

海陽研究文獻集

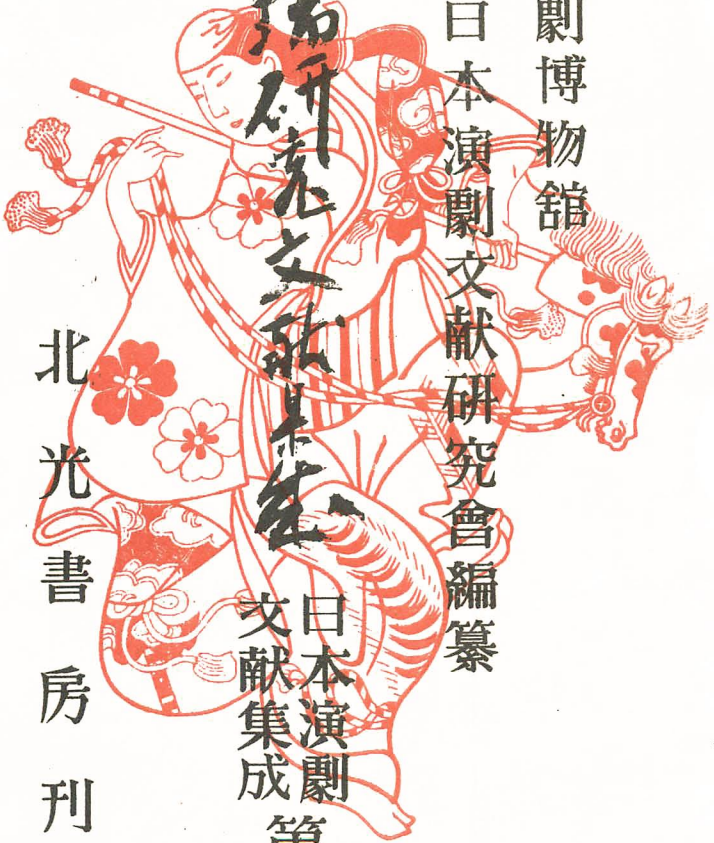
早稻田大學
坪内博士記念

演劇博物館

日本演劇文獻研究會編纂

淨瑠璃研究之秋葉集

日本演劇
文獻集成
第二



北光書房刊

日本演劇文献集成刊行について

祖國の興廢を賭する大戰局下、國を擧げて日本固有の傳統精神に相倚り、眞の日本文化の本質の研鑽と價値の昂揚とに邁進すべき時、吾々はその文化の一面をわけもつ日本演劇についても亦茲に再検討、再認識すべき時にたち至つた。

從來これが検討、研究は必しも尠くなく、先賢碩學の士による名著は汗牛棟に充つると云つても過言ではない。しかし、これ等先賢諸氏の近世日本演劇に關する研鑽の資となつた文献資料は、過去三百年間に、更に更に多數存在してゐるのである。しかも何等整理さるゝことなく散在してゐる。のみならずこれを披見しようとしても、既にその姿を失ひ、或は湮滅に瀕し、或は圖書館、愛書家の祕庫等に探らざればこれを得易からざる状態である。かくては、前記の如き時局下に於て、世界に獨自を誇る日本演劇の研究と、その正しき智識の獲得とを志す人々にとり、その不便と困難とは筆舌の外と云ふべきである。況や原曲乃至根本資料による研究の重要性に鑑み、延いては日本演劇の正しき認識による發展を阻止する結果を將來しないとも限らない。こゝに「日本演劇文献集成」（豫定第一期二十冊）を編纂し、散在する多くの文献を集成整理して複刻し、廣く斯界の爲めに刊行せんとするは、一には資料の整備によつて、演劇文化の向上に資し、一には、逼迫せる戦局下、一朝有事の時、貴重なる文献の消滅すべき事あ

るを慮り、これが分散保存をも必須事を觀じ、即ち本集成の刊行を企圖した次第である。

一片の紙と雖も、戦力化すべき喫緊時に當り、斯る切實なる企圖によるものとは云へ、茲に許されて刊行し得るは、全く御稜威のしからしむる處で、日本演劇界にとり、伏して皇恩の有難さに恐懼すると共に、吾々は本集成の目的の完璧なる成果を期するものである。

早稻田大學
坪内博士記念

演劇博物館内

日本演劇文献研究會

編纂責任者

文學博士

河

竹

繁

俊

吉

田

暎

二

淨瑠璃研究文獻集成

日本演劇
文獻集成 第二

解説校訂 山

本 二 郎

目次

今昔操年代記 五

上の巻 一六

下の巻 四〇

浄瑠璃
文句評註
難波土産 五

卷之一 六

發端 六

御所櫻堀川夜討 七

お初天神記 三

卷之二

安倍宗任松浦登

北條時賴記

並雪之段

卷之三

大内裏大友眞鳥

卷之四

國性爺合戰

苅萱桑門筑紫麟

卷之五

蘆屋道滿大内鑑

大塔宮曦鎧

竹
豐
故
事

一五

一五

二九

三四

三九

三九

一三

一三

一〇〇

三五

三五

三九

二四

卷之上……………一五〇

南都薪能事……………一五〇

芝居濫觴之事……………一五〇

淨瑠璃來由之事……………一五一

太夫受領之事……………一五一

三ヶ津淨瑠璃流布之事……………一五二

古流之太夫盛衰之事……………一五二

井上播磨掾之事……………一五六

清水理兵衛之事……………一五六

竹本筑後掾來歷之事……………一五七

同播磨掾之事……………一五七

卷之中……………一五九

豐竹越前掾來歷之事……………一五九

同江戸肥前掾之事……………一五九

竹本豐竹東西之流義芝居繁昌之事……………	二六〇
故人之太夫達評之事……………	二六〇
名人上手下手三品之事……………	二六一
名人之太夫達教訓之事……………	二六五
五段續語り場役柄之事……………	二七〇
音曲狂言綺語之事……………	二七一
呂律五音十二調子之事……………	二七一
卷之 下……………	二七四
淨瑠璃作者之事……………	二七四
近松氏之事……………	二七四
三味線來由同寸法故實之事……………	二七五
同藝者苗字に澤之字を付る事……………	二七五
操人形之故事……………	二七七
同古今達人之事……………	二七七

淨瑠璃古今之序……………二六

同時太夫名人之評……………二六

兩座中見立之事……………二六

兩座繁榮並逃助之字歲事……………二六

倒冠誌……………二五〇

音曲口傳書……………三〇一

淨瑠璃の原始……………附リ師彼段々の由來……………三〇五

同工夫の事……………附リ音大小の事……………三〇七

信あれば得ある事……………附リ寶物の事……………三〇八

深切なるといふ事……………附リ子わかれの癖を語る事……………三三

音曲口傳……………附リ淨瑠璃五十二番……………三三

冷泉ぶしの事	三七
あみとぶしの事	三七
コハリの事	三八
男女わかちの事	三八
情ふかくといふ事	三八
音の事	三九
調子の事	三九
譽られやうの事	三〇
たしなみといふ事	三〇
淨瑠璃譜	三三
外題年鑑	四〇
淨瑠璃大系圖	五五

解 略 索

引	註	說
.....		
.....	同	山本二郎
.....		
三	六	五

今昔操年代記

今昔操年代記いまむかしあやつりねんたいき

上之卷

目録

淨瑠璃の名取川

一昔の播磨風

流きよみづの末は清水の瀧

落て別るゝ水引の幕

笹*の丸の高矢倉

一中頃の嘉太夫風

打たり鼓太鼓の程拍子

能かゝりの音曲に寄鹿

一向一心*の稱名聲

一 今の世の筑後風

あまねく響きわたる

和讃の節付形見

となる稽古本

翁渡しの面箱^{*}

一 當世の上野風

もつてひらいた梅櫻

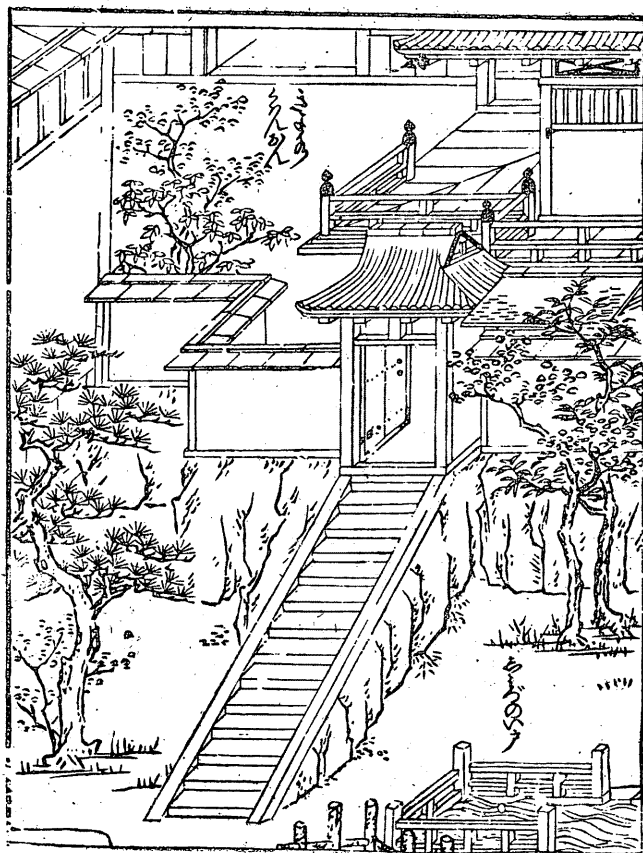
出かたりを松

見物の鈴生^{すなり}

近來操年代記序

つれ／＼なる儘友かたらひ、生玉天王寺安居清水の邊にあゆみ知る人あるに假の足やすめ、さつと仕た料理膳とつて薄茶、枕引寄四方山のはなし機一重あなたに、わかい衆五七人集り、芝居の噂とり／＼の評判、ひとり竹本門流と見へ、筑後芝居の眞口、今壹人は豊竹門弟と打見へ、上野のかたをもつて、出るまゝの討つこたへつ、今日の慰是ならんと耳の垢取てきくを、知らぬが佛様、竹本方の云、今世にもてはやす淨瑠璃皆筑後風なり。さのたまふ豊竹は文彌風かせつきやうか、風義かはりたる音曲ならば息筋はつて申さることはり、筑後風を學るゝ上は竹本芝居の善惡かたく御無用と座を打てのゝしる。豊竹つゝと出、一通り尤也、まつたく竹氏を護るにあらず。義太夫とて生立からの名人にてもあるまじ。行年つもり／＼て今名將の名をあぐる、は一藝の修行積りしゆへ也。其年敷をくらべては豊竹上手也といふがあやまりか、竹本仕出しの音曲といふにてもあらず。古播磨のながれを汲で其流義をかたらるゝからは豊竹もおなじ事也。殊に近來の淨るり、第一趣興文句のはだへむつかしければ、あたるはまれにし

てあたられぬはつねなり。何程名人の太夫にても淨瑠璃不作にては評判あし。今筑後最來あつても、むかし播磨太夫かたられし四天^{*}王事の上りあてがはゞ見物おもしろしとはいふまじ。しかるに播磨は、何ほどあらき淨るりにても諸人好る様にかたたるゝは名人といふにあらずや。竹本方云、それは時々を知らぬといふ物。今の淨るりを播磨どのにかたらさばどのやうにふしを付てかたり給はん。頃日^{このころ}の淨るり五段昔の三十段よりながし。其とき其心に應じて、見る者聞者^{きき}なれば、一圖に播磨太夫を名人とかたよらるゝは、くだから天を覗くにひとし。出なをされよと云ふ。豊竹方さの給ふかたゝこそかたいちといふ物。既に今淨瑠璃をかたるひとなくかたらぬ者もなき時節、たへず筑後のふし事を第一に稽古^{きこ}仕る人、大かた播磨の景事おのゝさきにかたたるゝ。宮嶋八景・長生殿の四季・屏風八景、此類數百段奥の卷に記すへゆ爰に略す。惣して播磨風の音^{おと}は何れかまねる人なし。此太夫を譏るかたゝめいゝ宗旨の祖師笑ふに同じ。あなもつたいなや、おそるべし。竹氏方かぶりを振此方の師釋^しの道喜は淨るり音曲の精といふもの、むかしゝ祖父とばゝのはりまはぞんぜぬ、當流稱美する所の竹本氏ならで此道の司^{つかさど}はごわるまいと、兩方腕まくりひたいに血筋をはつて既にけんくはになるべき所に、七十あまりの老人二重の腰にじゆすをつまぐり、よろゝよはゝ立出、是わかい衆れうじめ





さるな、此口論せつしやもらひました。双方互に一利屈有ておもしろき評定、筑後上野身にての満足此上何かあらん。さいぜんは東西の評論、其かはりを聞むとおもひの外播磨太夫にころび仕廻付ず、今舍利く佛淨るり太夫に出現せられても、此源の元祖たる播磨太夫に善惡いふ人覺ず。殊におのくとしわかにして物のしやべつもわきまへず、當前の事ばかり利屈はつて其根を知らず。出儘の我儘、我等當年七十五歳、若かりし時より此筋の音曲に身をよせ、播磨風より段々筑後豊竹の淨るり、替る度毎見物せぬといふ事なし。とりわけ播磨になづみ深く、此流儀をもつはら稽古いたしぬ。齒は一枚もなければ、富士の牧狩の道行、今語るを聞てはもどかし。とかく同席につらなる事ふしぎの縁、此流儀の發且よりは是迄の因縁を咄、それくの門にゆうゐんいたさん。羽ぬけ鳥にて舌のまやらぬとおちた所は御免く。

淨瑠璃來曆

淨瑠璃諸人もてはやし口ずさむ事、昔井上市郎兵衛といふ人音聲たくましくふしはかせかいぐ等に心を付け、おのれと此一流をかたり出し、終に操芝居を取立、程なく受領して井上大和掾藤原の要榮と名乗り、其後大和を改め井上播磨掾と云しより今に播磨風といへり。播磨太夫生年の頃より音曲を好み、フシ・ラクリ・三重・ラン・フシラクリ・ハル・ギン、此類に心をくばり、なかんづくうれい・修羅を第一にかたられしかば、見物なづきをさげ、めい／＼口まねせんとすれ共、其比は床本かたく閉て、弟子たらんにもむさとゆるさず。勿論稽古本といふ事なく、潮聞書にして、一行二行つゝおぼへ、夜あるきの友となしぬ。いまだ大坂に淨るり本屋なく、つてをもつて替り淨るり出れば、前の淨るりをこんもうして、京にて是を板行するといへども、しらみ本といふに五段を書、その間／＼に、一段／＼の繪をさし込、童子のもてあそびとしてひろむる。まつたく稽古人の助とならず。やうやく播磨太夫手筋より、心齋橋筋三津寺邊に書本を商賣仕る井上彌兵衛といふ人、太夫のゆるしを請、語り本の内、道行四季・神落

などを乞請、是を書本にして稽古人の助となしぬ。其外段物望む衆中、傳をもつて弟子と成、ふし口傳稽古するといへども、むさとおしへずむさと弟子をとらず。

▲序に播磨太夫名人といふいはく、今おの／＼もつはら稽古なさるゝふし事、何ぞといへば市郎丸ひでとら、安藝の國いつく島に着しかば、わに口ならしぬさをとり、神慮をすゞしめ奉ると、宮島八景のけい事、是にかぎらすあまたある、中にもおもしろきは、

一掛物ぞろへと云は 賴義北國落の内也

一歌仙之段と云は 菅原親王の内也

一宮島八景と云は 源氏筑紫合戦之内也

一しほがまの段と云は 賴光跡目論之内也

一馬の段と云は 同斷

一屏風八景と云は 金剛山合戦之内也

一清明神さいめいおろしと云は 花山院の内也

一七夕祭と云は 道寸軍法競の内也

一五天竺と云は 日本王代記

一長生殿四季と云は 源氏熱田合戦の内也

これらのたぐひかぞふるにいとまなし。尤文から古風にしていやしく、地よみおもしろからず。たとへば松のかれ木にひとしく、すんとしてとりじめなく、道行など名所方角前後し、文にくり事有て亂れたる糸のごとし。然るに井上、音曲をなわりたる妙には其亂れをほどき、其かれ木のふし／＼の中より、いろいろの音聲を出し、様々のふしを編み、末の今まで竹本氏豊竹氏はをもちゆる。勿論其流をくむ輩、此太夫の景事語らぬといふ人なし。しかれば此播磨太夫淨るりの祖師といふに誰か一點をくはるん。○播磨太夫一生のふし事數百段あり。是をあつめ、全部三冊にして西澤所持の板行ありといへども、辰のとし焼失して其外題のみ残りぬ。

○有比京四條の芝居より勸進元下り、播磨太夫一座を買請京都へ登りたまふ。井上初ての京入、吉日良辰をあらため、始まる初日頼光跡目論を出されしに、人形あやつり道具、役者に至るまで美を盡し、見物のお氣にまいるやうに、座中氣をはりゆみ、思ふつぽにあたりめ厳しく、京中の評判、よしやよし野の花見より此芝居と、日々に見物入まし、はりま殿の外聞目出申納ぬ。木戸役者より御目出たの酒肴、せいろう山をなし、大坂よりは門弟知べのもの、聞きおよびの生鯛生貝、鱧太刀魚のひかり芝居をてらし、毎日の酒盛、千秋樂萬歲樂と祝ひの中、太夫本心

地あしきと、假初の風重くしく、京中にてあらゆる天醫入かはり、療治のじをつくすといへども、かぎりの命にてや有なん、次第くにげんきおとろいぬ。目ずいしやうの都人にまで名人とよばれ、ほまれを夢の内にたのしみ、終にむじやうの風にさそはれ、五十四歳を此世の見おさめ王城の土となりぬ。皆々あん夜にともしびをうしなひ、せんかたなきからを長明寺におくり、昨日にかはる石塔戒名ばかり残しぬ。おもへばおしき命、京大阪の男女おしなめ袖をしぼり、南無妙法蓮華經をとなへ、忌日名日とぶらいぬ。

▲播磨死後井上市郎太夫、石屋三右衛門事尾崎權右衛門此兩人芝居を勤め、勸進元約束の日限、つゝがなく仕舞難波にくだりぬ。其間の淨るり、業平一代記・大職冠知略の玉取・跡目論以上三番にて止みぬ。是より市郎太夫、段々立身して一分のやぐらをあげ、新淨るり源氏十五段・五大力ぼさつなどめされしかど、はかしくからず、終に立ぎへにして其おわる所を知らず。○播磨弟子の内清水理兵衛といふは、此安居天神の南に住所をかまへ、浪花の腹ふくれ衆をあつめ、碁將棋茶の湯、連俳の座敷なれ共、あるじはりま風をかたり出せしより、皆音曲けいこ場となれり。もとより理兵衛井上流をたんれんし、かたをならぶるものなし。聞人我もくんと尊敬うやまひもてなしぬ。元來料理屋を商賣し安樂のくらし、寝ても覺ても、立にも居るにも、

ヤア天めい知らずの頼近めや、子として親を調伏仕る事、其聲天に響き今播磨といへり。遊人連一ぱいきげんのあまり理兵衛を招き、あつたら淨るり此儘捨んものこりおほし。芝居興行し幕あげせんと、なんなくていしゆをそゝりあげ、おもひ／＼こゝろ／＼に、銀をもちよりまんまと一座を組立、櫓まくはなやかに、新作にて上東門院と云ふ淨るりをかたり、町中めづらしく山をなしけり。然れ共、なじみある播磨の花香うせず、見物なじみなきと、珍らしき淨るりなきとに行當り、中ば芝居も止ぬ。此時天王寺の五郎兵衛と云ふ人竹本筑後こと理兵衛ワキをつとめ、初て床になをつてかたる。此五郎兵衛竹馬より播磨風に心魂をとられ、節季しらぬ農業の業をすて、あけくれ淨るりに氣をうつし、太夫號をよび、京四條川原の芝居におゐて、清水理太夫とあらため、日本王代記、松浦五郎など言ふ淨るりをかたるといへども、はか／＼しからず、出たり引込たり、半年つゞかぬ芝居、見るに氣のどくの天窓をかきぬ。

○宇治嘉太夫といふは、紀州和歌山宇治といふ所の人也。幼少より音曲に妙そなはり、第一謡をよくたんれんし、なり物一とをりうとからず。ふしはかせかなかいぐまでにこゝろを付、一藝何よらず人より上にたゝん事をねがひ、ふと播磨風におもひ付、朝暮是に枕をわり、ついに京にのぼり竹屋庄兵衛に密談し、あやつり芝居を興行し、伊勢島宮内が名代をもつて、淨るり

宇治嘉太夫と大看板にしろし、新作にて虎遁世記といふをかたり出しぬ。播磨風をおもてとしふしくばりこまかに、よはくたよく、うつくしくかたり出せば、京の見物あたまからお氣に入て、思ひの外ひやうばんよく、段々新作の淨るりを出し、人形いしやうまできれいにこしらへ、一年あまり首尾よく勤め、三年めの正月より天王寺五郎兵衛をワキにかゝへ、西行物語といふ淨るりの二段目、藤澤入道夜盜の修羅を、五郎兵衛かたられしが、元來大音にて甲乙ともにそろひ、まないたに釘かすがいを打たるとく、何程の大入にてもとどかぬといふ事なし。字どめ字頭の文字きへず、文のあやよく聞へければ、見物よろこぶ事かぎりなし。嘉太夫も五郎兵衛淨るりには心おき、後々我ほこさきの甲斐になるべきは此男と、云れしはさんがの嘉太夫ぞと後にぞおもひ知られぬ。さればこそ筑後風とて、國々浦々まで口ずさむ、くれないはそのほにうへてもなり。

○嘉太夫水魚のごとくむつまじき庄兵衛と藝の筋より互のぬちを云つたり、終に中あしく、たちわかつて竹庄方には一座を取組、五郎兵衛を太夫にして、一まづ京地をはなれ、西國にくだりぬ。然れ共嘉太夫ひるまづ、日々にはんじやうし程なく受領し、加賀掾宇治好澄とあらためしより、町中いよく此流をかたり出し、あまつさへけいこ本八行を、四條小橋つばやといへ

るに板行させ、淨るり本に諺のごとくフシ章をさしはじめしは此太夫ぞかし。名人は播磨、上手は嘉太夫也。取分け世繼會我より諸人もてはやしけり。

○竹庄、五郎兵衛を同道し、宮島の市を仕舞、大阪に登り、今の竹田外記芝居をかり、天王寺五郎兵衛といふ名をかへ、竹本義太夫と改め、やぐら幕、まりばさみの内に笹の丸のもん所、今につたへ此まく也。其頃は貞享三年、丑の年にてぞありけり。淨るりは嘉太夫致されし世繼そが、是義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になづみぬ。

げにうけがたき人のたいを受ながらと

二段目 待つ夜の恨

さりとては戀はくせ物皆人のと

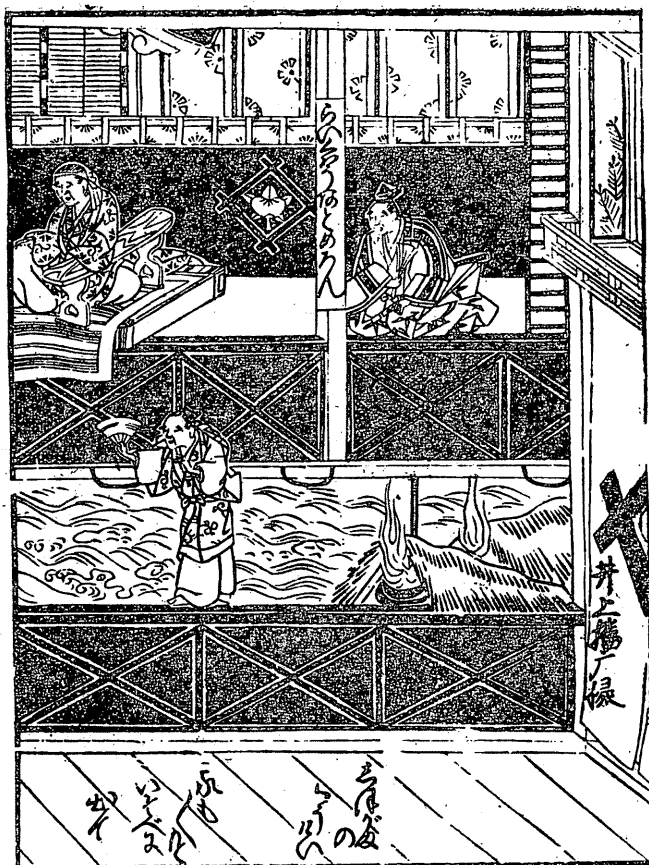
三段目 道行

立子^{たてこ}這子^{はこ}、此二所のふし事口まねせぬ者なし。次のかはりあい^あいそめ川梅の名よせ、道行のすみとすじりの濃中^{こい}をはやらし、續いて三のかはりいろはものがたりの獅子の亂曲、道行のなつののかのまき筆にて手習させ、其暮は堺にまかりいよく評判よく、義太夫ふしは、播磨此かたの淨るりと見物におもひつかし、其年のくれ心よき越年、是義太夫大音にて萬そろひたるうへに、理兵衛嘉太夫を吞込、おもしろきふしを付てかたたるゝは、鬼にかなさいぼう、なんでも三味^{しゃみ}をべつしては出世の門はひらきがたし。

○其明寅の年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて、西鶴作の淨るり、曆といふをかたられければ、義太夫方には賢女の手習並新曆として兩家はありあい、ついに義太夫淨るりよく、嘉太夫がた止ぬ。其次のかはりがいちん八嶋、是も西鶴作にて、評判よき最中出火して加賀掾は是限にして京へのぼられ、又々なじみ有都におゐて、操をはじめ、だん／＼珍しき淨るりをかへ、音曲修行、三十餘り、花落(落)におゐてたのしみ、寶永年中卯の初春廿一日に往生し自證院本淨道融居士となれり。世は夢現ぞかし。其年は七十七歳にてぞ有けり。

義太夫寅の年二の替りは、近松に縁をもとめ、出世景清といへるをこしらへ、是にて月を重ね、其後のかはり源氏移徒祝（むねじ）、但し頼朝七騎落也。是も評判よく町中口まねする所に、佐々木大鑑並に藤戸の先陣、松よひしぐれ相の山の道行、思ひ川ほさぬ袂のかたり出し珍敷趣興とはし／＼角々、此道行けいこせぬといふものなく、是より義太夫ぶしとてはやしぬ。そのうへに近松門左衛門、つゞいて新作をこしらへ、追々おもしろき趣興に、かはり文句はたらき、義太夫のかたり盛り、日々夜々音聲（おんせい）に實のりふし詞に花を咲せば、聞人見る人此太夫ならではとてはやしぬ。なれ共其頃は、かぶき芝居あたりおほく、殊に出羽にはさま／＼のからくりなどし、見物諸方にわかれれば、さのみ大入、大あたりと云ふ事なくしぶらこぶらの見物、な

れ共こたへもこたへたり、剩へ筑後掾藤原博教と、受領迄申請、西國おもて、山路ふみわけ木
こる杣人、海邊に迷ふ海士の子も、御いたはしやせみ丸といへば、又とこ闇の雲はれて日月ひ
かりかゞやけりと、よし野忠信のさいもん、何所からどこまでいかぬものなく筑後の掾のいせ
い、夜まし日増の繁榮、藝者のほまれ四方にかゞやくといへども、ほつこりとした藏入なく、三
八の十八にてあはぬそろばん、胸算用あふてあはぬは世間なみ、次のかはりの談合、一ツ盃庄
兵のばゝさまさしあひ、さしみは鯉にこせう、あたり淨るり何をかするめといふ所へ、やれ會
根崎の天神で、見事な心中、有馬の藥師、藥がまはつた、是を一段淨るりにこしらへ、そねさ
き心中と外題を出しければ、町中よろこび、入るほどにけるほどに、木戸も芝居もゑいとうと
うく、こしらへに物は入らず、世話事のはじめといひ、淨るりはおもしろし、少しの間に餘
程のかねを儲け、諸方のとどけも笑ひ顔見てすましぬ。此上に望もなしと後生心に成、きめう
むりやうじゆ如來に身をまかせ、芝居も是切に安樂國土きはめんと、明暮御堂に参り、あさじ
日中お八つをかくさず、一心ふらんにしやうしんげ、御和讃のふし猶殊勝にきこゑぬ。折ふし
竹田氏參會し未だ老木といふにもあらず、今町中しやうびする所に、おもひよらぬ引込じあん
二三年勤て給らば、拙者座本仕、萬事の世話を引請、貴殿内證入用銀、御用次第つゞけ不自由





させまじと、同行衆を以て頼みしかば、下地は好なり御意はおもし、いか様ともの詞をきわめ盃すんで其暮、かほみせ淨るりといふをはじめ、用明天皇職人鑑、作者近松門左衛門をかへ太夫竹本筑後掾、座本竹田出雲と看板並べ、三段目かね入の出がたり、泪川戀のこほりにとぢられて、身を切くたくおもひより、うき川竹のながれの身、辰松八郎兵衛出づかひ身振よく、見物の氣をとつてのかね入藏入、目出たくかはりく首尾よく、かほよ歌かるたといふ淨るり迄語り、それよりふと病付たまひぬ。日本一の太夫今一度とどめ度いろくと療治の手をつくし、人參の山を積でとどめんとすれども、かぎりの命はとどめがたく、もはや末期の水も通さず。おしや六十四歳を一期とし、正徳四年九月十日を此世の見おさめめいどかうせんの旅しばゐにおもむき給ふ。門弟數十人、白無垢の數をそろへ、ななく野邊におくりむじやうの煙となしぬ。竹本氏門流あまた有中に、豊竹上野は其流義をまねると云ふ心ざしより、天王寺念佛堂のむかひに石塔をきざみ、釋道喜、施主豊竹上野としるしぬ。心あらん人々名日には參詣あるべし。

○豊竹若太夫事若輩の頃より竹本流義を學び、家業はよその事にして、毎日芝居に入込、けいこおこたる事なし。其頃は竹本采女といへり。年拾八さいの頃、筑後跡芝居におゐて、傾城懷子

といふ淨るりをかたられしかど、しか／＼の事なく其年もくれ、あけのとし＊東立しりうけい慶しけいばゐにて
道具屋吉左衛門・永嶋重太夫、其外門弟あまた寄合、素淨るりの出かたり、是もはか／＼しか
らず半にて止ぬ。それより修行の爲爰かしこにくだり、其もどり堺南の端にて芝居をとりくみ
給ふ。折ふしいとやの娘、手代の久兵衛と密通あらはれ娘をつれ萬代もぐとやらんへかけ落、はた
けの井戸に身を投兩人共に死たり。是幸の心中と戯に一段淨るりに作り、さつとした道具拵云
づきにして、心中泪の玉の井と云ふ外題を出しければ、所の事といひおもひの外あたり、究の
日限仕舞大坂に歸り、長門九郎兵衛とかたらひ、相座本にて舞のしばゐにやぐら幕、豊若竹太
夫とあらため、はなやかなる看板、さかいみやげ心中泪の玉の井と出しける。春頃筑後がたに
はそね崎心中、兩家同じやうなる仕組、玉の井の奥、久兵衛おち道行の内に、さのみじみ／＼な
げかずとあゆましやれ、さきには鬼はないものと、初冠ういかうむりより町中に口眞似させ、次のかはり
金五郎うき名の額、是も一段淨るりにて茶屋名よせの道行に、まことに小さんと我中＊はあのは
り詰の二つ井戸、どちらを見ても深ければと、浪花のわかい衆によろこばせ、そね崎道行同前
に、此稽古本京大坂の淨るり本や、門をならべ板行してひろむ。あたまから見物にのみこませ
しは、太夫になるべき五音の調子聞人かんじけるとなり。その明東岸居士をかたり、それより

備中にくだられし内、泉州築能つくのといふ人舞のしほゐをもとめ、やぐらは濱の竹田にゆづり、芝居をつぶしかし家となしぬ。其折ふし出雲より、此太夫を助分に頼たきのよしたびく云來りぬ。太夫留守なれ共親の子を思ふしあんこそあらめ、心よくすまし究きりかへの盃さかづきすんで、太夫登られ右の品かたられしかば心よく請合、出雲芝居へ出られ、用明天皇二段目の役見物筑後と聞まがへるほどにぞありける。二年つとめ其暮、河内屋加兵衛といふ此道の粹方、あやつり芝居におもひ付、是非くはだてんと、豊竹辰松相座本とし、篠ささの丸のやぐら幕、淨ゑりの作者紀海音、新作追々出しければ町中餘程御最良の見物おほく、御取立によつて上野少掾藤原重勝と口宣くきんを請つぎ、其明鑑倉三代記といへる淨るり、是迄の大あたり、大黒舞のふしごと我もくといけいこするもの多く、夫よりのかはりさのみあたりといふ事なし。なれども根つよく一座をもちかため、折にふれ時によつては、和歌山・奈良・さかいへも罷り、さきくの評判よく、卯のとし村上嘉介作にて、建仁寺供養といふ淨るりを出し、明辰の二月より頼政追善芝、大出来大あたりにて、町中他國の見物此しほゐにかたより、三月廿一日木戸口はりさく大入、近年の不仕合取かへさんと、はづみきつたる所に、其日中より出火夥しく、手と身となるは世間なみ、され共操道具を助け、漸々さかいに立のき、様子を見合せ、ふつがうなる道具そこくこし

らへ、初の四月廿三日を初日と定、建仁寺くやうを出し、閏四月十五日より頼政、此二番にて六月中旬まで勤、つゝゐて六月廿三日よりそねさきに頼政をはじめ、初日より八月三日まで入つめ、藏入の宜敷事、豊竹氏御最眞つよきゆへぞかし。そのみならずあらし芝居賣やしきのよし、太夫本年來の望、折あしけれどもとめたきねがひ、尤の相談に究まり、傳をもつて地主方へいひ入、まんまと首尾して豊竹芝居と成りぬ。むかしより今にいたり、淨るり太夫芝居ぬしと成は、宇治加太夫。豊竹なり。まつたく自力にあらず、他力によつて是程の大望成就せしは、諸天三寶諸見物のおかげ、いよく佛神信厚あるべし。かねて太夫本、伊勢よりうすやくそく、ゆかねばならぬ首尾、ぜひなく一座其用意、跡の普請は一家衆大工の頭梁受取、人數をもつて按立ければ、作者方には顔見世淨るりのこしらへ、太夫元は伊勢より下向の荷物、三方一度にもみ合せり合、なんなくかほ見せの日限定、辻札橋札、はなやかなる舞臺棧じき、さあ上野がかほ見せしは結構なり、女せみ丸と云ふ外題、さこそおもしろからんと、おもひの外の大入見物も初日を見てせいきをつかし、ひやうしのない出がたり出づかい、作者のおもひちがひ、巳のとしもつゞいて不作、兎角此作者と、太夫本の相性あしきかと、ふしんにおもふ折ふし、作者の方より隙を乞、淨るり不作ゆへ斯成なとげて身退くは天の道と心得、三十石に

夢むすび都の方へ登られしと也。凡上野是迄の淨瑠璃數百番有。

○人一心に誠あれば、天道の恵招かずして來福仕といへり。豐竹氏ふけいきなる芝居、何とぞ珍しき物と、作者も相應にかきあつめたるかなそうし、北條時頼記といへるよりおもひ付、三人よつて此外題を趣興に、淨るり五段にくみ立ん、いづれも知恵を出されとざいふりまはせば、並木宗助・安田蛙文、美若なれ共、淨るり一段も書きかねぬ器量、西澤の下知に任せ、どをやらかをやら五段をつくり、切に最明寺雪の段、太夫本の出かたり厳しく當り、卯月八日を初日とし、今月今日まで入詰年越の淨るりとなれり、是太夫本邪なく、眞直成る豐竹一藝をくふうし、此上にも語様のこんなん有べき物と、寐る間忘れぬ心がけ、殊に身を高ぶらず、我とわが藝みじゆく成とおもはるるは、藝の上手心の名人といふ物也。尤筑後名人なれ共、修業の行年を算へては、豐竹はやき立身、何れも左にあらずや。竹本方聞て、段々の長物語、老人のくり事尤なる咄しなれ共、筑後時代には、町中今程淨るりもてはやさず、しかるに筑後といふ名人、かたりこなしかみこなしで、今若人の太夫に吞こますの道理、此返答あるまい、へいかうく。老人尤の返答おもしろし。今世上に竹本豐竹の門弟みちくたりといへども、みじゆくの淨るり誰かもてはやさん。名人といはるゝ太夫なればこそ、東の西のともてはやすに

あらずや。たとへていはゞ名々の家職におなじ。我賣物我細工をあしきといふ者なし。先播磨
より此流始まり、理兵衛・加太夫・筑後・豊竹ど、流義少づちがひめありといへども、つま
る所は播磨よりわかれ、播磨風を語れば、いふ程かたるほど費ぞかし。各々好ける太夫のふし
を稽古し、名人といはれ給ふがかんようく。

今昔操年代記 上巻 終

今昔操年代記^{こんじやくあつりねんたいき}

下之卷

目 録

一 近松の揮筆^{よるひよで}

手習ひに趣興の立消え
尋ねて見ても

あはぬ昔の筆の跡

一 作者智恵の海

布かい物心の走書き
いひかけと枕言葉と
頓智才かく

生立^{おひたち}から太夫くさい風車

一 太夫衆の節車ふしぐるま

廻りのよい淨るり語り

今に盡きぬは義太夫節

一 操歌舞妓寶引ほうひき

白いと黒いと取り合せたる

花薄亂れごころ

競べてぞ見る

今昔操年代記下

井上播磨少掾藤原要榮

死す

竹本筑後掾 藤原博教

死す

京都加賀掾 宇治好澄

死す

豐竹上野少掾藤原重勝

存命

右四座の太夫本を淨瑠璃四天王と號す。

○筑後芝居相續如何と町中門弟おもひの外、竹田出雲頓智發明より、國姓爺合戦といふ淨るりのおもひ付、門左衛門老功の一作、力瘤を出し、文句のはだへうるはしく書きまはしたる筆勢おもしろく、淨るりは竹本政太夫・竹本頼母・豐竹万太夫、右三人にてあしかけ三年持ちこたへ、見物から子齎の道行口まねせぬ人なし。筑後掾存命の頃あやつり上るりしかゝなかりしが、諸人歌舞妓芝居よりおもしろきともてはやし、次第くにはんじやうする事、第一作者の趣興、人形いしやう、道具まで花やかにこしらへ、手をつくし美をつくせば、歌舞妓は外に成りて、淨るりの評判はしつち、耳かしましくおもひ存候。

○近松門左衛門は作者の氏神也。年來作り出だせる淨るり百餘番、其内あたりあたらぬありと

いへども、素讀するに何れかあしきはなし。今作者と云はるゝ人々、みな近松のいきかたを手本とし書きつゞる物也。此道を學ぶ輩、近松の像を繪書き、晝夜これを拜すべし。又あるまじき達人、うやまひおそるべし。時に享保九辰年十一月廿二日、七十餘歳にして此世の見おさめ、今はの時殘し給ふ辭世

近松門左衛門性は杉森、（おき）字名は信盛、平安堂巢林子、代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槐九卿につかへて咫尺舉げて寸爵なく、市井に漂ひて商賣知らず、隠に似て隠にあらず、賢にして賢ならず、物知りに似て何も知らず、世のまがひもの唐のやまとのおしえ有る道の妓能雜藝滑藝（こつげい）の類迄知らぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ、一生をさへづりちらし、今はの際にいふべきおもふべき、眞の一大事は一字半言もなき倒惑、心に心の恥をおもふて七十餘りの光陰、おもへば無覺束我世經畢ぬ。

若し辭世はと問ふ人あらば

夫辭世去程扱も其後に殘る櫻か花しにほはゝ

入寂名 阿耨院穆矣 且具足居士

不俟終焉期自記

殘れとはおもふもおろか埋火のけぬまあたなる朽木かきして

平安堂のながれをくんで一作なさるゝ人々近年出來。

一 紀海音 一兩年休足 二 竹田州雲 手芝居自作

三 松田和吉 是も休足 四 並木宗助 當年より作也

五 安田蛙文 西澤一風 今は老年にて心計

あらまし此通り淨るりの作者すくなきもの。當り淨るりは稀にしてあたらぬはつね也。

竹本政太夫 筑後芝居の立物

○政太夫は中もみや長四郎とて、いまだ角前髪すまみの頃より音曲を好み、あけくれ筑後風に心をよせ、まんまと淨るりに成し頃、豊竹京にて芝居興行の節西澤この仁じんを招き、京都に同道仕若太夫方にて勤め、京を仕舞一座のこらず大阪にくだり、新地會根崎の芝居にて、若竹政太夫と名をあらため兩年勤め、三年め出雲方へ住まれ、段々淨るり實のり功者と成り、今西の芝居にて筑後替りとならるゝは、日頃音曲に心かけふかき故、諸人稱美する事お手柄てがみ。此人の藝を

たとへていはど、萩野八重桐におなじ。なぜといへば小兵なれども取まはりしく、修羅つめなどかゆい所へ手の行くがごとし。別して段切を大事にかけらるゝは上手藝のなす所、去るによつておぎのどのとならべておせくの兵。音聲の非力はぜひなし。身の持ちやう銀持かたぎ、心すなをにして豊竹どのにおなじければ誰そしる人なし。あやかり物く。

竹本大和太夫 本芝居の立物

此人生國は和州田原本の人なり。農行をすて此道を好み。啖かりしより竹本を學び、ついに床になをつて和州をめぐり、程なく出雲芝居に住み、舞臺に出でてかたられしは、天神記の天拜山のふし事也。先づ聲能くとりまはりおもしろければ、突出しより評判よし。今の淨るりを聞くに、おとし一流かはり、おもひ入にあてん事を第一となさるゝ故、見物のうけよし。たとへていはど嵐三右衛門仕だしにおなじ。何處やらびらついて又しやんとした處もあり、地事ふしごと藝に應じ、うれい事あはれに又おかしき筋あり。是其身其音曲の癖有物也。就中世話事よし。今にては政太夫と肩を並べ四分六歩六歩四分也。折々とんきよなる聲出るはいかに、よし





方へは釣るまじ。しかし聲大きにして、かたり出しは^{*}なりと、聞く人おしなめ田舎に京とは此太夫と、町中の見物どつと譽めてとをしぬ。

竹本文太夫

此太夫内名はふしみや五郎兵衛といふ商賣屋、生立よりそろばんを枕とし、見一^{*げん}無頭^{むとう}歸一倍市より割出し、此一曲をまねびいつの頃より筑後芝居に出で、あるとしは豊竹をつとめ又西に有付、今日まで音曲止ず、兩役にてかねを儲ける方便^{てがせ}、いやといはれぬしかけ、先づ淨るりおとなしく、ふしことこまかに、詰修羅萬事巧者分なり。たとへていはど、杉山^{*}勘左衛門同前の藝者にて、淨るりの一體を崩さず、本間にかたらるゝ故あたりめすくなし。當世は^{*}はすはなるをよしと仕^{*}。なれども本間の通りかたらるゝは、師のおしへをそむかず仕込みの藝なれば、伊達なるよりかうたうなるがよし。此うへに三重のたぐひ、おもふ様にあらば誰にかおとらん。残りおほいは一^{*}聲二^{*}こゑにてはんべるであんす。

竹本式太夫

此人陸奥茂太夫門弟にて、餘程巧者の太夫なれ共、心の如く音曲叮嚀なる仕出し故あたりめなし。聲よく淨るりのわけさつぱりと聞え、難することたとへがたし。市^{*}のや重郎兵衛仕出しにて上下いため行義くづさぬいきかたつがうせり。心がけよくば次第^{／＼}に上落^{*}あるべし。末頼母敷藝振り、今氣を付け給はねば立身いつをかごせん。唯つめ段切に心をくばりたまへと御見物申されしは金言哉。

竹本喜太夫

生立は木津難波牛頭天王^ゴ氏神、守りめあつてはやくと筑後しばゐに有付き給ふ。尤も頃日^{キヨコ}の淨るりなれば、つめ／＼、五段目の役付けなれども、上落次第に役まはりよき物なり。淨るり語り皆よき場を第一に稽古^し仕、あしき所を捨て給ふは非が事なり。人けいこせぬ所を、よくか

たりまはさねば上手の果くはにいたりがたし。惣じて初心の間は、詰つづまはりを何んのかのおもへど、既に釋迦如來もあらら仙人を師と頼み、難行苦行こけのぎやう、つもりくゝて佛と成り、衆生たつとむにあらずや。爰を得心あつて精出したまへ。追付け上々吉に成り給はむ。

竹本喜世太夫

豊竹上野座

此太夫以前はりま屋四郎兵衛といひし頃より、筑後風をもつはらかたり、其頃は肩を並ぶる人なし。第一聲よく、修羅つめのたぐひ嚴しく段切よし。聲に應じてはふしことはんなりとよし。此人道頓堀にて櫓をあげ、新地にていろくゝの淨るり出されしに、はかゝくしからず中ば仕舞ひ、其後そねさきにて座本を仕、文流作にて新淨るりを出しけれ共、しかゝゝの事なく、陸奥むつ茂太夫。竹本源太夫一つになりてかたられしに、是も立消して止みぬ。それより豊竹芝居にとしを重ね、午のとし休み、其暮よりつとめ給ふ。惜きは此人の音聲、せつしやあの聲あらは誰にかおとらん。是心がけうすき故と存る。近年の淨るり、前々のかたりやうとはちがひ、頭字かしらおさへ字わからぬ故、文句消ゆる様におもはるゝは玉に疵なり。心を付けてみがきたまはば、

ひかりの出まいものにあらず。よく／＼工夫あるべし。何と左にあらずや。たとはど、音羽次郎三郎諸藝のごとし。のこりおほいはせりふつぽへゆかぬにおなじ。なれ共大鳥なれば下に置かれず。よく／＼たれんし名人の名を取りたまへところん／＼。

豊竹和泉太夫

此人紙屋理右衛門といひし頃より此流をかたりそめ、西の芝居につとめ、夫より東に有付き、豊竹澤太夫と云ひ、今は和泉太夫と呼子鳥の子、淨るりの器用はだは美濃紙なれど、めりはりのないが半切紙はんきりにひとし。節事ことは芳野杉原、音曲おんきょくのきれい成るは奉書におなじ。つめ段切修羅のたぐひ、男の延紙遣のびふが如くぬるし。景事道行のふしも相應に付けかねぬをとこ。音聲高からずひくからず。藝の一體花妻はつまどのおなじく、きれいなると調子のいきかた同前、何とぞ此人のごとく萬事に心をつけ立身あるべし。今にては竹本頼母と、おほなになはず枋中おほなやたへなんにて候かしく。

豊竹品太夫

此客人生立から上野弟子にて外を見ぬ太夫、去年迄他國をかせぎ、享保十年六月の頃、身替弓張月を少しの間助^{たすけ}られ、其くれ十月晦日より上野芝居にあり付き給ふ。久々にて音曲うけたまはりしに、思ひの外の上洛、聲よくはなやかに、乙^{おつ}大きにして聞きよし。淨るりの一體中々巧者にて間^まひやうし操りに應じよくうつる故、彌々出來ばへ見物の受けよし。去によつて近年のあたり役者澤村音右衛門と釣りあはせて何とかあらん。かぶき方云音右衛門との出合おもしろし、實惡武道事、せりふつめ合のたてり、いづれかつり合申ぞ。品方あふともく實惡實のせりふ、三浦彈正、二階堂城之助のたぐひにて知るべし。音右かたに節ごとうれいなるか。かぶき方ふしごとは淨るりかたらねば存ぜず。しうたん事は其役なればおろかはなし。品方然らば此太夫も人形役者にあらねばたてりの事はぞんぜぬ。巧者と間拍子はいかに。かぶき方かぶき役者の拍子と云は、舞所作事也。こうしやはおとらじ。拍子も舞所作ばかりにあらず。相手を取てつめひらき、間のぬけぬを以て拍子利^きと申す。然らばおせく又五歩くにて申分な

し。兎角音曲のたんれん工夫有べし。

豊竹伊織太夫

此人よしのや喜右衛門とて、道頓堀に料理屋を商賣して居られしが、出火の後豊竹座に住まれ今豊竹伊織太夫と云ふ。聲よくふし事、道行のつれよし。つめ修羅のたぐひ、次第／＼に上洛すべし。いつまでも上野どのに付て廻り、淨るり修行あらば追付け上手に成り給はん末頼母敷身のうへ、是によつて山本京四郎とつき合はして如何といへば、かぶき方それはどうしたおもはくと云ふ。されば京四郎殿いまだ美若にして、ぬつと出られし舞臺つきどうも云はれず。され共行年なき故しか／＼の評判なし。追付け立身ある藝者、それによつて此人とならぶる事非がことならず。とかく藝者は善悪いはるゝ間がはなかのあるお茶、うまひあちなひいかれぬはめい／＼の損と知るべし。あなかしこ／＼。





豊竹新太夫

此客も去年よりつとめ給ふ。元來商人にて有しが、好ける道とてついに淨るりかたりとなれり。時頼記のつまゝ語られしに、見物評にかけぬは先づあしきにあらず。床馴れ給はゞいやみはのく物也。先づかつかうより太物やにて、なんでもかでも御座れゝ。間にあはさんと晝夜の本ぐり尤なる心がけ也。藝者にかきらずかせぐにおひつかぬといふ事なし。いまだ初心の内なればよしあしいふ事なし。跡替りの役を見て評を申さん。今にては此人の音曲どくにも藥にもならぬ藝者、兎角精の一字を忘れず、口のおかるゝ程あいて、音曲大きにかたり給へ。わすれたまふな。

江戸田羽芝居

竹本國太夫

此國太夫、大阪天神橋筋農人橋邊にて、昆布屋彌兵衛といひし商人、仕し似せの見世を振捨て筑

後になづみ、雨の夜も風の夜もかよひ小町、なんなく淨るりの間にあふむ小町と成り、片時もはや筑後芝居へ出んと、あけくれ心關寺小町、ついに床に直つて語らるゝ。尤も淨るり小兵なれども、氣をつけらるゝ徳には、ふしごと地事よし。修羅つめのたぐひちと甲斐なき音聲。近年江戸にくだり、一座の立者と成り、今國太夫と賞美せらるゝは仕合、此太夫と市川團十郎（トウジロウ）藝とくらべて、いづれか甲乙あるべし。お見立のほど承らんと申ける。仰におよばずくらべんも役者はあいみたがい事、仕かたと身振り音曲は、雪と墨とのちがひあり。なれども此人おなじみの團十殿にあひ同じ、あたり役者の市川にあやかる爲の競物（くらひもの）、出世の程はかぎりなし、随分氣をつけ名人の、名を取り給へと夕告げの、鳥が鳴く鐘になる、聲にひかるゝ淨るりとみなくあしをはやめける。

豊竹嶋太夫

東西くちくとんばいほめまらしよ、此人堺をびす島より出現のおとこ、御らうじ付けらるゝ通り、めんていにがみばしり、笑顔のよい公平（きんぴら）づくり、ちよつと見た所小相撲一ばんもひねり

かねぬ風俗、なれ共人はかたちによらず、心はほんじやりほやりと憎からぬかたぎじやわいなあ。此太夫生立より豊竹にかしづき、外を知らぬ淨るり太夫、然るに江戸座より達て頼まるゝ。元より修行の爲と已の年のくれ江戸にくだり、國太夫と一所につとめ評判つゞいてよく、午ひつじの年もとめられぜひなく勤め給ふ。是藝の上洛ゆへ也。第一音聲にほひありて遠音をさし修羅詰のたぐひきびしく、文句のあやぎれよく聞ゆる、是第一なり。尤丹前歌事の類少し申分あれ共、だん／＼上手に成給ふうへは重ねて申さん。今此位の淨るりをかぶき役者にたとへていはゞ、松本幸四郎也とはいかに。はて松本のあら事、嶋太夫のはしき音曲、松本の丹前と嶋太のふしごと、松本の實事と嶋太のうれいごと、松本のきりやうと嶋太の器量とは、歌舞伎とあやつりのちがひ、嶋太に眞鳥かつら大口ひたゝれを着せ、しやく持ちて拍子をとらし、大友の眞鳥の三段目より承りたい。神八まんどうもたまるものではハッアあるまいと敬て申す。

豊竹三和太夫

此人内匠理太夫の忘れがたみ、稚名は勝次郎と云り。十五歳の時、辰松八郎兵衛同道にて和歌

山へくだり、出かたり生玉八景を語られし事あり。夫より淨るり修行の爲め諸國にくだり、卯の十一月朔日より始めて豊竹座に有付き、三和太夫といへり。第一器用者にて手跡よく、三味線ひく、ふしのうけ取本ぐりはやし。行年つもらねど見物難を云はず。三年上野の膝元さらず、大島にもまれし故音曲に實のること其身の仕合、第一地事景事道行のたぐひよし。つめ詞少しづゝ申分もあれど、美若に應じては上手ぶん也。音曲一通りなんどもやらるゝ。是三絃彈かるゝ徳にて、間拍子よし。此人と嵐三五郎とは當初下り初顔見世、先立てあらしの評判あたりのよし、此人におなじく萬事器用なる藝者、あたらいではと、おもふほしをくらはせし金貝の揚弓、三和殿も是にあやかり是に對して御評判、お江戸の若い衆、すみから角までづらりと頼み上ます。

豊竹染太夫

是も豊竹門弟にて、いまだ未熟成し頃より豊竹流をかたり、餘程音曲實のる時分江戸に下り、辰松八郎兵衛座を勤め、夫より下總の長子にくだり、芝居をはじめ、御最良の若衆、其外あま

たの御見物を引請け、あたり厳しく又江戸に歸り、出羽芝居を勤め給ふ。行年積りし故淨るりのいやみぬけ今は聞きよし。前方よりつめ修羅のたぐひよし。ふしごとく相應にかたらるゝ。なれども本地のそばをとをざかり給へば、つまる所音曲我儘なるべし。坂田半五郎殿にあやつてほど拍子こんたん有べし。諸藝仕上げ追付け故郷へは錦の土産、今一度難波の一曲一かなで所望仕り承りたい事でございます。

竹本森太夫

此仁も大阪よりくだりし太夫。此芝居に足をとめ、今森太夫と御見物の口にかゝり給ふも淨るりのゐとく、當代此流義口まねすれば、野の末山の奥迄も下に置かず人々もてなす事、竹本の影おろかにおもふべからず。同藝者にてもおぼき役者獨旅して諸人もてなすことなし。爰へもかしこへもと呼まはるは義太夫ぶしきかん爲也。その上相應のこれしき取て能い事だらけ、かうじくして聲を失ふ物也。此人の音曲未だ實のらねど、行年にしたがひ段々上落いたすべし。とかく本ぐりを大事にかけ、朝夕稽古本をはなさず近學あるべし。

辰松八郎兵衛座

豊竹倉太夫

浪花堀江に住宅し、豊竹上野の門弟と成り、をりふしは床にあがつて稽古し、餘程語るゝ内江戸辰松登り合せ、淨るりの音聲を聞き、給銀のおりより究め、武州に同道し、初日より評判よく倉殿の仕合せなれ共、折々とんきよなる聲出るが氣の毒、是も大坂にて聞きしより耳にかゝらぬよし、珍重く。兎角修行がかんじんかなめ、今少し心を付けて語り給はゞ、段々立身あるべし。世話事丹前事の類かいなし。詰しゆら事よし。市川團藏と組合して、あらうこと武道の詰合^{たて}立^{たて}りおなじ。市川は手取りの役者、此人はみじゆくの藝、しかし辰松座の立物なれば、ちよつと圖藏どのをかりまして傍に置けばかり、せつしや不調法は御免く。

竹本勘太夫

此人道頓堀嶋の内にて疊屋町の何某、仕似せの商人成しが、好める道とてぜひなく淨るりにお

もひそめ、終に竹本勘太夫と宿札打ち、弟子も少しある時はかぶき芝居に出で、淨るり狂言のあひくを語り、それより江戸にくだり、辰松座にて勤め此芝居の立物、見物のあたりも大てい、尤巧者といふにもあらず世間並の淨るり、若鳥なれど大坂から江戸へ飛で飛び損なはず、今日迄羽をのして乙にはあらず、かん太夫ともてはやさるゝは、小鳥なれ共轉よき故なり。修羅詰節事世話事大てい難することなし。たとへば市村竹之丞にあやかり、出世する様のこんなあるべし。市村殿も年若此人も美若、若いは互、竹之丞殿の如く御最眞を受け隨分修行の功を重ね上手の果に至り給へとしかいふ。

竹本 佐内

此人ちくごの甥のとの也。竹本存命の貌見ぬ人、此佐内どのを能見給へ。其儘の御影割すに(空白)のたとへ、お貌の似ぬは苦しからず、淨るりがあやからしたい。なれ共、瓜の蔓に茄子はならず、筑後程にこそなけれ、音聲の筋どこやら伯父くさい。あの聲を以て節事何か心がけあらば筑後二代の太夫ともてなさんに残念、定めし御如在よらいもあるまじけれど、心より發おこらぬ道心末と

げがたし。惜い事と此人の噂ばかり申出しぬ。一とせ豊竹座に住み、節ごと一つ宛^つ毎日がへに語られし時は、筑後の最來かと思ひ出しらくるい仕りぬ。是も伯父御の影おろかにおもひ給ふな。いつしか江戸座に有付き、今日迄首尾能く勤め給ふ事お手柄く。此上にも精を出し稽古をはげみ、追付上手と成たまへ。たとへていはゞ此人の音曲勝山又五郎と並べ、おせくか。いひや何も角も勝山どの。

竹本今太夫

近年筑後風はやり出し、江戸表の淨るり太夫あるひは土佐節・半太夫節・永閑・さつま、此類の淨り消えく成ぬ。今若衆専ら稽古なさるゝは、竹本・豊竹風。此太夫もと江戸の住人成が、こつすいより此流すき人となり、辰松座に出で大坂下の太夫同前に語らるゝは、奇特とやいはん末頼母敷、淨るり今善惡の筋のべがたし。素人細工には御器用、とくと上方の太夫のかたりやうを聞き節配り、詰の差引き覺へぬいて、追付け上手に成り給へ。大坂から抱^かに參る氣ざし、急便ゆへさつと一筆爰にてとめ畢ぬ。

△右の外淨瑠璃太夫、江戸京大坂に満ちくたりといへども、大坂江戸の芝居へ出給ふ計りをのせ其外は略す。

享保十二のとし

ひつじの孟春吉辰

攝州大坂南木挽町

正本屋

作者 九左衛門

開板人 同 前

今昔操年代記終

難

波

土

産

見性却清醇
享齡擬壯椿
春溫渾滿腔
空眼轉洪鈞
勻翰謔歌刻
少歲綺語神
甲休門榜燦
樂隱持相親

右題近松
予安第像



淨瑠璃
文句評註
難波土產

序

おしてゐるや難波のみつの賑ひ余國にこえ、港に出入百千の船、ヤンヲ目出度やの聲絶す、就中南江の歌舞伎淨瑠璃芝居の軒をならべて繁昌の時を得たり。僕もとし比淨るりの作文に種々の事共取あつめたるが面白さに、數本一覽をなすに、唐倭の引事聞しらぬ俗の諺など時々抄せしを懷にし、ひそかに博識の隱士に便てこれを問に、其解こと流水の如くなりしをことごとく筆記し見れば、おのづから善をすゝめ惡をこらすの一助共成けるまゝ、頓て清書し篋に藏んとするに、書林某來て是を梓に壽ふせば四方好事の本望ならんといふにぞ、吝べきにもあらねば吾子が心に任せんと、直に難波みやげを題として茅舎の窓下に筆をおきぬ。

元文三年戊午のほし

淨瑠璃評註卷之一

發端

抑淨瑠璃といへる來由を尋るに、むかし豊臣秀吉公の御臺政所の侍女に小野於通といふ人あり。才智人にこえ手跡も普通に勝れたりければ、時の人殊におもくもてはやしける。一日御臺所於通を召て仰けるは、いにしへの清少納言紫式部などいへるは、源氏枕双紙等の文を作りて其名を千歳に残しぬ。汝が才をして小女にひとしく朽なん事いと口をしきわざなり。何にてもあれ作物がたりして後世にとゞむべきよし命ありければ、小通かしこまりて退き私に思ひけるは、いにしへの才女の仕わざにならはん事思ひもふけざる事也。しかりといへ共主命もだしがたしとて、閑窓に閉こもりて長生殿十二段といへる物語を書いて參らせける。其趣ひとへに矢矧の淨瑠璃姫の事を主とし、藥師の十二神に表して十二段として書たるにより、時の人此草紙を淨瑠璃本とぞ申ける。こゝに岩橋檢校といへる有て、この双紙に節を付け、夫よりして以來好事の

人間出て淨るりの作文をし、音聲おんじやうすぐれし人に曲調きよくてうして豊なる世のもてあそびとす。又人形にあはする事は、往いじ慶長の比六字南無右衛門といふ女太夫四條河原に芝居を立興行せしに初る共いひ、又同じ比西＊の宮の傀儡師みやこに出てかなでしが濫觴也共いひ傳へり。近世にいたりては或は座敷淨るり、あるは芝居淨るりなど専らもてはやす事には成ぬ。然ども其文勢筆力なく何となく拙く感情もなかりければ、只下々もとのもてはやすのみにして、中人ちゆうじん以上は曾て其本とて取あげみる事もなかりしに、元祿年間に近松氏出て始て新作の淨るりを作り出し、竹本氏が妙音にうつさせたりければ、聞人感情を催し、ひそかにその本をもとめて其作文をみるに文弊拙からず、儒佛神によく渡り譬を取り故事を引にも人の耳にするどからず、貴賤のさかひ都鄙のわかち、それ／＼の品位につきてさこそあるらめとおもはせ、道行等のつづけがらもいせ源氏の倂をうつして、しかも俗間の流言をおかしくつらねければ、自然と貴人高位も御手にふれさせ賞し翫し給ひしより、打續て數多の淨るりを作り出すに、佳言妙句擧てかぞへがたし。終にその名を天下にあらはし、彼淨るり本を見るに恥なく成て、専ら世上に流行する事數十年に及べり。是偏に近松氏が力なり。然して近松死したれ共猶餘光うせず、其門に遊ぶの人相續て作文をなす。夫より數多の作者出來りて、今に於て燦然たり。皆是近松がながれをしたふが

故に、其おもかけ残て甘味ある事すくなからず。然はあれど元來近松が器なれば、古語の取あやまり古實のたがひまゝ有て、氣の毒ながら機轉發明がおとらぬ所も有て、近年の淨るりにも世人の耳目を悦しめ、或は希有の一趣向を出して大に當りを取事、是また達人といはんに強て難有べからず。

○往年某近松が許にとむらひける比、近松云けるは、惣じて淨るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句みな働を肝要とする活物なり。殊に歌舞妓の生身の人の藝と芝居の軒をならべてなすわざなるに、正根なき木偶にさまゝの精をもたせて、見物の感をとらんとする事なれば、大形にては妙作といふに至りがたし。某わかき時大内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし雪いたうふりつもりけるに、衛士にあふせて橋の雪はらはせられければ、傍なる松の枝もたはゝなるがうらめしげにはね返りてとかけり。是心なき草木を開眼したる筆勢也。その故は橋の雪をはらはせらるゝを松がうらやみて、おのれと枝をはねかへしてたはゝなる雪を刎おとして恨たるけしき、さながら活て働く心地ならずや。是を手本として我淨るりの精神をいゝる事を悟れり。されば地文句せりふ事はいふに及ばず、道行などの風景をのぶる文句も、情をこむるを肝要とせざれば、かならず感心のうすきもの也。詩人の興象といへるも同事

にて、たとへば松島宮島の絶景を詩に賦しても、打詠て賞するの情をもたずしては、いたづらに畫ける美女を見る如くならん。この故に文句は情をもととす心得べし。○文句にては多ければ何となく賤しきもの也。然るに無功なる作者は、文句をかならず和歌或は俳諧などのごとく心得て、五字七字等の字くばりを合さんとする故、おのづと無用のてには多くなる也。たとへば年もゆかぬ娘をといふべきを、年はもゆかぬ娘をばといふごとくになる事、字わりにかゝはるよりおこりて自然と詞づらいやしく聞ゆ。されば大やうは文句の長短を揃て書べき事なれ共、淨るりはもと音曲なれば語る處の長短は節にあり。然るを作者より字くばりをきつしりと詰過れば、かへつて口にかゝらぬ事有物也。この故に我作には此かゝはりなき故、てにはおのづからすくなし。○昔の淨るりは今の祭文同然にて花も實もなきもの成しを、某出て加賀掾より筑後掾へうつりて作文せしより、文句に心を用る事昔にかはりて一等高く、たとへば公家武家より以下みなそれ／＼の格式をわかち、威儀の別よりして詞遣ひ迄、其うつりを專一とす。此ゆへに同じ武家也といへ共、或は大名或は家老その外祿の高下に付て、その程々の格をもつて差別をなす。是もよむ人のそれ／＼の情によくうつらん事を肝要とする故也。○淨るりの文句、みな實事を有のまゝにうつす内に、又藝になりて實事になき事あり。近くは女形の口上、

おほく實の女の口上には得いはぬ事多し。是等は又藝といふものにて、實の女の口より得いはぬ事を打出していふゆへ、其實情があらはるゝ也。此類を實の女の情に本づきてつゝみたる時は、女の底意などがあらはれずして、却て慰にならぬ故也。さるによつて藝といふ所へ氣を付ずして見る時は、女に不相應なるけうとき詞など多しとそしるべし。然れ共この類は藝とみるべし。此外敵役の餘りにおく病なる躰や、どうけ様のおかしみを取る所、實事の外藝に見なすべき所おほし。このゆへに是を見る人其しんしやく有べき事也。○淨るりは憂が肝要也とて、多くあはれ也などいふ文句を譬、又は語るにもぶんやぶし様のごとくに泣が如くかたる事、我作のいきかたにはなき事也。某が憂はみな義理を専らとす。藝のりくぎが義理につまりてあはれなれば、節も文句もきつとしたる程いよゝあはれなるもの也。この故にあはれをあはれ也といふ時は、含蓄の意なうしてけつく其情うすく、あはれ也といはずしてひとりあはれなるが肝要也。たとへば松島などの風景にても、ア、よき景かなと譽たる時は、一口にて其景象が皆いひ盡されて何の詮なし。其景をほめんとおもはゞ、其景のもやう共をよそながら數々云立れば、よき景といはずしてその普のおもしろさがおのづからしるゝ事也。此類萬事にわたる事なるべし。○ある人の云、今時の人はよく／＼理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ

世の中、むかし語りにある事に當世請とらぬ事多し。さればこそ歌舞伎の役者なども、兎角その所作が實事に似るを上手とす。立役の家老職は本の家老に似せ、大名は大名に似るをもつて第一とす。昔のやうなる子供だましのあじやらけたる事は取らず。近松答云、此論尤のやうなれ共、藝といふ物の眞實のいきかたをしらぬ説也。藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也。成程今の世實事によくうつすをこのむ故、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへ共、さらばとて眞の大名の家老などが、立役のごとく顔に紅脂白粉をぬる事ありや。又眞の家老は顔をかざらぬとて、立役がむしや／＼と髭は生なりあたまは剃なりに、舞臺へ出て藝をせば慰になるべきや。皮膜の間といふが此也。虚にして虚にあらず、實にして實にあらず、この間に慰が有たもの也。是に付て去る御所方の女中、一人の戀男ありて、たがひに情をあつくかよはしけるが、女中は金殿の奥ふかく居給ひて、男は奥方へ参る事もかなはねば、たゞ朝廷などにて御簾のひまより見給ふもたまさかなれば、餘りにあこがれたまひて其男のかたちを木像にきざませ、面體なんども常の人形にかはりて、其男に毫ほどもちがはさず、色艶のさいしきはいふに及ばず毛のあな迄をうつさせ、耳鼻の穴も口の内齒の數迄寸分もたがへず作り立させたり。誠に其男を傍に置て是を作りたる故、その男と此人形とは神のあるとなきとの

違のみ成しが、かの女中是を近付て見給へば、さりとは生身を直ににうつしては、興のさめてほろぎたなくこはげの立もの也。さしもの女中の戀もさめて、傍に置給ふもうるさくやがて捨られたりとか也。是を思へば生身の通りをすぐにうつさば、たとひ楊貴妃なり共あいそのつきる所あるべし。それ故に晝そらごとゝて、其像をゑがくにも又木にきざむにも、正眞の形を似する内に又大まかなる所あるが、結句人の愛する種とはなる也。趣向も此ごとく、本の事に似る内に又大まかなる所あるが、結句藝になりて人の心のなぐさみとなる。文句のせりふなども此こゝろ入れにて見るべき事おほし。」

淨瑠璃評註

目 錄

卷 之 一

○御所櫻堀川夜討

○お初天神記

卷 之 二

○安倍宗任松浦登

○北條時頼記

並雪之段

難波土産

卷之三

○大内裏大友眞鳥

卷之四

○國性爺合戰

○刈萱桑門筑紫轡

卷之五

○蘆屋道滿大内鑑

○大塔官礪鎧

淨瑠璃評註目錄終

淨瑠璃評註卷之一

外題

○御所櫻堀川夜討

此淨るりは九郎判官どの京ほり川の御所に御座有し時、鎌倉の頼朝卿より土佐坊を討手にのぼされ、堀川の館にて夜うちの始終をあみ立たる故、かく外題する也。げだい當世の氣に應じ尤面白し。

序

○恩は春のごとく威は虎のごとく訓は父のごとく愛は母のごとし李巖をうたひし吏民の詞

李巖は三國の時の郡守也。民をよく治し故民の吏しづみや民共が其徳をほめてうたひし詞也。民をめぐむは春の陽氣の草木をうるほすがごとく、下を畏おそすに威のある事は虎のはげしきがごとく、民を教るに道の明かなる事は父が子を教るがごとく、民をあはれみて愛する事は母が子をいつくしむがごとしと也。こゝは平家ほろび源氏の世となりて、頼朝義經の民を治め給ふになぞらへいふ也。

義形せり

儀刑と書べし。儀とし刑といふ事にて、君の徳が天下の手本となりて四海がのつとるといふ事なり。

評、右の序文、近松の筆法とは大にたがひ、句作りの格何となくいやしく、理もまたとくと本意に妥貼す。しかしこれらは全體の文づらの巧拙の論なれば、何許を指てその好惡をあらはしがたし。但し漢和の文共を多く見たる人の目には、おのづからみゆる事也。是ぞ古人のいへる知人ぞ知の場なるべし。

兄によろしく弟に宜して國民をおしゆといふ

大學に詩經を引て、國をおさむるの本は家の内にて兄弟中よくするが肝要なりとおしへたるを引なり。よりともよしつね兄弟にかけていふ。

吳越とへだより

春秋戰國の間、吳の國と越の國と不和にしてたゝがひにおよびし故、中のあしくへだゝるをいふ。是に付て世俗あるひは間のはるかにへだゝる事を、吳越になぞらへ思ふは誤り也。吳と越は遙ならず。唐詩に到江吳地盡隔岸越山多といへるも、吳越の界たゞ江をへだてたる

のみなる事知るべし。但し間のへだたるは胡越なり。唐人も間の遠くへだたる事を胡越のごとしと書簡に書る事あり。

摩利支天

軍をまもる天部の本尊なり。

その咎をしらためるに

しらためるの語淺まし。是は京大阪などの側陋うづやこうじの匹夫しよべなどが、調しらべるといふ事と改るといふ事とを聞はつりて、兩語を一つにしてしらためるなんどいふ。それを直に取たるならん。殿中にてかぢはらが口上には似合す。

甲がしやり

大友眞鳥の抄に出せり。

梵天帝釋

佛法にいふ卅三天の司つかさどにて、天帝也。

閻魔法王

是も佛法にいふゑんまわう也。閻魔えんまこゝには雙王さうわうといふ。但し苦と樂とをならび受給ふゆへ

也と名義集にみへたり。

五道の冥官ぢくわん

地藏十王經に出たり。めいどの官人なり。誓文に請ずる所の本尊、この外に十二神あり。

泰山府君

是も誓ひにもちゆる神也。陰陽者流のたつとぶ神にて、史記にもみへたり。

阿鼻地獄

阿鼻こゝには無間といふ。呵責の間しばらくも間なき故に名づくといへり。

龍の腮あきとの珠

此事列子に出たり。河上翁といふものゝ子川に没しづみて千金の珠を得たり。河上翁がいはいく、石を取て是を鍛へ、かならず名珠ならん。惣じて珠といふものは驪龍の腮の下にあり。汝是を取えしは龍の睡たる時に出あひしならん。さなくば汝が身を粉にせられんものと嘆じけるとなり。

衆星北に拱たんだくして

天の衆あその星は四方にめぐりて、北斗は北にありて動ぬゆへ、衆星がめぐりては北の方の北

斗に拱むかふを北にたんだくすといふ也。論語にも此たとへ見えたり。

靜はたへかねコレのふと立よるを駿河がへだてゝどこへ／＼もう泣ごとはかなはぬ我君に見放されて身のたてらいがならずば

身のたてらいとは何々の詞ぞや。身が立すばとか、身を立るたつきがなくなるとか、身を立るあだてがなくなればなんといはゞ、か程には鄙いやしからじ。

流殺りうせつの法は黃帝の御代に始て

流罪の事、書經の舜典に出たる四罪が、たしかなる書にみえし始とすべし。書は尙書よりふるきはなき事、漢以來の諸儒の説也。こゝに小ざかしく黃帝に始るといひしは、後世の雜書の端にさだかならぬ事の記せるをみていふなるべし。今の作者は誰もすべき事也と、近年世上に評判するも其理ある事也。みな此類の誹諧學文なる故なるべし。

施ほどこしは財たからと法のりと無畏むいの三つ

在家きいかより沙門しやもんへ金銀などをほどこすを財施といひ、出家より俗へ法ほつせをほどこすを法施といふ。又眞實の妙道を得て畏おそる事なき徳をほどこすを、無畏をほどこすといふ。此事つぶさに起信論に出たり。

剛臆をみて

剛はつよき也。臆は臆病なる也。しかし此語は日本の軍書詞にて、漢文には通ぜぬ詞なり。

四 民

士農工商也。士は官につかへる人をいひ、農は百姓をいひ、工は諸職人をいひ、商は諸商人をいふ。此四つにはづれたるを遊民といふなり。

評、此間の追はぎの段、理句義文句共はなはだ面白し。針右衛門はおかしく、ばくち打は小きみよく、親孝行の貧者は思ひの外にあたゝまりて、よそのみる目をこゝろようす。さりとては作意也。殊に伊勢ノ三郎が我身につまされての感心、尤人情のいやといはれぬ所にて、又むかしも是に似たる例有て賢者の論にも合へり。むかし漢の代に呉祐といへる郡守の掾に孫性といふ者ありて、其父まづしく寒氣をふせぎかねし故、孫性がわたくしにて支配の在々へ公用金なりとて民の金を出させ、衣服をこしらへて父にさづけゝるに、其父いたりて簾直なる者にて、汝いかなる術をもつて此衣服を得たるぞと問ける故、有のまゝに答ければ、その父おゝきにいかり、官につかへる身としてかゝる私の非道、天道のおそれあり。急ぎ郡守へ参りて此趣を白狀し、その罪を乞候へといふ付けけるにぞ、孝心ふかき餘り父の下知にし

たがひ郡守に其旨を白狀しければ、郡守吳祐かへつて是を感じ、汝は父をいつくしむ故をもつて民のたからをかすめ汚^{けが}たる名を取れり。勿論民をかすめしは汝が過なりといへ共、又父のためにする所もだしがたし。是すなはち孔子のの給ふ、過を見て仁を知るといふもの也とて、天子へ奏してその衣服をゆるしあたへけると也。今伊勢ノ三郎がみづから劫盜をなすも、おやの故なれば誰か不義也とにくむべきや。尤見物のひいきをうながすものなるべし。

耆婆^{きば}や華陀^{くわだ}

ぎばは天竺の人にて釋尊時代の名醫なり。くわたはもろこし三國時代の名醫にて、蜀の關羽を療治せし人なり。

評、此淨るりは二段目一段丸ぐち無疵の上々吉、扱々よくは作意を煉たるもの也。しかも瑣細な所に氣のついて隅から隅迄みぢんのぬけめもないとは此事、是を思へば三段目はよつぽどまだるい事がち也。惣じていせの三郎に付たる趣向の筋、一から十迄尤ずくめ、しかも骨つぎの段には餘程おかしみ有て氣の盡^つをさんじ、其跡土佐と出合てのせりふ、老母の立あひ何から何までよくも／＼揃ふたりとみゆ。但し場が三のしゆかうとならぬが残念也。二段めには打てつけたる極上々の作意なるべし。

ある人難じて云、伊勢ノ三郎は道を守るひんぬきに仕立たるに、浪人のならひとは云ながら劫盜をさせたる所が少しいさぎよからず。もしも學者などが見て評せばすこし云ぶん有べきか。答、學文の理屈と世間の人情とは少しづゝ違のあるもの也。こゝをよくのみこまねば右のごとき難ある事也。殊に世上の人ごゝろには判官ひいきといふ僻ありて、おくだゝいが實方にて手柄などある人の事なれば、疵有てもよく云なし又よく思ひこむ所が、藝にもちこむ骨髓なり。されば歌舞妓淨るり共義理を本とする事なれ共、その義理に右のかけ引ある事也。それを一向に理くつぜめにして評判すれば、藝の本意を取失ふ事たとへば西と東との違ひができるもの也。それに付ちか比京都のさる學者を門弟がふるまひて芝居をみせければ、此學者都に住ながらよく／＼無風雅に偏屈なる人にや、當代の役者の名も顔も見事なくみごと其日は一日見物せられしが、歸りて後門弟共問けるは、かの芝居の立役の内いづれが上手也と思しめすぞといふに、答て、かの若殿に成し惡人形が藝ぶり甚だおもしろかりし、是が上手ならんといはれし故、それは嵐三右衛門とて實形にて候。かの繼母と一つになりて若殿の遊女ぐるひを云立にして、家を追出さんとたくみし家老が惡人がたにて候といふければ、いや／＼それは理にちがひし評判也。あの若殿がごとく淫洒におぼれて放埒至極のおこ

なひをなさば家の滅亡ゆへ、そこをとがめて追出さんと謀るまゝは、や家老は至極の尤也といはれしとかや。芝居を此やうにみられては、いかなしばゐも仕廻成べし。

風の勢ひは大海の波をうごかせ共井の内の水をうごかす事あたはず

語の心はよく聞えたり。但しこの語は正しき古人の成語つくりたることばとはみへず。それゆへ經子史集

の四部には大かたみへぬ語ならんと思へば、穿鑿に及ばず。此國にて出來たる管蠡集くわんれいしふといふ書に、日月は大地をてらせ共海底をてらさずとある下に、此語に似たる事あり。然れ共たしかなる語にはあらず。

親々矛盾の折からに

こゝのむじゆんといふ事、世俗は中のたがふ事共思ひ、又は相違する事共おもへり。みな誤り也。是は故事にて、自身の口上が自身にくいちがふ事にかざりていふ詞也。むかし一人の士し矛と楯とを賣ものあり。矛を賣らんとては此ほこをもつて突時はいかなる楯もつきとほさずといふ事なしといふ。又楯を賣んとては此たてにてうくる時はいかなる矛をも請とめずといふ事なしといふ。ある人難じて若もし又なんちが矛にて突かけ汝がたてにて請とめばいかゞとがめければ、此者何共こたへんやうなく自身の詞の相違せるを恥たり。是より自言の相違

せるを矛盾とはいふ也。作者その義をしらず。是たゞ今やう作者の斗筭とてよかるの輩文盲の罪也。伊勢の二字を偏つひと傍たがひに引わくれば人平たひらに生るゝは丸が力とよむとあれば

辻談儀する物もらひが神道を講釋する逆、何がな佛法をそしらんとて、西は西方極樂とて佛法には西をたつとむ。されば西の心になればたちまち人の道にそむく故惡とは西の心と書なんど、おのが胸のくらきにまかせて盲蛇におぢずのたは言、世間はひろき物なれば目あき千人めくら千人、みんごと口過をしてとをるもおかし。されば伊勢の二字を此に書たるごとくいひならはす事、愚俗の世話にある事はある事なれ共、偽銀もにせがねと知ては取まじき道理なれば、僻言を取もちゆるは作者の目がかすむ故とおしはかられて淺はか也。近松などとはかやうの所に自分の力量のあらはるゝを恥、一向學者などの笑ふ事は除て書ず。さればこそ近松有てより後は淨るり本が下におかれず、上々がた迄も御覽あるやうに有しに、近年は本のもつたいぐわつたりとおしさがりて、公家武家のうへを書も町屋下さまの挨拶體になり下り取あげてみられぬ事多し。伊勢の伊の字の傍は尹の字也。平の字にはあらず。勢の字も又生るゝの偏にあらず、本字勢なり。俗に勢とかくはやつしよりあやまりたる也。但し此本文には平産へいさんの縁えんをとらんだため俗説を用ひたらんか、俗の耳には尤らしく聞事も有べし。然共

盲千人の譽たるより目あき一人の笑ひにかゝる身の汗をしぼる種なるべし。賢者の詞に身かならずみづから悔てしかふして後人これをあなどるといへることく、作者も自身に我道の威光を引さげる事又口をしからずや。されば惡の字を西の心と書と思ふも、伊の字を人平とよむとおもふも擔かふておるゝ棒にあらずや。

伯夷叔齊はその罪をにくみて其人をにくまずといへり

論語にはくいしゆくせいせいは舊惡を思はずとの給ひし孔子の意を取て、其語を作りなをして用ひたる也。

俱不載天

禮記に君父の仇には俱に天をいたゞかずといひて、君と父とを殺されたる敵とは同じ天をいたゞきて同じ世に住べき義にあらず。すみやかに其仇を討ほるばすべしと也。

古の高良かうらの臣は湯起請取て

高良のしんとは武内宿彌也。人王十六代應神天皇三十一年、たけちのすくね勅使として筑紫におもむきける其跡にて、弟むましろちのすくね帝へ讒して、武内三韓をかたらひ謀叛の志ありと奏す。天皇おどろき給ひて使を下し武内を討しむ。武内の臣まね子といふ者武内に代

て死す。武内是よりひそかに上落し咎なきよしを奏す。みかど疑ひ給ひて武内兄弟を神前に
 おいて湯をさぐらしむ。是湯ぎしやうの由來なり。

評、蜀紅の錦も衣服の裁縫^{しなて}があしければ木綿布子におとるべし。此所の梶原が名字をなはり
 し體なる連判狀を義經公やき給ひて、鎌倉の大小名の中にも此連中あるべければ、みなく
 心を安堵のためわざと焼捨給ふとの意、遠くは楚の君、ともしびをけさせ冠の纓をきらさせ
 給ふの德に似、近くは魏の曹操我にそむける百官共の天子への奏狀を箱の内にて焼せたるふ
 ぜいにて、あつばれ大將の胸中廣大なる一器量のみゆべき所也。たゞ殘念は筆さきしぶりて
 其意を盡さず。跡先の文言^{かんせん}はつきりめかぬ故にや、泣ねいりに肝心の甘美^{うまみ}がぬけ、見る人き
 く人の感ずる段迄とゞきかねるは殘念く。ア、近松戀しや。

勇士の戰場におもむく時三忘とてわするゝ事三つあり

この本文七書の中にみゆ。本文の心はきこえたるとをり也。

もろこしの樊噲^{はんくわい}が母の小袖を母衣^{ぼうち}と名づけ戰場迄も持たりといふ

此事史記漢書等の實錄にはみへず。通俗などの中に出たるならんか。

評、辨慶は一代にたつた一度女犯^{にょはん}せしと云謠、子供迄いひ傳ふる事にて、しかも是迄狂言に

取くまぬ事なればまことに結構なる一口趣向なるべし。是によつて作者の思ひつきとみえたれ共、淨るりに仕立あげたる上にてみれば當世の氣にくいちがふやうにおもはれ侍る。それ故にや世上にこの所の評判はづまぬよし。今の時代、女形があら事するを悦ぶ氣にはのらぬ筈也。尤べんけいがせりふづけ辨慶らしくぎこつなくはきこゆれ共、いかにしても女房といふ道具おとし一體がなまけて見え、芥子酢かましずのきぶい所へ砂糖水をくはへたやうに、底があまふて見物にもたれのくるきみ多し。是を思ふに大事のもの也。かの鹿を逐ふ獵師は山をみずとかやいひて、鹿に計り目が付て向ふみずを追かくれば山に行あたる難ある所に目がつかず。べんけいに此しゆかうははずむと計り目が付て、かんじんのべんけいにぬるみのくる所に目がつかず、ついに當世のはづみを失へり。されば此淨るりあつたら二段目を三で引もどすやう、十ぶんのあたりとはみへず。誠におしむべし。そのうへ兩人が肌にわけしふり袖は、清十郎おなつの土用ぼしかびくさく、播州ひめちのしのび寢は、七小町に名にしあふ大原のさこねの夢まださめず、殊にべんけいが娘を切てより後のせりふ、うれしいの中にすこしおかしみの出る文句あり、どこ共なふうれいもしらけて諸見物のうるほひすくなし。

又ある人の難に、辨慶が肌着は童の時よりして晝夜身をはなさず今此場の役にたちし事あま

りに見物をうつぶけたる趣向ならずや。辨慶がおさなだちより是迄の越方、いか計りのへんれきとかせん。矢島のうら波一の谷のしほ風、數十年のあらばたらき、戦場の大汗にひたしては、おそらく齊の晏子あんしが名を得し三十年の狐裘こさうなり共有べき事とは思はれず。事のかけたる仕組かなと嘆息せしもさる事なるべし。

○道行

注なし。

この道行に評注なきはいかん。答。この道行一つも注すべき事なし。其上近年の道行、文句は生玉祭文あるひは手まり歌繪草紙やうの口氣こうきにおちて、多くは評するにたらず。近松が筆勢の光燄はたえ果たり。おしいかな。近松が道行は何となく句がらげだかく、やゝもすれば歌書の體源氏なんどのうつり有て、優美なる事かくべつ也。それに目なれて今時の道行は一
向評議におよぶべからず。

須彌しゆみの四州の四天王

佛説に世界をしゆみせんといふ山に作り、東西南北の四州にわかち、四方をつかさどる四天王也。多門持國増長廣目の四天にて、謠などにも多くある事ゆへつまびらかにはしるさず。

夜討によせたる正俊が心をみする此をびらと重藤と共になげ出すを伊勢ノ三郎おつ取てみれば弓には弦もなく鏃をぬいたるをびらの矢幹

この正俊が義を立し所よく聖賢の意にかなへり。孟子離婁の篇に此義と同じき事あり。鄭の國より衛の國をうちし時に、鄭の大將を子濯孺子といふ。衛の國よりは庾公之斯といふを大將として向はしむ。しかるに戰場にてしたくじゆし俄にやまひおこりて弓を引ことかなひがたく、其士卒に云けるは、我かならず今日の軍に討るべし。我病て弓をひく事かなはずとて其日の衛の大將を誰なるぞと問に、士卒こたへて庾公之斯なるよしをいへければ、孺子聞てしからば命をたすかるべしといふ故、士卒ふしぎに思ひ、ゆこうしは衛の國にて聲にきこへし弓の上手なるよし、然るにかれが向ふと聞て命をたすからんと給ふはいかなる故ぞと問ふ。孺子こたへて庾公之斯は弓を尹公之他といふ人に學べり。尹公之他はわが弟子なるが日比たゞしき人なれば、其人が友として弓をおしへたる庾公之斯はかならずたゞしき人なるべし。此故に我をたすくるを知るといふ。果してゆこうししせめ來て孺子の弓をひかざるをうたがひ問に、じゆし病おこりたるよしを答けるにぞ、ゆこうししがいはく、我は弓をいんこうしたにまなびいんこうしたは弓を君にまなべり。我君の衛をもつて君を害するにしのび

ず。然れ共今日のたゝかひは我君の命なれば捨られずといひて、矢をぬきて乗たる車の輪にたゝきつけやじりをぬき捨て、中^{あた}ても孺子に害なきやうにして矢をはなつて引しりぞけりとも。此事義によくかなひたるゆへ、孟子是を取て教とし給へり。

けいほうきそくの日

此事いまだかんがへず。

呉子孫子張良陳平韓信に諸葛が術をそらんじ給ひ

呉子と孫子とは戰國の時の兵法の達人也。すなはち呉子も孫子も兵書をあらはして七書の中の一つなり。ちやうりやう、ちんぺい、かんしんは漢の高祖の臣にていづれも名將なり。しよかつは孔明にて蜀の劉備の謀臣なり。

評、四段目の奥、いそのぜんじが舞に取まぜ藤彌太がはたらき、尤氣を取る仕くみ也。さて土佐坊を善にしたて、初段の口にかまくらにて誓紙を書せたる所、世上のいゝつたへを反^{うら}へなして、新しく今この場にてよしつねにもせいしを奉り、御父義朝公の重恩を思ひよりともよしつね御兄弟へ共に奉公の筋を立たるゝ尤おもしろきしゆかう也。ぺんけいが尻馬は雀場の似せ土佐、正眞の土佐は忠信をたてぬき伊勢ノ三郎にうたれし所、始終よくぬけたるもの

也。すべて此段もあなのあく所みへず、いかさま佳作といふべし。

馬歴神

馬歴と書べし。既の神なり。

評、正俊しやうどんと正尊ただんと、むかしより土佐が實名なづを二様に云ならはせるを據よにして、眞と偽とをわけ、眞の土佐ぼろは正しゆんにして正ぞんが偽土佐なりとの事、尤似つこらしき作意なりこれより奥のかんたんのまぐらの一きよく、諸見物ながことのたいくつを引たて、罷顔いながほのよきやうとの取くみ、尤さもあるべし。

外題

○お初天神記

曾禰崎の天神のやしろの境内にて、天満屋おはつ心中したるよりして、此天神をお初天神とよびならはせり。此淨るりおはつが心中の始終を作るゆへかく外題せるなり。

げにや安樂世界より

此語田村のうたひの語をすぐに取て書たる也。あんらくせかいは極樂といふにおなじ。示現

はかりに形をあらはし給ふとの意なり。

のぼりて民の賑ひを契り置てしなにはづや

是は仁徳天皇高津にのぼりなには津の跡を見給ふに、貢ものをゆるされて民が富さかへて賑ひけるを御覽まし／＼ての御製に、高きやにのぼりてみればけぶりたつ民のかまどはにぎはひにけりと詠じ給ひ、すへの世迄も此所の民のにぎはひをことぶき契り置給ひしなにはづ也との事なり。さて大坂をなにはといふ事は、むかし神武天皇日向の國より御舟にてのぼり給ふ時、此所にて浪速なみく御舟こえ難かりしかば、此所を浪速の國と稱給ひし事日本紀にみへたり。浪速もなにはとよむ。又なみのあらき心にて難波共書く。みな此時の故事也。さて大坂を三津の里共大江の岸共いふなり。

三つづゝ十と三つの里

大坂三十三所の觀音のある所三十三所ゆへ、三つづつ十と三つといふ。こゝの文句がら雅にして面白し。近松が手段にあらすばかく優美にはいひがたかるべし。是は伊勢物語の歌に、鳥の子を十づゝ十はかさぬ共といへる詞がらをかりて書たり。しかも大坂を三津の里といふにいひかなへて、三つづゝ十と三津の里と詞を引うつりたる所妙也。大坂を三津の里といふ

は高津敷津難波津の三つある故也。

罪もなつの雲

つみもなしといひかけてなつのくもといふ。

かほよ花

杜若の事也。是も娥かほよは妍みよよき事故云かなへたるもの也。

てる日の神もおとこ神

神道にては日を天照大神とす。天照だいいじんは陰神かげがみなり。しかるをかくいひしはいぶかし。

但し日は陽なるゆへ、陰陽の方より取ておとこ神といへるならん。

むかしの人も氣のとをるの大臣の君が鹽がまの浦を都へ堀江こぐ

融のおとどは嵯峨天皇第十五の御子也。むかし加茂川のほとりに家づくりして住給ひ、六條河原院と申す。官位は從一位左大臣にてまします故、大臣といふ。しほ竈の浦はもと陸奥宮城郡にある名所也。とをるのおとど、此鹽がまの景を都の宅にうつし給ひしが、今なにはの堀江をこぐ舟の其しほがまのうらのけしきにて、茶ぶね荷ぶねのかよひは鹽くみ舟のごとく也と也。

弘誓ぐぜいの櫓うしべうし

くはんをんめぐり故、廿五の菩薩の來迎のぐぜいの舟によそへていふ也。ぐぜいは一切衆生を弘く濟度せんとの誓願を立給ふ故、しゆじやうのいのち終る時、極樂より觀音を第一として、廿五の菩薩がぐぜいの舟にて來迎し給ふと也。

法の玉ぼこ

王ぼこは道といはん枕詞也。故にのりのみちとのところ也。

ふだらくや

普陀洛迦山とてくはんおんの淨土なり。

久かたの

久かたは空といはん枕詞也。空にまばゆきと云たるゆへ、久かたの光とうけたり。

光に移る我がげのあれくはしればはしる是々又とまればとまるふりのよしあしみるごとくこゝろもさぞや神ぼとけてらす鏡の神明宮

この段文句はよく聞えたり。空の日のひかりをうけてかぐみをいひ、鏡は神の御正體ゆへしんめいぐうをいふ。空にまばゆきと云出したるより以下の文句、みな神明宮をいはんための

まくら詞也。しかもはしければしるとまればとまる等の詞、人形にふりを付たるもの也。女一人の道行ゆへ、ながきもんくの中にば此文句のごとき事あれば、一入人形の所作がつきてふりがあるゆへなるべし。

御佛も衆生のための親なれば

一切衆生悉是吾子と法華經に説給ふにもと付ていふ也。親の縁よりおはせと移たり。うつりかもめなれも

鳥類畜類蟲などをよびてなれもといふ也。歌ことばなり。

はづかしのもりて

はづがしの森といふ名所ある故それにかけていふ也。山城の國乙訓をよくにの郡にあり。

七千餘卷の經堂

一切經をおさめたる堂也。一代の説經七千よくはんなりと也。

經よむ鳥のとき

ほととぎすを經よむ鳥といひ、又はめいどの鳥共いふ。此事くはしく十王經に出たり。經よむ鳥といひてすぐに日暮の酉の時といひうつしたる也。

きぬくも

きぬくは別れの事なり。

空にきえては是も又ゆくゑもしらぬあいおもひぐさ

西行の歌に、風になびくふじのけぶりのそらにきへてゆくゑもしらぬわか思ひかな。此詞を取て書り。相思草はたばこの異名なり。

夢をさまさんばくらう

獺といふけだものはよく夢を食ふといふ故事あるゆへ、ばくらうといひかけたり。されば枕屏風の繪などにおほく獺を書も、あしき夢をくはせんとの心也とかや。

佛神水波のしるしとしていらかならべし

佛は神の本地にて神は佛の垂跡なれば、神とほとけは水と波とのごとく也となり。いらかは藁と書て瓦なり。棟をならべたるをいらかならべしといふ。

さしも草

たゞたのめしめじがはらのさしも草われよのなかにあらんかぎりとは、観音のちかひをよみたる歌によりていふなり。

三十三に御身をかへ

観音は人を濟度せんために三十三の身をあらはし給ふ事、くはんおん經にある故それによりていふ也。

戀のやつこ

奴は下部しもべの惣名なり。然れども和語にやつこといふに二種あり。一種は鎧持などの艶やつこ也。是は常のとなへのごとくやつことよぶべし。又やさしき童僕などは。や。つこトやの字を載きてよぶべし。こゝは戀の。や。つこなるべし。

とくゐ

あきなひ旦那をとくゐといふ事京大坂の常語なれ共、遠き田舎にはしらぬ事也。先年奥方の學者、此淨るりをよみて、此詞をあんじ煩ひしよし聞つたへし故爰にあらはす。

死手の山三途の川

めいどに死手の山とさんづの川ある事佛説に出たり。三途は火途刀途かづ血途とて三つの途ありといへり。

うつせ貝

身のなき貝殻なり。

袖とくをまきのとや

和歌の戀の詞に、待わぶる付合せに眞木まぎの戸さゝぬといふ事あり。この本文も徳兵衛がま

ちたるにいひかけたるなり。

道行
あだしが原の道の霜

あだし世あだし野あだちが原あだしみな化の字を書て、さだめなきあだなる心也。さればあだし野あだしがはらはおほく墓所むしよを指ていふ。今死にゆく身なればむしよへの道行の心也。又あだちが原といふ詞もあり。大和詞にあだちが原とはおそろしきをいふといへり。然ればあだちが原と見ても遠からず。しかれ共其本意はあだしが原也。さて命のはかなきを露霜にたとへたる古語おほし。その意を取て道の霜といひ、霜より取てきへて行といへる、皆おもしろし。ひとあしづゝに消てゆく

道の霜といふより縁を取て、一足づゝにきへてゆくと受たる、尤おもしろし、しかもひとあしづゝにきへてゆくの意は、人の命の一日くちぢまる事を、佛經に屠所の羊のあゆみにたとへたる語あり。羊を殺すものを屠者といふ。その屠者が羊を屠場へ引てゆくをみれば、

ひかれゆく羊は一あゆみ／＼にておのが命がちどまるなれ共それをしらす。凡夫のいのちのちどまるをしらぬもかくのごとしといへり。これらの心をふまへて書たるゆへ、底に意味をふくみたる文句也。

夢のゆめこそあはれなれ

うき世は夢なるに、又我身のいま死にゆくはかなさ、さながらゆめの内にまた夢をみしこゝちなれと也。此世を夢といふ事は佛説におほき中に、唯識論に云、いまだ眞覺を得ざれば常に夢中に處す。故に佛説で生死の長夜とすといへり。金剛經にも一切有爲の法は夢幻のごとし共いへり。又詩にも人間一夢中いっちゅうちゅうなど作りて、浮世のあだなるを夢にたとへたるこれらの語をふみて書たる文句なり。

鐘のひびきの聞おさめ寂滅爲樂とひびくなり

涅槃經の偈に、諸行無常是生滅法、生滅々已寂滅爲樂と説給ふ。此心はうき世のもろ／＼のもの一つとして常ある事なし。生ずればかならず滅するの法也。されば生じては滅しめつしては生じひたすら生滅を経て、其終り寂滅としづかに滅しおはりたる所を、眞實のたのしみとするとしめし給ふ也。されば今死ぬる身にじやくめつをたのしみとするのひびき也と聞き

とれば、此世よりさとりしこゝろもあり。

雲こゝろなき水の面北斗はさえて影うつる星のいもせのあまの川梅田の橋を鵲のはしと契りていつ迄も我とそなだはめうと星かならずそふとすがりよりふたりが中にふるなみだ川のみかさもまさるべし

陶淵明が歸去來の辭に、雲無心以出岫きうといふ語あり。その外詩人の詞に、雲の心なきを人情のうき思ひの胸にふさがる目より見てうらやむ心多し。こゝも其心にて書なせり。我々はうき思ひにかきくれしに、うらやましや雲は心もなく何の苦もなくみゆると也。それより水の面とうつりて、しづみ川のけしきをいひしも、彼の空はひとつに雲の波といへる心もちに書なし、空の景氣と今目前の川邊のけしきを打混じて、上と下とでいひたる甚だめづらか也。空のほくとはこゝろよくさへて、其かげ水にうつりてかゞやくも、我むねのくもりたるには事かはりてうらやまれ、わきてうらやましき事は、七夕の星のいもせのちぎりをこめ給ふ天の川もありくと、さぞな二星じせいは千歳をうけて、つきぬ契りをむすぶらん。さらば我々もあやかりて、今わたる梅田のはしをかさゝぎの橋と、ちぎりかならずそはんとすがゆよる有さま、その景その情その態すがたいづれもさも有べし。かさゝぎの橋とは牽牛織女の二星落合給

ふ夜、かさゝぎがきたりて羽をのし天の川をわたすといひ傳へなり。扱ふる雨よりいひかけて川のみかさとうつりたるも、筆のあゆみこゝろよくおもしろし。みかさは水のかさ也。水のかさ高くなるを水かさもまさるべしとはいへり。

きくに心もくれはどりあやなや

應神天皇の御時、使を吳國へつかはして綾をる女をもとめ給ふに、吳國四人の綾をり女をおくれり。其中に吳織穴織くれはどりと名付るありしゆゑ、是よりしてくれはどりとといふ詞をうけてはあやとつづる也。爰も心のくるゝといふをいひかけてくれはどりと云たる故、あやなやと受たる古歌の心にながらひておもしろし。古歌に、くれはどりあやにこひしく有りしかばふたむらやまもこえずなりにき。

せめてしばしはながからで心もなつの夜のならひ

心もなしといふ心をもたせて心もなつといひかけたり。此類のいひかけは結句きれいにして雅なり

だんまつまの死苦八苦

いのちの終んとする際のくるしみを斷末間のくるしみといふ。死苦はもとより死する時のく

るしみ也。八苦は人間の八苦なり。死苦といひたる故八苦とうけたる、是もいひかけの類なり。

淨瑠璃評註卷之二

外題

○安倍宗任松浦笠きぬがき

此淨るりは伊豫守みなもとの頼義、御子八幡太郎義家の兩將、奥州あべの貞任宗任を退治して凱陣あり、其後都にて山純親王のむほんをふたゝび平治し、その上むねたふを度々ゆるし其終に奥州の舊地をあたへ松浦黨と名のる事をつゞりたり。外題當世の氣に應じ諸人評判よろし。但し笠の字をきぬがさとはめづらしき和訓なりと、くろがさ黒字を見知りたる人は嘆するもいやといはれず。

序飛禽也また恩耶義を知る猛虎尙惠與仁をしる治亂我にあり敵にあらず歸心叛意おのれが身たり同一甘味の民と君

この最初の二句は詩の語とみへたれ共、其出所つまびらかならず。其心はよくきこえたり。空をとぶ禽だにも恩義を知り、たけき虎さへ惠仁の心はあり、是らにさへ恩義仁惠あるをみれば、まして人たる者誰か仁惠を捨んや。しかれば此方よりさへよくあしらふ時は、敵とな

るもの有べからず。たゞ世のみだれて敵多きは、此方よりのもてなしのあしき也。かくみる時は此方のしむけ次第なる程に、治亂我にあり敵にあらず。我にきぶくする心と我にそむく心とのさきさまに出来るは、皆おのれよりの仕むけによる。然れば歸心叛意おのれが身なるにあらずや。さて右のごとくみる時は、怨と情と二ツにあらず、同一なりと也。此序のこゝろ、義家卿が宗任をしたがへさせ給ふをふまへていふ。其文面よく意にかなひ面白し。但し筆者のあやまりにや、智しの知の字を智しの字に書たる見苦し。又同一甘味の甘の字鹹の字にあらずれば意義通ぜず。その故いかんとなれば、作者には御存なきかしらねど、此語はもと佛書におゝく出たる語也。是は古歌にいふ、わけのぼるふもとの道はおほけれどおなし高根の月を見るかなと詠ぜしごとく、佛のおしへさまゝに別るれ共、つまる所の本は一理に落るをあかさんとて、千川萬河の水、その流のすじはわかるれ共、おちこむ所は一つ的大海にて同一に鹹味となるのとたとへ也。海水の鹹をいふなれば甘の字大にあやまれり。作者よくよく引るゝ所の本書をみられよかし。

上意にまかせて天奏をもつて上聞に達せしに

天奏は傳奏のあやまり也。堂上に議奏衆傳奏衆とて事を天子へ奏する役なり。その内に傳奏

は別して武家の事を奏するゆゑ、武家傳奏共いふ。いま天の字に書たる笑ふべし。又上聞といふ詞も、天子へそうするには耳なれぬ詞也。但し今の淨るりには何方もかくのごとき胡椒丸のみなる事多し。然ればかやうの僻語は、當世淨るりのはやり物共いふべし。

大みや人

禁中の人々を指ていふ詞也。

うぐひす蛙も歌をよむ

かはづの歌はむかし紀の良貞といふ人住吉もうでの時、浦の草をもとめに出けるに、木の下にうつくしき女の立居ければ、心をかけていひよらんとするに、かの女今は露ばかり思ふ事あり、かさねて爰にきたり給へかならず相見ん、とちぎりてわかれし故、其明る年けいやくのごとく、良貞又かの浦に出て待けれ共其女は來らずして、たゞ砂の上にかはづ有て前わたりせしかば、其蛙の跡をみれば卅一字の歌也。すみよしのうらのみるめもわすれねばかりにも人に又とはれぬる。良貞おどろき是を見て、扱は過し比女とみしは此かはづよとそしりける。又鶯の歌は孝謙天皇の御宇に、大和の國たかま寺の軒端の梅へうぐひす來りてさえづる。老僧その聲を文字にうつせば、初陽毎朝來不遭還本栖とあらはれて、是を和訓にてよめば、

はつはるのあしたごとにはきたれ共あはでぞかへるものとすみかに、といふ三十一字の和歌なりしとかや。

周處心をあらたむれば忠孝のほまれをとる

しうしよは三國の時、呉の人なり。始は其里人に迄おそれられて、周處が三害とて三ヶ條の害の内へ入し程の悪人なれ共、後には大將となりて忠孝のほまれを取れり。

なんぢ豫讓が義を思ひ

晋のよじやうといふ者、主人の敵趙襄子を討んとねらひたりしを、一たんでうぢやうしにとらへられたれ共、主の敵をねらふ忠義のこゝろざしを感じてたすけし事也。しかれ共其後橋の下にふして趙子をねらひし故、後には殺されたり。

評、初段すらりと大概きこへたとほり也。さして替^{かは}ししゆうこうもみへず。文句もありべかゝりの内に、匡房おつぽねなんどのせりふ、餘りいやし過てみゆる所多し。

衆愚の諤々^{がく}いつはりの變言

衆愚はおほくの愚なる者といふ事、諤々はげうく敷ていなり。

圍碁

碁をいごといふ。但し碁を打を碁を圍といふゆへなり。

もろこし玄宗皇帝すごろくもつて后をさだめためし

此事通鑑つがんの唐書又は唐鑑などにはみへず。小説の中にあるにや。

いざ手談と

碁をうつを手談といふ。相手向ひに手にて談かたといふ心なり。

評、碁の所おもしろし。殊にごばんがすぐに八幡太郎の塀を飛で切付らるゝの用にたち。其後まさふさの北の方が早成へ碁石を打付らるゝ場にて入用のものとなる。道具はかくのごとく始終用に立やうに遣るゝ事尤勸なるべし。ある人のいはく、初段より二段目の段切迄打みた處がさうりとして、譯はよく聞へ氣のつきぬ藝とはみへたれ共、底に意味のある事見えす。何とやら請取ぶしんをみるやうに、よみがこまぬと存ずる。答、尤さる事有べし。然れ共せかいの事は一概にいはず。見物にさまゝのすきこのみあり。是を料理にたとへていはゞ、下戸の口と上戸の腹と物ずきがうらはらなるごとく、其藝の見手によりさうりとしたるが氣にいる有り、ねちみやくしたるを好もあり、兎角何をまいらうもしれぬ客の心也。殊にしはるでのあたりは第一あやつりのはなやかなるが肝要にや、此二段め八まん太郎のしの

びの段前太平記の移りにて趣向はありべかりなれど、あやつりの踊^はどうもいはれず、是を思へばあたりを取は、陰の舞の理屈よりは、目の前で仕てみせるが十分の理也。しゆかうがわるう入くめば、一段で一場程づゝ長物がたりの居^{*}せりふ、しらぬ京物がたりに、けんぶつの精をつからす事又ある事なるべし。されば近比ある人の説に、あやつりを見やうならば今のしばゐにしくはなく、本を讀てたのしむには中古近松が作にしくはなしといはれしごとく逆も文句のうへでは今時は人のなぐさみになる程の事なければ、太夫衆の音曲あやつりの色どりにて評判をたのむも一手だてといふべきか。しかれば場所により趣向もさたりが勝なるべし。

桃菌

源氏の先祖六孫王經基しん王の事也。

本國河内へ引こみ

かはち石川郡香爐峰、今いふ壺井通法寺也。山のうへに頼信よりよし義家三將軍の墓あり。つぼゐごんげんとあがむるも右の三將軍を祭る也。又壺井と名づくる事は、頼義奥州の水を壺にいれ本國へもち歸り、此所に井をほりて其水をうつし給ふゆへなり。

六任たふの兄弟

貞任・宗任・家任・重任・正任・則任なり。

青龍朱雀白虎の旗

天の二十八宿を四方へわかし、四方に名あり。南をしゆじやく、東をせいりう、西をびやくことす。即ち天子即位の時、是にかたどりたるはたを立るなり。

波羅門白駝四天王

ばらもん王・はくだ王・四天王、みなあらし姿なる故、いきほひのはげしきにたとふ。

韋駄天班足王軍多利夜叉提婆達多

いだてんは足疾鬼そくしきを追給ふ天部也。はんぞくわうは天然にて暴惡の王也。ぐんだりやしやは五大尊の一つ也。だいはたつたは釋迦に敵せし惡人にて、法華經につまびらか也。

倭人賢人に似たれば非もまた理にまがふことなり

この文句古語にはあらね共、此道理なるがゆへに、作者の筆さきにて古語のやうにつよりなしたるならん。

もろこし陳たふの大夫に秋胡といふ好色者わが婦としらで戯れ後代のそしりを受ける

しうこは魯國の人なり。春秋の時陳の哀公につかへて太夫となり、楚より賣られて陳の國やぶれしかば、城の東門よりぬけ出て古郷に歸らんとするに、既に古郷に近く成て平山桑埠の間をとをりしに、ひとりの婦人桑を取居しをみるに、其かたち甚だうるはしかりければ、しうこ是を戀てたはふれ寄、女の心を引見んために云けるは、百姓の耕作を隋出すよりは、豐年に出合たるがまされり。織はなむすおんなの桑を取事をはげまんよりは、一國の卿太夫にまみへて寵愛にあふがまされり。今婦人終日桑を取給ふ共筐かたみにも満みじ。もし我心にしたがひ給ふ物ならば我に金かねあり、婦人にあたへて辛苦をたすけんとて金を出してみせければ、婦人こたへて云、桑を取て絹をおり辛苦して姑嫜しやうぢやうをやしなひつかふるは婦たるものゝさだまりし道也。我には夫ありて今他國につかへたり。我金をもとめず。又太夫にまみゆる事もねがはず。君はやく其金をおさめてかへりたまへといふ。折ふし秋胡が僕ども來りけるゆへ其まゝわかれて立去、しうこは古郷に歸り着けり。此しうこといふ者、五年いぜんに妻をむかへ五日過て陳へ行つかへたりしが、此たび久々にて歸りし程に老母よろこびて對面し、るすの内は嫁の白氏みづから桑を取てよくやしなひよくつかへし事を語りて、かの嫁をよび出してあはせければ、最前平山にて桑を取居たる婦人なり。夫婦と成て間もなく久しくわかれ暮せし故、双

方共に見わすれてかくのごとし。白氏おつとを見ておどろき泣てはぢしめて云、君先年妻をよびて五日にして遠とほくつかへ母に別るゝ事久し。今日古郷へ歸らば萬事をなげうつて途を急ぎ、母にまみへてやしなふべき事なるに、途中にして女にたはふれ、母の孝養にそなふべき金を捨んとせしや。母をわするゝは不孝也。色をこのみて行作けうさをけがすは不義也。親につかへて不孝なれば君につかへて忠あらじ。家に居て不義なれば官みやつかへして理にしたがはじ。されば我は君を見るにしのびず。君他の婦をめとり給へといゝをはりて奥に入り、うしろの園よりぬけ出て河に身を投て死したり。しうこ大おほきにおどろきて我あやまりをくやみ、泣かなしみて白氏か死骸をほうむり、ふたゝび奉公の心なく一生母をやしなへり。魯人白氏がために廟を立、年ごとに祭をなし潔婦けつぷの社やしろとあがむといへり。

あやまちを改るにはゞからずと申せば

論語に出たる孔子の語なり。

冥途黄泉

大友眞鳥の抄に出せり。

評、三ノ口趣向おもしろし。忍びの段の浪人が、夫婦のやくそくを云立て景正を不義ものと

いふを、義家卿もつともしてかけまさを罪に落し給ふ所、すこしまだるきやうなれ共、奥で打わつた所が元來義家卿がつてんの謀なればさも有べし。惣じて大塔宮の三ノ口程にはみへ侍る。第一しゆかうの筋が先へ少しもみへぬ所が何よりの珍重。此場より奥迄よく練れたるしゆかうとみへて、當目^{あたしも}がたしかく。

ある人難じて云、むかしより女を男の躰^{てい}にやつしたる事は、本朝にも其例を聞及ぶ事あり。

此段のごとく男を女にしたつる事其ためしをきかず。ちかくはかぶきの女形など、うつくしき變童^{やちゆう}を地女の臙粉^{いろうどり}よりもなほこまやかに飾たるもの故、打みたる所は取なり物こし女に正^{しやう}のやうなれ共、よく氣を付たる時はあるひは手の筋あらはに青みだち喉骨高くあらはれ、中々眞の女とは格別なる所あり。いかん。答云。難のごとく男を女に似せたる事狂言には多き事にて、實事には見及ばず。もろこしの歴史などにも見あたらず事也。但し魏晉以來六朝の雜傳をあつめたる、歷代披砂^{ひさ}といふ書にたま〜此類の事あり。晋の惠帝くらゐに即て至ておろか也。その妣^{はひ}、賈皇后淫亂ほういつのあまり、近侍の宦官共にひそかに命じて市井^{いちまい}に人をつかはし、美少年の者あればだまし誑^{すかし}て後宮へ召よせ給ふに、内外^{うちと}の目をおほはんため、かの少年を女儀^{でたう}に出立せ、あまたの女官の中にまじへて給事させ給ふ故、惠帝をはじめ朝廷

の大臣もその事をしらざりしと也。是をもつてみる時はたま／＼其例なきにしもあらずといふべし。

是人於佛道決定無有疑

法華經其外の經にもおほく出たる語なり。此文の心はこの人ほとけの道においては、決定して疑ふ事ある事なしと也。

評、三ノ奥の一場、註の入るべき文句なし。但し諸見物ひいさせぬ方の最後故かうれひしんみりとせざれ共、りくぎのやりかた十分とこちよし。但しこしもと共が噂のあたりより奥方鶴はぎの口上などに、少し奥へ氣のつくべき文句あり。それ故か此所ではそろ／＼筋みへるこゝち、是は作者が奥のこゝろを心にもちて書かれしゆへ、思はずしらす其もやうが、ふでさきへあらはるゝ成べし。但はそろ／＼見物へのみこましもてゆく合點でわざとかう書れしか、それなればわるい合點、惣じて先を隠す事は随分かくすが宜そうに思はるゝ事ぞかし。勿論おゝとうの宮などは三ノの奥におどり場で身がはりを切る下づくろひに、三ノの口に燈籠づくし、齋藤が切子の使者、又奥の口あけに右馬頭がおどりなど、先のみへるやうなれど、是は肝心の趣向にはちつ共かまはぬ事にて、しかも其狂言の時節盆の比ならねば、宮の首き

る場になりて俄におどりを始ては、時ならぬゆへ見物の氣がけうとく、萬一わるう吞こみて踊に物のあるやうに成ては主意の邪魔になるゆへに、是はわざと手まへよりそろ／＼おどりをよほして、踊の時節じやといふ事を見物の虫にがつてんせんためなれば、此格とは別なるべし。しかし此やうにいへばとて、此場に疵を付るにはあらず。是は榮耀の上のせゝり箸とやら、先は三段目口奥共十ぶんの大出来、文句しゆうかう共諸人の難する所なく、みな當りとの評判なり。

○道行

註なし。

評。此道行、ざしき淨るりにしては差^さたる事もなけれ共、芝居ではあたりを取る文句共おほく、尤花やかにおもしろし。

鳳凰は徳を見て下り鳥は視肉^{しにく}にまよふとかや

この語文選に見えたり。ほうわうは諸鳥の長にして、聖人の世ならではあらはれず。雄^{おんどり}を鳳といひ雌^{めす}を鳳^{ほう}といふ。羽蟲^{うしちゅう}三百六十の長也。からすは註に及ばず。視肉は鳥けだものなどの肉のある所を見てまよひくだるとなり。

もろこし郭臣といふ者母にちぶさをあたへんとて我子を土中に埋しといへり

くわつきよは廿四孝の中の一人にて、此事廿四孝傳にみへたり。此時くわつきよ土中をほりて金釜（こふねぶ）を得たりと有り。それに付釜は斤目（きんめ）の事にて、金を釜ほど得たりとの義なるを、此方にて取ちがへ、金のかまを得たりと訓故。繪又は作り物などに釜を掘出す體をなすは誤也。評、道行の奥の場より段切迄、しゆかう文句共に上上吉。飛脚の籠をやく所一際おかしく、奥にいたりてのうれひあはれにひあひに、別して女中などの好そうないきかた也。吃の置みやげ、ふし事の段だてにあはれに面白し。終にはおさな子は命たすかり、結句沼太郎が思ひかけなき切腹。さいごの際に吃のなほりたるいゝわけの所、きつくりと見物のむねにこたへて尤らしく、女房かたわのなほりしに付て、いとゞくやみなげきの體、人情の感ずるただ中始終この段も上出来なるべし。

ある人難じて、沼太郎が心の臓を切てより物いひが正しき事、舌は心に屬する故との事はきこへたれ共、心は眞君（まきみ）の靈府なれば、すでに心を傷て暫時も精神（せいしん）の有べきやうなし。然るを辨舌が正しきなどゝは、醫經にうとき事也とさみせり。尤狂言綺語とはいへど、かく難すればいやとはいはれず。然れば筆を下す時少しは學文の心もつけらるべき事ならずや。

諸神もとより形なし正直をもつて心とす虚靈不昧の御神徳

是も古語にあらず。作者のつゞりたる文句なり。神體は鏡の中のむなしきがごとく、さだま
れる形なし。神はたゞ正直を心として物をてらし給ふ事、かゞみの體たの虚靈たにしてくらから
ざるがごとしと也。虚靈とは形は虚むなしくしてしかもありくおらたと靈なるをいふ。不昧はかゞみのく
らからぬにて、すなはちあきらかなる事也。

野夫漁人

野夫は土民をいひ、漁はすなどりにて魚をとる人をいふ。

御鬱然をはらせ給ふ一興

この然ぜんの字あしく、惣じて然の字を卒然儼然鬱然などゝ用ゆるは、形容し字とて其體てをかたど
るための付け字也。それゆへ鬱然としてとよまるゝ所ならでは用ひてのらず。是等は作者が
文章をしらざるのあやまりなり。

冥感

惣じて佛神のたすけは、目にみへぬ所より力をくはへ給ふ故、冥くらの心にて冥感くらの冥加くらのなど
いふ詞を用る也。

酒宴たけなはの折から

酣いの字を書て半酔半醒の時をいふと註する字なれ共、古來おほく熟醉の方へつかふ事也。軍いくさにても酣戰いといへば、戦をはなはだきびしくするになる也。

五ばん調でう

五臓がよく調和したるといふ心にて用ゆれ共、漢文には見あたらず。俳諧師などのおほくもちゆる事なり。

猿田彦 神事の先へ悪魔をはらふ鼻高の事なり。

外題*
○北條時頼記

此淨るりは最明寺殿鎌倉執權の時節の事を取くみて、末には近松の殘し置れし女はちの木のきの雪の段を切くはせて、始終をよくむすびあはせたり。それゆへ北條時頼記と外題を置也。

序
葵の花は日を見て轉じ芭蕉は雪を聞てひらき
此事圓機活法又は本草綱目などに出たり。

桑の門かど雑はつ髪

出家は樹下石上とてさだまる家なく、あるひは石のうへにたゝすみ又は樹の下にやどるものゆへ桑の門といふ。薙髪はかみを薙きことにて、すなはちしゆつけする事なり。

將軍職しやくの除書じょしょ

將軍職に任ぜらるゝの書也。惣じて官位をさづけらるゝを除せらるゝといふ。但しふるき官を除のぞくといふ意なりとかや。

唐とうの盜賊とうせきが邪智

とうせきはいにしへのぬす人也。伯夷といふ賢人は飴を見て、此食物は老人の口をやしなふに便よき物也といふ。とうせきは飴を見て此ものは盜に入とき、鎖にぬりて鎖をあくるにかつてよきもの也といへりとかや。

節刀せつたうといふ

天子より將軍しよくをたまはるしとて、斧鉞刀旗などを給はるを、都て名づけて節刀といふ也。

かのもろこしの鴻門の會はう沛公はいこうがまぬかれし項伯が恩陳平が情

沛公は漢の高祖也。楚の項羽關中に入て鴻門に陳を取し時、苑増がすゝめによつて高祖をま

ねき、酒えんのうへにて劍をまはせて沛公をうたんと計しを、頂伯と陳平とがなさけによつて其座をまぬかれ給ふ事。史記および前漢書にみへたり。

功有て賞せず罪あつて誅せずんば唐虞といへ共化する事あたはず

唐虞は堯舜の天下をおさめ給ふ代の名なり。化とは治化教化とて天下をおさめ給ふをいふ。此語は七書の中に出たり。

孟宗郭巨

もうそうもくはつきよも二十四孝の中の人にて、兩人共に親孝行の名のえし人也。

魍魎鬼神

もうりやうは山の神の類也。鬼神も山川などの鬼神なり。

壽をやしなふものは病にさきだつて藥をふくし世をおさむる君は亂にさきだつて賢にまかす

この語の心なる文句は、儒書又は醫書にもあまた有る事也。但し正しく此語の出所は見あたらず。古語にはあらず。

謀計は眼前の利潤といへ共終に神明の罰をかうむる

天道の正直にまかせずして、私の謀計にてりじゆんを得る事有といへども。終には神罰をう

くる也。此語は三社の託宣に出たり。

もろこし周の世に魯國と戰ふ事あり一人の匹夫二歳の子をすて十歳の子をつれ走る

この本文のわけはよく聞えたり。此事は左氏傳に見えたり。

○道行

此道行大概上々の出来なり。但し註におよぶ事なきゆへ略しぬ。

道行ノ奥

こも僧しゆぎやうのぼろ／＼と

こもそうの事をぼろ／＼と名づくる事つれ／＼草に出たり。みなかみは京都明あんじ、元祖は普化^{ふけ}ぜんじ也。むかしはこも僧といはずしてぼろ／＼といひけるなん。又尺八を洞簫なりと思ふ人あれ共さにあらず。洞簫は今いふ一重切^{*}の事也。尺八はむかしより尺八と稱す。羅山文集に尺八の賦出たり。かんがへみるべし。

世の中をいとふ迄こそかたからめかりのやどりを何をしむらん

西行法師の歌なり。

けに人間の一生は岸のひたいの根なし草

身を觀すれば、岸のほとりに根をはなれたる草、いのちを論すれば、江のほとりにつながさ

る舟、といふ詩の句を取て書たる也。

發心門さとり門

はじめてぼだいにこゝろざしたるがほつしもん也。後にぼだいをさとりえたるがさとりのも
んなり。さとりのもんはすなはち悟道門なり。

易行門難行門

他力念佛などが心やすき修行ゆへ易行門なり。戒をたもち座禪する等がむつかしきしゆぎや
うゆへなんぎやうもんなり。

觀念門天臺二十四門

くはんねん門は天臺止觀あるひは一心三觀などとて、空假中の三諦等の佛法の一大事をくは
んずるをいふ。天臺の二十四門は右のほつしん、ごだう、いぎやう、なんぎやうもん等みな
その内なり。

空門非空亦空門

これも三諦より出たる事にて、諸法を空とくはんずるを空門といひ、空にもあらずとくはん
ずるを非空門といひ、空にあらざるにもあらずとくはんずるを亦空門といふ。みな佛學の奥

義なれば、たやすくえとくせらるゝ事にはあらず。

評、五段目にいたりては、近松の作の女鉢木雪の段を切くはせて、五段の都合首尾まつたしかく古き名作物を取合せ給ふ所偏に作者の機轉也。さるにより此じやうるりは大評判にて、今も人のよろこぶでき物なり。さて此奥には最明寺の道行の謠の出端ばかりにて、淨るりに移る文句よりして道行の間はぬけたるか、此道行の文句には筆勢のおもしろき事共多し。まづ蝶のつばさのおしろいをくさにこぼして、梢には鶴のしもげをぬぎかくる、雪は花より花おほきと書る所、圓機活法の雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して、石曼卿せきまんけいが雪を詠ぜし詩を出せり。その詩を和語にうつしたるもの也。其詩に云、蝶遺てつゐ粉翼こなよく輕難けいなん拾、鶴墜つるふち霜毛しもげ、散ち末轉まつまわといふ二句あり。是をなほして右のごとくにつゞりしは、彼の樂天が青苔帶あおがせおび衣掛いかけ、巖肩いわかた白雲似しらぐもに帶繞おびを山腰さんゝの一句を、苔ごろもきたるいわほはさもなくてきぬきぬ山のおびを出すもの故五出といふ。雪のみごとさは花にまさるの心にて、唐人も花のうへをゆくのをもつて六出とよぶの意によりて、雪は花より花おほきといへる、尤佳作にあらずや。其外雪中に最明寺一人道行し給ふを見立て、さながら雪の一筆烏といひ、からすの縁よりお羽打かれ

しといひ、其むすび文句には、叡山の僧正の雨ごひの勅をかうふり給ひて詠ぜる。おほけな
くうき世の民におほふかな我たつそまにすみぞめの袖といふによりて、浮世の民におほふか
なの句をもちゆ。一句々々意味ふかく筆さきかんばし。さて道行にいたりては、宿をかり
かけ給ふ時墨のおれか木のはしかとあるは、つれづれに、法師ばかりうらやましからぬもの
はあらじ、人には木の端のやうに思はるゝと書をかたどりたる詞。さながら最明寺殿の詞
共思はれ、又娘がこたへ、鼻そげでもいぐちでもの詞大に下へ落て見物のはづみをうけ、又
其跡をおさへて、天下をさばく御身にも此へんとうにゆきくれて、たゞすみ給ふぞしゆしや
うなるとは、又及ばぬ手段にあらずや。爰の問答、一人は天下の執權職ひとり是在所の若む
すめ、諺にいふ下駄とやきみその相手とち、其相應にせりふを付られし事自然とそなはる妙
手なるべし。さて爰の娘が詞について思ふに、惣じて今の世下がゝりにあらざれば下へはづ
ます。さりとして下がゝりを無調法に書くすせば、千枚ばりの女形をみるやうになり。一向下
鄙てけうがさめる。さればこゝのむすめがせりふの跡、天下をさばく御身にもこの語にあらず
んば、なか／＼花車におさまるべからず。然る時はおかしい事げびた詞も、跡のおぎなひや
うににていやしからず、天下取の御前でも耳にたゞぬやうにもなるものなるべし。其外評し

たき事山々なれ共、此淨るりにかざるにあらねばまづは筆をとめぬ。

太上感應編といふ書をみるに、趙州の奥に白虎山といへる深嶺あり。その峽に鳳鳴觀といふ道士の庵あり。ある夜雪いたくふりすさびて、暗夜のけしき常ならぬに、扉をしきりにたく者あり。道士立出何者なるぞとたづねれば、平生おとづれを通じてむつまじき、麓の農民胡班といふものゝ娘也。此むすめよはひ二八計りにして、近所に名を得し美女なりしが、心に願ふ事有て此峰の絶頂なる神の祠にまふで、日の内に歸るべきをいかゞしけんをそなはりし内、雪にふぶかれ道にまよひ、這々夜に入てこの觀にたどり着たる也。道士うちへ入るゝ事をゆるさずして云、ぜつてうよりは迄さへあゆみ來られしうへ是よりふもとへは程近し。今すこしの艱難をしのぎ我家へかへらるべし。若き女性を此庵にとゞむる事かなふへからずといふ。娘聞てうらめしく、此庵迄たどり着をちからにして來りしを何とて扉をあけ給はぬ日比親たちのよしみは思ひ給はずや。其うへ此山中に、人倫はなれておこなひすまし給ふ身が、わかき女をとめたりとの世のそしりをはゞかり給ふは、扱は塵の世をはなれ給ふの道心はおはせぬかやとがむれば、道士聞て、いやとよ世のそしりはしばらく置、我いま道義を修するとはいへ共猶いまだ肉眼なれば御身が色のうるはしきを人なき庵に引いれさし向ふて

見るならば、いかなる煩悩かおこるべき。然れば某がしゆぎやうを害する惡魔外道心魔をふせぐためなれば、やどりはふつ／＼かなはずと、彼があはれをよそに見捨身のつゝしみをなしたるとなん。是に付て思へば最明寺どのをやどさゞりし娘が遠慮もさる事なるべし。殊に最明寺どのほ道德すぐれ給ふ故、世には老人のやうに思ひなせ共、三十歳にて入道し給ひ三十七歳にて逝去し給へば、回國は三十一二歳の比にて男ざかりなる時は、其身はたしかにおぼしめす共わき目にうたがふことなり也。されば人ごとにたしかならぬ心をたのみて我身を正しきものと思へど、心ほど手綱のゆるされぬものはなし。されば孔子は心を論じて出入時なく其向ふ所をしらず、あやふき物也との給ひ、別して佛法には心は縁にひかれてはさまざまに變ずる事を説給ふ。しかるに佛心はいかなる縁に出あひても其境につれて變ずる事なき故に、是を不變眞如といふ。いまだ佛心にいたらぬ内は、いかに道德の人たり共惡縁にひかれては惡業におちいる事をまぬかれず。故に衆生の心を隨緣眞如とはいふなり。是によつて佛説には心は孤生ひとりおこらずかならず縁に託よて起るといへり。此心を書寫山一雨ときこへし僧の歌に、にほはずばそれ共しらしゆふま暮心をつくる梅の下かぜと詠ぜり。うす暮の比むめの樹のあり共しらず心せはしく打通りしを、風がもてくる句にさそはれ心ときめき、色よき花

の咲みだれしを打ながめてはあかぬ思ひになずみ、終に下陰の立さりがたきも縁にひかるゝ
のゆへなるべし。

淨瑠璃評註卷之三

外題たがいり おほ 大内裏大友眞鳥とものま

むかしの内裏は今の内裏よりは廣く大きにして、南北卅六丁東西二十丁なり。それゆへ今の朱雀が古の内裏の朱雀門の跡也。今の東寺が禁中の＊やうくわん鴻臚館なりしを、後に弘法大師へ給はりたる也。かく廣大なりし故大内裏といふ。眞鳥筑紫に於て是をうつして宮殿を作りしと也。

大友の眞鳥は、人皇廿六代武烈天皇の朝に仕へし人に、眞鳥宿禰とも又は平群大臣へぐりのおとよともいふありて勇猛なる公家あり。此人の曾孫ひまごに大友金鳥きんうといふ人、勇氣大膽の武夫なりしが、後に曾祖そいの名を取て大友眞鳥と名のり、筑紫に在いて謀叛をおこせしを、朝廷より宿禰金道に勅して誅罰させ給ふ。此淨るりの全體眞鳥がむほんを金道が退治せるを主意にのするゆへ大友眞鳥を外題とす。殊に大内裏を立たるが大事おほごとゆゑ、別して大内裏とは題號せり。其實記は近年板行なりし大友眞鳥軍記といへる軍書にくはしく記せり。

周の世に八士あり一母四乳の伯仲叔季なつひよ雙生るゝ王佐わうさの才

この事は論語に出たり。八士とは八人の學者をいふ。周の世に一母^{ひとりのは}双生^{ふたご}を四たびに乳^うて兄弟八人を出生せり。四乳とは四たびに乳といふ事也。伯仲叔季とは唐にての兄弟の次第也。日本にてもむかしは宗領を太郎とよび、次男を次郎三男を三郎などゝ次第して呼しごとくに。宗領を伯とよび其次を仲とよびその次を叔とよび末子を季とよぶ也。故に太郎次郎三郎四郎といふがごとし。擬ふたごを双生といふは即ち双生^{ふたご}るゝといふ意也。王佐の才とは天王の天下を治め給ふを佐^{たすく}る程の才能といふ事也。周の世に此兄弟八人が士となり、天下をおさむるほどの才能を有しと也。是迄双生の才能すぐるゝ事をいひて、金道になぞらへたる也。金道はもと双生なるゆへなり。

人に雙生樹に連理康叔が二穗^{ふたこ}の稻王濬が二莖^{ふたしゆん}の瓜

人に双生ありて其の才能すぐれたるをめでたき御代の吉瑞とするのみならず、樹には連理の枝をめで度事とす。連理とは根が二株にて枝が一つにつらなるをいふ。康叔とは周の文王の子にして衛の國の君也。此人が衛をおさめたる時、異畝同影とて、田地のならば畝^{うね}に禾^{こめ}のかぶは二株にて、畝^{うね}を異^へながら穗^へ先^てが一つになりたるを吉瑞也とて、天子へ奉りければ、朝廷にもいはひ給ひて嘉禾^{かこ}といふ文を作り給へり。王濬は晋の武帝の時の人也。此王濬といへる人

の園の内に、瓜の莖二本が一つになりてその末に瓜が一つなりたるを、是も吉瑞として天子へ獻じて祝へり。是みな人の双生のごとく天下の吉瑞とする事也。されば金道の双生にて有しも、めでたき御代のためしとなり。

みな是代々の吉瑞のためしを爰に日の本や文武天皇の皇居ある藤原の宮所みやどころ

吉瑞とはめで度瑞相也。上にいふ所の吉瑞とものたとへをこの國へひくといひかけて、たとへを爰に日の本やといふ。金道の時は文武天皇の御宇也。此時ならの京ゆへ藤原の宮所といふ。宮所とは天子の御所といふ事也。是も古は下々の屋敷をも宮といひしを、秦の始皇の時より始て天子の御殿にかぎりて宮所といふなり。

壤はらみり

土地がよく腹こへて、膏のあるごとくに潤うるとして柔なるをはらくといふ。是は書經の禹貢の篇にみえたり。

今上

何の代にてもその時の帝を今上皇帝といふ也。

聖德ふかく

聖とは徳の至極にいたりたるをいふ。

神代の古風

天神七代、地神五代を神代といふ。此時は上代ゆへ、上下共に人の心すなほにして質朴なる風なりしを古風といふ。

四十二世

文武天皇は人皇四十二代なり。

律令をはじめ給へば

律令とは朝廷の法度、おきてなり。

禮樂たゞしく

天子の天下をおさめ給ふ根本が禮樂なり。禮は貴賤上下の等しなをわかちて、其身の節ほどにつけて衣服道具等も次第あり。朝廷のつきあひにも貴人をうやまふ等也。樂は聖人の道徳をもうたひて樂に合せ舞也。是も禮がたゞしければ貴賤上下のあらそひなく、上下が和して樂を用る故、禮と樂との二つが世を治むる本となる也。

主水司もみづしの貢の氷こほりひむろのもたひ

禁中にて水を支配する役所を主水司といふ。六月朔日に主水司より舊冬の氷を奉る。是を氷のためしといふ。四海ゆゑかなれば其氷とけずしておほく有といへり。是は山里に氷室とて冬のこほりをたばひ、置室をこしらへ、六月朔日に其里人が主水司の取次にて、天子へ奉る也。毎年きはまりて春日野のさと人が献ずるが佳例なり。貢とは下々より君へたてまつるをいふ。かすが野とは今の奈良なり。

深山幽谷

おくふかき山を深山といふ。歌には深山みやまとよむ也。おくふかき谷を幽谷といふ也。

陽氣おそく發するゆへ

草木みな陽氣にて發生する也。春は陽氣が發する故梅さくらに花さくが常なれ共、深山幽谷は寒氣つよきゆへおそく發するなり。

鳩は三枝の禮ある鳥

鷓鴣ちぐ夷ち全書云、鳥有ニ反哺之孝、鳩有三枝之禮云々。鳥は巢だちして後、おや鳥へ哺ほをふくめ返すもの也。是すぐもる内におや鳥に哺をふくめられし恩をおくるの心也。鳩は木の枝にとまるとき、おや鳥よりは三枝づゝ下にとまるもの也。これ親をうやまふの禮ある心也。されば詩

經にも、諸侯の夫人を、鳩の性の專一なるにたとへてほめたる事あり。

鷹は鷺鳥

惣じて鷹はやぶさくまたか雕などの諸鳥を、鷺鳥うつとりをすべて鷺鳥しとてうといふ。同じ鳥類の命をうちとるゆへ惡鳥とする也。

仲春の月鷹化して鳩となる事禮記には見へたれ共

禮記に月令篇とて、十二ヶ月の月々の氣候をしるして其時をしり、天下へ令けいし給ふ事をしるしたり。その中にこの語出たり。

天地の變怪

天下に惡事おこらんとては、さまざまにあやしき事あるを變怪といふなり。

百官百司

禁中の百ももくの官人百の司なり。司とは一役をつかさどる役人なり。

躑躅てきちよくと

けだものゝ兩足を折ておどる體を躑躅といふ。さればつゝじの花を躑躅花といふも、此花のつばみ羊の乳によく似たるゆへ、子羊が是を見て母の乳ぞとおもひて、躑躅と足を折ておど

る故也とぞ。

小牡鹿さほしか

ちいさき牡鹿をいふ。

秦の趙高

秦の始皇天下を取てのち諸國をめぐりて途中にて崩す。李斯といふ者と趙高といふものと兩人共に佞人にて、始皇の太子扶蘇ふそといふ人の正しき人がらなるを忌恐れ、此人を嗣あとつぎにせずその弟の胡亥こがといふ人の愚なるをかれらが便たよりとして、始皇の遺言也と偽りて、扶蘇を自害させ胡亥を位につけたり。右の趙高はもと宦官とて女中につかはれ奥方へ徘徊し、始皇の氣に入て御前近く立身せし者なるが、此たびは我はからひにて胡亥を位に立たるにはほこり、朝廷の臣もしおのれを恐れざる者はたちまち罪に落しけるが、猶も己れが權威を試んとて、ある時鹿を奉りて馬也といひければ、胡亥あやしみて羣臣に問に、みな趙高が權威におそれいかにも馬也とこたへし也。是より人をうつけにしては馬鹿なりといふ詞はじまれり。

前表

先だつてあらはるゝをいふなり。

九州の探題

探題とはもと大内にて政をしらべ給ふ役にあたるをいふ。但し題をきざぐる探といふ事にて。事をぎんみしてしらぶる意也。諸國にて一方の惣領そうれうとなるをむかしは探題といへり。眞鳥は九州の旗がしら故かくいへり。されば今の俗に物をぎんみする事をたんだへるといふも此こゝろなるべし。

靈佛靈社

靈はあらたなる事をいふ。

兩部の社

神道に唯一ゆいと兩部りやうぶとの二つあり。伊勢加茂などのごとき。佛をいむは神道一すじに立るゆへ唯一神道といふ。兩部といふは神道に佛法をまじへ。神の本地は佛にして神は佛の垂跡也と立る故、神佛を合せて兩部といふなり。

武士

武士をものゝふといふは、日本のむかし物部ものべ氏の人。朝廷にてはじめて武官をつかさどりたるゆへ。後の世迄も物部ものべとよぶなり。

兵部省

省は禁中の役所なり。禁中には八省とて八所あるその中に、軍兵をつかさどる役所を兵部省といふなり。

つの髪

わらべのひたいの兩旁に髪をつかねて結たるは、角のごとくにみゆるゆへ、唐にては童のまへがみを𪛗角共又總角共いふ。和訓にて角がみ共あげまき共いふ也。みな前髪の事なり。

不肖

我身を卑下する詞也。もとは肖にざる事にて賢人には肖にざるとの意なり。

とび梅の筑紫

菅丞相つくしへ流され給ひ、都の梅をしたひ、こちふかば匂ひをこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそと詠じ給へば、都にのこし置れし梅たちまちつくしへとびさりしとの故事をふまへていへり。尤作者の頓作なり。

堂上堂下

公家衆を堂上方といふ。いづれも官位を経て御殿の堂上へあがり給ふ家なる故也。公家にあ

らざる官人を堂下とも地下人共いふ。堂上へあがる事を得ず、階下に伺候するゆへなり。

軍神の血祭いくさがみ

軍に出る時軍陣をまもる神を祭るには、けだものの生血なまぢをそゝぎ其肉をそなへるを血まつりといふ。唐よりして其ためしある事也。

馬鹿

上に出たる故事をふまへて、馬鹿もなしと書たる作者のはたらき也。

王化

天子の教化といふ事なり。化はおしへなり。

ふりわけ髪

いとけなき時の、まへがみを中より二つにわけたるをいふ。歌に。くらべこしふりわけがみも肩すきぬきみならずしてたれかあぐべき。

三種の神器

天子の御位をゆづり給ふに、此三つの御寶をゆづらせ給ひて御しるしとし給ふ。神璽寶劍内侍所なり。この三つ、代々の天子御くらゐをまもらせ給ふ御たから也。

瀟湘^{せうきやう}の夜の雨

からの八景のひとつ也。うたひの文句を直に引もちひたり。

手向山

たむけは近江の名所なり。菅家の御歌に、此たびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまに〜。

かたそぎや

やしろの棟のかつほ木也。上代は質朴にして神の御殿も茅ぶきゆへ。風をおさへたるためにかつほ木をもちゆ。かつほ木は風おさへ木といふ事也。その端をそぐゆへかたそぎといふ。是も神代の神は内へそぎ、人王以後のかみは外へそぐ也。口傳也。

額づきて

ぬかはひたひ也。ひたひを地につくるをかくいへり。

柏手

神道にかしはではらひとて、神をおがむに手を拍てはらひする事あり。これにいろ〜の口訣^{くげつ}ありて神道に傳授とする事也。

かへりもふし

賽と書なり。神を拜して祈念する事なり。

瓢箪酒

うちみの藥なる故なり。

瑞籬

神前の垣をいふ。たまがきといふに同じ。瑞はあらたなる意なり。

庶流

宗領のすじを嫡流といひ、次男のすじを庶流といふ也。

壁子

妾ばらなどの末の子といふ事なり。

傳

いとけなき時より其人の傳につきて諸事をおしゆる役なり。

國に杖つく

つえは老て歩行をたすくる也。禮記の王制に、五十にして家に杖つき六十にして國に杖と云

り。

金巾子きんこじの冠袞龍こんりやうの御衣

巾子こじは冠の髪をおほふ所をいふ。其うしろに立るものを羅といひ、其うしろにたるゝものを纓あひといふ。巾子を金にてしたるを金こじといふ。袞龍はのぼり龍くだり龍を袍ほろにゑがく装束をいふ。金こじのかんむりにこんりやうのぎよいは天子のよそほひなり。

こうがしやり

甲が舍利也。甲はよろひと訓じて甲虫かうちゆうといふは、龜や螺蛤にじなどのかたくよろひたる惣名也。

舍利はもと梵語なり。翻譯名義集に舍利、こゝには骨といふとあり。かの甲虫のごときかたき物が骨となる共といふ心也。

補佐の臣

補佐はたすくるとよみて、君のたすけとなる臣をいふ。

九州二嶋

九州に壹岐對馬をこめていふなり。

掖門えきの扉

難波土産

正面の門の兩旁に小門あるを掖門といふ。人の脇の下のごとくなる故也。掖は腋と同じ。
大紋

布びたゝれの事なり。

なまめく

媚の字也。うつくしく艶しきなりふり也。

伽やらふ

今は旅人のつれづれをなぐさめの伽をやらふといふ事に成たれ共、もとは下さま惣嫁やうのたぐひは土の上野中などの契りなれば、唐土の書にも是を土妓野合といふ。すべて世俗の僻言そのいはれある事おほし。但したび人なぐさめの伽にやらふと轉じたるも又一興也。

おもうち

面もちといふ事也。源氏に見へたり。

舟玉

ふねをまもる神なり。

九百九十九の鼻かけ猿

此ころはきこへたとをり也。但し文選六臣注李善が注にみへたり。

景行天皇

人皇十二代の天子なり。鹿嶋もふでの事は本朝通記にみへたり。貝あはせの始り此淨るりの本文のごとし。

兩夫にまみへぬ教訓

通鑑に出たる齊の王蠋しよくが詞也。燕の國の大將樂毅といふ者齊の軍をやぶりたる時、王蠋が賢者なるをしり燕につかえん事をすゝめける時、王蠋がいはく、忠臣は二君につかへず烈女は二夫にふれずといひてうけがはざりしと也。是より貞女は兩夫にまみへずといふ詞あり。

尾に泥をひく龜山

莊子に諸侯より莊子をまねきし時うけがはずして云けるは、うりかたトのためにもちひらるゝ龜は人が尊敬をなせ共かへつて其身を殺さる。泥中のかめは尾にどろを引て見るしけれ共無事也と云り。是を取て龜山に恥をあたふる詞にいゝかけたり。

逆鱗

龍の頤おとがほにさかさまに生たる鱗あり。此うろこにふれたる者はかならず死するゆへ、天子のい

かりにふれたるものはかならずいのちをとらるゝにたとへて、天子のいかり給ふをいふ。
綸言ふたゝび歸らぬと汗をぬぐふて立歸る

古語に綸言如汗とあり。天子の詞を綸言といふ。天子の詞一たび出ては跡へかへらぬ事、身の汗のふたゝび歸らぬがごとしと也。此本文にはりんげんよりあせをぬぐふにいひかけたり。是作意なり。

てんば

顛婆と書也。ものくるはし顛 婆といふ事なり。

いぶせき

詩には無聊といふ。源氏岷江入楚に不審と書り。

すゞめかまたか

これは駕かきの山椒也。かくしこはすゞめは百に成てもおどりわすれぬといふ謠より取て。百をすゞめといふ。股とは二本との義にて二百をいふ。

骨肉同胞

兄弟は同じ骨肉をうけたる故こつにくといひ、同じ胞にむまれしゆへ同胞といふ。

みさほ

操とも介とも書て共にみさほと訓じて、人のまもりめのかたきをいふ。

既に孔子も季孫のうれひ蕭牆せうかうのもとにあらんと給へり

此事論語に出たり。魯の國の季孫氏といふもの君をないがしろにして政道を我まゝにさばきしが、魯國の傍なる顓臾せんぶといふ國をうたんとする事を、孔子聞給ひて、季子のごとく我まゝにては臣下の内より亂がおこるべしといふ事を、季孫のうれひは顓臾にはあらずして蕭牆のもとよりおこらんと給へり。蕭牆とは外門と内門との間にある牆也。畢竟は季孫が家内より亂がおこるべしと也。俗にいふ足もとからおこるの意なり。

聰明睿智

耳に善惡をきゝたがへぬを聰といひ、目によしあしをあきらかにみるを明といふ。睿はふかき心にて、智の千萬人にすぐれたるをそうめいといふなり。

つたへきく燕丹王

この事史記に出たり。秦の始皇は燕丹の敵ゆへ人をたのみてころす事をもとめ、田光先生といふ勇者にたのまれしに、田光がいはく、某は年老たればうつ事かなはずといへ共、我友に

荊軻けいこといふ者あり、是をたのみて本望をとげ參らせんとてけいかどもとへゆく時、燕丹王田光を門外迄おくり出、この大事かならず人にもらし給ふなと申されしかば、心得たりとてやがて荊軻が方へゆき、此事をよく／＼たのみて、田光はけいかゞ門前の李の樹にかしらを打わり死したり。是ひとへに燕丹王がうたがひをはらさんがため也。今かすへの身のうへに、尤よく相應したる故事にて尤おもしろし。

此やい鎌のとがま

中臣鞍なかつくさにやいかまのとがまをもつて切はらひ給へばといふ語あるをすぐにもちひたり。かねみちが鎌を持ての所作なれば、尤とりあひよき作意也。

邯鄲鑊かんしゃく耶や

晋の雷煥らいくわんといふ者、天にむらさきの雲氣たなびきしを見て其下をほりたれば、つるぎの鑊くわくとなるべき鐵丸二つを得て、すなはちこれを地がねとし、于將ばくやといへる夫婦のものに劍をうたせて名劍となる。是より名劍をいふにかならずかんしやうばくやと稱するなり。

孝弟忠信

孝はよく親につかふるをいひ、弟はよく兄につかふるをいひ、忠は君によくつかへ、信は人

にまことを立るをいふ。此四つのは人道のおもんする所なり。

三段目
猩々よく言へども獸をはなれず

禮記曲禮篇に鸚鵡よくものいへども飛鳥をはなれず、猩々よくものいへ共禽獸をはなれずといふに本づきたり。人として禮義をしらざるはきんじう同然なりとの意なり。猩々は面は人のごとく身は猿のごとしとあれば、此語に引つゞきて獼猴をいへるも、取合よろしき引ごとなるべし。

獼猴の冠

是は楚の頂羽、みづから霸王と稱して我まゝ無禮のおこなひしを、削徹といへるもの是をそしりていへる詞也。今の眞鳥が無禮我まゝに引あてたり。

麒麟大王

きりんは四靈の一つにて、毛虫三百六十の長なり。身はくじかのごとく、尾は牛のごとく、ひづめは馬のごとく、額に一つの角あれ共つのゝ端を肉がおほひて物にふれず、されば生たるものをくらはず、生草をふまず、至て仁あるけだもの故、その徳を聖人になぞらふ。眞鳥みづからほこりてかゝる徳ある號を稱せしと也。

卿相雲客

卿は天子の朝廷にてまつりごとを相あそる宮ゆへ卿相といふ。天子の殿上を雲のうへになぞらへて殿上人を雲客といへり。

浮べる雲のうへ人

論語に、不義にして富貴なるはうかべるくものとしといふ孔子の語あり。此語のこゝろは有もなきがごとくなるをうかべる雲といふ。又あぶなき事を浮雲共いふ。こゝの文句右の兩意をかねて、しかも雲のうへ人といひかけたり。

しらぬひの筑紫

むかし景行天皇海上より火のみゆるを見給ひて御舟を其火のある所へ着しめ給ふ。すなはち今のつくし也。是よりしてつくしといはん枕詞にしらぬひといふなり。古歌におほくよめり。

色やむかしの色ならぬ

春やむかしの春ならぬと詠じたる古歌のもじりなり。

麻につるゝ蓬

此語の出所つまびらかならず。童子教にもこの語あり。意はあさの中に生たるよもぎはあさ

につれてなをく立のびるとなり。

子を妊はらでは寝るに側そばす座するに邊かたはらす立に蹕ふたしちす

是は漢の劉向といふ人の作りたる烈女傳といふ書の語をすぐに引たる也。是は胎教とて懷胎の内のおしへ也。

姫ごぜは三界に家なし

三界の事はこゝに出あふ事にあらね共、俗は世界の事をさんがいといふ故俗説にしたがひていひたる也。たとへば子はさんがいのくびかせなんといふも皆せかいといふ心にもちゆ。女に家なしの事は女は夫をもつていへとすと禮記にもみへたり。又は孔子の語に婦人は三従の道あり、家にありては父に従ひ、人にゆきては夫にしたがひ、おつと死しては子にしたがふあへてみずから遂とぎる事なしとあり、みな家なしの義なり。

よめい歸りをするといふ

詩經の註に朱子のいはく婦人謂嫁爲歸といへり。是も女は夫をもつて後は、おつとの家をわが家とするゆへ、嫁は我家へ歸るの意也となり。

猶豫せしに

事を決せずしてためらふをゆうよといふ。猶はけだものゝ名也。此けだものうたがひ多くして、人が來らんかとおそれ樹の枝へかけのぼれ共、樹のえだは安からぬ故たちまち地へおつれ共、又人をおそれのぼり又くだりて、ふだん居どころを決せず。豫は犬の事也。いぬは主人に付したがひて主人の行さきに待ゐるもの也。若かへり來る事おそき時はいかゞとうたがひて往つもどりつするなり。しかれば猶も豫もうたがひてさだまらぬこゝろをいへり。

形容枯槁

形容のやせかれておとろへたるをいふ。屈原が漁父の辭に出たる語なり。

つくも髪

藻をみるとくばら／＼として見苦しき髪なり。江澤藻と書なり。

夫婦は義合

五倫の内に天合義合の別あり。父子兄弟は天然と生れ合たるもの故天合といふ。君臣や夫婦や朋友は今日のうへにて、人と人とのやくそくづくにて義理をもつてまじはりをなす故、義合といふ也。

はらから

兄弟をはらからといふ。伊勢ものがたり初段に、いとなまめいたるおんなはらからすみけりとあり。

慈なければ

いにしへ恙といふ虫ありて人を害せしゆへ。人の無事なるをつゝがなしといふ。

いふに岩手の神ならで通せん事もあら氣の雅道

役えんの行者大みね山上をひらき給ふ時、神をつかひて道を作らしめ給ふに、日をへて成就せざりし程に行者これをいかり給へば、一言主ひとことぬしといへる神、そのかたちの甚だ醜を恥て夜ならではたらき給はぬ故かく延引するよし、岩手の神がうつたへられしかば、行者やがて一言ぬしの神をしはり給ふ事元亨釋書にみたり。其故事をふまへて書たる文段もんだんにて尤よくかなひたり。

疏黄が島

薩摩にある島也。輕大臣燈臺鬼かろ大臣たいじんとなりて此島にて死せられしより鬼界が島共いふよし。くはしくは眞鳥實記といへる軍書に出たり。昔より科人をながすところ也。

地獄へみちびく五逆罪

往生要集に一百卅六地獄を出せり。八大ぢごくにおのゝ十六づゝの小ぢごくありて、八大

ちごくを合せて百卅六となる也。五逆罪は父母を殺しほとけのみ佛身より血を出し和合僧をやぶる等の五つ也。

丸まるがはからひ

此註はあしや道満の初段にくはしくしるす。

順逆の二門忘縁にあらざらんや

佛語也。人の生死老たるが先へ死しわかきがおくるゝは順也。わかきがさきだち老たるがおくるゝは逆なり。この順逆の二門ありといへども。ともにりんゑのきづなをきりて縁をわするゝの端にあらずといふ事なしと也。

傍若無人

晋の桓温くわんおんといふ人。王猛といへる高官の人の前にて道をかたるに。虱をひねりながら物がたりせられし程に。其さま傍に人なきがごとく見へたるゆへ、是よりして法外なるはたらきを傍若無人といふ也。

さすらへ

左遷させんと書く。もとは官職ひきもちを貶ひきさげらるゝ事なれ共。今では流罪の事にもちゆるなり。

欣然と席をあらため

きんぜんはよろこばしき體也。席は座なり。

双六かてうばみか

てうばみといふ事源氏にみへたり。今いふおりはの事也。おりはといふもの賽さいの目の偶てうにてとる故にいふ。偶食てうばみと書なり。食はむとは石を取事也。十六むさしに食くふといへるも是より出たり。

皇后も御懷胎

人皇十五代神功皇后なり。御くわいたいにて出陣し給ひ新羅高麗百濟をうち、御凱陣のみぎり筑紫にて響田ほんだの天皇を産給ふとなり。

子をもち月のいわた帶

みちのくのならはしにて、我戀めづにして妻めづとらんとおもふ女の門ぐちに、手拭てふきふくさやうの物を竹につけて立をく。是を縁むすびのしるしとするなり。これをいわたおびと名づくとなり。

口さへいまだ乳くさき大將軍

史記漢書等に、大將のわかきをあなどりていふ詞に口尙乳臭くちうといふ語あり。それを取て國石くにとしが至て幼稚にして大將となるをいふ。

勢そろへの段
五大力

五大力ばさつとて夫婦の縁守りの本尊也。津の國にも住吉の神宮寺に有。

じびにいふてぞ通りける

じびは自鬢也。自身に鬢をいふ事なり。こゝは自身にほめる事に取なしてそれより自鬢にも
いひかけたり。おぐしあげが口上にはよくかなひたり。

九牛が一毛

九は老陽の數なれば數の至極として、物のかずおほき至極をかならず九をつけてよむ。九天
九淵九重の類のごとし。されば多き牛の中での一毛といふ心にて、大海の一滴などいふに
おなじ。但し佛書におほき語なり。

婦人城

是は晋の朱除といふ者の母、軍勢を引うけておほくの女を士卒とし籠城せし事あり。世に是
を婦人城といふ。くはしくは晋書に見えたり。

一聲の玄鶴そらになき。巴峽秋ふかし五夜の哀猿

是は圓機活法に出せる詩の語也。作者はつまびらかならず。あきの比巴峽といふ山道を夜の

くらきにとをりたる景象を詠じたり。闇の夜の物すごきに鶴の一二を物かなしき折しも、猿のさけぶこゑとあはれにきこへて心ぼそくなるとの意也。この城外へしのびきたるもやうもかくあらんとなり。

秦の孺徐が母

是はあやまり也。晋の朱徐が母也。前にいひたる婦人城の故事也。歴代に外の例なければ必定あやまりたる也。作者いかゞこゝろへられしや。

扱は双方手はおはぬなこはいかにともぎ取て火影にすかし能みればきれぬこそ道理なれ是も双引これも双ひき

文句はきこへたるとをり也。

評、ある人難じていはく、こゝの双引の文句のてには、初の是もといふがきこへず、是は双ひき是も双引と書べき事也。其故はものてにはは旁及はうきふの詞とて、一つ主なる事ある上に是もといふ事也。是は双引と一方を見て又次に今一つを見れば是も双引也といふべきを、最初から是も双引といへるは作者のそこつ残念なり、いかん。答て云、これ文章の法をしらぬ難也。漢文にこの格おほき事也。和語のともいふてにはは漢字の亦の字のきみなり。たとへば翰文

に賢者亦有^{わかしずるもの}二天^{のちなきもの}者^の不肖者亦有^{いのちなきもの}二壽^の者^のといへるも、上の亦是下の亦へかけていひ下の亦是上の亦へかけていひて兩方をもちあはせたるもの也。是に同じく上の亦是も双引といへるも、下の亦是も双引といへるも、にかけ、下の亦是も双引といへるもは上の亦是ものもにかけ、いひて、兩方をもち合せたるゆへ、結句文の法をよく知て奇^{めづかし}に書なしたる作者の器量のみゆる所也。それをしらずかへつて咲^{さみ}する事文章にうとき故也。難者又いはく、文法はさもあるにもせよ人形に合せてみるべし。まづ一人の双を見て是は双引とおどろき、次に又一つをみて是も双引といふべきを、あたまからは是も双引といへるは何に對して是もとはいへるぞ、心得がたし。尤作者は二腰ながら双引とする趣向にて書たるゆへ、作者の心には初より兩方双引としりたる故あたまからは是もといふ詞出そうなものなれ共、虎王が一方をしらぬ口からは是もとはいふまじ。是作者が我心をすぐに書たるはあやまりならずや。答云、この時虎王が人形はいかがつかひたるかもしらぬ共、もし兩腰を二度に見たるやうにつかひたらば人形遣のあやまり也。作者のあやまりにはあらず。まづ淨るりの文句を跡先よくみるべし。虎王が心に双方共手をおはぬをふしんし、双方一時にもぎ取て火影にすかしてよく見れば、きれぬこそ道理なれ、兩方共に双引也との意也。火影にすかしよくみればといふ内に、二腰をためつすがめつとく

と見たる心ともれり。さればこそ兩方共に双引なるを見とゞけて、きれぬこそ道理なれ、是も双引是も双引といひたるが、何とあやまりといふべきや。難者此一句に閉口しうなづいて退きぬ。

十月にたらぬおろし子の諸佛一度に御聲をあげなげかせ給ふ御なみだ

是はくめのもりひさ。地獄のあとときといふむかし淨るりの古文句を、すぐにはめ句にしたるもの也。今のわかき衆は多くしらざる所なり。

もろこし衛の國出公輒

しゆつこうてうといへるは衛の靈公の孫にして蒯聵の子也。くわい／＼罪を得て衛の國を立のきたる跡にて、靈公死し給ひしゆへしゆつこうてうを君とす。しかるに蒯聵このよしをきゝ國へ歸りて衛の君とならんとす。しゆつこうてう是を入まじとして軍おこる。この時子路といへる人しゆつこうてうにつかへぬたる故、しゆつこうの父をふせぎ給ふをいさむれ共しゆつこう聞給はぬゆへ、しゆつこうのゐ給ふ樓たかどを焼んとせしを、やがて矛にてつきころされたり。此事くはしく史記にみへたり。

首陽山の伯夷叔齊

これも史記に出たり。伯夷は兄しゆくせいは弟にて、孤竹といふ國の君の子也。周の武王旗をあげて殷の紂王をほろぼさんと出陣し給ふに、この兄弟武王の馬前にすゝみ臣として君をうつ事あるべからずとて轡を取ていさむ。左右の者共是をころさんとせしを太公望見て義者也といひていのちをたすけゝる。其後周の天下になりしかば、武王の徳をけがれたりとして周の粟を食ふ事をはぢ、首陽山といへる山へ引こみ巖を折てくらひ、終に飢て死したり。

娵婆と冥途

名義集に娵婆こゝには忍土にんどといふ。しやばは梵語にて、唐の詞にすれば堪忍土どといふ事にて、娵婆世界はもろゝの苦を堪忍せねばかなはぬの意なり。冥途とは和語のよみちといふ事也。

一重つんでは兄のため

是よりさいの河原を移してもものもらひする鉢はちぼうずの口うつしなり。此たぐひの事はなには邊あたりの人ならでは、遠國へは通じがたし。

あはれはかなき我ら迄

是も地藏の和讃に出る口うつしなり。

神力勇者に勝つことあたはず

佛力ゆうしやにかつ事あたはずといふ語をなほしたるもの也。此理は儒佛神道共におなじ事也。近くは織田信長ひえ法師と争論の事共あり。怒りて山王廿一社をことごとく破却す。この時當分には何のたゝりもなし。かゝるたぐひをいへり。しかれ共ついに神罰のがれず、明智がために本能寺において自殺せり。おそるべし。

檮あふち

散木さんぼくとてやくにたゝぬ木也。莊子に出たり。

黄 泉

人死すれば體魄たいはく土に歸す。つちの底の泉は濁るゆへにめいどともくはうせんともいふなり。梲器かうきの柱

もと科人を賣る時に繋るはしらなり。今こゝにてはごくもんの臺をいふ。

桶かづ
桶かづ

いにしへは貴人の死去の時近習の護衛まもりになぞらへて、荷かにて人形をつくり死骸にそへてほうむりしを、後になりて眞の人形をつくりて桶となづけてほうむる事はじまりたる也。今の俗それより取て棺をようおけとよびならはせり。

月日をつかむ修羅

あしゆら王が梵天帝釋とたゝかひて日月をつかみし事佛書に見えたり。

紅梅のあははませ

馬を急にのりて駈させれば、口わきより血まじりのあはを吐をいふなり。

威風凜々

其いきほひの物すさまじきをいふ。

天下創業の旗あげ

はじめて天下をとるを創業といふ。されば親のゆづりの天下をうけてまもるを守成の君といひ、みづから始て天下を取たるをさうげうの君といふ也。

力士ごし

りきじとは本名は那羅延ならえんといふ。佛塔などのやねの四隅に棟を負て、鬼がはらのごときが是也。はなはだちからのつよきものなり。

章駄天ごし

是も天部の本尊にて、足疾鬼そくしきが玉をうばひて逃るを追かけ給ふもこのいたてんなり。

おち坊主の白藏主しやくざうす

つり狐の狂言にあり。

道行
かくれがの軒もる

山ざとなどに小家をしつらひたるをいふ。はにふの小屋とて軒もまばらなるさまをいふ。

月にこがれ出

あはれをもよほす折ふし月のさえたるにさそはれ出るていなり。西行の歌に。なげゝとて月
やは物を思はするかこちがほなる我涙かな。

露にやしなふ

月に對して露をいふ。袖がうろにてしばらく氣をやしなふとなり。

すがり

きやらのたきさしが下著に香の残りたる故に香取姫といひかけたり。本はかとり繪とて好絹をいへ
共こゝには云かけに用ゆ。

契りを

手と手をもちににぎりてちかふ事也。もちにぎるを略してちぎりとと訓じたるなり。

二世

佛説におや子は一世といひ夫婦は二世といひて一蓮託生と説給ふ。かねみちに深きちぎりをかけたるを二世とかねみちといひかけたり。

未來のため

佛敎に過去現世未來の三世をたつ。過去は前の世をいひ、現世とはこの世をいひ、未來とはのちの世をいふなり。

そぎ尼

そぎとは髪を薙事也。大内などにては菩提に入るとき、尼になり給ふとは髪をきり給ふ也。是をそぐといふ。剃髪にはあらず。

うつぶし色

黒き色をいふ。すべてくろき色に染るには五倍子にてそむる也。さて五倍子は子の中空なるものゆへ空五倍子といふ。蟬のぬけがらを空蟬といひ、人の氣のぬけたるを空氣といふがごとし。

けさよりも

今朝と袈裟とをいひかけたり。

づだ袋

天竺にては乞食こつじきを分衛ぶんゑ共頭陀共いふ。出家の人修行のために乞食に同じく身をなして、食を乞て袋へ入るゝ故に、其ふくろを頭陀袋といふなり。又ふくろの訓は物をいれてふくれるの義也。れとろと通ずる故にふくろといふ。

かたみに持し

筐かたみとはもと竹籠也。繼體天皇いまだ位につき給はず、男太迹おとびの皇子の時西國にて女にちぎりくらゐにつき給ひて後つねゝもち給ふ花筐をかの女へつかはし給ふ。それより人の別れのなごりにおくるものをかたみといふ也。形見とも記念とも書なり。

なぎさの

川などのほとりをいふ。むかし淀川のほとりに宮をつくりて渚の院といふ。今の枚方ひらかたの傍に禁屋さんやといふ村あり。又渚といふ村もある也。

身なし貝

貝の名にあらず。濱邊の貝の殻を身なしがひといふ也。

君まちがほのうたゝねにひちまくらしたるをいふ。あはざる戀のことばなり。

菩提

天竺の詞なり。こゝの詞にて得道とくだうといふ。佛のみちを得たるこゝろなり。

五戒

一に殺生戒とて物のいのちを取事をいましむ。二に偷盜戒とてぬすみをするをいましむ。三に邪淫戒とてよこしまなる淫欲をいましむ。四に妄語戒とていつはりをいましむ。五に飲酒戒とて酒をのむをいましむ也。

三界

欲界色界無色界これを三界といふ。今このしやは欲界なり。

家を出たる法のみち

法華經に三界無安有如火宅とて此界を火の宅なりといふ故に、佛道を修業すればさんがいの家をいづるの心にて出家といふなり。

むすぶすゝきはまねかねど

古歌に、花すゝきまねかばこゝにとまりなんいづれののべもついのすみかぞ。ふく風のまね

くなるべし花すゝきわれよぶ人の袖とみつれば。

あだし野の煙

あだなる野といふ事也。名所にはあらず。嵯峨の奥愛宕のふもとに化野あだしのといふ墓所むしよあり。つれづれ草にあだしのゝ露きゆる時なく鳥部山のけぶり立さらでとあり。こゝには墓所に用ひたり。

楊柳觀音

洛東清水のくはんおん也。むかし音羽の瀧のみづ五色にみへしを、諸人あやしみたづねのぼりに、みなかみに金色のひかりさし、朽木の柳に花さき、たちまちやうりうくはんおんとあらはれ給ふと也。

はた物

刑罰しおきものを幟物しおきといふ。但し唐にては、その傍に罪におこなふ様子を書たる幟をたつる故なり。たぐりゝといひかけて糸くる體より織機にいひかけたり。

千引の石

ものゝ至ておもきをいふ。千人もしてひく石となり。みちのくに千引の石ありとぞ。おほく

戀によせて古歌によめり。人のこゝろのひけどもゆるがぬにたとへたり。

戀のぬすみ

貪のぬすみに戀の歌といふ俗言をあはせていふ也。

白浪

ぬす人をいふ。伊勢ものがたりに、風ふかばおきつしらなみ立田山よはにや君がひとりこゆらん。立田山にぬす人あらんかと、業平の山をこへてかよひ給ふをあんじて、井筒のよめる歌なり。

暗はあやなし

ものゝ文采おもめもみへぬをいふ。躬恒の歌に、春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみへぬ香やはかくるゝ。

かねのみさき

はりまの國の名處なり。

諸行無常

涅槃經の四句の文にて、もろくの世にあるものはみな無常にして終には寂滅すると也。

ひゞきの灘

是もはりまのめいしよ也。

たまの緒

いのちの事なり。

あられ釜

いま茶の湯にもちゆるかまの一つ也。あしやがまといふも有ゆへ、あしやのうらといひかけたり。

いさり火

在所の家内にてたく火也。ある説に海士の朝にすなどりするをあさりといふ、ゆうべにするをいさりといふ云々。いさり火はその時とす火也と鴨の長明がいへり。

評、惣じて此道行首尾全體近年の上作なり。しかしかとり姫がかねみちの首をぬすみとらんとてのびあがり、とどかぬ足のうらめしく世のせいすいやとなきしづむといへる詞何ぞや。世のせいすいといふては其心をだやかならず。今すこしあるべき所なるに不自由千萬なるゝり言、かとり姫には残念なる不相應の詞なり。はおしむべし。

四段ノ奥

ふとんの内むりやうのしあんぞこもりける

ふとんといふより織ものゝ文綾（わ）（れ）と無量とをいひかなへたる面白し。しかし是より前近松が筆に既にみへたり。是は口まね也。

經陀羅尼

經は唐の詞にて佛説の惣名しれたる事也。だらには梵語にてこゝには惣持といふとなり。

魂魄體

魂氣體魄とて神（たましひ）は陽に屬して魂（こん）なり。人死する時は天にのぼる。體は陰に屬して魄（はく）なり。人死する時は地にかへる。體はしやれかうべなり。

六根五體

眼耳鼻舌身意を六根といふ。五體は手と足とを四體とし首をそへて五體といふなり。

四十九の餅

亡者の七々四十九陰に表したるもの也。人死してより四十九日の間は中有（ちゆう）にまよひてまだ生を受ける所さだまらず。七日くゝに生滅していまだ形なく、虚空に住して香を食す。この間を中有共中陰共いふと也。中陰經にくはしくみへたり。

評、ある人難じて云、四段目の趣向の内かね道と助八とを見ちがへたるにつき、かとり姫がごくもんのくびをかねみちと見ちがへしは死くびなればさもあらん。後に助八が家にて眞のかねみちを疑ひし所その意をえず。いはんや嫁のお作が近比まで助八と一所にゐて、このたび來るかねみちを助八と取ちがへしはいよく有べき事ならず。世間に双生はよく似るものとはいへ共いか程似たり共すこしはちがひのなくてはかなはず。さればこそ世間によく似た人多けれ共取ちがへるといふ事は其ためしなき事也。然れば同じしゆかうならば實に見物のうけとるやうにしたき事也。惣じて噓もまことのうらにて諸人の尤とうけとるやうに書ではおもしろがらぬ筈也。此所いますこししゆかうの未熟なるにあらずや。答て云、兄弟のよく似て夫婦の間にも取ちがへたる事唐にもその例あり。張伯階といふ人の弟を仲階といひしが其かたち甚よく似て人の取ちがへる事おほし。あるとき弟のちうかいが妻うつくしく化粧して立出るに、兄の伯階が立てゐる傍へより我夫のちうかい也と思ひてささめごとをいひて手を取しゆへ、伯階興をさまし我は兄の伯階なりといひければおどろき恥て立去しが、又伯階がたゝすみゐたるを見て是こそ夫ぞと思ひはしり寄て手を取、さき程兄ぎみをあやまつて君ぞと思ひはづかしきたは言をいひたるといふ。伯階又我は兄なり仲階にてはあらずといひ

ければ、恥かしく思ひて奥へ入て久しく出る事を得ざりしと風俗通にみへたり。是はまさしく枕をかはしたるふうふさへかゝるためし有。お作が見ちがへしは尤也。又かとり姫がうたがひも既に我手にかね道也と思ひ込しくびがあるうへ、最前よりかねみちの狐つきの體を見てはそこつに信ぜられざりしもことはりなるべし。難者尤とうなづいてしりぞく。

五段目

亂臣の榮花は出沒螢のごとく太陽に照されその身を失ふ

是は古語を取あつめ成語のやうに書たるもの也。ほたるのひかりはひかるかと思へばそのまきへて、ある共なきともさだめられぬをしゆつぽつぽたるのごしといふ。太陽は日の事也。らんしんのえいぐわをなすは、やみの夜のくらき間にほたるがひかるごとくなれ共、徳ある人に出あひては、日にてらされて螢のひかりのきゆるがごとく、終にその身をほろぼすとの意也。

民を虐しへたげ

虐は民をむごくする事也。今の俗にいふ人をせめせたげるといふが此字なり。

課役をかけ

課はおほせるとよみて、日に幾月くげつにいくらといふ員數をきはめて、公儀へ役をとる事也。

金殿紫閣

こがねの御殿むらさきの閣たかどのにて美をつくしたるをいふ。三體詩に金殿當頭紫閣重といふ詩の語を取て用ひたり。

鬪鶏

には鳥合せの事也。鬪鶏とて唐にもあり。

闕みどろ々

御殿々々也。禁中には御殿の門に高樓ありて、其兩掖わきを闕みどろたるごとくに門をあくるゆへ掖門えきもんとも門闕ともいふ。それより取て御殿を闕といふなり。

大官人

禁中の人をさしていふ。貞任が歌に、わがくにのむめのはなとは見たれどもおゝみやびとはいかどいふらん。

東天紅

にはとりの時をつくる聲也。文字のごとく東の天くれなゐなりといふ事にて、夜あけをつぐる鳥のこゑをいふ。

てうける

寵戲（さいぎ）と書。人をなぶる事也。今も北國仙臺あたりの詞に物をなぶるを寵するといふ。この字也。

秋津島

和國の異名なり。秋津はもと蜻蛉（とんぼ）の事なり。日本の地形あきつむしに似たりとてあきつしまといふ也。

評、此眞鳥全體上出來。おさく近松がしゆかうにおとらぬ所おほし。双生（ふたご）のいりくみ始終にわたり、お作かとり姫が二度のびつくり、助八が養母のくり言、まとりが猛惡、かねみちが勇氣、女の勢ぞろへの發明、ひとつとしてぬけめなし。それゆへ見物のよろこび、數月の大入を取し事作者のまんどく座本の大慶いはん方なく、いかなる家にもねずみの糞と眞鳥の本のなき所はなかりき。

淨瑠璃評註卷之四

○國性爺合戰

此淨るりの一體は、大明の末に思宗烈皇帝の御子福王南京にて即位ありし時、先帝の時より韃靼王中國へせめ入り、北京を居城として又なんきんへせめ入。此福王をもほろぼさんとするに、先帝につかへし鄭之龍といふ者、先帝御存生の折讒言にあひてやうく命をたすかり日本長崎へわたり、それより肥前の平戸にて妻子をもふけしが、大みんの亂いまだしづまらざるを聞て妻子を引ぐしふたゝび大みんへ歸り、一子國性爺と共に明朝の味方をなして韃靼と合戦する事をしるせり。始終こくせいやがはたらきを第一とするゆへ此外題を置也。性せいの字を性せいの音になへする事いぶかし。是は唐の土地の名や人の名などは唐音になふる例もあるゆへ、作者の狡黠こしやくにて性の音をはねて國性爺こくせいやとかなを付たりとみゆ。松江の鱸うなぎを松江のすずきとなへさせ、南京を南京なんきんとよぶ例也と思へるなるべし。然れ共性は唐音にては性しんなり性にはあらず。殊に唐音にてよぶならば國性爺の三字共みな唐音にして國性爺こくせいやとよぶべき事

也。され共人の名に限りて唐音によびて益もなければ國性爺こくせいやとなふるがよしと知るべし。是等はもし淨るりをもてあそぶ人々學者にふしんせらるゝ時の心入れなれば辨じ置也。世上のかたりならはしなればかたるは國性爺とかたれ共、根はとくとせぬ事也とわきまふべし。花序とび蝶おどろけ共人うれへず水殿雲廊別に春をおき曉日よそほひなす千騎の女

是は鄴宮けいきうを詠ぜし詩の詞にて陸龜蒙りくきゆうが作すなはち三體詩に出たり。此意は花がちる故春の盡んとするを見て花にたはむれし蝶はおどろけ共宮中の人はうれひなし。その故は帝のおごりにて禁中には水をゑがきたる御殿や雲をゑがきたる廊などが有て、其内はいつも春のたのみ有て、世間とはかくべつに春を置たると也。さて曉がたには千騎もあつまりし宮女共がかほよく靚よそはて、白櫻桃の下にてむらさきの綸巾りんきんをいたゞきてたはふるゝ也。此奥にせんだんくはう女の縁さために女官の花軍があるゆへ、其事にあてゝ此詩を序文とする也。殊に兄みかどは奢つよくして、多の宮女に花いくさをさせ給ふ事實録にも有る事なれば、かれこれよく相應したる序也。

紅唇翠黛色をまじへ

宮女共が口くち臍へいをよそほひ翠まゆかみの黛まゆかみをかざりて色をあらそふとなり。

三夫人九嬪廿七人の世婦八十一人の女御あり

禮記に天子につかふる宮女の數をしるしたる通り也。夫人は本妻也。嬪より下はみな女官なり、嫡妻にあらず。

をよそ三千の容色

禁中に内家叢とて宮女のあつまる後宮ありて、其内に容色ある女くはん三千ほどあるをいふ也。

諸侯

一國を領する君をいふ。日本の大名と稱するがごとし。

二月中旬に瓜を獻する榮花也

唐の王建が花清宮に題する詩に、内園分得温湯水二月中旬已進瓜と賦したる語を取ていふ。瓜は六月にならでは熟せぬ物なるを、たいりのそのうちには温湯の水をわけ取て種をくだし、二月中じゆんにはすでに瓜をすゝめたてまつると也。榮耀の體をいふなり。

越羅蜀錦

越の國の羅、蜀の國の錦いづれも名物なり。

侍女阿監　侍女はおもとひとよみてこしもと也。阿監は女中かしら也。

珊瑚のたま

珊瑚樹は海底にある樹なり。八月十五日夜の満月には是を取て珠にみがく也。七寶の一つなれば至て重寶するにたとへたり。

虎の皮豹の皮

虎は山獸の長にして、かたちは猫のごとく大さ黃牛のごとく黒き章かたあり。爪は鉤のごとく牙はのこぎりのごとく兩眼はなはだ光あり。一目よりはひかりをはなち一つの目にては物を見る。その皮甚だ貴とす。豹はめとらと訓ずれ共虎とはかくべつ也。毛色は赤黃にして黒文くもんありといへり。

南海の火浣布東海の馬肝石

火くはんふといふは布也。但し火中に火を食する鼠あり。其ねずみの毛にて織し布也。垢づく時は火中にて焼ば白くなる。もし水へいるゝ時は損ずる也。ばかんせきは馬の肝に似たる石なりと也。

米粟

粟はあわとよめ共日本の稷あはの事にあらず。米のいまだすらざるをいふ。日本にいふもみごめなり。

三皇五帝孔孟のをしへ

三くはうは伏羲・神農・黄帝也。五帝は少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜なり。孔孟は孔子と孟子と也。其教は仁義忠信人倫の正道也。

五常五倫の道

五じやうは仁義禮智信なり。五りんは君臣父子夫婦兄弟朋友なり。其まじはりの道は親義別序信也。これをも五常といふ。

斷惡修善

惡を斷て善をおさむるをいふ。

道もなく法もなく飽迄くらひ暖に衣て

孟子に、飽までくらひあたゝかにきて逸居して教なきは禽獸に近し、といふ語あるに本づきていふ。口には飽迄物をくひ身にはあたゝかなる程物を着て人の道をしらぬは禽とらけだもの同然なりと也。

北狄

中國の四方のはし／＼をゑびすといふ。俗のいふ大いかなり。だつたんは北のはづれ故ほくてきといふ。

管仲が九たび諸侯の會もかくやらん

周の世の末に天子の御家おとろへたる故、天下の諸侯勅命をもちひざるゆへ、齊の管仲といふ人その君桓公をもち立て諸侯の伯とし、天下の諸侯を會して國々をよくおさめさせ、天子をたつとむやうに下知したる也。それゆへ天下のしよこゝ天子の威にはおそれね共、桓公やくはんちうにおそれて我まゝをなさず。それゆへ天下が靜謐なりし也。

伍子胥が余風

ごししよが眼をくりて吳の東門にかけし事前にしるせり。余風とは其餘りのふぜいにてなごりのこりたる體也。

范蠡がおもむき有

はんれいは越王勾踐の忠臣にて越王をもち立て吳王を討しめたり。吳三桂が君をしゆこするにたとへていふ。

萬乗の位

天子のくらゐをいふ。禮記の王制に、天子は萬乗の國諸侯は千乗の國といひて、天子の御領地は軍車いくさくるまを萬乗いだす程あるものゆへにいふと也。

頭にさせば二月の雪と散もあり

折し梅花ばな挿さ頭かぶ二月雪満ふ衣えといふ詩の句のころを取て書り。

一家仁あれば一國仁をおこし一人たんれいなれば一國亂をおこす

大學の語をすぐに書り。君の家一つが仁愛の風になれば、其教が下へおよびて一國中が仁愛のならばしとなり、君一人が貪欲無道なれば、下もそれを見ならひて國中が亂をおこすとのぎなり。

五刑の罪

つみに輕重ある故刑罰の法に五ヶ條あるを五刑といふ。五刑は墨ぼく・劓ひ・剕ひ・宮きう・大辟たいへきなり。

墨とは科人の額を刺ていれ墨をするをいふ。劓は鼻を斷そをいふ。剕は足を斬をいふ。宮は男なれば勢まへを割き、女なれば幽まへを閉るをいふ。大辟は斬ころすをいふ。

宗廟の神

先祖の神靈を祭る處を宗廟といふ。宗は源にて先祖は子孫のみなものと也との意なり。廟は神主を置殿也。廟は貌也とて先祖の貌にかたとるとの義なり。

大の字の金刀點

筆法に點の名さまざまあり。大の字は三點にて、大の字の一字を玉案と名づけ、左へひく點を犀角と名づけ、右へひく點を金刀と名づく。其形刀の身に似たるゆへなり。

宸翰

天子の御筆をいふ。

かし水

米をあらふ水也。浙と書也。もと米をたくを炊といふゆへ、それより取てこめを炊んとてあらふみづゆへかしみづと訓するなり。

龍顔

天子の御顔をいふ。天子の徳を龍にたとふるゆへ也。

刃のさびは刃より出て刃をくさらし檜山の火は檜よりいでゝ檜をやく

この語は成語にあらず。是は作者が意をもつて造語たるもの也。藍よりいでゝ藍より青

く朱を研^すて朱よりもあかしななどいへる語の勢ひを模^{うつし}て、あらたにつづりたる詞也。さびは鏤と書が正字なり。

印綬

もろこしには天子より百官迄その位につきたる印あり。その印を腰におぶる紐を綬といふ。是は天子の御位のしるしのいんじゆ也。

たのま緒

いのちの事を大和詞にたまのをといふなり。

綿蠻たる黄鳥丘隅にとどまる人としてとどまる所にとどまらずんば鳥にしかざるべしとかや
是はもと詩經の詩にて大學に出たり。鳥のなく聲をめんばんといふ。黄鳥はうぐひすと訓じて毛の黄なる鳥也。丘隅は峯の樹のはへふさがりたる所をいふ。此詩の心はめんばんとさへ
づりとぶ黄鳥も人ちかき所には居をやすんぜず。かならず山おくの樹の生ふさがりて獵師の
弓矢などもとどかぬ所にいたりてとどまり居る也。然れば人の住居もとどまるべきよき所にとどまらずんば鳥にもおとりたるなるべしと也。

長沙の罪をさけ

漢の賈誼かぎといふ賢臣讒言にあひて朝廷をしりぞけられ、長沙王の傅ふに貶せらる。いま鄭之龍もさんげんの罪を避て日本へわたり居と也。避るはよけるなり。

砂頭に印をきざむ鷗

唐詩の語なり。かもめが濱邊の砂を足にてかきさがす體を文字を印に彫きざむの體に見立てる也。

蛤よく氣を吐て樓臺をなす

蚌蛤はうがく蟹みなはまぐりと訓ず。蚌と蛤とは常のはまぐり也。蟹には二種あり。一種は大蛤也と註して一名を車蟹はたてがといふ。是は貝の類なれ共樓臺をなすものにあらず。よく氣を吐て樓臺をなすといふ蟹ははまぐりと訓じても其かたち蛟みづちに似て龍の類なる物なり。本草綱目に其かたち蛇に似て大なり。角ありて龍の形のごとし。紅の鬣ひれあり、よく氣を吐てろうたい城郭の形をなす、まさに雨ふらんとしてみゆ、是を蟹樓と名づけ又海市かいし共いふと云り。又唐詩訓解の註にも、蟹は蛟の類にて氣をはき樓臺人物のかたちのごとしといへり。然るを近松は鷸蚌しぎやまぐりのはまぐりと思へるは龜末かめすのいたりにあらずや。又謝肇制が五雜俎に、登州の海上に蟹の氣あり、時々むすんで樓臺のごときかたちをなす、是を海市といふ、但し是海の氣にして蟹の

氣にあらず、およそ海水の精多く結んでは形をなし、散ては光をなす、海中の物何によらず其氣を得る事久しければみなよく變幻^{へんげん}をなす、蜃のみにかざるにあらず共いへり。日本にても近年安藝の嚴島に此氣あらはれ、人みな是を見たり。三刻ばかりの間はその邊金色のひかりさし、五色の岩ぐみさながら金樓玉臺のごとくなりしと也。

あさる羽おと

鳥の餌をもとめんためにさへづるをあさるといふ。

雪折竹に本來の面目をさとり臂を切て祖師西來意のわをさとりしも

初祖に神光といふ僧來り參するに、祖はたゞ端座して教の詞なければ、かの僧庭に立けるに大雪ふりて竹を折れ共しりぞかす夜あくる迄立居たりしかば、初祖あはれみて汝何事を求めにか雪中に有やと問給ふに、かの僧なみだをながし師たゞねがはくば教給へといふ。初祖のいはく、諸佛無上の妙道はなんぢがごとき小智小徳の慢心をもつて得べきにあらずと。かの僧聞やいなや刀をもつて左のひぢをきり、師の前に置て云く、諸佛の法印聞事を得べしや。祖のいはく諸佛の法印は己が心にあり、他よりもとむべけんや。かの僧のいはく、我心いまだ安からず、師ねがはくば我ために我心をやすんぜよ。祖の云く、なんぢが心を我前へもちき

たれ。かの僧心をもとむるにとらへ得べからず。祖のいはく、今なんぢがために心をやすんぜりと。かの僧ついにさとりをひらけり。

しぎ蛤のあらそひ

是はもと韃靼はろくわちより梅勒王はろくわちを大將として大明をせめしむる時、闖王もん李自成といふ者其虚にのつて南京へせめ入、帝を害し王位を奪ふたる故、吳三桂いそぎ韃王の陣へ至り。此たび力をくはへて闖王を討しめ給へと願ふに付、だつ王いかゞせんと評議有しに、ばいろくわうが謀には此度ござんけいが乞にまかせ加勢をやりて闖王とござんけいとをたゝかはせ、其虚に乗て兩方をだつたんの手に入べしとて、此鵲蛤しぎはまのたとへを引てだつ王をさとしたる故事也。今此淨るりには國せんやが事にもちくみたる尤作意也。さて此故事の源は戰國策に出たり。

秦の始皇六國を呑んため連衡の謀

この時天下に七ヶ國あり。秦燕趙韓魏齊楚なり。しかるに秦の始皇、のこり六國を攻ほろぼしてみな秦へあはせ、天下を一つにして皇帝のくらゐにつき給へり。連衡とは此時蘇秦といふものと張儀といふものと謀をなして、あるひは六國をつらねて秦につかへさせんとし、あるひは秦を討んとし又は六國を討んとする等の謀共をなしたるをいふ。

楊貴妃

唐の玄宗皇帝のてうあいし給ひし女官なり。

なむきやらちよんのうとらや／＼

あみだ如來の根本だらにの詞に、のうほあらたんのうたらやゝといふ事あり。それを略してかくいひたる也。是もよき作意なり。是より奥の唐人ことは皆やくたいもなき事なりとすべし。

くひの八千度

いくたびも／＼くゆるをいふ。和歌のことばなり。

本卦師の卦にあつて

師の卦は六十四卦の一つにて、八卦の坤を上卦とし坎を下卦としたる卦體なり。卦の義理は專らいくさの事を斷たる卦也。

天の時は地の利にしかず地の利は人の和にしかず

孟子に出たる語なり。軍を出すに天の時をかんがへ歲月の吉凶日取時とりの吉凶、又はその日によりて或は勝利を得あるひは敗北する等の方角もある事也。然れ共要害堅固なる土地の

利^しき城にこもりたる時は、何程よせ手の勝べき時日にせめよせても勝れぬが治定なれば、是天の時は地の利にしかざる也。又たとひようがいのよき地に陣を取たり共、士卒の心和合せずして大將をうらむるは、いかなる堅固なる城をも士卒が捨て逃る時は大將一人してまゐる事あたはず。ついに打負べき時は是地の利は人の和におよばざるなり。

三韓退治

新羅高麗百濟これを三韓といふ。神功皇后さんかんだいぢの時ともへにあらみさきの立し事日本紀に見へたり。

もろこしの望夫山

婦人その夫を虎に喰ころされし者、この山へのぼり虎に似たりし石の有しを敵虎と思ひ矢をはなちしかば、婦人の念力にて其石に矢が立たり。其石を望夫石といひ其山を望夫山といふ。

我朝のひれふる山

狹手彦が東夷征伐に發足の時、その妻まつらさよ姫其別をかなしみ、この山へのぼりて袖をふりてなげきしと也。大和詞にひれふること袖ふる事なりといへり。

潯陽の江これ狸々のすみ所

じんやうは隠なき大江にて、こゝには別してせうぜうおほくすむといへり。

赤壁とてむかし東坡はが配所ぞや

赤壁は、三國の軍に魏の曹操が呉の周瑜に舟をやかれて敗北せし所也。宋の蘇軾を東坡と號す。朝廷よりつみせられて流され此赤壁のもとにあそぶ。東坡が赤壁のあそび前後に二度にて、前赤壁の賦後赤壁の賦をつくりて、そのあそびのたのしみを詠ぜり。

廿四孝の揚香が孝行の徳によつてしぜんとのがれし惡虎の難

此事二十四孝の傳につまびらかにしるせり。

西天さいてんの獅子王

しゝ一名を白澤はくたく共いふ。狡しゅんげい貌といふも是也。かたちは虎に似て黃なり。銅あかがねのごとき頭にて鐵のごとき額あり。牙は鏃のごとく目のひかりいなびかりのごとく吼る聲いかづちのごとし。

よく虎豹を食ふ。天竺にあるけだもの也。天ぢくは中國より西にあたるゆへ西天といふ。

あまのぶち駒

神代の馬なり。

しやぐはん

射官なるべし。火炮弓箭を射る役也。

ちやぐちう左衛門

是より國所をかしら字にしてよび名とす。その國々の文字は東埔寨呂宋東京暹羅白城等也。仁ある君も用なき臣は養ふ事あたはず慈ある父も益なき子は愛する事あたはず

古語のやうなれ共慥なる書には見えず。その理もちかく似たれ共正しき聖賢の意には的當せざるがごとし。

夜まはりのどら聲

どらは鉦と多く書共刁の字よし。史記通鑑等に出て、陣屋の用心をいましむる夜廻りがうつ鐘也。もと刁斗といふを和訓にて刁とよませり。此字を刁とよむに付て、今の俗子丑寅のどらの字の略也と思ひて、寅の字の代りに用ゆるは笑ふべし。是さだめてかなの濁を見をとしたる鹿相ものゝ取ちがへそめたるなるべし。

いしゆみ

弩弓とて此方の人いふ石はじきの類也。

いしびや

佛郎機いびやなり。

胡亂ちらん

胡國は天竺の際にて中國よりは甚だ遠きゑびす故、言も中國へ通ぜぬゆへ不埒なる詞を胡説こせつ亂道らんどうといふ。胡亂ちらんは此二字を切て唐音にていひならはしたるもの也。

きこらいくびんくはんたさつふおんく

此淨るりの唐音は前もいふ通り譯もなき事也。きこらいは歸去來の字を用ひたれ共是も唐音にては歸去來くわらいなれば合す。ひんくはんたさつふをんくも唐音をもつて文字に合せなば相應なる事も有べけれ共、すべて近松が唐音はみな頓作にて其かゝはりなし。前の所にはだらにをもちりて唐音にまぎらかしたり。又大職冠の唐音は唐菓子や膏藥の名にてまぎらかせり。

又本朝三國志の大王の道行に、御いたはしや大わうはちりくちくすい引かへてあほす峠のよるの道と書り。京都のさる俳諧師此ちりくちくすいの語をあんじ煩ひて問ければ、是は大王夫婦の道行ゆへくちりくちすい引かへてといふかなを上下へ置かへて用ひたりとこたへしかや。又唐船はなし今こくせんやの口に唐の木やり有、其文句に、らうがときろくほにやふたうにやくこんもつきんといふ事あり。是はむかしの東國歌に、うらか齋坊さいぼうにや豆腐こんに

やくきんもつだといふを、かなを上下へ置かへて用ひたる也。此類にて埒もなき事を知るべし。近年鼎軍談の唐音はまことのたういんなり。

足かせ手かせ

足械は足にうつ械也。手械は手鎖なり。

延平王國性爺鄭成功と號し

本傳を按ずるに鄭之龍が兄鄭森廿歳の時父と共に大明の皇帝隆武帝につかふ。身のたけ六尺八寸ちからは大象を取ひじき、殊に倭國の産なれば日本の兩刀を善つかふをきこしめし、忝くも宮中にて元服し成功と字し明の朱姓をたまひ、常に左右に侍し奉れば、臣民これを貴み國性爺と稱す。後又延平王と號せりと云々。

章甫の冠花紋の履

しやうほは殷の代のかんふり也。花紋ははなの紋を織つけたるくつ也。

幢とうちのはたばんのはた

幢幡共にはたにて、天子諸侯のもたせらるゝ道具なり。

會稽山に越王のふたゝび出たるごとくなり

吳國を討んとて越王勾踐くはいけいざんより旗をあげ給ふ體也。前にいふがごとし。

父が庭訓

孔子の子伯魚ある時庭を通りたるに、孔子立給ひて詩と禮をまなぶべしと教給しより故事と成て、父のおしへを庭訓といふ。

玉ある淵は岸やぶれす龍すむ池は水かれず

この語文選にみへたり。

むかし唐土の白樂天といひし人日本の智慧をはからんと

此所の文段つぶさに白樂天の謠に有て誰もよくしりたる事ゆへ是を略す。

道行
唐子わけには薩摩ぐし嶋田わけには唐ぐしと大和もろこし打ませて

此文句うはべは何事もなけれ共、底意にふまへたる故事有て書出したる也。莊子に蝸牛の角のうへに國二ヶ國あり。左の角のうへなるを蠻の國と名づけ、右の角の上なるを蜀の國と名づく。此左右の國たがひにあらそふて戰ふといへり。蝸牛はかたつむりと訓じて俗にいふでんく虫也。莊子は人の耳をおどろかす事を書上手なるゆへ右のとをりにいひたり。此語の心をふまへて、中むかしの毎句付の笠に、かしらの上に國二ヶ國といふ題ありしを、加賀笠

の下にさしたるさつま櫛といふ句をつけて勝句となり、世上の人の語り草となる。此の道行の出の文句又はをやつしたる也。唐子わけには和國のさつまぐし、和國の嶋田にはもろこしの唐ぐしとやまともろこし打ませてといひかけて、せんだん女と小むつと打まじりてのたびだちをことはる也。

枕をたゝむ夢たゝむ千里を胸にたゝみこむ

船中などに用ゆる懷中のたゝみまくらより邯鄲の枕をふまへて夢たゝむといひ、飛張房が縮地の杖の意をふまへて千里をむねにたゝみこむといふ。殊に二人が渡海のはるけさ千里あたへ着く意を胸にたゝみたくはふるの情によせていふ。

我は古郷を出る旅君は古郷へ歸るたび

此句情をいはずして情その中にこもる。尤詩などにこの格多き事也。小むつは古郷を出る旅なれば古郷をはなるゝ物うさいか計りぞや。それにくらべてはせんだん女は古郷へ歸り給ふ旅なれば旅のうさにも便ありと。小むつがせんだん女によへ力をつけていさむる體也。それゆへ此下の文句に小むつがいさめちからにてといへり。

ふたばに見せてせんだん女

古郷を出ると歸るとの二端とうけて、又せんだんの二葉といふにひかけたり。

親と妻とを持し身は何かなげきは有明の月さへ同じ月なれどなふ二人見馴し閨の月

小むつが身の上にて小むつが情をのぶる也。月を見て夫婦ねやにてながめし思ひをのぶる。

尤さもあるべし。

なごり數々の大村の是よりぬれてかはかぬ旅衣

といふ迄の文句其心はよく聞えて註に及ばず。たゞ文句のすら／＼として何共なふおもしろ

く筆にうるほひのある事よく／＼氣をつけてみるべし。是らが筆さきにうまみの有といふな

らん。

二千里の外故人の心

白樂天が月の詩也。三五夜中新月色といふの對句なり。月をながめて二千里の外に別れある

所の故人（そとこ）の心もさぞや此月を見て我をしたふらんとなり。

うなばら

滄海の二字をあをうなばらとよむ也。

鬼界十二の嶋

きかいはさつまのいわうが嶋也。それより目通りに打つゞきて十二の嶋ありとなん云り。此所の嶋々みな今に有る嶋共也。

あれはいにしへ天照神の住吉の明神に笛ふかせ舞曲を奏し二神のあそび給ひし所とて二神嶋共申す也

そさのおの尊暴惡なりしかば、天照神いかり給ひて天磐戸へ引こもり給ひしかば、天下常暗となりたるゆへ、住吉の明神をはじめ八百萬神かぐらを奏し給ひしかば、それより岩戸をひらき給ふ。爰のすみよしのふえふき給ふは此故事也。又二神嶋にふたがみのあそび給ひしは余の事なれ共、かぐらをいふ故住吉の明神を引て立たる也。二神嶋はふたがみしまとて今に有となん。

敷嶋のはや秋津洲の地をはなれ

敷嶋もあきつすも日本の別名なり。

あまの鳥舟岩舟の

たゞ舟の事をいふ歌ことばなり。

まだ秋風に鱸つる松江の湊

古來ずんがうとよみ來れ共唐音は松江まつえにてすゞきの名處なり。日本にても出雲の松江は鱸の名所にて、まだあき風にすゞきつる也などいへる古歌あり。其古歌を取てこゝの文句のいひかけに用ひたり。

陶朱公

越の范蠡官を去て後陶朱公と名のり大に富をえたり。

宮前の楊柳寺前の花

三體詩に出たる詩の句にて其こゝろはきこへたるごとし。

鸞輿らんよ風車ふうしゃ

天子の御車をらんよといふ。跡につゞくるまをしよくしやといふ也。

谷のましら

ましらは猿の事也。

かたにかし

肩かたに薦ゐのといふ事也。

さいくはいの山路に

難波土産

崔嵬と書也。山のけはしき體也。詩經に有。

手談のわざ

前にみえたり。

斧の柄もおのづからとや朽ぬべし

列仙傳に此事あり。仙人の碁を打を見る内に年月移りて、手につきゐたるをおのゝえくさりたりとなり。

とりのそら音ははかる共

孟嘗君といふ人秦に囚^{とらへ}へられし時、ひそかに秦を夜の内にぬけ出たりしが、追手のかゝらん事をおそれ道をいそぎしが、函谷關といふ關所をひらかざりし所に、もうしやうくんにしたがひし者に鶏のなくねをよく似する人あり。鶏のまねをせしかば其邊の鶏みななきし程に、關守やがて夜明けたりとて關所をあけて通しけるとの故事なり。

鹽山のふもと

りさんといふ山のふもとに花清宮といふ御殿あり。

楊貴妃の御廟所大眞殿

唐の玄宗皇帝の十八番目の御子に壽王といふあり。楊貴妃はもと此壽王の妃なりしが美事うつくしきすぐれたりしかば、壽王へは別に妃をあたへやうきひをば玄宗寵愛し給ふ。すなはち楊玄琰たんとがむすめにておさな名を大眞といふ。貴妃は女官の名也。後に安祿山といふもの亂をおこせし故、玄宗は貴妃ともろ共に蜀へにげ給ふ。其みち馬嵬ばかいといふ所にて軍兵が貴妃を殺したる故その後玄宗したひかなしみて臨邛りんきやうの方士かふしに勅して貴妃の魂のあり所をもとめ給ふに、蓬萊山へいたりて大眞殿といふ額のかゝりし所へゆきいたり、楊貴妃にあひしとぞ。

楚人の一炬ひとに焦土となんぬ咸陽宮共いつゝべし

是は杜牧之が作りたる阿房宮の賦の詞なり。秦の始皇がおごりをきはめて花麗に立たる咸陽宮なれ共、楚の項羽が一戦にほろぼされ項羽楚人にやかせしかば、さしもびゞしき宮殿も一つの炬にやきつくされて焦土となりたると也。

目撃一瞬

目撃はまたゝき也。一瞬は一たび目をひらきて閉る間をいふ。故にまじかく見るをももくげきすと云ふ。

福壽海無量

法華經普門品ふもんぽんの語也。福と壽との徳を得る事海の量はかりなきがごとしと也。

鵲のわたせる橋

前にみへたり。

くめの岩はし

大和の國大峯山をかづらきといふ。此所にくめの岩はしといふ名所あり。

泰山を挾んで北海をこゆる事あたはず

是は孟子が梁の恵王へ教給ふ語なり。此心は魯國の泰山のやうなる山を脇の下にはさみて、北海のごとき大なる海を飛こゆる事は何程したき事とねがひてもかなはぬ事也。君の位ある人が民をおさめて王となる事は此類にあらず。君の心に爲せんとさへ願ひ給へばなる事なれども君の心にその事を爲給はざるゆへなりとなり。

御幸

天子の御行を御幸さきといふ。但行給ふ前々さきにてたまものあるゆへ民みな幸とするのころあるゆへなり。

鳩毒

鳩といふ鳥は甚だ毒あり。此鳥もし水に影をうつせば其所の鱗ことごとく死すと言へり。是によつて唐にては酒又は食物に此毒を入れて毒餌するの術あり。又井の傍に桐を植るも、桐は鳳凰のすむ樹にしてほうわうは諸鳥の長なる程に、この樹を見てはもし鳳凰や有べきやと鳩鳥も恐れてよりつかざる時は、水にその影のうつる氣づかひなきがため也とかや。

評、右國性爺合戰五段の趣向外にいふんなし。只一つ老一官が甘輝が城へゆきし時、かなきが妻の金祥女がやぐらのうへにて一官がすがた繪を月かげにうつしてよく見合する所、理のくらし書きやう也。一官は城外にたゝずみ、きんしやう女は櫓の上に居、その間遠きゆへ鏡にうつして引合すとの心、是は晝ならさも有べし。月はもと日の光をうけてひかるものなれば夜にいり太陽地にしづみては月光が本影也。それに復かゞみをうつしたりとて照すべき理なし。是はさだめて古人の云る書をよむに雪をあつめ螢をあつめし格と思はるべけれ共、それは目の前にて目にさし當てみるなるべし。それさへあるべき事ならず。いはんや數十間をへだてゝその影あきらかに鏡にうつるべきや。何として直に見られぬぞ。此段はなはだいぶかし〜。

○刈萱桑門筑紫轢かるかやだうしんつくしのいへづと

此淨るり全體がかるかやの事を取組たる故此外題也。かるかやの事はむかしより説教又はぶ
んやの淨るり其外かぶきにも多く仕來る事にて今さら語かたにも及ばず。次に此げだいの轢の字
をいへづと訓ずる事たしかなる出所ありや、おぼつかなし。惣じて外題は三字五字七字等
の奇はなの數をもちゆる事俗の胡婆こまの業ごうより出て、かならず字わりを偶にはせぬ事有ふれたる例
なる故、字數を奇にかなへんための無理訓と聞へたり。尤狂言綺語とはいへど近比わがまゝ
なるよし評する人もすくなからず。いかさま文字の形かたちを分てみれば、家の土産みやげに榮さかものを車
につみて歸るの心を會意して此字を製しかくよませたるにや。此やうな事が格になりなば金
扁つぱに遣つかといふ字を大臣とよませ、紫帽子を冠かぶにして爺おやぢといふ字を變重へりぢ共よませるやうになり
ゆくべし。

序

大道すたれて仁義おこり國家みだれて忠臣をあらはす 此語をもつてかんがみれば道にもまた
誠の本あり 其まことのみなもとを尋れば戀慕愛執ねほにしくはなしと豐蘆原ゆきの陰神陽神やみかみさぐり給
ひし天の逆鉾

この序の詞、木に竹をつぐとやら前後の語つゞきはなはだ不都合也。まづ大道すたれて仁義

あり國家みだれて忠臣をあらはすとは老子經に出て、老子が道とする所の虚無自然の眼より聖人の仁義忠孝を打やぶりたる詞也。この語をうけて道にも又誠のもとありとは何事ぞや。しかも戀慕愛執を道のもとといふ事、いかに狂言なればとて餘りにつたなき書やうならずや。勿論男女のまじはりより父子兄弟等と人倫のひろまる事は諸書に多き事なれば、その心をはんとならば聖書にもあれ神書にもあれ此所へ引べき語幾等いくどももある事なるを、かくのごとく妄言を書ならべて一部の發端とする事作者の恥也。さて豐蘆原は日本の別名にて、伊弉諾伊弉冊の二神あまのさかほこをもつてさぐり給ひ、此國がはじまりしといふ事は子供もしつたる事なればくはしくしるすにおよばず。

世々のひつき

祚の字にて天子の御くらゐをいふ。

君子國

日本の別名なり。日本は禮義たゞしき國なるゆへ稱美していふとなり。三才圖會には日本の外に別に君子國といふ國あれ共、日本の國をくんしこくと稱する事昔よりふるき事なればまづは日本の別名とすべし。

踏歌たうかの節會せちあひ

正月十六日に内裏におこなはるゝ節會なり。

とのゐもり

だいらへ御番にあがりて守護するをいふ。

いなにはあらぬいな船

古今などに最上河によめる歌の詞也。出羽の國の名所もがみ河は川水ことの外はやくして、船を引のぼすにふねのかしらすがたのふる態が、人の物を否なといひてかぶりをふるに似たる故かくいひかくると也。

公卿

内大臣右大臣左大臣を三公といふ。又内大臣をのきて太政大臣をくはへても三公といふ。その内にだいじやうたいじんは常になき官なれば、まづは内大臣と左右の大臣を三公といふ。さて三位以上を卿といふ故に、三公と三位以上を公卿といふ也。

比翼の友羽がひ

山海經にいはく、常晋山に鳥ありて翼も一つ目も一つゆへ二鳥相ならびて飛、その名を鵲せうと

いふと。又示雅にも南方に鳥あり比くらはされば飛ずといへり。皆ひよくの鳥の事なり。

香染の袈婆

あまが絳色に染たるけさをいふ。

おどろの髪

おどろ荊はいばらの事也。いばらのごとく亂たるかみといふ心也。

叡感

叡の字は深明也と註して智の至てふかき事也。書經には叡は聖をなす共いへり。されば時の天子をあがめて聖主などゝ申す故、天子の事にほめ奉りて叡の字をつくる也。

常陸帶

ひたちの國かしま明神の祭の日、女に思ひかけたる男のあまたあるを、布のおびに其名を書けて神前におけば、其多き中にすべき男の名書たるはおのづとひるがへるを、禰宜が取てとらすれば、それを聞て男かこちて終にしたしくなるといへり。それゆへいもせの縁むすびの事に引ていふなり。

大悲のおちから

大日經には大慈大悲といへり。佛菩薩の衆生をあはれむをいふ。

念彼の段

觀音經の偈に念彼觀音力といふ事多く有。その所を俗にねびの段といふ。

雲雷くせいでん

念彼の段の文也。もし雲おこり雷なり電はげしき時、彼觀音の力を念ぜば時に應じて消散する事を得んとのころ也。

胎金兩部の峰

眞言家に佛體を陰陽にわかちて、陽を金剛界とし陰を胎藏界とし是を兩部といふ。それより取て大峰かづらきの山上をたいこんりやうぶのみねといふ也。

幕下

大將の旗下をばつかといふ。大將の陣所に幕を打たる其幕の下といふ事也。されば其手下につくをばつかにつくといふなり。

大玄谷神の咒

幻術などをつかさどる神にて其本尊の咒なり。

雲井のかほり蘭奢の乗もの

こゝのらんじやは蘭麝なるべし。匂ふ乗物との心也。又蘭奢は南都東大寺にある奇楠ぎなんの名也むかしより東大寺に傳はる寶物也。それにつき世俗のものがたりに、寺を東大寺となづくる事此蘭奢待といふ奇楠ある故也。其故は蘭の字の中に東の字を取り、奢の字の上にて大の字を取り、待の字の旁にて寺の字を取て東大寺といふと也。此説久しく云つたふる事なれ共、蘭の字の中は東にはあらず、東かんの字なればいぶかしき事也。さて此序に伽羅の事をも辨すべし。世俗に奇楠を伽羅とよぶ事漢語のやうに覺へたれ共伽羅はもと梵語也。漢語になをすれば黒くろといふ事也。佛法に大黒の眞言を摩訶伽羅まかといふ。是すなほ漢にては大黒といふ義也。翻譯名義集に摩訶此こには大といふ、伽羅かこゝに黒といふと云り。然れば漢にては黒といふべきをそのまゝ梵語をもちひて伽羅といふなるべし。さるによつて伽羅といふ字を穿鑿しては奇楠の名とする事其義知がたし。是に付て薰物の方を黒方といふも伽羅の方也との意なるべし。是等は世間に多くしらざる事ゆへ序ながら書付ぬ。

たそかれ

黄昏と書く。暮方の事也。

男山のむかしを尋るに豊前の國宇佐の郡くちじやうより勸請

男山とは八幡山の事也。元來ぶぜんの國うさのこほりひしかたの山に、廣幡八ながれあらはれて八幡大神宮とあをがれ給ふを、其のち神龜四年に今の山城のおとこ山にうつし勸請し奉となり。

餓がう死

餓がうの字に餓がうのかなを付て餓死とかたるは何故ぞや。大かたうへ死をがつしと覺たるならん。
鄙いやし々。

大行は細瑾をかへりみず

戰國策に出たる語也。天下などを取んとのむむやうなる大事をおこなふものは、瑣細なる事には目をかけぬもの也とのこゝろなり。

外面似菩薩內心如夜叉

阿含あこんに女人地獄使能斷二佛種一外面似二菩薩一內心如二夜叉一といへるを截ていふ也。

まよふが故に三界の火宅

佛法のさとの意をのべて迷故三界城悟故十方空、本來無二東西一何處有二南北一といふ偈あり。

此心をふまへて書たる也。三界の事火宅の事は前に註せり。

輪廻のきづな

恩愛にほださるゝものは三界をはなるゝ事あたはず。車の輪のめぐることくに生れかはり生れかはりて三界の間をうろたゆる。是をりんゑのきづなといふ也。

無明ぼんずのさとり

無明は煩惱の事也。無明の暗といふはあれ共無明のさとりとはめづらしき詞也。無明を悟て破るこゝろにて書たるにや。

妻子珍寶不隨者

經に妻子珍寶及王位臨ニ命終時ニ不隨者といへるをきりて用る也。

愛別離苦

前に出たり。

評、此段の本妻と妾とが碁盤の枕のうへ二匹の蛇の咬くはあふ趣向は、もと藤澤の一遍上人の俗の時の事也。くはしく爰にしろすべき事なれ共北條九代記にもあり。又近年出たる小栗實記といふ軍書にも遊行の由來を書たる所にくはしくあり。作者大かた小栗の中より得られたる

思ひつきならん。

富で奢らず貧してむさばらぬは未可なり富貴にして禮をしり貧してたのしめと弟子にしめせし孔子の詞

此語は論語に出て、孔子の弟子に子貢といふ人間かけられしを孔子のしめし給ふ詞也。其心は文面にてよく聞えたり。

鏑 矢

矢じりに煉ものゝ丸ぎを付たる矢也。

一天の主となる某十二人迄女房持てもくるしからず、

天子の妃は十二人をさだめて一年の十二ヶ月にかたどると白虎通に出たり。日本の天子にも女官は典侍^{すけ}四人お下^{しも}四人内侍四人合せて十二人あり、これを局といふ。俗多く取ちがへて十二の後といふ。后は天子の妻也。一人に限る。局は官女にて官^{みやつかへ}なり。

もろこし臨潼の會に善をもつて寶とすと伍子胥がいひし

りんとうは秦の哀公天下の諸侯を會せられし所の名也。この會鬪^{たからくらべ}寶の會なりしが、楚にはいか成寶かあると問し時、伍子胥こたへて我國には金銀珠玉の寶をもつては寶とせず、惟善人

をもつてたからとすと答たり。伍子胥この時楚の靈王にしたがひて臨渚にゆき、此會の明輔たり。

ついに妹脊の道しらず

本朝の神代に鵲鴿ありてその尾をびくめかせるを、

長くいもせの道をつたふ。さればせきれ

いを戀おしへ鳥といふも此故事也とかや。

智仁勇

此三つ人道の大徳也。智はちえ也。仁は天よりうけたる本性の徳なり。勇はすみみていさみある也。人に此三つがそなはらねば道徳にいたられぬ也。智はたとへば行所の道すじを目をもつて見わくるがごとし。仁はたとへば行べき道すじを足にてあゆむがごとし。勇はたとへば行べき所へゆき着べしといさみすすむがごとし。故に此三つを天下の達徳共いふ也。

もろこしは下和がたま我朝の驪龍のため

荆の國にべんくわといふ人あり。山より璞を堀得て是を荆王に奉る。荆王かのあらたまを玉尹といふ目に相せしめ給ふに是石なりといふ。荆王べんくわが上をあざむくと怒て左の足

を削きぜらる。其うち荊王死し給ひその子武王くらゐにつき給ひしかばべんくわふたゝび是を獻す。王尹又見て石也といふ故武王もいかりて右の足をきらせらる。其後武王死し給ひて共王くらゐにつき絶ふ時、べんくわは荊山に引こもりかのあらたまをかくへて哭ゐたるを、荊王めし出し給ひかのあらたまをみがゝせば給へば至極の名玉にて有しと也。さて驪龍のたまといふも唐の事也。こゝに我朝といひしは心得ず。是も又めつばうに書たるものなるべし。

張華が博物志

はくぶつしは書物の名にてちやうくわといふ人の作なるゆへ、ちやうくわがはくぶつしといふ也。

萬劫

劫は數の名也。佛書におほくいふ事にて一劫といふものはなほだ久しき事也。四十里四方の岩あるを、天人が三千年に一度づゝあまくだりて羽衣にて一遍づつなづるに、なでつくしたるを一劫といふ共いひ、又四十里四方の藏に粟のみのりたるを、三千年に一度づゝ天人がきたりて一粒づつ是を取に、其取つくる時を一劫といふ共いへり。

女之助の趣向尤おもしろしとはいへ共、仕組のすじ入くまぬ故か一つ／＼さがみへて氣の

毒。それゆへ素人目には感ずれ共粹すいはのみこまぬ所多し。さて守宮しうきうの事俗説にいひふらす事なれ共慥よりどころなる據を見ざりしが、先年長崎の人にちなみて猥々わうわう子しといふ南京人の傳授の書也といふをみるに、藥方も多くのせたる中に女のほれる藥とて此事を書り。その方守宮の雌めと雄おとを取り生ながら竹の筒へ入れ、但し竹の筒に節を一つこめ雌と雄とを節をへだてゝ入れおけば、一夜のうちにかのふしを咬やぶりて二疋がつるむを直くわに霜しもとなし、是を煉る汁には

ほれさせんと思ふ人にしらせずして是をつくれば、其人たちまち心ほれくとして其つきたる人を戀したふといへり。今按するに唐人は日本より偽りおほきものにて、かゝる得しれもなき事をいひたるならん。しかも　といふごとき取得られぬものを藥味にくはへたるは噓うそのはげざる前置なるべし。

それを力のしのぶ草

しのぶ草は歌に多くよみて忍ぶ事にいひかくる也。人家の軒につるしのぶといふくさなり。爰はやもめのかたを波

惣じて波にはめなみおなみありて、女波は多く打てその間におなみがうつものなるに、紀州

和歌の浦はめなみうたずして男波のみうつゆへかたをなみといふ也。山邊の赤人の歌に、わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをさして田鶴^づなきわたる。

姪犯の病

犯の字誤り也。姪奔と書べし。姪亂といふに同じ。

ひなの者

鄙はいなかの事也。

屠處のあゆみ

譬如^三屠所羊^一一步々近^レ死といふ語ありて、羊が屠^{はがれ}にゆく時は一足づ^ゝにて死に近しとなり。陰徳あれば陽報あり

陰はかげにて陽はひなたの事也。人の目にかゝらぬ陰にての徳を陰徳といふ。又人の目にみへたる報のあるを陽報といふ。陰にて徳をつむ人はかならず目にみへたる善報を得ると也。

楚^{しゆ}の叔敖^{しゆくごう}といふ人いとけなき時出てあそび兩頭の蛇を見る。たちまち殺して是をうづみ歸て泣。母そのゆへを問ふに答て云く、我きく兩頭のへびを見るものはかならず死すと。さきにこれを見るゆへ母をすてゝ死せん事をおそるといへり。母のいはく蛇今いづくにか有。いは

く他人の又見ん事をおそれて殺してこれをうづむと。母のいはく、我きく陰徳ある者は天かならずむくふに福をもつてすると。汝かならず死せじといへり。果して無事に成長し後に相となりしとかや。

浮木の龜の對面

佛書に多くある事也。盲龜とて目の盲たる龜大海の底にありて、千年に一度海上へうかみ出づ。しかるに此かめ甲はひびれ共腹はなはだ熱す。もし赤旃檀といふ木をえて其身に添れば熱をさます藥となる。それ故龜の心に赤せんだんの海木に乗て腹をひやし甲を日にほしてあたゝめばやと思へ共、目はみへずあまつさへ千年にたゞ一度うかみ、又しやくせんだんが浮てながるゝに出あふ事まれ成事なれば、あふ事の希なるたとへとはするなり。

奇恩入無爲

奇の字あやまり也。棄恩入無爲とて出家する人は恩愛を棄て無爲の菩提に入るとの心也。しかるを奇の字にては通ぜず。今の作者の義もしらす書ちらすめつぼうかい、これらの所にて見るべし。

今此三界悉是吾子

法華經の文にて今この三界の衆生はみなこれわが子也との意也。

評、高野山の案内作者はしられぬにや、文句に間違あり。はじめ石動丸が登りし坂は不動坂よりのぼりたり。それゆへ荻萱の詞に、來た道すじは難所にて草臥足にはかなふまじ、こちらへゆけば花坂とて平地も同然といへり。さて次の文句に息をばかりに玉やの興次、みだい所をおひ奉り女人堂迄來りしがと有て、又其次の文句に石動丸はかちはだしかくとみるよりはしりつきノウ情ない母様といへり。是大なる間ちがい也。其故は大師の廟の前より花坂の方へゆけば、大門といふ門有て女人堂はなし。但し女人は大門より内へは入る事かなはぬ也。右の通りゆへ花坂へゆけば女人堂へは行あはず、花坂と女人堂とは大に方角たがふ也。いかさま近年の作にはふぎんみだる事すくなからず。ちか比ある人の物がたりに、今の淨るりは東西となくたはいもなき事がちなるを、似つこらしく語^{かた}なして見物をまねかるゝは、いかさま日本一人の名太夫なるべしといひしも思ひ合すれば過論ならず。その一理はある事たるべし。

淨瑠璃評註卷之五

○蘆屋道満大内鑑

此じやうるりみな蘆屋のだうまんが事を主意にして書たる故蘆屋道満の四字を置也。あし屋は氏なり。道満は名也。大内は内裏の事也。鑑とは唐の代の詞に、古をもつて鑑とすれば興替を知り、人をもつて鑑とすれば得失を知るといふ事貞觀政要といふ書にみへたり。それよりして物をかんがへみるを鑑と名付る事多し。是もかんがへみるの心にて大内鑑と外題す。此淨るりげだい評判はすぐれざりしが、與勘平といふ名趣向よりして淨るりは近年の大あたり、世上にかくれなき事也。

○序風にさけぶ青嶂せいしやうの外雨にうそむく古林の中

青嶂は松柏などの生しげりて青々としたる峯也。屏風を立たるごときを嶂といふ。狐が風にむかひて吼さけぶ體をかくいふ也。嘯といふも雨にむかひて打ぬをのき息をつく體也。古林はふる林の物さびしき所也。是みなきつねのあそぶありさま也。

尖れる鼻はびこる尾小前大後

これ狐のかたちを詠ず。小前大後とは狐の形は前の小く後の方大なるもの也といふ事なり。

色中和をかね死すれば丘を首とす

是はきつねの徳を詠じたり。狐の色の黄なるが中和の徳にかたどる。中和といふは徳の至極にて、天氣にていへば寒からず暑からず春の日ののどかなるがごときを中和といひ、人の氣にていへば聖人の剛からず柔からずほどよきを中和といふ。されば五色を方角に配當すれば青は東にあたり赤は南にあたり白は西黒は北にあたりて、黄なるが中央にあたるゆへ是を中和の色とする也。さては死する時丘をまくらとする事禮記にみたへり。狐は丘にて生るゝもの故死する時又丘を首として死するは本をわすれざるの心也。これみな狐の徳なり。

是の妙獸百歳誰かしらん女と化し苔の褥に草まくら契りを人におなじうす

こゝには狐の妖る事をいふ。妙はふしぎなるをいふ。宇彙に狐はよく尾をうつて火を出すと云り。佛法には狐のよく妖るを報得の通と名づく。事文類聚といふ書の中に百歳を経し狐名ある人の髑髏をかしらにいたゞき、北斗を拜するに落ざる時は淫婦とばけて人をまよはすと云り。されば狐がばかせば苔をしとねと思ひ草を枕として、眞の美女と思ひて人姪ぢぎりを

おなじうすとなり。

日月星度

日や月や星やなどのあゆみの度を度といふ。惣じて天には形なき故、二十八宿の星を東西南北の四方へまぐばりて是を天の體とさだめ、月日や星のあゆみをさだむ。故に日月星度といふ。

比翼連理

比翼鳥とて雌雄つばさを比てとぶ鳥ゆへいもせの中むつまじきにたとふ。連理は前にみへたり。唐の玄宗帝楊貴妃を愛しある時ちかひて、天に在てはひよくの鳥となり地にありては連理の枝とならんと給ひしとかや。

氣候

天地の氣を一歲に廿四氣七十二候にわかす。即ち春夏秋冬の氣のめぐるをいふ。

月かげの白虹日つらぬけば甚だひかりを失へば

むかし荊軻が秦の始皇をうちに行たる時、虹が日をつらぬきし例あり。すべて虹が日月をつらぬくは不吉のしるしなり。

日蝕ぐわくしよく月蝕げつしよく

蝕はむしばむとよみて日月がひかりを失ふ事也。もと日と月とがたがひに光を衝つて蝕する也。日蝕は君よはきの象、月蝕は臣よはきの象也といへり。

身まかり

罷まかりと書てしりぞく事也。死する人はこの世をしりぞくの心ゆへ死するをみまかるといふなり。

天文の博士

日の月の星のといふものは天の文あやゆへ天文といふ。博士は官の名にて其道を博くきはめたる學士といふ事也。

薄氷をふむごとく

恐るゝ體をいふ也。詩經に戰々兢々として薄氷をふむがごとしといふ語に本づきて書たるなり。

胸はうつせの

おそるればむねがだん／＼とうつやうなる故。胸はうつといひかけてすぐに空蟬へ取付て、心がうつゝぬけがらのやうになりたるをたとへいふ。みな御前をおそるゝ體なり。

おめす

おめるは臆の字也。人に恥る所ありておそるゝきみなり。

分野

唐の九州の地を天の廿八宿に割付て、何州は何の星のぶんや也とさだむる事也。

白虹日をつらぬけば天子のお身のたゝりなれ共月の體をつらぬきしは親王さま

日は君の象月は大臣の象なり。又月は日に次ものなれば儲貳の象あり。ちよじはすなはち親王なり。

二十八宿

東方の七宿は角亢氐房心尾箕なり。北方の七宿は斗牛女虚危室壁なり。西方の七宿は奎婁胃昂畢觜參なり。南方の七宿は井鬼柳星張翼轸なり。かくのごとく四方におのゝ七宿あるを四方合せて二十八宿にて是を天の體とする也。

しなとの風の天の八重雲を吹はらふやうに

神書にある事也。たゞ雲を天の八重雲といふ。八は神道にたつとぶ數ゆへ、別して八重といふ。しなとの風は神風なり。

聞でんほう

聞傳法なり。耳に聞たるばかりのおしへといふ事なり。

易は變易

易は陰陽のうつりかはる妙用をいふ。故に易の書に、易はへんゑき也、時にしたがつてへんゑきして道に隨ふといへり。

大元尊神

大元帥明王とて惣身に蛇のまとひ付たる本尊也。いくさをまもり給ふゆへ大元帥といふなり。

和歌三神

住吉玉津島人丸をいふ。

そこにお暇たまはらばみづからも身をすべり

そこは足下そこなり。今の俗の貴様といふ程の事を雅語たがしきには足下といふなり。

丸が心まろにあり

丸といふ事を天子の自稱と心得るはあやまり也。是は上を恐れて我身をよぶ詞なれば親王以下臣下の自稱に用ゆべし。其故は元來まるはちゞまるといふ略語なり。君をおそれて此身が

ちゞまるとなり。都て和語にまるといふ詞の付は、みな物が一所へあつまりちゞるの義也。これと訓の一つの祕事なれ共ここに明す。まづまるといふてにはの付語共を案すべし。あつまる、ちゞまる、わだかまる、こまる、つゞまる、つまる、せまる等、みなちゞまるの意あり。されば子供の大小便を取る小厠をまるといふも、腰がかゞまり身がちゞまるの意也。朝臣にもいにしへは鷹と名付たる人多し。後世には鷹を轉じて丸の字をもちゆと見えたり。

無
狀むらなし

無爲共書て埒もなき事をいふ。

おぼろけ

小縁おぼろけと書てすこしのゆかりといふ事なり。

久かたの空

ひさかたは空といはんとてのまくら詞なり。

うちはへて

打榮と書。にぎはふ體也。又みごとなるきみ也。

簗籠よき内典

阿部の晴明が作りし曆數をしるしたる書なり。

注連繩

神前にはる繩なり。惣じて神事の清めにもちゆ。紀貫之が土佐日記にはしりくめ繩とあり。諸社根元記云、いわとのまへに繩をはりて日の神の還り入り給はぬやうにする也。是今のしめなわ是也。わらを左になひ七五三と數をわくるは、七五三は合て十五也。天道は十五にして成なり。ひだり繩にするは天道の左旋させんに取る。左は陽也。陽には陰が添もの也。繩の二筋まとふは是すなはち陰陽也。はしをたゞざるは質素の義なりと云々。

非相非々相

みな三十三天の中の名也。

大卜師

占の官をいふ。周禮に大卜の官といふは天子のうらかたをつかさどる官也。

曆算推歩の術

曆をつくる算をれきざんといふ。日月星の歩を推量はかりてつもり知るを推歩の術といふ也。

吒た枳ぎ尼

天部の本尊なり。

咒咀しゅその文もん

まじなひにて人をのろふ文なり。

三百六十四爻ごうの占

易の卦は六十四卦にて爻は三百八十四爻あり。今ここに六十四爻といへるは六十四卦の數を取ちがいていひたるもの也。作者の文盲なる尾の出る所もつともかやうなる所に於てみづべし。

坤の卦乾の卦

坤も乾も共に八卦の中の一つなり。

ふかみ草

牡丹の事なり。

塵にまじはる宮柱和光の影もあきらけき

神の威光のひかりをやはらげて塵の世にまじはり給ふといふ事を和光同塵といふ也。此語はもと老子經に出たり。

鴻飛で冥々^{やみ}戈者^{やしや}なんぞしたはんや

感遇の題にて唐の張九齡が作りたる古風の詩也。鴻の大鳥がめい／＼たるおほぞらへ飛あがりとび去る時は、戈^{やみ}いるものも取んとしたふ事あたはずとの意なり。

蟻の穴から堤のくづれ

老子經にある事也。蟻の穴を老子經にては蟻封^{やみふう}となづけたり。

戀ぞつもりて淵となる

陽成院の御製に、つくばねのみねよりおつるみなのがはこひぞつもりてふちとなりぬる。

詩經といふ唐のふみに桃の天々^{やうく}たる其葉^{しんく}々々この子こゝにとつぐ

詩經周南にある詩也。是は詩人が嫁する女^{むすめ}を見て、桃の若木^{わかく}の天々^{やうく}としてその葉^はの葉々^{はふん}なるにたとへ美^{はな}ていふたる詞也。とつぐは嫁^{よめ}をいふ。

優曇^{うぜんげ}花

天竺に有て三千年に一たび花さくといふなり。

龜ト

龜の甲を燒て其甲のかけわれたるすじを見て吉凶をうらなふをいふ。

身體髮膚をわけられし父

孝經にしたいはつふは是を父母にうけたりといふ孔子の語あり。

伍子胥はいさめて誅せられ眼軍門にかけられしが呉王の恥辱を見て笑ひしとや

是は呉越の戦ひの節の事也。呉王を夫差といひ越王を勾踐といふ。兩方相たゝかひて越王勾踐
會稽山にて打まけ、さまゝの艱難に身をこらし今一度旗をあげ呉王をほろぼさん事を心が
けたり。此時呉王ははなはだ奢をきはめられしかば、其臣伍子胥これをいさめ斯ては又越王
にほろぼされ給はん事をいふ。呉王いかつてごししよに屬纆しよこの鈎をあたへ、是にてなんぢが
首を刎よとわたさる。伍子胥大にいきり、今呉王知なくして我を殺し給ふ。此後久しからず
して越王のためにほろぼされ給ふべし。我いま死したらば首を東門にかけ置べし。我呉のほ
ろぶるを見んといひて自殺しぬ。其のち果して越にせめられほろび給ふ時、ごししよが眼に
是を見て笑ひ、其まゝしほれけると也。

隨求陀羅尼

大ずいぐぼさつのだらに也。都てだらにはみな梵語にてぼんじ也。

露ときえゆくたまよばひ

いにしへ人の死したる時、その死人の衣服を屋根の上へ持のぼりて、その名をよびかへり給へくくと三度よぶをたまよばひといふ。すなはち復たまよばひと書なり。

離魂病

俗にいふかげのやまひにて、異病論病者彙解などに出たり。

はづかしやあさましや

此かゝりより奥へむけて葛の葉が子に別れの口上、おほく百合若大臣野守鑑の鷹が子にいふせりふをはめたるものなり。もとよりゆり若のせりふは近松の筆ゆへ、一入しつぽりとして人の感情をもよふす事多し。此場みなく其移ゆうつりへおもしろき筈なるべし。

畜生残害の人間よりは百倍ぞや

さんがいとは物のへちをそこなふ事也。こゝの文句残害といふと百倍といふと文句がつりあはず。百倍といふは、畜生は人間より愚痴なるゆへ愛着の念のふかき事百倍ぞやと事いふ也。されば佛法に畜生の子を思ふ事人にまさるを愚痴鄙陋とはの給へり。残害はこゝへ出あはず。

○道行

註なし。

葛の葉の恨

くすの葉といふものは風にふかれては其の葉のうらをかへしてことごとくうらを見るもの故、歌道に恨のまくら詞にはくすのはのうらみといふなり。

卅一文の歌の詞は八雲たつ

素盞雄尊の御歌に、八雲たついづもやえがきつまごめにやえがきつくるそのやえがきを、是三十一字の始なりとかや。

丹波の父うち栗

此事世上に大に取あやまりて傳ふるは、むかし此里人に不孝のもの有て我父を殺して地にうづみたり。その墓より栗の樹はへて常の栗よりも其子^み大き也。今の丹波の名物てうちぐり^み是也と。是跡方もなき説なり。此栗はいがの内よりひとり割出で樹よりおのづと地に落るがこの栗の妙也。それゆへ古人出落栗^{でんおちぐり}と名付とかや。それを後世はみぎのごとく取あやまるとなん。

司天臺

天文をうかがう臺なり。禁中にあり。

評、此淨るり始終の趣向文句共おほやう面白くよく出來たるものとはいへ共、又格別に外の淨るりにすぐれたり共みへず。然るにかくべつの當り有し事は與勘平のたすけなるべし。まづ與勘平といふ名ばかりでも一當りがものは有べし。其上に我がおれかおれが我がのせりふおかしうて尤で底に意味のふかきやうにおもはるゝ事也。但し莊子に此趣あり。莊周ある時夢のうちに小蝶と化して翔りまはりてたのしみしが、たちまち夢さめたれば我身をみるに床に打ふして本の莊周なり。さて莊周は世上を虚なるものと見捨る見識ゆへ、今日のゆめさめたるも亦ゆめのごとしと思へり。それゆへ此夢の事を論じていはく、今ゆめのさめたる我心より思ひやれば、今迄ゆめの内に小蝶となりしは莊周がゆめなるべし。然れ共打返して思ふてみれば、今我ゆめさめて莊周といふ人に成たるが小蝶が夢にて、今我身を莊周也とおもふは却て小蝶がゆめの内やらしれず。夢が現かうつゝが夢か、莊周が小蝶か小てうが莊周か其差別知れがたと云り。佛法にも此意ありて維摩ゆいばと文殊もんじゆ舍利弗せりふなんと心體の入かはる事あり。入我我入といふも此きみ也。然れば此しゆこうはその心の來る所の根ざしが、はなはだ高妙也。しかれど見た所がやつことやつこの所作、町中子供のうれしがる所、葛の葉がせりふは

女中の感心あさからず、何やかや都合よく出来たる故の評判なるべし。

○大塔宮囃鎧

此淨るりは後醍醐天皇太子さだめの事につき、關東ならびに六はらの我まゝをいきどほらせ給ひ、大塔宮をもつて將軍とし征罰の企をなし給ふ事、大様太平記の意を本にしてつゞりたるもの也。中におゝとうのみや御鎧をめされたる行粧げうざうあさひのかゞやくごとき、との文句あるをもつて外題を直にあさひのよゝいと名付るなり。尤よきげだいとの評判なり。

舜序に錐を立るの地なけれ共天下をたもち禹に十戸の聚じゆなけれ共諸侯に王たり上三光の明をおほはず下百姓の心をやぶらざるは王者の術

この語文選に出たり。いにしへ舜といふ聖人はそのはじめは百姓の子にて、わづかの土地もたもち給はざりしか共後には天下をたもち給ふ。錐をたつるの地とは至てわづかなる地をいふ。禹といふ聖人もとは堯舜の臣にして、其はじめは民のかまど十軒もたもち給はず。十戸は家數十軒にていたつて少々也。聚は落聚とて民のあつまり住居する村をいふ。禹は十軒ほどある村の主にてあらざりしかども、後には天下の諸侯の上に立て天下の王となり給ふ。

さればかく舜や禹のごとくに後にてんかを取給ふ事は其身の徳、上日月星の三光のあきらかなる徳をおほはず、下は百姓の心をやぶり給はざるを心として天下に王たるの術とし給ふ故也となり。

参差しんさたる

かたがいとよみて、世の濟とよほらずさまぐの出入のあるをいふ。

山の座主ざす

山といふものは何のやまにもおのゝ名あり。或は愛宕山鳴瀧山など、皆その名をよぶ事なるに、只打まかせて山と計りよべばひえの山にかぎる也。是但し叡山は王城の鬼門をまもり佛法王法を鎮護ある第一の山なるゆへなり。

扈從

君の供をするをこせうといふ。

赤酸醬かみじ

鬼灯の事也。日本記に出たり。

折伏門しやくふくもん

佛法に攝取門折伏門の二つあり。衆生をあはれみすくひとるをせつしゆもんといひ、惡魔外道をおどしてくつ伏さするをしやくぶくもんといふなり。

解説どうさう

罪を解まぬかるゝをげだつといふ。衣はつみをげだつするゆへげだつどうさうといふ。

若宮はおもなげに

おもなげは面目なき體なり。

一言事をやぶり一人さだむ國津風

文句はよく聞へたとをり也。此語は大學の書に見えたり。

鐘馗の繪

しやうきはもと終南山の人なり。唐の太宗の時進士及第し出世をくちかれ、いきどほりを發して御殿の階にて頭を打わり死しけるが、其後玄宗皇帝の御宇楊貴妃わづらひの時、みかどの夢に大臣の姿となり惡鬼を追はらふと御らんあり、終に惡鬼がうふくの神として其像を繪にうつさせ、鐘馗大臣とあがめさせ給ふ。それよりして後の世迄大和もろこし相傳て此像をあがめ、惡魔及び疫癘をはらふのまもりとする事也。

酒は詩をつり歌をつり

唐詩に酒を掃^レ愁箒といひ又は釣^レ詩釣^{はり}なりといへり。

偕^{ひとこら}び

禮をのりこゆるをひとこらぶといふ。

釋^{しやくだいくわん}提桓^{もん}因

梵天王の名なり。

評、無禮講まんざい等の文句みなあたり有。その中に無禮もぶれいぬれえんさき立はだかりしとの文句あまりのやうなれ共、これ下の句の受がよき故耳にたゞず。立はだかりしはの跡右少辨俊基といふものにて格別いやさからず。是又氣をつけあぢはふべき事なるべし。

臣として不忠なるは子として不孝なるにおなじと田氏が母の確言

この語圓機活法忠臣の所にみへたり。確言とは名言の事也。

北の方より家の桃灯さきばしりのかちの者お歸りとよははる聲に門番とび出貫の木扉ぐはつたりひつしり八もんじにひらく地に鼻手燭かゝげて扈從^{こぞう}近習敷臺におりめ高なる玄關前月にきらめく鍔印父齋藤太郎左衛門利行お歸りかいのと乗物に取つけば

文句は註におよばす。

評。此所太郎左衛門やしきの表へ早崎がきかゝる所へ齋藤歸り合せ、門番が門をひらけばこしやう近習出むかへ、はやさは齋藤へあいさつをせんとする、何やかや一時に取まぜたる事の多き場なるを、文句を繰て小みじかによく書こなしたるもの也。貫の木とびらぐはつたりひつしり、八もんじにひらく地にはな手しよくさゝげて、こしやうきんじゆ敷だいにおりめたかなる玄關前の句、ずいぶんくつどめたる内に其場のもやうをよくかたどりたるもの也。まづ爰の語を一つづゝ引はなしてはきこへぬ事多し。第一ひらく地に鼻とは何ぞや。しかれ共あとさきの書まはしが奇妙なるゆへおのづと其わけよく聞ゆ。此本をよむ人これらの所にて作者のはたらきのある所を氣をつけ給ふべし。此次に早崎がせりふも小りこうに書たるもの也。その故は夫に隠して参りしといはずして、もしも夫よりかす殿はみへまいかといひア、心せかれやといふゆへ、聞親はなを心ならず子細はしらねど立ながらのさたではあるまじ、いざまづ奥へとつれゆくやりかた、人形を活してせりふがしづまぬ書方也。是より奥に至り早崎が齋藤へものがたりの所、齋藤が返答、よりかすが立ぎゝ、みなく都合よく勝手ばやにいやといはれぬ書こなし、尤妙作なるべし。

三十年來夢空々しゆみせんくだけで盤石に花ひらく一喝

辭世の偈をつゞりたる也。よりかすが年卅歳あまりゆへ一生の間を夢とさとりて卅年來夢空々といふ也。空々は本來空の意にて元來我といふ物なしと也。しゆみせんはくだくべき物にあらず。ばんじやくは花さくべき物にあざれ共、眞理をさとり得たる時はしゆみも常あるものにあらず。盤石も一佛性なれば又さとの花をひらくべし。一喝とは我が一念悟入の眼をひらかんため心をよびおこして喝とさけぶ也。禪宗のさとの意也。

哀別離苦

人間八苦の一つ也。いとしかはいひ親子ふうふも死わかれてかなしみくるしむをいふ。

周の八疋項羽が騅呂布が石兔馬我朝の鬼鹿毛

周の穆王八疋の龍馬にのりて天下をかけめぐり給ふ。騅は楚の項羽が名馬、せきとめは漢のりよふがめいば也。我朝にては小栗判官の名馬をおにかけといふ。

辟易

おどろきさはぐをいふ。

彌天の暴逆

天にはびこるを彌天といふ。

那羅延力

佛書におく出たり。ならえんは今いふ力士なり。

都みやびやなる女あり車を同じうすかんばせあがは顔かん 薺かんばせあがはの花のごしとうたふ

是は詩經の鄭風有女同車の篇の語也。薺は今いふむくげ權の花也。其顔のうつくしきもくげのはなのごとしと美女を詠ぜし詩也。三位の局にかけていふ。扱今の俗のあさがほといふは牽牛花也。なる程草にては牽牛花をあさがほと訓すべし。木にては權をあさがほと訓す。詩などにいふはおく權の事也。詩經の註にも薺は權也といへり。

鄭衛の二風道を蕩とろかし國をそこなふの淫聲

詩經國風の内にて、鄭の國衛の國の詩は其うたひ聲たはれて淫聲と名付て人の心をとらかす故、聖人はをいましめ給ふ。

氣焰騰のごとくにあがり

書經に周公の勇氣をほめたる詞なり。其ゆうきのいきほひ騰のはげしくあがるのごしとなり。

根笹のあられに水晶の玉をかざり上には鳶が羽をのし鯉をつかむつくり物戀に心はとびたつばかり根ざさにあられさはらば落よの心をさとり

こゝの燈籠のもやうづくしの文句、五十年もいぜんのはやり歌をすぐに書たるもの也。されば時代がうつれば古物があたらしく、今のわかき輩にこれをふる言と知る人なし。

ひきがゐるに歌よみも有ふ事とぞさゝやきける

此まへの文句を段々よみて此落文句をみるべし。これらが正眞の近松の筆勢なり。かはづの歌をふまへて太郎左衛門がふつゝかなるをひきがへるといひたり。諸見物のどよみをつつてよろこぶ所おかしみ又かくべつ也。是につき近松がよのつね人に語しは、をよそ落文句に笑ひを取事又はかる口などを書には、すこしもあんじたるけしきなく其場へふと出たるやうに書がひみつ也。しかれ共是が下手のなりにくき事也とかや。尤さも有べし。近松の筆勢には思ひがけもない所で、時々ひよかすかおかしみある故本をよみてもよむ人の氣をつかさず。是近代作者の大に及ばぬ所なるべし。

乾達婆王

法華經にあり。夜刃などのごとくあらくれたる姿なり。

もしほぐさ

何やかや書あつめたるをいふ。

らうたげに

此語のものは御所に上臈らうたけ下らうありて、官位をおほく經給ふを臈長らうたけたりと申すゆへ、下々のいふ長おとなしやかのみみあり。又爰では宮の御ものおもひにて氣をつかし給ふ體にもかけていふ也。評、三の奥のかゝり、八歳のみやの御うたの前、文章うづだかくさながら下におかれぬ手段あり。亦近松が筆勢也。中々餘の作者のおよぶ口氣にあらず。今の淨るりはかやうの場になりて格がつたりと落て、正眞のよみうりの繪さうしと肩をならぶ。能々氣をつけて何かを見くらべたらんはおのづからあじはひしるべし。

充滿其願こころをんによじやうれうち如清涼池

その願みだを充滿みだしめて清淨池のごとくならんとの文言にて、奈落の底の罪人も七月十六日にはぢごくのほのほをのがれ出、すゞしき池にあそぶ心地とて、すなはち孟蘭盆經の説なり。漢の紀信が忠義にこへ

きしんは漢の臣にて、かんそのたゝかひに高祖のあやふかりし時きしん身がはりとなり、か

うそのしやうぞくにて車にのり楚の陣にゆきて焼死したり。是によつて高祖はあやふき場をのがれ給へり。此事史記前漢書に出たり。

九品蓮臺

極樂に九品あり。上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生合せて九品也。其うてなをれんだいといふ。

評、齋藤が賢介けんけつを立ぬきたる所尤ぬけめなし。はじめよりかず切腹の上にて力若を齋藤がもり立んといひし所にすでに此ころあれ共もとより見物に思ひがけなし。扱この場にいたり齋藤が始終の心をかたるについて最初よりのいきかたをあんずれば、齋藤はしどう武士道を立ぬきたる所あきらか也。我は六はらのひくはんゆへ我身におゐては少しも天皇への荷擔なく、頼員力若は天皇へのたのまれし義を立させ始終てんわうの御ためにいのちを果し、しかも力若がさいごによつてよりかすがむだ死迄忠死となる。みな是さいとうが一心よりあみ立し武道、尤さも有べし。をよそ三段め一段丸ぐち外の筆勢ならず、みな近松の形見なるべしさればこそ趣向より文句にすこしもぬけめなく、おどりの中の愁うれひなんどまはらぬ筆にはおよびもなき事共なるべし。

○道行

註なし。

四段目
北宮黝が勢ひをひらき孟施舍が義をまもる

ほくきうゆうはいにしへの勇者にてすゝんで敵にむかふ事をこのむ。もうししやもいにしへのゆうしやにて我身をしりぞかず敵に屈せざる事をこのむ。みないにしへの名あるゆうしや共にて此事孟子に出たり。

分段同居の塵にまじはり

佛法に四土しとといふ事有て世界を四つにわかづ。其中に貴賤ひとしく居る地をどうことといふ。すなはちどうことは刹利さつりもしゆだもわかちなく貴賤貧富のしやべつなし。娑婆はぶんだんとて上下きせんのぶんざいがそれぐにへだよりて貧福のわかちあり。されば佛ぼさつは同居土より出て、しやば分段土のちりにまじはり給ふとなり。

簿伽梵

佛をぼきやぼんといふ。すなはち佛の十號のひとつ也。

評、四段目殿のひやうえが潔癖にて狂氣の段、よめむすめのいきぢ萬端始終おもしろし。

ゆかう文句共に大でき、尤はんなりとして道具立迄見物の氣を取、よく出來たりとの評判にて有しとぞ。

日西天に没する事三百七十餘日大凶變じて一元に歸す

天王寺にて楠が見たる聖德太子のmiraikiの語なり。

もろこし管仲が古主をすて桓公をたすけし

齊のくはんちうははじめ齊の公子糾が傳ゆつとなり。齊の君死し給ひて糾の弟くはん公齊の君とならんとす。この故に兄の公子糾と桓公とたがひに國をあらそひて軍におよび、終に公子糾うたれて桓公の世となれり。はじめこうしきうが戦場にて、くはんちうは主人こうしきうがためにくはんこうを射てころさんと迄せしか共、後にくはんこうの世となりてくはんちうがいのちをたすけ、齊のまつりごとをさづけ給ひければ、くわんちうすなはちくわんこうの宰相となり齊の國をよくおさめたり。此事春秋左氏傳につまびらかなり。

元文三年午正月本出來

浪華書肆

丹波屋半兵衛
伊丹屋茂兵衛 壽梓

竹

豐

故

事

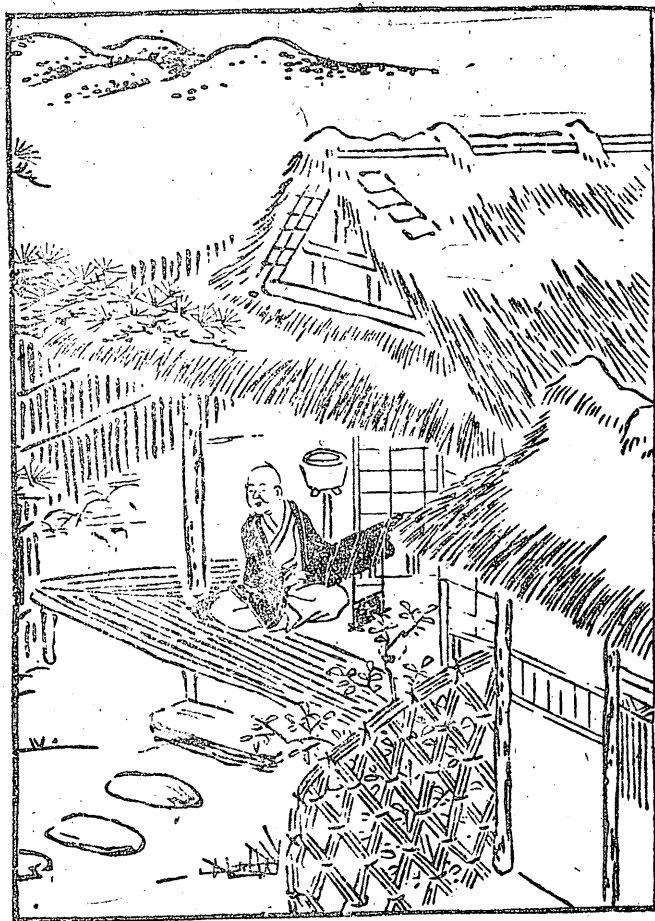
竹豐故事序

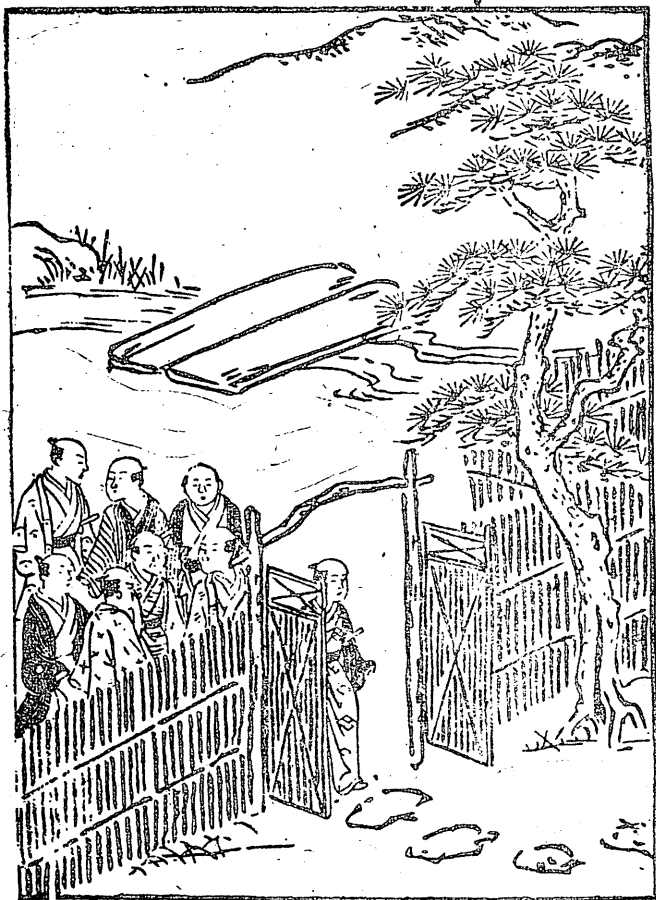
時津風浪靜成難波の濱、昔しの京と名に高き高津の宮の高臺たかぎやに登りて見れば煙立、茶屋ちやはいろはの四十八櫓*は八つの定芝居、爰繁榮の大湊深き恵や道廣き道頓堀の片邊に住居する老人有。年壯き砌りより竹本豐竹の淨瑠璃を好て、語る事は不得手なれど聞事は好者すけべ也。幾年か東西の淨るり操の替りを見放はなしたる事もなし。住家より程近ければ芝居の木戸口へ成共毎日通ひ、外題看枚にても見て歸らねば氣分勝れず。餘り此道を好る故、知れる友連異名して筑後越前の頭字を取筑越翁と稱しける。獨り住身の氣散じと缺天目に德利引寄せ、一杯の酒に酔を催す酒吞童子*の道行、月に分れて月に行、實哉げんや廬生が見し夢の榮花の程は五十年、假の浮身の樂しみと雪の段を副臥とし二睡せるぞ豊かなれ。時まだ東雲の頃成に、若き者共數十人來り先生は御内に在ますかと案内す。主じはむくと起きて戸を開き、是は是は未だ夜も明ざるに各々打連立ての御越は芝居行と推したり。初まる迄は餘程間も有ぬらん、先づ煙草にても參り緩々と御出あれ。して各々方は筑後へか越前へかと尋ねれば、大勢の中より親父分進み出、否此人數の中にも豐竹へ

参る者も有又竹本を見に参る人も候が、斯同道して宿元は出ましたけれど西最負の東連中の二組に別れて、動もすれば喧嘩を仕出し姦しい事でござります。先生には御道の御粹方故芝居の譚を能御存の義なれば、若い者共が片意地成最負論を致さず納得仕る御示しを頼みます。然れば先今日は芝居行を追ての事に致し、幸ひ能^よ次でなれば、淨瑠璃操の由來物語が聞まし度存ます。若い衆何れも何とく^くと尋ねれば、皆々聞て是は一段と能思ひ付、御苦勞ながら御咄を頼み上ます。筑後翁聞て同氣相求むる御所望、幸某も徒然の慰み、然らば物語致すべしと、大字七行の稽古本二三札と巻物一軸とを手持^{たうさへ}て座上に居^すり、此來歴の義は餘程年經りし事と云又物覺薄きは老人の習ひ、傳へ聞しに違し品も忘れたる事も繁^{おほ}からん。併し所班らに咄し申さん。聞給へと、破れ扇子を友に構へて聲繕ひし東西く東ヲ西イ。

寶曆第六丙子の年

浪速散人一樂





引用書目

諸社神託記	增補鐵槌	指南	同股本紀	老子經	事類全書	小補韻會	海界次第
古今集	下學集	枯机集	顏氏家訓	周禮註	風俗通	調音祕決	圓機活法
和歌雜題	羅山文集	孟子子	周易略註	毛詩註	書言故事	名談集	白氏文集
和名集	南嶺子	史記正義	爾雅	文選註	紀原	首楞嚴經	世事談

竹豐故事目錄

卷 之 上

- 南都薪能事
- 芝居濫觴之事
- 淨瑠璃由來之事
- 太夫受領之事
- 三ヶ津淨瑠璃流布之事
- 古流之太夫盛衰之事
- 井上播磨掾之事
- 清水理兵衛之事
- 竹本筑後掾來歷之事
- 同播磨掾之事

卷之中

○ 豐竹越前掾來歷之事

○ 江戸肥前掾之事

○ 竹本豐竹東西之流義芝居繁昌之事

○ 故人之太夫達評之事

○ 名人上手下手三品之事

○ 名人之太夫達教訓之事

○ 五段續語り場役柄之事

○ 晋曲狂言綺語之事

○ 呂律十二調子之事

卷之下

○ 淨瑠璃作者之事

○ 近松氏之事

○ 三味線來由同寸法故實之事

○同藝者苗字に澤之字を付る事

○操人形之故事

○同古今達人之事

○淨瑠璃古今之序

○同當時太夫名人之評

○兩座中見立之事

○兩座繁榮並逃助（ちやうけ）之字義事

竹豊故事 卷之上

芝居濫觴並薪之能付櫓木戸等之事

○抑芝居と云名目の起りは、人皇五十一代平城天皇大同三年戊子の二月、南都猿澤の池の邊り成地面に大き成土穴出來て、其うちより黑煙夥數立登り隣國に覆ふ。其毒氣に觸たる老若男女悉く疫癘に侵されける。依_レ之時の博士を禁庭に召さる。占_イ者考へ奏しけるは此穴より出る所の煙は地中の陰火也。陰火亢ぶ_リ逆上する則_レは萬民惱むの理に候へば、陽火を以て是を制し除かせ給ふべき由を奏聞しける故、即ち彼穴の上に薪を積て燒立ける。此術に因て煙も立止、諸人の病惱も平癒せしとかや。猶又興福寺南大門の前なる芝の上に翁三番叟を舞はせ其邪氣を祓ひ退け給ひけり。今の代に至りても其故實に任せ薪の能と號し、芝の上に居て執行せり。其遺風を以て其後は猿樂・田樂・能・相撲・舞・歌舞妓・上るり・操を勤る場所を何れも芝居と號するは此所緣也。御免を蒙りて興行するには櫓を揚る。櫓も棧敷もなきは場多芝居と云也。城戸と

云は城廓に順じて大切成名目也。後世城の字を恐れ木戸と稱す。見物人の木札を改め取一人宛に入る體、鼠の小さ穴を潜るに似たる故、俗に鼠木戸と云習はせり。櫓の上に梵天帝釋を勸請し障礙災難を拂ふ祈りとす。鑓*を並ぶるは非常を禁ふしむる道具也。慶長の末に歌舞妓芝居始り、寛永十二年に嶋田萬吉と云名代にて、京都の北野祇園四條五條に於て淨瑠璃又歌舞妓をも興行し廿日卅日程宛勤ける由、山城名跡志に見へたり。其後承應三年甲午の年より京江戸大坂の三ヶの津共に定芝居を御免有し也。

淨瑠璃操之來由並太夫受領之事

○擬淨瑠璃の濫觴は永祿年中の頃織田信長公の侍女に小野の小通おつうと云し秀才の艶女有。古への小野小町をも欺く計の美女成しとかや。信長公御生害の後は大閤秀吉公の御簾中ごれんちゆうに召出され近仕し侍りぬ。昔紫式部源氏物語を作り給へる例に習ひて草紙を作り出せり。其趣向は往昔左馬頭義朝の末子牛若丸幼年の間に鞍馬山に在ませしが、御父君の仇敵平家を討滅ばさんと密に彼山を忍び出、金商人橋次信高と云し者を語らひ、奥州伊達の秀衡を頼み彼方に下向し給ふ折節、三河の國矢矧やはぎの長者が亭もとに宿り給ふ。彼館の娘淨瑠璃御前と忍びて契り給ひし舊事を、彼小野

の小通草紙物語に作り畢ぬ。此矢矧の長者に子の無ことを歎き、同國碧海郡峯の藥師如來に立願して儲けたる娘成故淨瑠璃御前と名付、藥師瑠璃光如來十二神將の縁を質り、十二段の草紙を作り淨瑠璃物語と號せし也。後鳥羽院の御宇に信濃前司行長入道と云し人、平家物語を作り生佛と云盲法師に此物語りを教へ、節を付琵琶に合せて語らせけり。彼生佛が生れ質の聲の風を今の琵琶法師は學びたる由徒然草に見へたり。是に例して岩船檢校と云し琵琶法師音曲に達せし名人なるが此十二段に節を付たり。又瀧野檢校、角澤檢校の兩法師、三味線に合せて曲節を語り弘ける。天正年中の末薩摩治郎左衛門と云し者角澤檢校より節を習ひ傳へて、攝州西の宮の傀儡師を語らひ木偶に仕形をさせ、十二段を語り始めける。永祿年中に六字南無右衛門と云し女太夫、京四條川原に於て淨瑠璃操芝居を興行せり。夫より次第に弘まり珍敷慰成とて大名高家の奥方所々へ召出され、後には太閤秀吉公の上覽にも入、剩さへ慶長年中に 禁庭へ召出され 觀覽に及びしより、淨瑠璃太夫に受領を 勅免成し也。

三ヶ津淨瑠璃流布並古流盛衰之事

○慶長年中の末より江戸に淨瑠璃繁昌して、油屋茂兵衛・鳥屋治郎吉・四郎與吉等の太夫有。

別して泉州堺の住薩摩治郎右衛門、江戸に立越大に名譽を顯はし繁榮し、後に法體して淨雲と云り。是淨瑠璃太夫の根元也。此淨雲の子も又薩摩治郎右衛門と號し相續きて名人也。淨雲弟子丹後太夫・丹波太夫・源太夫・長門太夫、右の四人何れも虎屋と號せり。正保・慶安の頃四天王と稱美せし名人也。次に近江太夫法體して語齋と號す。江戸肥前・同外記・同土佐・虎屋永閑、江戸半太夫剃髮して坂本梁雲と號す。此人大薩摩以來江戸近世の名人にして其名高し。河東流と云も此末也。

○京都に昔は淨瑠璃葉流^{はやり}ず、説經與八郎・歌念佛日暮林清^{ひぐらし}・同弟子林故・林達等を翫べり。寛文年中に江戸虎屋源太夫上京有てより淨瑠璃繁昌し常芝居も出來たり。源太夫弟子同喜太夫・同相模太夫・越後太夫續て勤らる。源太夫弟子山本角太夫、延寶天和の頃一流を語り出し大に繁昌し、山本土佐掾藤原房正と受領せり。角太夫弟子の山本長太夫・治太夫・八太夫等名高かりし中にも、治太夫一流を工夫し、芝居を興行し松本治太夫と一派立られたり。是貞享・元祿の始め頃の事也。

○虎屋源太夫門弟伊勢嶋宮内一流を語り出し、其弟子佐太夫相續し北野に於て常芝居を興行し、後に剃髮して節齋と號す。

○伊勢嶋宮内の弟子に嘉太夫と云人は紀州和歌山の生れ也。元來謠に達したる上に伊勢嶋の風義を學び一流を建られたり。天和貞享の頃より芝居を興行し次第に繁昌し、宇治加賀掾藤原好澄と受領せられ、益々宇治の一流を葉流し新作の淨瑠璃を作らせ、稽古本大字八行の正本を始めて板行させ、謠本のごとく節章をさし初しは此加賀掾根元なり。此人謠の音節を和らげ語られし故、呂律^{りりつ}甲乙^{かんおつ}連續して今の世迄も其遺風殘れり。中頃は太坂へも下られ、始終卅年餘京にて宇治の一流を葉流せ、寶永八年卯の正月廿一日に死去せられぬ。法名は自證院本淨道融居士と稱し行年七十七歳也。子息宮内相續て芝居を勤られぬ。門人數多の中、野田若狹・富松薩摩・立花河内・宇治相模等何れも譽れ有し也。別して富松氏師匠の跡を相續在て芝居繁昌せり。是寶永・正徳・享保の始め頃の事也。併し當時は此流を語る人もなく絶果たる同前、残念の至り也。

○都太夫一中と云し人は元來本願寺派京都或道場の住職成し由、若年の頃より淨瑠璃を好み山本土佐掾・松本治太夫等の流義を和らげ一流を語り出し、終に相傳の寺を退き淨瑠璃太夫と成、寶永・正徳の比一中節とて他國迄も賞翫せしなり。亂髮にて紋紗の十徳を着し、白練の長袴、小刀^{ちひさ}を指て出語りを勤められし也。子息も都和泉掾一中と號したり。

○都古路國太夫は一中の弟子成故、始の名半中と云たり。後に國太夫又豊後と號せり。是一中節を又々取直し一流を語り出し、三ケの津は勿論諸國の隅々迄流布したり。併し他の流と違ひ新作の五段物時代事杯は語られず、世話事を専ら語られし也。門弟數多在し内可内・辯中等何れも名を顯はされし。

○大坂表には前々虎屋源太夫・表具又四郎・道具屋吉左衛門等の太夫達語られしか共、指て繁昌と云程の事もなかりしに、元祿年中の比京都山本土佐掾の門人岡本文彌、伊藤出羽掾芝居にて一流を語り弘められ、大坂中文彌節とて持流しぬ。殊更山本飛彈掾手妻人形の所作繰取雜へ見せられし故、其時代の見物衆大に悦び繁昌し。大坂中は云に及ばず遠國迄も名譽を顯はされたり。其門弟岡本阿波太夫も相續て世に鳴られし也。此人聲柄と云甲乙共に揃ひ上手成しか共、時移り年變りて一向當時は用ひず、惜き藝を埋もれ仕廻に終られたり。此外江戸京の古流皆絶果、當時は兩竹氏に流義諸國に弘まり繁昌す。尤江戸の半太夫、京都の國太夫等の流儀計り残るとは云共、是等は座舗の一興又は歌舞妓の所作事、或は舞子の地道行等の會譯に而已語りて、段物操芝居等には曾て用ひず。

井上播磨掾並清水理兵衛之事

○寛文年中大坂に井上市郎兵衛と云人有。生得音聲強數古流の節譜に心を付、淨瑠璃の道に工夫を凝し風登江戸萬歳の音に心を付て體となし、自然と珍數一流を語り出し、終に芝居を興行し程無受領して井上播磨掾藤原の要榮と號し、名譽を顯はし世に播磨流と稱美せり。此人色々に音聲を遣ひ分け品々の節を編出されし遺風今の代に傳り、竹本豊竹共に此流を用ひられし上其流を汲む太夫達井上氏の節事を稽古せずと云事なし。其景事多數有中に掛物揃・歌仙の段・宮嶋八景・鹽釜の段・晴明神風・跡目論馬の段・屏風八景・七夕祭・五天竺・長生殿四季の段、是等の類ひ員ふるに暇なし。此芝居の繁昌を浦山數思ひ京都の銀主井上氏の一座を買切、四條の芝居を勤め居られし内、風與病氣付五十四歳にて死去し都の土と成られぬ。貞享二年丑の五月十九日、法名は夏月了音日弘とかや傳へ聞し。

○播磨掾門人多き中、別して井上市郎太夫・清水の理兵衛等は芝居をも興行し名高き太夫也。就中理兵衛と云し人は安居天神の邊に住居せる料理茶屋成しが、此道に熱心深く聲柄能然も功者に能語られ、井上氏の奥義を能吞込れし故播磨掾死後に花香失ず。諸人今播磨とぞ持流しけ

る。後に剃髮して伴西と號せり。

竹本筑後掾來歴 並 同播磨掾之事

○攝州東成の郡天王寺村に五郎兵衛といへる農夫有。生得淨瑠璃を好み然も聲柄大音にして清潔かに、甲乙地合自然と兼備せし大丈夫の生質也。井上氏存命の間の淨るりを能學び、次に清水の理兵衛に彼流の奥義を習ひ傳へ、且亦其比京都に名譽を顯はされし達人宇治加賀掾に立入て音節の祕術を受けて執行し、古風を仰て心の師範となし肺肝を碎き鍛鍊を盡し終に一流を語り出し、名を改めて竹本義太夫と號し、貞享二年乙丑の年道頓堀に芝居を興行し、鞠挾の内に篠の丸を付たる櫓幕の紋所、是竹本氏出世の始なり。其上近松門左衛門新作を編出し、追々面白き趣向と云、義太夫の語り盛、見聞人此太夫ならではと持葉流しぬ。殊更竹本筑後掾藤原の博教と受領を申請、繁榮の譽れ四方に輝けり。元祿年中の末竹田出雲掾竹本氏の座本となられ、人形操道具建に至る迄美を盡さるゝにより益々繁榮して流義弘まりぬ。併し定命限り有て正徳四年午九月十日、行年六十四歳を一期とし終に死去せられぬ。法名は釋の道喜とぞ稱しける。一生涯の中其名高く、死後に至つて名譽を四方に顯はし世舉つて義太夫節を稱美し、諸國一圓に此

流を學び繁茂せり。

○竹本政太夫と云人は大坂の出産、中紅屋長四郎とて、未前髪立の比より淨るりを好み、竹本豊竹の流義に執心厚く満間まんまと藝に仕負せ、若竹政太夫と號し始めて豊竹座を二年勤めらるゝ内、節誦ふしよみに心を付て工夫せられ、段々と淨瑠璃に實のり、三年目に竹本座へ住て立物と成、筑後掾の跡替りを勤らるゝは兼て心懸の深き故と衆人の稱美淺からず。夫より次第に立身在て竹本義太夫と變名し、相續て播磨掾藤原の喜教と受領せられしが、不幸にして延享二年乙丑の七月廿五日に行年五十四歳にて死去せられ、不開院乾外孤雲居士と稱し冥途の太夫となられしは扱々残念く。又大和太夫と云し大晋の名人有。若年の砌より竹本座を勤め故政太夫と肩を並べられし大立物成しが、惜哉藝盛りに此世を去られて是非もなし。此外陸奥茂太夫・多川源太夫・竹本頼母・幾世太夫・内匠理太夫・和泉太夫・河内太夫、其途上手分の語り手在しか共、何れも故人となられ無念残念。

竹豊故事 卷之中

豊竹越前衆來歴並江戸同肥前掾之事

○豊竹氏は大坂南船場の出產、若年の時より井上竹本の流義を學び、家業を打捨淨瑠璃に心を籠めて工夫を凝し、終に達人の名を世上に顯はされぬ。世に冠たる器量の驗しにや、音聲天然と格別に生れ質れし上、衆人に秀でたる器量備はり、十八歳の比より竹本采女と號して芝居を勤められ、程なく豊竹若太太と變名し暫時は竹本氏と一所に務められしか共、壯若の時より別に芝居を興行して段々と立身有、豊竹上野掾より再轉して越前少掾藤原の重泰と受領し益々名譽を世上に暉し、晩年に至り功成名遂て隱居せられし後も、芝居の繁榮町中の最眞彌増れり。年齡八十歳に近けれど長壽の上堅固也。斯入納の連續したる果報人は當道に於て古今例なし。○江戸の豊竹肥前掾は元來大坂の出生也。若年の比より此道に立入晝夜の修行怠たらず、越前掾に隨從し新太夫と號して勤め居られしが、享保年中お江戸に立越、程無芝居を興行有て繁昌

し次第に町中の最負強く、豊竹肥前掾と受領し、剩さへ芝居迄求められし由、大に成御立身、猶又定芝居の淨瑠璃薩摩座・辰松座は休の時も有ぬれど、豊竹座計りは絶せぬ繁昌にて相續せらるゝは徳の顯はれし所也。三ヶ津に古來より名人の太夫衆數多在しなれど、芝居主と座本と太夫との三つを兼備せられしは、京都に加賀掾、大坂に豊竹越前掾、江戸には豊竹肥前掾との三人計りとの噂、先以目出度ぞんじまゐらせ候。

竹豊東西之流芝居繁昌之事

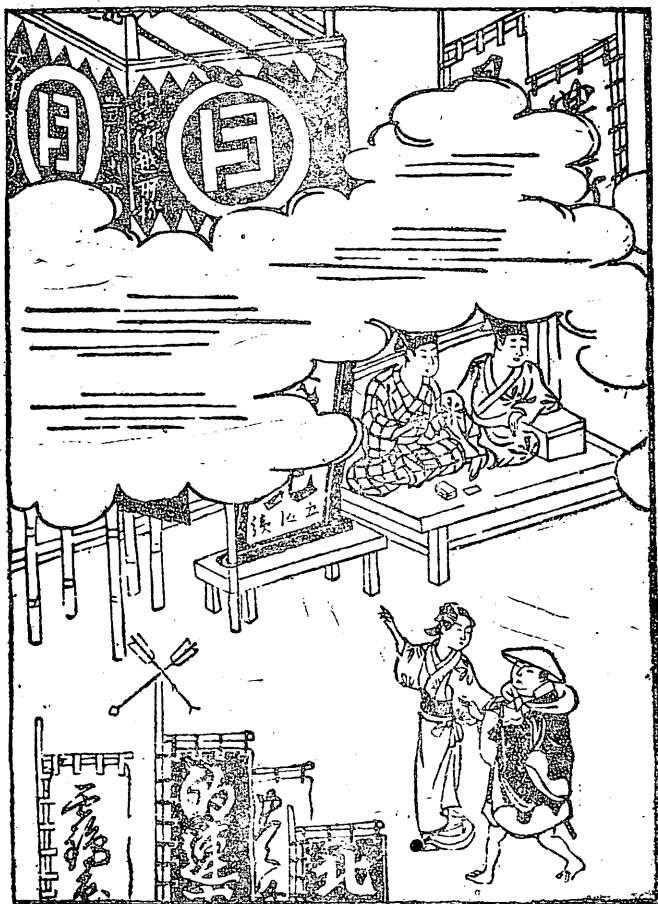
○竹本豊竹の流義は時に合ひし淨りと云つべし。其證據は古代に流布せし江戸の薩摩・土佐・外記・半太夫等の流、京都の山本・宇治・都一中杯の節、大坂には伊藤出羽掾座の文彌節は諸國の浦々隔々迄も葉流、遠國邊土の西國順禮の衆中、京都にては御内裏燦、大坂へ來ては出羽様の芝居を見て歸らねば西國したる甲斐もなく、死ては閻魔大王の前にて云譚の無様に有難がつて持賞しけるに、今にては其名代さへ無成ぬ。勿論冷泉・網戸・平家・説經・歌念佛・祭文杯云物は聞知りたる人も稀々にて、只兩竹氏の流義而已諸國一圓に流布せるは當流の大き成矩模と謂つべし。猶又古來の淨瑠璃は文句短く、只有邊懸り成事にて、左而已切替つたる趣向も

なし。操道具も龜末成仕方にて、大方は黒幕と山簾とにて仕舞ぬ。人形の衣裳は鎗泥きゅうでいの摺込襖すりこふす様、女人形は紅もみの表に淺黄裏うら杯にて事足りぬ。元來足付人形杯は曾でなかりし事也。其後次第に操芝居繁昌せる付道具建衣裳等漸々に向上に成、別して竹本豊竹兩座と成てより、東は西に負まじ西は東に勝らんと互たがひひに勵み出來、益々芝居繁榮し淨瑠璃の作者は種々様々の趣向を工み出し、道具建にも金銀を惜まず金襴きんらんにて舞臺を暉かし、或は數寄屋懸りの粹成思ひ付に智恵袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬しゆもん緞子だんこ繻子しゆこ金襴等にて美麗を盡し、詰人形つめにんがたの外は皆々足付と成出遣でしやうひの外は介錯・足遣ひ、立懸り歌舞妓役者の所作より増りて天晴見物事也。併し西か東か一座計りにては斯繁昌もせまじ。當時は町中の若い衆豊竹講の竹本講のと號し、毎月掛錢を集め置き替り淨るりの節進物の入用に仕給ふとかや。扱々奇特千萬成御心中益々信仰なさるべし。

名人上手下手三品評判之事

○猶又次でながら故人達の名言共を思ひ出る儘に咄し申さん。故陸奥茂太夫・多川源太夫・豊竹幾世太夫・竹本播磨掾・同頼母・大和太夫・和泉太夫・河内太夫以下其時代に名人と呼れし





太夫衆も筑後掾・越前掾の兩元祖に及ぶ音聲は豈人も有べしと思はれず。兩祖師は天然自然の達人成故に、卻句^{せつく}甲乙偏頗の輩の師範には成難かるべきか。其故如何となれば、斯る衆中の師傳を受得ても、音聲不都合の輩は其流を直寫しに語る人は稀成べし。喩へば龜相成木地の道具を上手成塗師が塗上たると、又島桐さつま杉杯の木工^{もくく}目能き木地道具との違ひ有がごとく成べし。兩元祖は木地道具のごとし。其外の上手分と呼べるゝ衆は皆下手を塗上げて能仕上たる上手成べし。夫故に今の世に譽れ有衆中は、皆下手を塗直して能藝にする筋を懇鍛^{こんたん}しての上、素人の弟子中に教へらるゝ故に、此理を以て考ればケ様の太夫衆を師匠と頼み稽古せられれば利方能からんと存ぜらる。故竹本播磨掾、當時の豐竹筑前掾、豐竹駒太夫、竹本錦太夫等は音聲兼備の達人と云には非ざれ共、切磋琢磨の功を積て名人と譽れを取られしとは存る。兎角上手分と呼べるゝ太夫衆は、何分にも生質の器量薄くては名は揚られまじ。又都べての藝者に名人と上手と下手の三品有。先づ名人と云は其一道に生れ付ねば達人名人杯といふ場には行届き難かるべし。下手にても骨髓に徹して其藝に熱心深く修行の功積りなば上手と云迄には成べき也。名人に成べき淨るりは未だ功も無き内より程拍子^まの間合能く、開語譯能く聞へ、清潔^{おそやか}なる音聲なる上序破急の氣轉取り廻し能語らる人は名人になるべき器量兼て見へ透物也。然れ共其名人と成

べき仕出しの淨瑠璃なれ共、稽古修行に精の入ざるは惡仙あくせんに成、上手分と云場迄も行届かず終る太夫も有し也。又硬付こいつて當りを取らんとのみ思ひ語る衆中は大方下手分の爲業しわざ也。顔氏家訓に曰、上智は教へずして成、下愚は教ふと云共益なし、中席の人は教へざれば知らずと有。此語實に宜成かな。所詮名人と云は藝の道堪能にして其爲す業自然と至極の場に至り、感應見物の心魂こころたまに的するを云成べし。故竹本筑後掾・同播磨掾・隱居豐竹越前掾、三味線故鶴澤友次郎人形當時の吉田文三郎等の類は、神化不測ふしよの名達人と稱して誰か非言有らん哉。次に上手と云は夫々の業を能なすを言也。併し上手なれども名譽の少き人も前々に在し、故陸奥茂太夫・竹本頼母・和泉太夫等也。又上手の至る所にて名譽在しは故河内太夫、當時の竹本大和掾、同政太夫等成べし。又上手分の中にて大丈夫成聲柄は見物の讀る掛聲も多く、是等の衆は時に合たる名物と云べし。故竹本大和太夫、當時の豐竹若太夫等を云べきか。何分上手と呼るゝ太夫衆は數無すくなくこそ。

名人之太夫達弟子中へ教訓之事

○井上播磨掾清水の理兵衛に示されて曰、淨るりの一體秋は隨分聲花はなぐさに語るべし。是人の陰氣

を引立んが爲也。春は引締て和らかに語るべし。人の氣浮立時なれば引締ざれば人の情寄らず。時の氣に乗じて和らかならざれば人の情に應へ難しと教訓せられし由。是に依て思ふに増補鐵槌に北村季吟の曰、呂は凡て和か成音也。律は立て硬き音也。唐土の音聲は和らか過て聞分かつたし。日本の言語は清濁分明鮮然にして剛く聞ゆる。唐土は呂の國也。日本は律の國也。是和漢呂律の不同、呂は陰、律は陽也。和朝には唐は春に用ひ律は秋に用ゆ。唐土は是に反すと云。依之見る則は井上氏も此理に達せられし名人と覺ゆ。

○宇治加賀掾門弟に教訓せられて曰、淨瑠璃を稽古するに面白氣なく高き聲有、美敷けれ共生得低き聲有。大音にて下手なるは執行すれば上手に成べし。一體小音にて紋切のせぬ音聲は何程心懸ても其甲斐なかるべし。又如何様成上手成共我藝に自慢の心が有て語られれば、淨るり疎縮て聲花ならぬ者也と示されし。

○竹本筑後掾へ陸奥茂太夫初心の砌問て曰、女の詞は如何心得て語り可申や。筑後掾答て曰、第一に傾城の詞を能合點して語らるべし。漂々と語れば懦弱に聞へて下品也。只挨拶なく蓬然と柔從成言葉を能々考へらるべし。是さへ語り既挺るれば外々の事共は皆語り易かるべし。其故如何となれば語る處の者元來男成故俗としたる事は生質に持て居る故也。次に心得べきは高

位成御方の詞をば能勘辨せらるべし。貴き御方の詞成とて位を取過て語れば至^{さい}ずらしく成て聞ぐるし。此段稽古に工夫せらるべしと教訓有しとかや。

○豊竹越前掾門弟和泉太夫・河内太夫等に示されて曰、藝に精を入ると云は、我役割の場を能工夫して稽古に飽迄精を出し、扱床へ上りては心を安らかに思ひて語るべし。稽古に精を入れてさへ置ぬれば、易らかに語りても少も間拔はせぬ者也。兼ての工夫に心を盡さず床にて計り精を入れるれば力身^{りきみ}立行^{たち}詰りたる様に聞へて賤し。其上操への移り人形の働き迄が不都合に成と教へられし由傳へ聞たり。

○加賀掾門人宇治甚太夫・伊太夫寄會談せしは、師匠の語らるゝ節所は見物業極て讃ざると云事なし。我々は随分精を入大事に語りても見物業の懸聲なきは合點行かず、と咄し合けるを加賀掾聞て曰、皆の衆は語り出すと否や讃られんと而己思ひ始終面白様に語らる故、要^{かな}の場に至て聲^{こゑ}疹^{いた}み聞ゆる故、讃度ても聲の懸られぬ様に成也。某しは唯何となく安らかに語り、節所要の場處に至りて精を入語る也。始終共見物業の掛聲を取らんと而己心得ば肝心の場當るべからずと云云。斯る示しを傳へ聞れしにや又自分の發明成や。故竹本播磨掾、當時の豊竹筑前掾等は此教訓の理に合ひし語り方の様に聞ゆるなり。

○岡本文彌の曰、荒事を語る時は上るりの文句相應に強みを引張て語るべし。上邊計りを語り並べても人形の働きと相應せず、心と形と二つに成故當り目なしと云れし由。尤成理也。併し事は一圖に計り了解すべからず。或太夫酒の酔の場を受取て語られしに、床へ上る時に臨んで茶碗酒を二三盃吞で語られしに、一段と見物の請能出來晴せしとかや。か様の人に若し手負の場杯を語らさば、床へ上る時毎日肩先にても二三寸計り切られて後に語らるや、一笑く。何様の場成共只一心の工夫に有べき也。

淨瑠璃語り方心得之事

○芝居を勤め給ふ太夫衆は文句の清濁り節付等にも心を付給ひて、鹿相の無様に心得給へかし。物置納屋の連子は破れても人目に立ず。座鋪の障子紙は少の破れにても見苦し。元祿年中に岡本文彌の語られし上るりに、老女の戀慕せる段の文句にしらかみすじに油付と云所を、岡本氏は白髪三筋に油付との開語に語られし也。虎屋源太夫此所を難じて曰、此文句作者の心には白髪筋に油付にて有べし。如何なれば三筋や五筋の髪の毛には油を付る事は成まじ。勿論三筋許りの白髪は目にも見へず手にも懸るまじ。併し文彌は天性の妙音にて何事も聲にて押せば是非

に及ばず、一聲二節と云なれば文盲にても時の譽れを取し人也と云云。故實を知り顔に自慢せられても聲柄の甲斐なき人を、喩へて云ば智恵有人の貧乏成に同じ。不都合にても聲の能語り手は有徳成人の阿房に同じ。賢くて金持たらんは猶以て好ましかるべし。然れば聲の能を頼みにして執行の薄き太夫衆は、名人と云には成難かるべし。

○藝者の身の上計りにも限ざる事なれど、運の能と悪敷と有。先運悪敷人は至極の上手なれ共時に合ずして用ひられぬ身の上も有。或は自分の器量を顧みず古實を守るが能と計り心得、筑後越前兩元祖の語られし通を直寫しにせんと而已思ひ語らるは了解違ひと云成べし。斯る人を喩へて云ば、學問に能達したる僧の談儀の下手成と同意也。佛の本意計り説て方便説を雜へざれば、聽衆眠氣出次第に參詣も薄らぐ者也。而れば何を以て衆生に濟度利益を施さん哉。機に因て法を説くと云なれば、此段淨瑠璃に引當工夫有べし。併し芝居を見淨るりを聞は鬱氣を暗さん爲の慰み事なれば、兎角して成共見物業を悦ばさんと、名譽有し太夫達の眞似をし、又は歌舞妓役者の詞色（にやいろ）を似せ。或ひは放廣（おどけ）にて當りを取らるゝは本道の當りとは云難し。道外がましき語り方は場の見物業への當りは有べけれど、棧敷（さんじき）に居らるゝ衆の耳には悦ばれまじ。何とやら此近年に及びては兩元祖の語り弘められし遺風は薄らぎし様に聞ゆる也。

五段續語り場役柄之事

○連中問て曰、淨るり五段續拾壹貳幕の内何れの場か大切に候哉。筑越翁答て曰、是を五段に綴るは能の番組に同じ。初段は協能、貳は修羅、三は葛事、四は協所作、第五は祝言也。大體是に表せる物也。其内第一太夫の重んずる所の役と謂は大序と三段目の切、第二は四段目の切と道行、第三は二段目の切と三段目の口也。第四は初段の切と四段目の口也。又出語りは三段目の詰と同敷大切成役也。其外作趣向に依て景事拵に限らず、此餘の所にも要とする能場所所有べし。古來より兩元祖大概此意を以て勤め役割をもせられたり。右に談ずるところ大序は一座の立物太夫の勤めらるべき第一の大役也。先づは其日の祝義と云次には見物業への一禮の爲也。尤一部の始成ば末々の輕き衆には語らせ間敷場也。爾雅の釋語に曰、序は叙也、緒也と、然る則は其綱要を擧る事蠶の絲を抽づるが如しと云云。序と云字を糸口と訓也。其糸の口亂れなば始終の亂と成なん物を、而るに此近年良共すれば輕き太夫衆の大序を語らるゝは歎かは敷事に非ずや。併し今時の太夫達は兩元祖程に大丈夫に有ざる故、三段め四段めの本役を大事と思はるゝから、未だ見物も入揃はざる間の役故、此大役を未熟成衆中に勤めさゝると推量せり。故

筑後掾存命の節は今時程淨るりも永からず、越前掾時代に至りては五段續も次第に永く成しか共、大序三段四段めの切は勿論五段目に景事の有しか共、要の場は越前掾壹人して勤められし也。老子經に曰、天下の難事は必ず易きより作る、天下の大事は必ず細か成より作ると云云。然れば大序は勿論其外の役義を緩がせにし給ふべからず。又末々の太夫衆、初段の中・五段目・落合等の輕き場を受取給ふ共、其役義を大切に存られ工夫を付て勤め給はゞ、次第に立身し給ふべし。指せる場にあらずとて捨鞭を打給ふことなかれ。

音曲狂言綺語並呂律五音十二調子之事

○惣じての音曲を名談集には、音曲共俳優共戲遊共云なり。何れも狂言綺語の戲れ事也、と云云。狂言とは物狂は數詞也。法男次第に曰、綺は側かたはら也、語は辭ことばば也と云、心は道理に卒そとくを綺語と名づくと云云。周禮の註に曰、發端を言と云答へ述るを語と云と云云。毛詩の註に曰、直に言を言と云論難するを語と云と云云。然れば狂言綺語と云は堅き事を和らげ或は方便の爲に戲れ言をなして、愚か成人を善道に導引みちびく謀計の誠しめ也。白樂天の洛中集の記に曰、願くは今生世俗文字の業狂言綺語の誤りを以て翻がへして、當來世々讚佛乘の因轉法輪の縁となし給へ

と云云。此文に依て觀る則は諸法實相の理顯然たり。峰の嵐谷の響きおみやうしやくさう鴉鳴鵲噪あみやうしやくさう皆佛法と觀す。況哉此淨瑠璃の文句趣向、表には世間の戲相を顯はすといへ共勸善懲惡の深理を含み、詞には當世の人氣を察して作文をなせり。神祇・釋教・幽玄・戀慕・哀傷・兵戈・君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友等の五倫の道を正し、世の爲人の爲事一賞翫すべき道也。信すべし、見物すべし、聞べし、心を止て語るべし。

○夫若おもふれば以もつて謠淨瑠璃等の郢曲あひきよくしりべの譜は狂言綺語の嬉遊言成とはいへ共、其態わざ堪能に達する則は音義正しく、大鐘・大族・姑洗こせん・絃賓すひん・夷則いそく・無射等の六律に通じ、大呂りよ・夾鐘・仲呂・林鐘・南呂・應鐘等の六呂にも達す。史記の正義に曰、律は氣を統て物を類す、呂は陽を統て氣を宣ぶと云云。呂律調和すれば化來宮おのづから・商・角・徵・羽の五音に達せる故、衆人の六根に徹して心身を清すまませ、六塵六情の偏欲を厭離なさしめ、神魂を清淨になさしむる也。調音秘決に曰、○甲は聲の始め也。其音上つて天の五蘊ごいんと成、寒暑燥濕風なり。呼吸ひくい則はち天也、陽也。一調子高きを甲の音とす。○乙は聲の終り也。其音下つて地の五位と成、金水木火土なり。吸息すいき則はち地也。三調子下るを乙の音とす。○呂は悦びの音也、陽也。双調・黃鐘・一越調等は呂の音也。是天を司どる。天上には樂しみ多き故に、此調子を悦の音と云也。○律は悲しみの音也。平調・

盤涉は律の音なり。陰也。是地を司どる。下界には苦しみ多き故に歎き憂ふるの音とす。○角の調子は肝の臓より出る。和調にして直すなをなり。是双調なり。○徵の調子は心の臓より出る。和調にして長し。是黃鐘調也。○宮の調子は脾の臓より出る。大きに充て和らかに緩し。是一越調也。○商の調子は肺の臓より出る。軽く少けれども勁はげし。是平調也。○羽の調子は腎の臓より出る。沈て深し。是盤涉調なり。○壹越・斷金・平調・勝絶・下無・双調・鳧鐘・黃鐘・鸞鐘・盤涉・神仙・上無、是を十二調子共十二律共云也。

○熟思じうしふに筑後越前は天性の達人にて、音聲の開語自然と五調子十二律に合ひし淨瑠璃一道の聖也。孟子に曰、大に而之しを化するを聖と云と云云。生得むまれながらにして事の理に達するを聖と云也と註す。而れば兩元祖の當道に達せられし所を以て見る則は、聖といふに何ぞ憚る處のあらん哉。周易の略註に曰、聖人の道は天地の萬物を育つがごとしと註せられしは尤宜なるかな。竹本豊竹の兩氏當道を世に弘められし德に依て、今當流の淨瑠璃世上專はらに流布し、是を産業すまわひとして世を渡る人、諸國の中に幾千萬人といふ數をしるべからず。是天地の萬物を育くみ養ひ給ふ理に違ふべからず。其功大いならずや。

卷之中終

竹豊故事 卷之下

淨瑠璃作者並近松氏之事

○淨瑠璃の作者と極まりたる人昔古^{いにしへ}はなし。俳諧師或ひは遊人抔の慰みに作れり。中昔、曆と云淨るりは西鶴翁の作也とかや。是を産業となせる人は近松門左衛門に始る。此人博學碩才にして、しかも當世の人氣を察して世間の世話を能吞込て、百餘番の淨るりを作られり。其文句言妙不思議を綴る。元來は京都の産^{うまれ}にて去る堂上の御家に仕へ、本姓は杉森氏にして由緒正數人成しが故有て浪人と成、元祿年中の始め歌舞妓芝居都萬太夫座の狂言作者と成、又宇治加賀掾の淨瑠璃をも作られたり。此人世上作者の元祖也。其後大坂に立越竹本筑後掾の作者とならる。享保九年辰十一月廿二日七十餘歳にて死去せられぬ。平安堂菓林子^(集)と號す。法名は阿禪院^{あぜんいん}穆矣^{もくいたん}且具足居士と稱せり。近松氏過行れしか共猶餘光失^{うば}ず、相續き數多の作者出來りて趣向作文を成すといへ共、元來近松程の器量無き故か、古語の取誤り古實の相違有職の違ひ等間々有

て見聞苦數品も多ければ、畢竟は狂言綺語成と了簡せねばならず。併し機轉發明の作意劣らぬ所も有又は稀有の趣向等も出さる故大當りを取らるゝ段、是又何れも達人と云はんに強て難有べからず。其外作者と名を揚られし人々には錦文流・村上嘉助・紀の海音・西澤一風・筑後の座本竹田故出雲・松田和吉・長谷川千四・並木宗輔・同丈輔・安田蛙文・爲永太郎兵衛、江戸にては北條宮内・塚原市左衛門・岡清兵衛等、此外にも有しかど換骨の餘情薄く名高き衆ならねば略し畢ぬ。併し是等は何れも故人と成られしも多し。當時東西の座共に名譽を顯はされし作者達は人々の知れる事なれば談するに及ばず。

三味線來由並寸法三筋糸付澤之字苗字に付る事

○連中間て曰三味線の緣起をも御物語下されば忝じけなからんと望みける。筑越翁聞て御所望に任せ咄して聞せ申さん。抑々三味線の來由と謂は元來琉球國の弄そび物成故琉球絃と號す。琴瑟琵琶和琴等の音を摹したる物也。日本に是を傳來せし始めは、人皇百七代の帝 正親町の院の御宇永祿五年壬戌の春、琉球より泉州堺の津に渡り來る。其比の武將織田信長公下知有て是を朝廷に獻じ奏覽に入奉らる。時に帝久我右大將通興卿を以て、其比音曲に名譽を顯はせし琵琶

法師瀧野檢校を内裏に召出され、是を彈せて數聞在ませしに其郢曲甚はだ妙音成しを歡感まし
 ましぬ。其砌京都に名を得し琴琵琶の細工人龜屋市郎左衛門石村と云し者此三絃を模し作り出
 せり。琉球には三絃の胴を蛇の皮を以て張ると云共我朝に斯る大き成蛇皮なし。依て猫の皮に
 替て是を張たり。此三絃の形ち大體琵琶に同じ。惣尺三尺は天地人の三極を表し、棹長貳尺餘
 は陰陽の二氣、海老尾かいろうびの五寸は天の五星、胴幅六寸は地の六合、同長さ六寸餘は地の六種、震動
 厚さ三寸は高下平の三形さんけいを象れり。轉手てんじゆ絃手又天柱共書也。是天の象ちを表し反首はんしゆに半月の形
 ち有、海老尾の糸巻に三臺の星を象どる。一の糸は虛精と云二の糸は陸淳と云三の糸を曲順と
 號す。十二調子の内壹越・斷金・平調・勝絶の四つを一の糸の中に兼備ふ。下無・双調・龜鐘
 ・黃鐘の四つを二の糸に兼備へ、鸞鐘・盤涉・神仙・上無等の四調子を三の糸に兼備ふ。首楞嚴
 經に曰、譬へば琴瑟琵琶の妙音有といへ共若妙手無んば終に發する事能はずとの佛説のごとく、
 堪能の達人此三絃を鼓ひく則は衆人の神魂に徹して邪念を退ぞく。而れば自然と六根を清淨ならし
 め神明佛陀の加護に預るべし。亦懦弱好色の意を欲して彈ひく則は、聞人姪欲惑亂の念を發おこす。尤欽
 まざるべけん哉。然るを傾城遊女藝子野郎等の業に翫物となせるは歎かは敷事ならずや。當世
 の三絃は其形少し異にして惣長三尺一寸五分、海老尾五寸二分、棹長さ二尺五分、胴幅六寸、同

長さ六寸六分、天手三寸五分也。○世事談に曰、三絃は永祿年中琉球より渡る。或人泉州堺の津の盲人中小路と云法師に取らせたり。其後虎澤と云盲人本手端手の術を引始む。慶長の比角澤と云琵琶の名人成しが三絃を手錬して小歌に乗る。其比又淨瑠璃節出來なり。此淨るりに乗せ弾くは角澤が始め也。其後大坂に城秀と加賀市との兩法師此術を得たり。後に江戸に立越、加賀市は柳川檢校と成、城秀は八橋檢校と成り。當時八橋派柳川派と稱するは此兩人が術也。是を三絃と號せるは三つの糸筋有故也。然れば淨瑠璃三味線は角澤檢校を元祖とす。角澤の澤の字の縁を取て後世淨るり三絃を産業とする衆中、竹澤・野澤・鶴澤・富澤等と云成べし。大坂に中古達人と呼ばれし人々は竹澤權右衛門・同彌七・野澤喜八郎・富澤歌仙・竹澤善四郎・鶴澤友次郎・同三二、此衆中は故人と成られり。野澤後の喜八は此近年休息、是も残念。

操人之形故事並名人之遺手 古今達人之事

○連中間て曰操人形の始りを承り度候。筑越翁答て曰、いふ會に曰機關木偶は人に象どり、肢と體と聚め集まる謂也と云云。活法傀儡の詩に曰、絲を穿ち木を刻みて巧み神のごとく限り無し機關此身に在と云云。文撰の註に曰、手の伎を技と云體の才をば藝と謂と云云。事類全書に曰

木偶は人形也、本來は喪家の樂なり、漢に至て始めて喜會に用ゆと云云。傀儡子又は郭禿共書也。委くはくは風俗通・紀原・書言故事・顏氏家訓等の書に出たれば、唐土にも古來より翫くわんそび來る哉。順したがつふの和名集に傀儡子、でくつかひ、でくどつ共訓を付られたり。指南に曰、木偶を弄もよほそふ者を屈くつ傀儡子と云へり。本朝攝州西の宮より出る。俚俗是を名づけて笛出狂坊はこでくるまうと云と云云。史記殷の本記の正義に曰、土木を以て人形を對象たいじやうすと云云。此説を以て人形と號する者成べし。南領子に曰、傀儡は木偶の戯あそむれ也と、註に曰、今云人形舞し也と云云。然るに和歌雜題には傀儡と云てくぐつと訓て遊女の事とす。傀儡何ぞ遊女に限らんや。惣て人形舞しの事成べきを遊女の事に限る様に成しぞと思ふに、攝州西の宮より人形舞し世間を廻りて始て遊女の人形を第一番に立て遣ふ。これより轉じ來れりと見へたり。下學集かひくに曰、日本の俗遊女ぞくを呼て傀儡と謂と云云。是等の本文に依るときはおやま人形が根本也や。操芝居ひやうじけの表付にもおやま人形遣ひを立物札に書來れり。枯こ扒集こつに曰、傀儡師とは出狂坊舞しの事也。是を詩の註には滑稽優人といへり。滑稽とは嬉游言たはむれごとを云て人を笑はする也。優人とは猿樂の事にて狂言をする者也。是皆傀儡子の類ひ也と云云。諸社神託の紀に曰、西の宮惠美須太神御託宣に年の始に諸々の民爾笑たみにちむひを於もよほませ、催もよほませ、富貴ふうき於護牟ごもと云云。此神託に依て往古より此所の民春の初めに女人形に吳服くれはの厨

作事を舞す也。是を紗のく衣と號せり。其外異相成る人形を舞し京都を始め國々を廻り、獸の皮を終に出して悪い事した者は山猫にかまそふと威す。是上代の勸善懲惡の誠め質素正直の神教への遺風、出狂坊を舞して笑ひを進む。此故に此傀儡子を神道秘要には惠美須賀質と號する也。

○寛文の比江戸に小平太と云人形遣ひの名人有。羅山文集に曰、鼓吹鑾琴有て木偶の動くに應じ曲節有、且是を操り是を引、板を踏んで呼者と木偶の相得たる事殆ど生るが如し。今日の爲所の者江都第一の僂師小平太と號す。近世傀儡の巧手たりと云云。此小平太おやま男人形共に能遣ひし名人のよし傳へ聞たり。相續ておやま次郎三郎此道の達人也。近世には辰松八郎兵衛名譽を顯はれたり。京都には貞享元祿の比おやま五郎兵衛・同五郎右衛門・大藏善右衛門、正徳享保の比三升平四郎・宇治久五郎・三十郎・與八郎等何れも名を得し上手の遣ひ手也。大坂には辰松氏・藤井小三郎・桐竹三右衛門等のおやまの名人有し也。當時立役人形吉田文三郎は古今無双の名人也。相次で若竹東工郎譽れ高し。おやまは今藤井氏、男人形には桐竹・吉田・豊松、若竹氏の中に上手分多し。

○手妻人形は山本彌三五郎飛彈掾に始まる。南京糸操は寛文延寶の比より遣ひ始めし由、京都

山本角太夫芝居に專はら遣ひし也。又其比に江戸和泉太夫座に野呂松勘兵衛と云し人形遣ひ有。頭平めにして青黒き顔色の賤氣成人形を遣ひて是をのろま人形と云。のろまは野呂松の略語也。又鎌齊佐兵衛と云は賢き質の人形を遣ひ、相共に賢きと愚成との體を狂言に仕始めし也。其比の人愚かに鈍き者を賤しめのろまと云異名を付痴漢に比したり。此野呂松氏を祖とし京大坂の芝居に野呂間・匱呂七・麥間等と名を付、道外たる詞色をなし淨るり段物の間の狂言をなしたり。近來はケ様成事は捨り知れる人も稀に成し也。出遣ひは辰松八郎兵衛に始る。此人古今の達人にて手摺を放れ無量の手段を遣ふに全身少しも亂るゝ事なし。京大坂にて譽れを取後に江都に來つて益々其名高く成、剩さへ御免操の櫓幕を上げ芝居を興行せり。是を辰松座と號せし也。

○筑越翁の曰、扱々何れも打揃ひ此道に執心の厚き段愚老も大悦是に過ず。次手ながら各々へ御目に懸る物有と巻物一軸取出し、忝も此書の義は去年節分の夜不思議なる靈夢を蒙り。先年死去有し近松門左衛門の靈魂來られ夢中に某がしに與へられし處の一巻也。是にて讀上申さん間各々謹んで拜聽有べしと、三度推戴きて紐を解き高らかにこそ讀上げる。

淨瑠璃古今之序並當時之太夫名人之評

○夫淨瑠璃は人の心を種として萬づの趣向とはなれりける。世の中に在る人事業繁き物なれば、心に思ふ事を見る物聞物に付て作り出せる也。色に愛つる世話事、義理に清る時代事を見れば、幾年生る者何れか此道を好まざりける。力をも入らずして人の情を感じしめ、嫁を惡む姑にも哀と思はせ、男女の中をも和らげ、恪き親父の意をも慰むるは此道也。過し時世の竹本筑後掾なん淨瑠璃の聖也。又豐竹越前掾といへる人在けり。淨瑠璃に奇敷妙也けり。頼光山入の道行は竹本氏の一節に綾錦のごとく語り、雪の段の出語りは豐竹氏の音聲に雲井迄も響きなんと思はる。越前は筑後の上に立たむ事難く、又豐竹は竹本の下に立む事難くなん在ける。此人々を置いて吳竹の世々に蔓茂り多き門弟達の中に竹本播磨掾なん世に知られし名人なりしかど、惜哉不幸にして短命也。爰に往古の事をも此道の意を得たる人當時は僅に五六人なりき。而はあれ共彼是得たる所得ぬ所なん有れり。

一豐竹若太夫は歌仙第一僧正遍照の歌の意に同じ。淨瑠璃の様は得たれ共其言葉花にして實少し。譬へば圖に畫る女を見て徒に情を動かすがごとし。

一 豐竹筑前掾は歌仙第二在原業平の歌の意に同じ。其情餘りて調子下し。譬へば盛り過たる花の色は少しといへども而も薰香有がごとし。

一 竹本政太夫は歌仙第三文屋康秀の歌の意に同じ。淨瑠璃は巧者にして其體俗に近し。譬へば商人の能衣よきぬ着たるがごとし。

一 豐竹駒太夫は歌仙第四喜撰法師の歌の意に同じ。詞幽か成様なれど始め終り正し。喻へば雲隠れせし秋の月の曉の風に曙るがごとし。

一 竹本大和掾は歌仙第五小野小町の歌の意に同じ。古への竹本頼母の風也。音聲おとこゑ艶敷して氣力なし。喻へて謂はゞ能女の惱める所有るに似たり。

一 竹本錦太夫は歌仙第六大伴黒主の歌の心に同じ。頗逸興有。然共少し野鄙也。譬ば薪を負る山人の花の蔭に休めるがごとし。

此外の太夫達其名聞ゆる野邊に生る葛あまふしの榮は穢へいごり林に繁き木の葉のごとくに多かれど、未だ淨瑠璃の奥義には至らざるべし。竹本の流絶せず豐竹の節細やかにして、正木の藤ふたば永く傳はり鳥の跡久敷止まらば、程拍子をも知り事の意を得たらん語り人達は、大空の月を見るが如くに上代を仰て今を希望こゝろざらめかも。

○名代竹本筑後掾 座本竹田出雲掾座當時出勤之衆

○太夫 至功美麗音節無双 竹本大和掾藤原宗貫

成功甚深琢磨無類 竹本政太夫

風雅名譽獨步無格 竹本錦太夫

恬然優美 竹本春太夫 聲花秀術 竹本紋太夫

功術珍重 同 友太夫 同 土佐太夫 同 長門太夫

寛 濶 同 桐太夫 同 染太夫 同 組太夫

對揚 同 澤太夫 折太夫 家太夫 森太夫 仲太夫

○三味線 妙術 明廉 大西藤藏

晏如 竹澤甚三郎 鶴澤 文藏 竹澤 佐の七 宗吉

○人形 立役 眞至極拔群操宗匠 吉田文三郎

おやま風流美體 田中小八 最媚 小松文十郎

立役起居壯健 桐竹門三郎

同 箕裘業 吉田 文伍

竹 豐 故 事

舉動尋常

吉田彦三郎

術巧

竹川七郎次

若術

吉田藤五郎

同

貫藏

淺田太四郎

桐竹源十郎

土佐幸助

同 三津八

松嶋又三郎

吉田嶋八

同 源八

笠井茂十郎

桐竹定七

吉田平治

太田源五郎

田中平次郎

京都出勤之衆中は除之

卷軸功老鍊磨

桐竹助三郎

○名代座本

豐竹越前少掾座當時出勤之衆

○太夫

積功至道鍊磨無双

豐竹筑前掾藤原爲政

優艶妙絶音聲無類

豐竹若太夫

幽玄至妙潤色無比

豐竹駒太夫

至要表珍

豐竹鐘太夫

功勞天晴

豐竹新太夫

適時強健

豐竹時太夫

丈夫

同 十七太夫

功術

豐竹伊豆太夫

丁寧

同 式太夫

若術

同 鐸太夫

○三味線 妙手 野澤文五郎 淳朴すなを 鶴澤重次郎

功 若 富澤正五郎 同 伊八郎 鶴澤龜次郎

新 參 竹澤幸助 野澤文藏 鶴澤喜太郎

○人形おやま 嬋娟當中美艷無上 藤井小八郎

同 綵飾さいしよく芬芳美壯 藤井小三郎

立形人形 莫大舉動發明無類ばく 若竹東工郎

紛骨時明 若竹伊三郎 度量的中 豐松彌三郎

考積功 中村勘四郎 若 發 豐松祐二郎 同 門三郎

若竹清五郎 若竹友五郎 豐松元五郎 同 彦七郎

豐松藤四郎 同 勘三郎 同 源三郎 福嶋市之丞

柏井傳三郎 若竹三千郎 同 清次郎 淺井徳二郎 笠井乙五郎

おやま美若 藤井八十八 同 新十郎

人形卷軸 積術模範ていしよく退賑 豐松藤五郎

○此一軸の意は紀の貫之の撰み給ひし古今集の序に例たとらへ、當時に名譽を顯はせられし太夫衆

の藝の品を察し、六歌仙の列に准じて位次に構はらず、近松先生未來記に認め置れし書なり。初心の衆中たり共淨るり修行の旁々は此意を熟得有て稽古したまひて然るべし。

兩座繁榮並逃助之字義事

○花奢優艶は京都、繁榮の勇ま敷は江都、北濱の景氣と淨るり芝居の繁昌は大坂に並ぶ所は有まじ。上に伸ぶる所の先代の役者衆に名人達多かりしといへども、古代と當時と競べなば當代の衆は皆々術を盡したる名人衆數多有べし。就中京都には加賀掾の門弟中の以後定芝居の操はなし。近來竹本氏の大夫衆折々上京在て語らるれば大體程も知れたり。然れば操淨瑠璃の芝居は大坂を第一とし諸國の水みな上と存ぜらるべき也。各や我等斯る土地に生れ住居して大切成芝居を心易く見物致すは大きな成果報と悦び給ふべし。然るにてう助やら云人は札餓湯餓も拂はずして見物致さるゝよし。近比卒忽千萬成仕方と存る。逃助のてうの字はのがるゝと訓み助の字はたすかると讀と承はれば、札場餓共に逃れ助からるゝと云義理にて逃助と呼來りしと傳へ聞ました。猶又最眞の二字は力を副ると云字心なれば、自然作趣向の惡數時成共惡き所は能取なし、能場は益々評判能なさるゝが肝要と存る。惣じて最眞といふ物は己が心の依所、酒吞有ば餅食

有、砂糖好みと唐辛子好は大き成違ひなれど、夫々の口中に味はひて心の欲し樂むに二つはなし。鶴の嘴が永いとて切ても捨られず、鴨の足が短い逆繼足もしられず、柳は緑に景氣を顯はし、花は紅ひに咲て人の目を悦ばしむ。我等は年來竹本豊竹の兩芝居共に最眞に存じ見物致すれば最眞といふ名も有てなし。唯好者すきやと申す成べし。各々方にも其意にて見物し給ふべし。猶又此席へ出座なき若い衆中へは、各御宿處へ御歸りの節宜敷評判頼みますぞ。評判く。

寶曆六丙子九月吉辰

八幡筋南綿町

浪華書林

増田屋源兵衛

心齋橋南詰

丹波屋半兵衛

卷之下大尾

竹 豊 故 事

倒

冠

雜

誌

自序

大和淨るりは作者の心を種として、萬の慰とぞなれりける。花に跡とふ藝子、水に浮む伽やらふの一ふし、いづれか出來文句をかたらざりける。たよりをいれずして、秘こしもとをもなびかし、目の見えぬ者には三弦さんげんと云渡世をあてがひ、惡口云の穴いけどもも、心をなぐさむるは是也。此淨るりも義太夫ぶしは凡大坂のはじめよりはやりにけり。しかはあれど世に傳はる事は竹田出雲に始まり、淨るりにしては國性爺よりぞおこりにける。世話事は天満あまなやお初はつのかな本にはじめ也。朝比奈辨慶の人形は子達の持遊びにもうりて、此二色は本屋御堂ほんやごどうの前の口過くちすまにもしける。元祖筑後は淨るりの精也。又井上播磨と云人あり。嘉太夫は名人なり。嘉太夫ははりまが上にたゝん事かたく。筑後ははりまが下にたゝん事かたしとかや。ちかき世にも聞えたる大和彦太夫は、大音にして四段目語の上手なれども誠すくなし。たとへば看板斗を見ていたづらに作の評判ひやうはんをするがごとし。和泉太夫わづみだうふはふし事の名人なり。節事を聞人は淋しき腹へ辨當を得たるがごとし。播磨掾は古今の妙音にて、語出したしかならず、のち程おもしろきは、ならびなき娘むすめ子

の新枕とも云べし。又今の政太夫は、淨るりはよく語ても前の政太夫と一口にはいはれず。いはゞ田舎から來た養子の身代をよくかたむるがごとし。今の大和はむかしの頼母のながれ也。ふし事あまりて地事いかず。いはゞ鼻歌で女をふづくるに同じ。錦太夫は其さまいやし。地もよくかたれどもちやりとやらにて當あたりを取りぬ。いはゞ顔のこはひかけ乞の子供に菓子やるがごとしとかや。花も過夏の間は祭にわかに夜を明し、目にたつなぐさみもあれど、おとりさへなくなりて八重むぐらの宿にいにしへをあをぎ、いざ聞傳ふるにまかせ、あら／＼筆を取るものにかま。

*後の文つき日

白 德 齋 述

倒冠雜誌

芝居いまだ興行ならざる昔、聲よく清きものは床に昇りて太夫と成、こゑなく上手成ものは手すりに懸りて操と成、筑後近松の兩人より竹田出雲を座本として、寶永二年乙酉三月よりはじまり益繁昌して類まれ成妙芝居也。抑義太夫天王寺五郎兵衛と云し時、初而やぐらを揚しは貞享三年丑のとしにていまだ竹田のしほにあらず。ワキ竹本頼母・多川源太夫などにて興行ありしが、此時分よりよし田三郎兵衛・辰松八郎兵衛とて名人の人形有しが、尤才智發明にして兩人共頭取役を兼帶して、人形の外に樂屋のしまり給銀のりのり町中の評判表の上り萬事水ももらさず出精ありしが、故筑後掾博教、竹田出雲かゝへの役者と成て芝居興行の節、則右之一座ごとく竹田へ屬して相勤ける。此時代は別而人形の藝至て上手ゆへ、突こみとて下より兩手をさしこみ人形壹つを一人してつかひ、手すりの上へ首を出さずちから一ぱいあげ、みじかき淨るりながら丸一段出づかいのやうにしてつかいぬ。中く見るもしんどく又なるべきとも見えず。中にも辰松は其妙なる所を得て諸人専ら用ゆる所也。依今の豊竹越前のむかし若

太夫と心を合し芝居興行して勤しかども、自分の器量すぐれしか又は時の運によるか若太夫を退散して東武ふきや町に芝居を建て座本を勤、今繁榮のしばる是也。同時吉田三郎兵衛は立形人形を専らにして、元祖山本飛彈掾に近寄人形の奥儀を極め、其比よりの大立もの、天満やおはつのおやま人形辰松八郎兵衛相勤むれば、徳兵衛は吉田三郎兵衛、最初^{*}の國性爺も此三郎兵衛役にて、世に秀たる人形、ちかき比迄も役はなけれど惣樂屋の後見とて毎日く出勤しが、定有年月はのがれがたく延享四年丁卯年三月十七日死去有しよし、殘念の袖をぬらしぬ。一子八之助は幼少より生れ立人並ならず器量骨格人に勝れ、なる程一方の大將共なるべき人相成しが、則國性爺後日合戦に錦しやの出つかひ、片手にてのはれわざ、年若なれ共さすが親三郎兵衛の子程有、のちくは天晴の役者にもなるべしと人々是をほめけるが、扱こそ此南瞻部州^{* せんぜんぶしゅう}に吉田文三郎と名を揚たり。若かりし時分より親の職を受繼て頭取役出勤よりしばらくは評判もなかりしが、大坂大火後鼎軍談に玉芙蓉といふ人形より桐竹三右衛門をあざむき、續て出世握虎の藤吉よりめきくと藝を仕上げ、眞鳥の助八兼道、篠原合戦の兼平、京土産の宗八、紅梅袴^{かたびら}の梶原、鬼一法眼の大くら、兜軍記のあこや、金の歳越^{こがね}の婉久所作事、道満の葛の葉、保名・與勘平、かたき打の次郎右衛門、行平の松風、小栗の太郎、ひらかなの松右衛門、別而梅がへ

の無間^{むげん}の鐘は古今無双の事、尤菊之丞の形^{かたち}とは云ものゝ舞子あるひはとしわすれのざしき狂言にもしてもてはやすは世の人の知る所也。昔よりは見物も上手になりて中々常^{つね}ていの事にては合點せず、目口まゆ指先の動く人形迄を拵、當世の世話を心がけ、はやる事を人形にうつして一チ事もるゝ事なし。是大かた荒増は文三郎に初りぬ。それより此かた兒源氏の熊坂、西行の西行、夏祭は團七、人形第一の大當り、菅原傳授の菅相丞・松王女房は珍敷仕内、中々申はくたゞ敷、人々いつも肝をけしぬ。此次の淨るりに嶋^{しま}の勘左衛門に摒をこす人形、馬に乗たる文三郎ともに引上^あがしが、是は昔のかけ鯛^{かけだい}心中の首しめの趣向より出し敷、ふら／＼としてことの外うけよろしからず。此時初而文三郎も悪敷との風聞、千本櫻の忠信きつねの思ひ入、是又大はね、耳の動く人形はこれが始の終りならん。忠臣藏の由良の助、布引の瀧のさねもり、凡六七十餘番の聞いづれか此人のふ當りはなく、淨るりはさのみ出来ねども是非文三郎は人形にて少しにてもはねめありしが、此布引の比より與^よ風作者の氣ざし事はらにして、戀女房染分手綱、吉田冠子一作、昔の小室ぶしに當世の世話をまぜたる續淨るりに取組、道成寺の亂拍子、近代世話事にての大當り、世の取沙汰ことの外よかりし故作者を第一にして、名筆傾城鑑に石橋の所作事出づかひ、其身は白粉青黛にて顔をぬり四方八方にらみ付、文吾・官藏もるとも板

に乗て引づる趣向、さりとはおとなげなく餘りの大不出來、にらみ付し目の評判眞如堂にひとしく、これをもみ評判を致しぬ。次に愛護の若にて色をあげ、人形は付たり、作をおもにして小袖組貫練門平・薩摩歌いこかゞみなどふ出來にして、それよりは病氣にて引籠、出たりひつこんだり。子息八太郎は楠昔噺の時分より千太郎の役にてありしが、千本櫻の維もりの役よりめき／＼と仕上ケ、忠臣藏より文吾とあらため、だん／＼出世して三代根生の立もの共なるべき器量、大かた子息へ役を廻して作のみとおもひの外、此度のおもひ立、其身人形は名譽の名人、作者はする、吉田苗字の役者をかたらひ、近々新淨るり外芝居にて興行のよし、内々の取組、吉田連名の内より告しらせたるによつて、竹田近江大きにおどろきとやかくと和談も入、色々と世話もありしかども年々の大望やむ事なきによつて、是非なく文三郎・文吾・弟大三郎並一家彦三郎、右四人同時にいとまを遣はし、しばらく此座を退散す。依て大夫本より残る役者中へ吉田苗字をあらため出精いたすべく段、書付をもつて樂屋へはり置。其文左のごとし。

覺

一、當芝居竹本筑後掾より凡八十年相續仕候吉田三郎兵衛儀其節より頭取役相勤此方へゆづ

り請候時猶以精出し候事、忰文三郎義幼少之時分八之助と申手前に遣イ其後人形けいこ致させ、親つとめ來り候役儀に在之候間若年之時より頭取役相勤させ申候。然る處人形之儀は世上へ風聞も有之程に候に付自分之藝にほこり、廿九年以前大和彦太夫作者長谷川千四、右三人心を合せ芝居興行可致企有之候得共、親三郎兵衛義實心之ものに有之に付、段々異見を加へ其上彦太夫病死致候に付相止候。然る處十三年以前元祖竹田出雲死去被致候後は役儀萬端我意を致、此方よりれんみんなをかけ候者も自分のはからひにて致候様に申なし、樂屋之者をかたらひ親方出雲申條に相不叶、依之暇遣し候處又々芝居興行之くはだて致す沙汰在之に付、座中之挨拶其上親共是迄了簡いたしつかひ來り候者に有之に付、手代之不調法と偽り和睦致し其分に致置候。然る所八年以前太夫方之不和を取むすび親方へうらみをふくませ、其虛に乘て徒黨をあつめ又々芝居興行可致旨右人數之内より我等へ相しらせ候得とも其分に差置、同苗へ談し合、京都へ出芝居興行いたし候。右之通度々おもひ立、殊に給金を取上げ身分不相應之おごりに候得共、同苗存生之内は數年之功に免して差赦し置候。四年以前同苗相果られ候後は、自分豈人も相心得、家内之儀萬端まかせくれよと願候得ども、是まで實なき者之儀に候ゆへ、家之亂と存、給金相増し手代五郎兵衛を以申遣しは、其方儀數年精出し候上親三

郎兵衛より文吾迄三代相續、外様とは格別之者に候得は給金之儀は其方若盛に取上げ候操之給金に、近松門左衛門給金の數を合せ遣候間、此上如才なくつとめ可申と申遣候。しかれども自分之氣には猶足に存、右申遣候給金之倍借用致し其上萬端我儘申候故、此分にては家之さわぎともなるべくと譜代の者共我等へ申候得共、内證之義は世間へ相しれぬ事故、數年相つとめ候者を其儘にいとま出し候ては、世上之御贔負之御方之思わくもいかゞと其儘に致させ候。五七年之間に凡三十貫目^{*}借し銀在之候得共差赦し置候處、去年十月病氣に付給金差上隠居いたし度段相願候、尤之儀に致承知候。併高給を取候者俄に家内之しまり方も出來かね可申候へば、當拂之儀は壹貫五百目遣し可申、極月拂より隠居料相極め、其方一代遣し可申と申遣し、其段手代共にも申聞せ置候。極月に至り拂入用いか程遣し可申哉、文三方へ尋に遣し候處隠居致候とは僞にて、此方より極め候給金より過分に申越候へども右申越候通遣し候處、右請取自分不存分にて女房まんに受取致させ越候て、世上へは給銀一せんも不取様に申なし候。右之通之心底に在之候間淨るり相談には一向くはへず候。其のち女房まん方より當三月節季拂壹貫五百目越候様申候故、則遣し候様手代に申付候。併隠居願ひ出し候者之事に候得ば、役者はらい同時に遣候ては、外役者共之しんていもいかゞに在之に付、翌二日朝

もたせ遣し候處時刻延引不届に存候よし、右給銀差戻し候。依之手代共いかゞ可致旨談じ候得ども、ひつきやう此方より合力に遣し候銀子を差戻し候段不届に候へ共其分に差置候。當卯三月十七日は親三郎兵衛十三年に相當り法事いたし候に付、文三義は不届に存候得共、親三郎兵衛儀は二心なく相勤候ものに在之候間、右返し候銀子何とぞ遣し度存候得共遣しかた無之候ゆへ、十七日我等佛前へ參詣いたし金貳十五兩三郎兵衛香でんとして差置候。五月節季は類焼にて沙汰不仕、右之金子世帶方へは不相遣、京都へ持參いたし、借座敷をかり淨るりを書、此淨るり京都にていたし度段願も在之よし粗承候故、是まで世上へ名の聞え候者之儀願之品により、當地にても致させ可申心底に御座候處、左には無之、此方之抱置候役者共をかたらひ芝居興行可致段先月廿三日に相聞へ候得共、永く相つとめ候者之義浮説にてあれかしと其分に相濟候處、當月四日高津屋勘太郎芝居木戸頭松葉屋清兵衛を文三郎方へ呼よせ、親子申候は、嵐吉三郎北村六右衛門芝居にて致候旨承候。然共其方芝居之儀は明芝居に在之に付あやつり芝居興行致度借りくれ候様申候よし、右清兵衛此方へ参り右之おもむきを申候。高津屋勘太郎芝居の義は、とくより我等買取罷在候得ば、右之段申候へと申付候。依之翌五日朝頭取役へ申付、太夫方三味線方操方のこらず廻り文三右之思ひ立有之候、もし荷

膽致され候哉、相正し參候様申付候に付右夫々申通し候處、不届之文三儀に有之候に付、豈人も相加里候者無之候。もちろん人形之儀は吉田名字多く有之候に付、二心なく相つとめ候はゞ吉田名字相けづり外名字に致すべく段申に付、數年相つとめ候者此節にいたりいとまつかはし候段、御最眞之御方にもいかゞ御うたがひも有之べく候に付、書付をもつて如此御座候 已上

竹田近江

かくのごとくしたゝめてはり置ぬ。おしむべし〜。太夫本も三代、役者も三代、殊に文三郎はしばらくにても親方の名目ありしに、此時に至り義絶とはなりぬ。しかしいづれよりか殊の外よろしき世話役ありて、金銀に事を關ず、おつ付太鼓を打よせ波のやぐら幕を揚るに間も有まじ。都の方に蟄居との風間浪華の好士この初日をのみ待ぬ。猶興行ののち追々有のまゝなる事を後篇のせんと爰にもらし侍ぬ。

寶曆九年卯七月吉日

音曲口傳書

音曲口傳書

叙

此書は傀儡の優曲にして世の知る所なり。父竹本播磨少掾、門人順四軒がために口授する所なり。此道による人此書をねんごろに見て父が趣意を委しくし玉はゞ地下に悦べし。今や是を同志の爲に彫刻せんと謀て序を乞ふによつて、筆を採て其證を述て序となす耳。

明和辛卯仲秋

中紅屋長右衛門

目 録

一 淨瑠璃の原始はじまり

附り師傳段々の由來

一同 工夫の事

附り音聲大小の事

一 信あれば得ある事

附り寶物の事

一 深切なるといふ事

附り子わかれの段を語る事

一 音曲口傳

附り淨瑠璃五十二番

一 冷泉ぶしの事

一 あみとぶしの事

一 コハリの事

一 男女わかちの事

一 情ふかくといふ事

一音の事

一調子の事

一譽られやうの事

一たしなみといふ事

以上十五箇條

竹本播磨少掾

口傳

門弟 順四軒 聞書

淨瑠璃の原始

琵琶法師の語るものを平家とて平家物語にふしを付たるものなり。淨瑠璃といふは淨瑠璃姫の事を織田信長公の侍女小野の阿通が作にて淨瑠璃物語十二段にふしを付て、琵琶法師に語らせられる。平家を語るは古めかしとて、淨瑠璃を語れ淨瑠璃が珍らしとぞ流行ける折節、琉球國の樂器三味線わたり來りしを彈ならして淨瑠璃に合せけるより、縦山姥たまたまが事を作りたる物がたりにても、ふしを付て三味線に合せさへすれば淨瑠璃を語るといひふらせしゆへ、此音曲の名とぞ成にける。其ころの三味線はやはり琵琶ひやの手のごとく、淨瑠璃も平家のふしにてすこしやわらげ謠に似よりたるものゆへ淨瑠璃＊に師匠なし謠を父と心得よと、我師 播翁、其師 竹本筑後掾、其師 井上播磨掾より申傳へられしように玉わり候。

斯て淨瑠璃も盲人法師の曲にて幾年か平家は琵琶、淨瑠璃は三味線とわかり過來りしが、寛文

年中井上市郎太夫といふ人謡にくわしく音聲うまれ得て自由なりければ、一流工夫して語り出す。今にヘリマ地といふこれなり 諸人珍らしともてはやせしより、操人形に合せ戯場御免を蒙り其上播磨掾

と受領を拜す。

同時代宇治加太夫といふ人これも謡にくわしく、井上氏の音曲世にはやりけるゆへ又一流語り出す。芦屋道満四段目へたれにとひたれにとはま 宇治加賀掾と受領を拜して戯場興行ある。これより兩流もつばら世に弘まりはやる。爰に井上播磨掾門弟に四天王寺村徳屋理兵衛といふ人、よく師傳を習ひ得て折ふしは戯場へすけにも出られ今播磨と諸人ほめける。此人の弟子同所同村の五郎兵衛音聲すぐれてよかりけるが、つらつらおもわれけるは我語る所の井上氏の流は地ふし長ふして音を表としふしを裏にこめて語り、又宇治氏の流は地ふし短ふして音を裏にかくしふしを細かに語り、兩流共いまだ節章句さだかならず。なうく 漸詞地、地有、地中などい許り也。いでや井上の長きをちがめ宇治の短きをのぼし、音の表裏をそなへ節の長短をまじへ序破急をさだめ一流を立て語るに諸人はなはだよろこぶ。こゝにおゐて名をあげ竹本義太夫と改め筑後掾と受領を拜す。今の世にいたるまで筑後ふし義太夫ふしともてはやす元祖なり。此筑後掾の聲二三町ほどづゝ聞へしといふ。もとより聲も大なるに音もまた妙なるゆへ諸萬人聽入しづまりて物管せ

ざりしゆへ芝居の外まで聞へし事妙音もあるべし。時に門弟餘多の中に中紅屋長四郎といふ人よく師傳をのみこみ語りけるゆへ、我も芝居を勤たしと望けれども音聲小まへなればとて筑後掾その事をゆるさざれば口惜き事かなとおもひくらしける折から、同門弟兄弟子若太夫豊竹上野掾と受領を拜し芝居を興行す。上野掾をのちに越前掾とあらたむる此時に中紅屋長四郎若竹政太夫と名乗此芝居へ出る。筑後掾政太夫がかたり口を聽て感心し我一流を残し傳へん事此人より外にあるまじと、後悔して急に呼かへし苗字を竹本に改め芝居を勤む。正徳四年甲午九月十日筑後掾六十四歳にて身まかりぬ。遺言にして義太夫となり名跡相續し、猶又音節章句を正し終に受領を拜して竹本播磨少掾といふ。其かたるところ音聲に深く人情をふくみけるゆへ聽人感心して淨瑠璃中興開基の名人なりと譽て、名を日の本の外までも輝しける事世の人の知るところなり。時に延享元年甲子七月二十五日やみて身まかりぬ。不聞院乾外孤雲居士と號す。年五十四歳。天王寺領の國恩寺に墓る。別に碑銘の文を書て四天王寺の西門石の鳥居の傍に建て祭る。

淨瑠璃工夫の事

播師つねく申されけるは、我長四郎のむかし小音なるゆえ芝居はつとまるまじと筑後翁申さ

れけるととき、つら／＼おもふは音聲の大小は人の生つき也。音曲の事は世話のたとへにも聲なふて人をよぶといふ事あり。生得たる調子をはづれ語れば脾胃を損なひ調子律にかなわす。應ぜざれば人感ぜず。音聲の師匠より遙におとりしは生れつきなれば是非もなし。音は銘々の音あり。音をもつて人情の喜怒哀樂眞實に語らば小音なりとも人の感心せぬ事はあるまじ。工夫して語りしと申されしが、成ほど人感心したると見へて播翁師の語り出されると手習子供が無言をまもるごとくしづまり聽入けるゆへ芝居の外まで聞へし也。こゝを以て音が第一じやと心得よ。情をふかく語れば聲はちいさくとも人が感心してよく聽わけ、嗚呼おしひ事や聲がやりたいと響らるゝやうがよいといふ序ばなしに、豊竹越前掾は音聲よき人にて響ぬものなし。しかしながら鉢の木の文彌おしにて響を請られしは義太夫の本意にはあらず。此事そしるにはあらず、唯執行の心得の爲にはなすと申されし。

信あれば徳ある事

我そも／＼此音曲を好みて元文三戊午の年五月十日 播翁師の門に入弟子となる。我年二十歳なり。夫より一日も稽古におこたらず、播翁師病中命終の今までも側にありける信にや、淨瑠

璃は下手か上手かしらねども此道においての寶物望すしてみな我が手にある事左のごとし。

目 録

一 播磨少掾自筆書狀 一通

此書面は寛保三癸亥の年の九月より雜^{ぞこほ}離^は場^ば重兵衛をすゝめて政太夫と名乗らせ芝居^すへ助けに出したる時の禮狀なり。

一 腹帶 壹筋

延享元甲子の年七月二十五日病中手づから我にたまはる。此帶を寛延三庚午の年 播磨七回忌追善の節政太夫へゆづる。其後天王寺西門播師の石塔の傍に此腹帶をおさめて曲^{きよくたい}帶^{たい}塚^{づか}を建る。

一 拍子扇子 壹柄

寶曆十庚辰年十七回忌追善を營みたと山城の伏見の里の我友催して、此扇子を伏見の中書島なる建長寺庭におさめて石碑を建てあふぎ塚と名づく。

一 調子笛 八橋定右衛門作

播師別して秘藏の品也。子息長右衛門より我にゆづられる。此笛は長四郎の昔得られたる

名笛也。

一唐人沈草亭の文筆

此文章は播師の淨瑠璃妙なる事を長崎にて聞および唐人の譽詞なり。其譯は門弟喜太夫長崎へ下向して此沈草亭に淨瑠璃を語りきかせければ、喜太夫が妙音、師匠は誠に名を聞およびたり、嘸々とおもふ、どうぞ成べき事ならば聞たいといふ心のちんぶん漢文なり。これ日の本の外までも名をかゞやかしけるは古今に獨りの竹本播磨少掾なりと、此事をしりたる人申出して感じ入也。

一凍石の朱印

二個

これも唐人五志明彫刻して播師におくる。これも喜太夫に言傳來る。印の文字は竹本播磨少掾と一面、いま一面は藤原喜教。かへすゝも唐まで名をしらるゝ程には大ていの名人ではあるまじと奉存候。

一掛物揃の戲場本

播師の直本といふは外になし。我ためには數品の中の第一ならずや。

右いづれも遺言にて我に譲らるゝ。

一 筑後掾自筆の起請文

これは筑後掾いまだ五郎兵衛といひし時に師匠天王寺村徳屋利兵衛へ差出されたる起請文なり。これ我手に入し事は寶曆十三癸未年九月十日筑後翁の五十年忌詳月命日なり。石塔は天王寺西門の傍に寶篋印塔を建て祭る。門徒宗にて戒名は釋の道喜といふ。此塔は先達而豊竹越前掾建立なり。右追善供養すみて後徳屋利兵衛の末葉何某の方へ参りければ、誠に見ぬ世のむかしを忘れ厚き志を感じ入との挨拶にて此起請文をあたへらるゝ。一流の元祖の筆佛法一宗の元祖の筆も同じ事なり。尊むべし、尊むべし。

一 竹田千前軒の墨跡一幅 一幅

これは竹本とり立の座本、人のしる竹田出雲掾なり。延享元甲子の年七月二十五日竹本播磨少掾遠行の時の追悼いよみの發句なり。

まへがき

播州司馬喜教音曲ならぶ人なく一藝ほろをとげて播磨・磨に任ぜられ竹本二代の祖たり。譽れある 受領の國をもて一句を賛す。
はりまのせう

竹田千前翁

はまちどり跡をのこすやふしはかせ

此掛物を寛保三庚午年（七回忌也）追善の席にて播師の後室子息より我にあたへ給ふ事有がたし。

此寶物以上九品の二品は塚に築て殊勝を残しける。此外に書て人にもしらせたき事數々あれども、何とやらん我自慢ばなしをするやうに見えければそれをやつし候。

播師^{はりまのせうじやう}深切の事

我年二十五歳の時ある夜狐の子別の段を語れと申されしゆへ、我うれしく語りければフウとばかりにて何ともかとも申されぬゆへ、我もふしぎにおもひ何ゆへまた此子わかれを御語らせなされ候やと問しかは、さればとよ貴さま去年惣領娘をもふけられしに、そのうへ當春京都東山高臺寺開帳へ愚妻まいりし時に貴様同道せられしが、伏見街道にて雨にあひしばらく休み居らるゝ折から、歌うたふて物もらふ子比丘尼雨にそぼぬれて行を見て、貴様申されしには去年娘をもふけしが若みなし子とならばあのごとく迷ふらんといひながら涙をこぼし申されしよし、愚妻がはなしにてきゝたるゆへ親子の情うつるべしとおもひ、子わかれの段を望みし所におもし

ろく聞へて氣の毒と申されしより、人情第一の事をはじめて口傳を受ける。是よりいよく出精して同門弟老分平野屋仁兵衛・きやう屋庄右衛門・一物藤兵衛などの衆中にいにしへの事どもひたすらにこひて稽古し、其しらべを播師の前に語りて彌々口傳を乞ふ。その熱心ふかきを感じ玉ひて其所彼所はと自身に其身ぶりをして教玉ふ。誠に有がたき事どもなり。其しなく數もかぎりもなき事也。とても口にていひ語る事なれば中々筆に盡る事にもあらねど、其中に筆に其理をあらわせば、其場の文句にもおもひ合すときは口傳を筆にいわせる事なきにしもあらず。因て其一をいふて萬にわたりしれるほどの心得を書しるし、此みちに志ふかき人のために傳ふる事左のごとし。

音曲口傳

掛物ぞろへ

繪かきをほめて十幅にわかれるやう。

屏風八景

その所くへ行こゝろもちになり。

宮島八景

居ながらはるかに見やるこゝろなり。コハリとさへいへばめつたにすこふ語るにあらず。

相生参宮

神くを拜し奉るこゝろ有がたく實體じつていにさらりと語るべし。

鐘入の段

鐘入のまへが鐘入にて、鐘入は鐘出と心得べし。冷泉れんぜいぶしの所はうれひの冷泉也。つねの冷泉にかたれば人形いそくとうれしそふにおどるべし。文句に氣を付べし。

身がわり音頭

全體うれしい也。うかくと語るとおもしろく成べし。人に譽られやうとおもふべからず。此音聲は播磨の國石の寶殿の近邊の在郷の米踏うたの音にて付たるふし也。三味線にのりかねる調子をもつてうれしいを持こゝろ也。

敵討宋太鼓おやつの

髪結床の段へ骨桶とり出し扇子にすへ九太夫どのもごゝに御座る。此調にうれしいがなければ骨桶が只の道具に成なり。能く心得べし。

檀浦兜軍記

あとや重忠へのこたへつとめの身の心をくんでの恭なきおつしやりやう。是はなはだ患なり
但し聲色ものまねにならぬやう、重忠あとやに見とれぬやう。重忠は智仁勇の三徳を兼そなへ
たる武士なり。人品に心を付てかたるべし。

三莊太夫五人娘

山岡が出来こゝろ、語やうがわるひと出来心が戀慕になる也。

蟬丸の道行

是はかたじけなくも天子の皇子御盲人を牛に乗まいらせ、長袖の清貫希世御供にて御いたはし
くしほれ玉ふ心持、その位ゆたかにやさしくうれいをもよふ事也。

曾我兄弟の道行

最後を本としたる心持にて勇氣をわすれぬこゝろなり。

大塔宮道行

熊野へ落ゆき玉ふ笈の中に鎧甲入て持拾ふ。敵御あとをおふなり。餘り位を子細らしく語べか
らず。さら／＼とかたるべし。道くさなし山の氣色をもちひて語る。

同無禮講

公家、武家、地下^{ちげ}のわかれあり。此段はよほど心を用ゆべし。惣體の心特別に申きかせませよ。

佛御前の道行

かたじけなくも天子龍の馬めされて、仲國一人召つれられ小督の局をしたひ給ふ御心に位を付て、夜の氣色月の瀟々たる心持、まことに優々としてもたれぬやうにかたるべし。蟬丸とはまたちがうなり。

同三段目

小松殿の御前へ、澁谷土佐二郎を引出す内大臣と、地下の武士に聲かけ玉ふ御詞など、考あるべし。

△順四軒申候。今かたるノリ地は此三段目より語り出されたり。是までは地ノリにて嚴からず。

國性爺三段目

樓門の出合いまだ父としらず扱は誠の父上かより患なり。それまではおぼつかなき心なり。國性爺かんきの出合、國性爺は血氣の勇、かんきは寛仁大度の勇なり。其わかれ大事に語るべし。

九仙山の語りやう、たとへば墨繪の草の山水を見るやうな心もちに語るべし。音聲したるく語れば仙人も唐人も公家衆のやうになる也。せんだん女の道行、女こゝろ也。童子は住吉明神なり。やすらかにしてつよからぬやう。千里がだけ半太夫おしさをながら唐土の地になりたるやう、三重まへ江戸おし始終の心得あり。

おはつ観音めぐり

大坂三十三番すらくと寺々へ参りふしおがみ、寺より寺の道のほど見わたし遠く近くの心得あり。しかしあまり念入ると一日にはまわりしまわれぬところへて語る。

△順四軒申候。これらが大口傳也。

同心中道行

一足づゝにきへて行、あまりあわれに語るべからず、興さめてわろし。

壽門松

淨閑は能町人の心持なり。治部右衛門は武士かたぎの人品也。將棋のだん氣を付べし。お菊はむすめ、あづまは傾城なり。與次兵衛はそだちよき人がら也。舛おとしの段異見の詞にあはれあり。

傾城酒吞童子

新町の茨木屋好齋おごりに長じ御とがめを蒙りし事をつくりたり。好齋が心持ゆう／＼樂／＼と奢る心つね人にして常の人にはあらず心得あり、傾城は傾城の心持あるべし。

本朝三國誌

あいのふすまの松に鶴、木の下兵吉郎いにしへ勤し館となつかしき心持にてかたるべし。

△順四軒申候。此所のふし地合心もちにて自然と今日のまへに見るごとくおもはるゝゆへ、此ふし世になりわたりけるがむかしがたりとなり、師 播翁の事おもひ出し涙をうかめ申候。

隅田川

梅若の位また武國がうちみ惣太が後悔、いかさま天狗にも成べきほどの勇氣の心もち有べし。

宵庚申里歸りの段

姉と妹のあいだの心持、父平右衛門がこゝろいき、半兵衛はもとが武士片氣^{かたぎ}。八百屋の母めつたにこわく語るべからず。世間に一圖なる老母は幾人もあり。わきまへて語るべし。

眞鳥二段目

百姓に成て居た助八が、にわかに大名の兼道が訶つきに變りし文句、氣の毒ながら其心もちすべし。

△順四軒申候。これらの事につき常々 播翁の申されし事あり。此助八兼道に成ての心もちどふも語り口心よからぬほどに、文句の書かた有まじやと作者に相談ありけれども文の勢がぬけるとて直しがたきよし、しからばとて語られし所心持にて諸人に耳立ぬゆへに文句さつとうつものなかりし。兎角心持といふ事が大切と申されし物がたりにて自慢いたされしにはあらず。播翁は自慢をいふやふな人品にあらず。只こゝろ持といふ事に付て申されし事也。

伊勢平氏三段目

位の事、これはおそれながら御歴々様方の御前と心得て語るべし。乳母八條とてもたどのうばにてはなしとおもふべし。

篠原合戦

木曾の願書うたひに近し。五段ともに心得あまたあり。數かぎりなし。

京土産上之卷

おまち御前の詞たゞ一口に患^{うれ}いある事。

三浦の大助

二ツ胴の段、しからは娘宿へ歸りは、もはや娘と死わかれのいとまごひなり。かならずふし立ぬ事なり。その氣持のうつりかわり感じすごし却てふしになりて汗をながす事なり。心得べし。

須磨の都

扇子屋の段 敦盛の位は下女の時なり。詞つきとても其心得なり。かねのだん、一しほふしは多けれどもふしを内にするやうに語りたし。

鬼一法眼

鬼若の段 うばを母と同じく思ひ、十三年の介抱になりし事姉にはじめて逢たる心いづれもおもひやるべし。鬼若とてあらくれなく語るにあらず。三段目随分上品なるもやう。法眼随分位あり。牛若鬼三太にて語りちゞむる事肝心のこゝろ得なり。

丹波興作

はたごやの段 興作ばくちうち揃へふしに乗べからず。まける度々に笑止になるやう第一也。

應神天皇

三段目 大仁此土にわたりし物語、浮沈長短こころ得ねば延過るもの也。はやうた おふゆ
姉妹の詞みぢかふしてあわれ第一なり。

蘆屋道満

子わかれの段 めつたになき語りにあらず。一雫づゝなみたをぬぐひては名残をいふ心なり。

赤松圓心

祐朝卿の心外三段目 わづか四行ほどの御教書の讀かたうや／＼敷語る事、また佐渡か島にて
祐朝卿わかれのうれひ、船いのりのだん、船頭のうけこたへ、始は渚だん／＼沖へ遠ざかるこ
ゝろ、吹もどされて舟子の誤わかれるやうの心得。

非人敵討

雛まつりの間たゞすら／＼とたをやかに語るべし。次郎右衛門が歸り助太郎の京もとり眞實の
あほう也。是に笑をもとめぬやうにあほうにかたるべし。左兵衛が言譯きくとひとしく兄弟顔
見合くちおしき心底、それより家内忌中のやうになるの心、二人の奴子やつこが心底、また娘の自害
その品の變りやう、奴子が女房共つとめ奉公の段、髪とりあげる間のふし事面白からぬやうの
心得、堤の段は多の氣色をおもに語る。私めは大切な望ある身分、こゝが要なり。御目立ます

るより人品のかわりやう全體かぶき仕立なれば、とかく淨瑠璃の本體へもどるやう心得あるべし。音曲淨瑠璃といふ事をわするべからず。又施主しらず人骨朽より躑ちかくふけにけりまでは、深夜の物あわれなる氣色第一なれば、執行者の念佛あらゝ敷みぶりにならぬやうに語るべし。奥の文句に情あればいふにおよばず。

同道行

伊兵衛左兵衛が心底にうれひあり。物もらふ間のなりふりと人なき所にては二人がたがひに患をもやうす、乃わかれ心を付べし。

△順四軒申候へふれやふれゝ我身世にふる。此調子ふしづけにてさとるべし。

御所櫻

伊勢の三郎、土佐坊の出合、又母の異見、侍従夫婦がたのみの内の歎き、おわさが心、しのぶがこゝろ根、辨慶がつようしてやさしきうれる、四段目夜討の所、昌俊がもふしひらきなど數々かぞへ盡かたし。

小栗判官

太郎があほう、非人敵討の助太郎があほうとはちがふ也。淺香よりは門番ねず兵衛にうれいあ

るやうに語るこゝろえ第一なり。

ひらかな盛衰記

先陣物語を別の物のやうにおもふべからず。淨瑠璃一段の内なり、すら／＼と語るべし。餘りおもしろくせんとせば詰にいたりやせてわろし。權四郎が詞に大分うれいあり。腹立るばかりにはあらず。逆鱸の段、舟の表に居る者と側に居る者にと物いふわかれあり。舟うたふし立ぬやう、舟歌の音調子第一也。辻法印にわらひをもふけんと語るべからず。實體にして心持文句に應ずべし。

△順四軒申候。此四段目むけんの鐘のどん、三味線の相の手がなくては梅が枝が心底かたりがたくて氣の毒なるものなり。かくいへばとて大和少掾をそしるにてもなく候。これにつけても師 播翁此三段目は身代古今の随一なるべし。語るにかたりよかつたと申されしなり。作の趣向がよさに心底こゝろ持がよかつたといふ事のよし。左すれば三味線にもかまわず、實の樋口の次郎にもおふでにも權四郎にも成て語られしものとおもふ。はや三むかし、おもへば／＼有難きはなしと覺候故こゝにしるしぬ。

將門冠合戦

二段目三段目いづれも正風體なり。^{*}四段目氣をつけて語るべし。數多ゆへ書つくされず。

△順四軒申候。此四段目の事は中々稽古にてもおよばぬ事なり。諸萬人耳をかたふけ感じり聽入て、有とも無とも評議もなき事、これは師 播翁の身に付し曲としるべし。

^{*}傾城請狀

心持うれひなりとおもふべし。なぜにといふに曾我兄弟を少將と虎とが何やらんと取あけしを引取て空ごとにいふ事なり。

新薄雪物語

兩親の心持、まがきが利口、姫の詞に字あまりあり。前 師のをしへあり。長くはつぎ短くはされとの事、むかし七夕祭に字あまりにふし相應せしを見るべしと也。正宗の段國九郎とのせりふ、是を逆さまなる事とおもふて語るべからず。やはり團九郎を親にして正宗を子にして語るべし。湯かげんの所になりて實體になすべし。手に覺ずと心に覺よとの事淨瑠璃とてもおなじ事、萬事にはたる文句その意味をとくと心得おもふべし。

雁金文七

兵法の段文句にあればいふに及ばねども、師匠の娘につとめさすが口をしいとのふくみある事。

翁打栗
てうちり

山の段はいろは縁起の二段目に似たるころなり。

△順四軒申候。此音節、地合は井上播磨翁のおもむきなるぞ能おぼへおけど、師 播磨少掾申きかされし事其聲いまに耳に残り有がたく、老の寢覺に幾度かおもひ出して語ります。

嚴島八景

これは百合若神もふで也。ころいさむと心得べし。

宮島八景

これは秀虎が主人の行衛を尋ね、主従の對面の願望なれば心に鬱氣あると心得べし。

懷胎十月

此文句は人間生滅の事をあらはし、神儒佛の三ツのをしへ能かんがへ語るべし。

△順四軒申候。神儒佛の事よく物知りたる人に聞て損のいかぬ事也。そのわけを合點さへゆけば六ヶ敷ことにてもなし。

京土産道行

音曲口傳書

わづか二く。だり程の中にヲクリ四ツあり。氣を付てかたるべし。

△順四軒申候。ふしは文句の膚にありといふおしへ有。これらの事也。かんがへてしるべし。

關羽の道行

まへにもいふごとく墨繪の唐山水草筆に書たるやうに語るべし。

冥加の松梅

これはおそれある文句也。かたじけなくも、菅相丞御誕生より御左遷それより御述懷、鳴雷の神、天子の守護とならせ玉ふ事おろそかに語るべからず。御罰やかふむりやせんとおそれおもひこみて謹で語るべし。粗略にかたれば冥加の松梅の詮なかるべし。

兒源氏

春駒めでたや／＼の語り口に氣をつけべし。

△順四軒申候。すべてがてゆんのゆかぬ文句あらば作者にとくと尋ねて語がよしと播翁つね／＼申されしが、いかにもおぼろげに覺へたる事にては、語りくち人ぎゝわるき物也。作者に手よりなくば物知り學文ある人にたづぬべし。かならず合點のいかぬ事を其

まゝに語るべからず。問は當座の恥とはぬは末代までの恥といふは如此の事なるべし。

平家女護島

俊寛の妻を召とり清盛のれんば、其使者はじめは越中の次郎兵衛、二度めは齋藤別當實盛、三度めは能登守教經なり。此位のそれくわかるやう能々心得べし。鬼界が島の段いづれも長袖の衆中なり。上使とても其人品おもひやりて語るべし。

冷泉節の事

これはむかし淨瑠璃姫物語十二段の文句のうちにへ扱もやさしのれいぜいや、といふ所へ付たる節なり。名ふしゆへ今の世まで傳りもちゆる也。このわけをしらぬ人冷泉節とて別に音曲のあるやうに覺へたる人もあれば序ながらしるし置也。

網戸節の事

これもやはり十二段の文句の中にへ柴のあみ戸を押ひらき、といふ所に付たるふし也。別にあみと節といふ音曲あるにはあらず。

コハリの事

此ふしめつたむしやうに物すごく語る事にもあらずと心得よ。

男女の事

おとこと女をあまりわけて語ると物眞似こわいろに成なり。音曲といふ事をわするべからず。

情ふかくといふ事

高位高官、武家の御よそほひ、地下人、百姓、町人、其中にもそれぞれの家業の風俗人品の上中下あり。學文したる人、文盲なる人、善人、惡人、いふも數限りはなし。其事其人となりて心得て心得ちがひのなきやうに語るべし。たとへば非人敵討の堤の段春藤次郎右衛門兄弟はと語るに、武士と心得て語れば非人小屋に金襴を立ねばならぬなり。實の非人にして語れば春藤次郎右衛門はなくなる也。此段の語りくちはたゞ文句にて其の通りの譯を人に知らせるはなし也。親のかたき討たいとおもふ人の事をいふはなしなれば、深切にいふてきかす心にて語るべ

し。是が情をふかくといふに似たものか、兎角筆には盡しかたし。扱又、御殿・館・屋舗・藁
葺、晝・夜・朝・晩・曉かた・深夜、人の應對、寛・急・喜・怒・哀・樂、氣色あるひは詞に
なると詞より地へうつるとの氣持心得肝要なり。

音おんの事

淨瑠璃を音曲といふからは音が第一也。聲曲こゑとも節曲ふしともいはず。音は一二三なり。天一人
地、人ありて音あり。それゆへ二の音が第一なり。

調子の事

淨瑠璃を語る座敷又は場所の廣狹と聽手の多きと少きとを考て調子を取べし。聲があればとて
狭き所にて戸障子をびり／＼ならしたとて何のやくに立ぬ事也。大きな聲ぢやとほめらるゝば
かりならば相撲取の丸山を見て大きな男じやとほめたも同前にて、聲の見世物にて音曲といふ
事がなくなるべし。能こゝろへ可被申候。

譽められやうの事

淨瑠璃を家業にする人は猶の事、なぐさみに語る人にもひとふし語るとも笑はれぬやうに語るべし。譽られるやうに語らうとすれば聲に慾がつきて淨瑠璃の文句わからず、彼情をはずれふし音位くだけで本意を背^{そむく}なり。何ほど稽古上達して、扱々上手じや名人じやと譽そやそうとも、聴手をあなどらず音を定め情をふかく語れば聽人感にたへ、たとへば小音惡聲の人にてても聽入あゝおしい事じや聲がやりたいといはゞ、是も則ちほめられたる詞なり。譽ると感心するとの違あり。とくとおもひくらべて見るべし。

嗜の事

女中方におもはれやうとおもひて語れば淨瑠璃の實體かの情をふかくといふ事がぬける也。たとへば九仙山を語るにへのぼるひばりや歸雁^{きえん}、此文句のきれいやさしき詞を此ふしにて聲のよい人しなたるゝ聲をなやして語つて見るべし。仙人もゴサンケイも姫君の道行のやうになる也。とくと思案して見るべし。

跋

淨瑠璃きらひな人此書を見て必笑ふ事なかれ。云には及ばねども淨瑠璃が無とて世界の歎にもならず、たかどなんでもなし。しかしかたられるなら語て見やれと云爾。しかいふ

明和八辛卯の仲秋

難波 順四軒謹白

淨

瑠

璃

譜

竹本
淨瑠璃譜序

享和とあらたまりぬるとし、蘆がちる難波にありて此書ふたまきを得たり。竹本豊竹ふたつの園にかたりものせし戯れ文の名を書つらねて、笠翁傳奇の種より偃師舞木の態にいたるまで、見あつめ聞あつめて諸事聞書往來としるせり。今その名の雅ならざるを惜みて、あらためて竹本豊竹淨瑠璃譜と題す。世に淨瑠璃年代記などいふものあれど、擇びて精からず、語りて詳ならざりけらし。

甲子仲春幾望*

杏花園主人* 牛門のやどりにしるす

諸事聞書往來

竹本芝居之部

名人の作者近松門左衛門、出生は近江國、高觀義近松寺御坊の尊にて出家をきらひ、京都にくらし居られしを、竹本筑後掾はじめ儀太夫と申し、攝州天王寺村の出生、井土播磨の淨瑠璃好み所々を修行し、貞享二年乙丑二月始て道頓堀西の芝居にて、座元竹本儀太夫と淨瑠璃操りを興行ある。

始めての淨瑠璃

世繼曾我

五段續

(二)
貞享三年乙丑二月朔日初日

(三)
是京宇治加賀掾古淨瑠璃也。夫より同二年丙寅二月四日初日にて

出世景清

五段續

是近松門左衛門竹本儀太夫の新淨瑠璃の作はじめ也。此節近松氏京都に住居なし、後元祿三年庚午の正月京都より下り大坂住宅となる。はじめより元祿拾年丁丑十月十三月初日

百日曾我

五段續

右淨瑠璃は京宇治加賀掾芝居にて、近松氏作りて、團扇曾我と申す外題なりしが、大入にて百日餘りも勤る故、あんぎを以て團扇を百日曾我と改る。義太夫操り興行より近松が新淨瑠璃凡三十番にて、又是よりの新淨瑠璃數々あり。しかし此砌操り芝居はわづか五六十日目にて狂言を替しとの事也。元祿十六年癸未の五月七月初日にて

前淨るり

日本王代記

切淨るり

曾根崎の心中

是近松門左衛門始めて世話淨瑠璃の作意、古今の大あたり也。當四月改元あつて寶永と相改る。竹本儀太夫は此先年元祿十四年辛巳の歳受領あつて、竹本筑後掾藤原の博教五十一歳勅許をかふむり、直淨瑠璃を出精なし、寶永元年甲申の秋其身座本をひき、是より竹田出雲掾竹本芝居の座本となり、人形衣裳道具迄りつばになりし也。此時近松氏新淨瑠璃語り出づかひといふ事をはじめて思ひ付けける。右新淨瑠璃

用明天皇職人鑑

五段續

大切鐘入の段

太夫	竹本筑後掾
ワキ	竹本浪花
三絃	竹澤權右衛門
おやま人形	辰松八良兵衛

是出語り出づかひのはじめ也。

夫より時代淨瑠璃世話淨瑠璃さまざま新物を作せられしに、^{*}丹波與作といふ淨るり、寶永四年

丁亥六月廿四日初日にて大入せしを、また／＼正徳二年壬辰のとし三月四日二度くり返し

前淨瑠璃

けいせい掛物揃

二段目迄

切淨瑠璃

丹波與作
關の小まん 待夜の小室節

上中下

此度若竹政太夫道頓堀芝居へはじめて出座、右丹波與作大序道中雙六出語りにて相勤め、是より竹本政太夫と改名す。然るに竹本筑後掾事正徳四年甲午八月中旬より病氣にて、終に九月十日行年六拾四歳にて死去せられ、法名は釋道喜、天王寺南門のほとりに石碑あり。此人道頓堀にて芝居興行、貞享二年乙丑のとしより當正徳迄年數三十ヶ年が間、淨瑠璃九十四番を操りにかけて語られたり。作者は大半近松門左衛門也。

筑後掾死後はやつぱり芝居繁昌にて、淨瑠璃太夫。

陸奥茂太夫・竹本政太夫・同頼母・内匠理太夫・竹本浪花・同彦太夫・田川源太夫・長島重太夫。

右太夫入替に相勤ける。同筑後掾死去後、大當り淨瑠璃

父は唐土
母は日本 國性爺合戰

五段續

初正徳五年乙未年十一月朔日より三年越十七ヶ月勤る。是昔より稀なる大入なり。(番附古板ニ十一月十五日ヨリト有之)

此はるか後年寶曆の比、道頓堀東芝居にて豊竹越前座、祇園祭禮信仰記の淨瑠璃、三年越に勤候得共年數はるかにおとる。

右國性爺役割を爰に出す。

座本 竹田出雲掾
作者 近松門左衛門

大序	竹本頼母
初段	竹本浪花
中	竹本文太夫
切	竹本文太夫

貳段目 口 竹本頼母

淨瑠璃譜

切 竹 本 浪 花

三段目 口 内匠理太夫

切 竹 本 政 太 夫

竹 本 文 太 夫

道行 ワキ 竹 本 浪 花

四段目 口 豊竹万太夫

切 竹 本 頼 母

久仙山景事 ワキ 内匠理太夫

五段目 竹 本 政 太 夫

おやま・人形辰松・八良兵衛、立役人形津山助十郎・同金七、是等名人なれども、此砌多くさし込み弓手とて、豊人してつかふが定りなり。此國姓爺の續き

種は日本
生は唐土 國性爺後日の合戦

五段續

享保二年丁酉二月十五月初日

此時舞臺大幕の上に小幕をはじめて引。三代前吉田文三郎若年にてはじめて出勤。此新淨瑠璃國性爺合戦とはちがひはなはだ不繁昌にて、切に曾根崎心中を附る。だん／＼淨瑠璃相勤來り

享保九年甲辰正月十五日初日にて

將軍太郎 出羽冠者 關八州繫馬

五段續

右淨瑠璃一枚かんばん、京大文字山^{*}のてい、四段目の道具奥をひらけば一面の山に大文字の道具建見事也。しかし大坂中大の字の焼るはあんぎ悪しと申せしが、はたして當三月廿三日南堀江橋通りより出火にて大坂残らず焼亡。是を大坂享保の大火事といふ。此年四月間あり。同十一月二十二日近松門左衛門病死す。おしきかな。是より竹田出雲掾、近松門左衛門に傳授請られし餘慶を以て淨瑠璃二三番作せられし内

大内裏大友眞鳥

五段續

享保十年乙巳九月十八日初日

是四段目兼道の身替り、古今の趣向とて大當り也。つゞいて享保十九年甲寅二月朔日初日

應神天皇八白幡

五段續

松田和吉事

文 耕 堂

作 者

三 好 松 洛

此時竹本政太夫、儀太夫と改名す。是より新淨瑠璃業平河内通ひ・蘆屋道滿大内鑑杯は人形遣ひはなはだ上手となり、與勘平・彌勘平(野干)の人形は、足・左りを外人につかはし、人形の腹働くやうに拵そむる也。是を操り三人懸りの始と云ふ。

享保廿一年丙辰二月朔日初日

赤松圓心縁陣幕

五 段 續

右四段目本間入道の人形、三代前吉田文三郎つかひ、はじめて眉の働く事を細工す。此年儀太夫事受領をなし竹本上總掾と勅許。

右祝儀として

天神記冥加の松

同元文二年丁巳正月廿八日初日

三絃

竹 本 上 總 掾
鶴 澤 友 治 郎

御所櫻堀川夜討

五段續

此時竹本上總掾、播磨少掾と改名す。同十月十日初日

太政入道兵庫岬

五段續

此淨瑠璃より合羽伊太夫事竹本美濃太夫と名乗り、道頓堀芝居へはじめて出勤。

同元文三年戊午正月廿五月初日

行平磯馴の松

五段續

此節名人と呼ばれし竹本出水太夫死す。同年八月十九日初日

小栗判官車街道

五段續

作者

松田和吉
竹田出雲

此時竹本美濃太夫事此太夫と改名す。同元文四年己未四月十一日初日

ひらがな盛衰記

五段續

(此時吉田文三郎、巴御前・船頭松右衛門・梅枝、三役也。梅が枝の人形に長さし金と云ふ事始る。後菅原四段目千代にも是を遣ふ)

此時芋屋平右衛門事竹本島太夫と改名して始て出座。右淨瑠璃役割爰に識す。

ひらがな盛衰記

五段續

大序 竹本播磨少掾

切 竹本此太夫

初段 中 竹本文太夫

八段目

口	竹本内匠太夫
中	竹本百合太夫
切	竹本播磨少掾

三段目

中	竹本此太夫
切	竹本播磨少掾

四段目

口	竹本百合太夫
中	竹本内匠太夫
切	竹本播磨少掾

道行

ツレ	竹本内匠太夫
	竹本文太夫

口	竹本島太夫
---	-------

五段目

竹本文太夫

右の通の役割にて是よりだん／＼出雲掾の作にて新淨瑠璃つゞき、延享元年甲子三月六日初日

兒源氏道中軍記

此淨瑠璃三段目を竹本播磨、床の内にて勤ながら中場にて死す。時に七月廿五日、行年五十四歳、おしいかな／＼。

播磨少掾實名紅屋長四郎、今も其筋、心齋橋清水町、補元丹煉藥店の南隣り、紅屋といふ家銘乗れり。

寛保三年癸亥三度目

大内裏大友眞鳥

五段續

右淨瑠璃をくり返し相勤る。

爰にざこば魚棚に十兵衛といふ商人あり。此もの素人にて淨瑠璃を好き聲柄杯も播磨少掾に似たるとの評判故、播磨是を養子となし竹本政太夫と改名させ、右大友眞鳥二段目を始めて操りにかけ勤めさせしに、わかい播磨少掾なりと大坂中こぞつて評判す。後西口政太夫と云ふは是なり。斯て播磨少掾死去の後、ほうがくを失ふと云へども、猶一騎當千の若手の太夫はある故、^{*}續て十一月十六日より二度目

ひらがな盛衰記

五段續

播磨少掾追善

八曲篋掛繪

節事

出語り太夫

竹本此太夫

竹本島太夫

竹本政太夫

竹本百合太夫

竹本紋太夫

竹本其太夫

三絃

鶴澤友次郎

同 平五郎

右相勤。此時錦太夫・杣太夫出座し、是も出語り相勤、はなはだ大入也。播磨少掾死去の後淨瑠璃のれつを定め、初段の切錦太夫、貳の切政太夫、三の切此太夫、四の切島太夫、其外紋太夫・百合太夫・杣太夫・其太夫、いづれも淨瑠璃の高下にて役場を割、三絃は鶴澤友次郎・同平五郎、人形は吉田文三郎・同才次・桐竹助三郎・同門三郎・山本伊平次、是らにて相勤たり

延享二年乙丑二月十三日初日

軍法富士見西行

五段續

此新淨瑠璃も繁昌にて、同七月十六日より

團七九郎兵衛
一寸徳兵衛
釣船三婦
夏祭浪花鑑

九冊物

是當芝居はじまりてより、世話もの九段續のはじめ也。比しも暑氣の氣をとり、四ツ目より八ツ目迄、始て人形衣裳帷子を着せる。是三代前吉田文三郎趣向にて、七冊目長町裏の段、本どろにて人形水をかくる事を思ひ付しは吉田文三郎也。此人あやつりにかけては人形を持出れば人の如く、右狂言にては役團七九郎兵衛・一寸女房おたつを使ひ、おたつ姿は今に歌舞妓にて、桔梗帷子、黒繻子の前帶、淺黄のわたばふしより外を着ればおたつのやうに見えぬもふしぎ、また團七九郎兵衛人形のわけ爰にしるす。

筑後はじまりてより、人形頭を打事名人にて笹尾八兵衛と云ふ者あり。今も操りにてくろう人ども、能きかしらを八兵衛といふが樂屋のふちやふ也。(符牒)此八兵衛一生の内國性命のかしら、安

(大人)

體神のかしら、日本振袖の始りそさのをの命の頭、其外新淨瑠璃に寄てあまたかしらを作りし故、其狂言の名を以てしるす。大塔宮齋藤頭、鼎軍談にて孔明かしら、用明天皇けんびいし頭其外人形頭の異名敷しれず。右夏祭團七の頭、國性爺といふ敵役のかしらを糸鬘となし、薄肉にぬらし、花色のぎん付の綿入、やげんの紋、三ツ目床の内より大鳥左賀右衛門の手をぬち出る所新らしく甚だ妙也。六ツ目より茶のごばんじまを着せ、徳兵衛頭はそさのをのかしらを白ぬり厚びんにて、紺のごばんじまを着せし故、今に團七の狂言、此通りの姿でなければ歌舞妓操りにても團七、徳兵衛と見へず。旅芝居津々浦々唐土迄も、外の衣裳はやり付になれど、此團七縞徳兵衛縞のうごかざるは三代前吉田文三郎名人といふべし。釣船の三ぶは安體神の頭を白髪となし、赤小豆色にぬり、照柿のかたびら、龍の爪にて玉をつかんで居る紋所、しうと儀平次は齋藤のかしら、きひらの帷子、今に於て替らざるはじやう木を板に押たる如く也。(定規)右團七の淨瑠璃役割左の通り。

夏祭浪花鑑

九冊物

作者 竹田出雲掾

夏祭團七頭、始篠尾八兵衛、

國性爺ノ和藤内ニ打シヨ

リ後調法シテ三代前

ノ文三郎團七ニツ

カハレシヨリ是

ヲ名トヨビ、

大團七。

小團七二

通リナリ。

近江源氏

和田兵衛、

妹背山鯉七ナ

ゾモツカウ頭是ナリ。



同釣船三婦頭、細工人篠尾

八兵衛。始國性爺安體

人ノ頭ナリ。ヒラガ

ナノ船頭權四郎杯

ニモツカヒ、白

クヌレバ布*

袋市右

衛門ニ

モ遣ハ

ル、ナ

リ。桐

竹勘十郎遣フ。



同三河屋儀兵衛次頭、

細工人篠尾八兵

衛。是大塔

宮齋藤太郎

左衛門

ヨリ薄

雪伊賀

守・菅

原ハジノ

兵衛・忠臣

藏九太夫杯ニ遣

フハ是ナリ。

三河屋儀平治、桐竹門

三郎遣フ。



同一寸徳兵衛、細工人篠尾

八兵衛。是日本振袖ノ

始リ、ソサノヲノ尊

ノ頭ナリ。鴈金

文七・千本櫻

ノ忠信・武部

源藏

・二*

ツ胴

梶原

杯ニモ

ツカフ。古

吉田才次遣フ。



壹冊目

竹本此太夫
竹本百合太夫
竹本杣太夫
竹本其太夫

五冊目

道行

跡

竹本紋太夫
竹本杣太夫
竹本百合太夫

六冊目

竹本島太夫

二冊目

竹本紋太夫

七冊目

合けか

竹本政太夫
竹本錦太夫

三冊目

竹本錦太夫

八冊目

竹本此太夫

四冊目

竹本政太夫

九冊目

跡

竹本島太夫
竹本杣太夫

操り段々流行して歌舞妓は無が如し。芝居表は數百本ののぼり進物等數をしらず。東豊竹、西竹本と相撲の如く東西に別れ、町中近國ひいきをなし、操りのはんじやういはんかたなし。延享三年丙寅八月二十一日初日

菅原傳授手習鑑

五段續

此淨瑠璃古今の大入。別て吉田文三郎役、菅丞相・白太夫・千代、三役なり。菅丞相の装束、黒に梅鉢若松の縫、今に歌舞妓にも替らず。梅王・松玉・櫻丸三子とも惣髪にて、黄色大郡内縞八掛紅ふなければ、大坂を始、國々にて三ツ子と見ず。是吉田文三郎が仕初なり。今歌舞妓芝居にて松王を勤る役者、三段目時平公の諸太夫じやと云ふ姿で出れども甚だ悪し。右菅原の役割爰に出す。

菅原傳授手習鑑

五段續

作者

竹田出雲
三好松樂

大序 竹本此太夫

初段 中 竹本百合太夫

切 竹本鐘太夫

道行 竹本紋太夫
竹本柚太夫

淨瑠璃譜

三五三

口 竹本紋太夫

口 竹本政太夫

二段目 中 竹本島太夫

四段目 奥 竹本錦太夫

切 竹本政太夫

切 竹本島太夫

三段目 口 竹本百合太夫

切 竹本此太夫

五段目

合ケカ

竹本紋太夫

竹本其太夫

竹本杣太夫

右淨るり五段目時平の人形桐竹助三郎、花王丸桐竹門三郎、女房八重山本伊平次相勤。道具を左右へ引明れば、天満宮の宮居正面に飜り、鳥居玉垣石燈籠も細工美を盡し、社の内には菅丞相の人形をかざり、竹本此太夫・竹本島太夫・竹本政太夫其外の太夫、神主の姿にては(拜)いをなす故、あまたの見物ありがたく思ひ賽錢山の如く上しとなり。此砌の人物はなはだ正直なり。吉田文三郎菅丞相の人形遣ふには、毎朝別火を食し水をあびて是を勤む。樂屋にて右人形は荒鷹をしき御酒をさうげ、神の如くに拜するかれいなり。大序勤むる此太夫も初日より七日は吉田文三郎とおなじく慎む故、おのづと早朝より舞臺嚴重なり。此砌はあやつり役者上下五十人

餘も一度にありし故、物事自由なり。

我天明の頃、竹本芝居かれゝなるを漸再建なし、姫小松子の日遊の淨瑠璃を立春姫小松と増補し、今の鹽町政太夫三段目にて勤しが、操り好きの我なれば、朝より見物に参りしに甚だ不入とは云ながら、大序の人形ぶしやふづゝと人形立の短かいのにさし、足は折わけ、掛臺と云ふ物にのせ、人形の首の働きはせんにて留め、舞臺に人形遣ひ壹人も不出。人形詞の時は十二三の前髪、是をかいしやくにんと云ふ、後よりゆさぶる故、もの言ふやうに、少しの見物思ふかは知らねども、やはりからくりの方がまし也。右大序を勤る太夫、二代目の駒太夫弟子生駒太夫、はじめ信太夫といふ、此者ひじゆつを盡し大序語りけるに、場には少々見物もあれど舞臺には壹人も人なし。みすの合より是を見て役場仕舞へば大いにいかり、樂屋にて大おん頭取にいふやう、いかに我々がやうな太夫じや迎心を盡し節を附勤居るに、大序の人形壹人も樂屋より不出、皆々竹のつゝにさし、詞の時は後よりかいしやく人きてゆさぶる廻る、あれでも事が濟か、ぐわつたりひしヨリハおとりなりと大いに怒りけれども、尤なれば詞をいたす者もなし。頭取は後、豊松彌三郎とて大のすいなり。生駒太夫をなだめて、なる程く皆々尤なれば明日よりはていねいにいたすべし。しかし後よりゆさぶるを立ものゝ人形遣ひが持て居ると思

ふたが能といへば、生駒太夫なげにとふ。彌三郎はて東のたてもの若竹ゆ三ぶるじやと、若竹伊三郎の事を思ひ出し大わらひにて濟しが、夫より二十年計り立しにいよく操りじだらくとなり不景氣なるも、右菅原の大序のまへと同事なれど立春の大序とは雲泥萬里の相違なり。おそるべし。是は扱置菅原傳授大入りにて、續延享四年丁卯八月廿三月初日

けいせい枕軍談

五段續

此時竹本文字太夫・同信濃太夫出勤する。(此時吉田文三郎、島野勘左衛門の人形出遣ひにて、門を越す操りを思ひ付、はなはだ宜し) 竹本紋太夫退座にて豊竹へ出る。此新淨瑠璃不入にて、同年十一月十六日より

義經千本櫻

五段續

作者

竹田出雲
三好松樂

此新淨瑠璃古今の大當りにて大入なり(此時二代の文三、十八歳にて三段目の惟盛彌助を遣ふ。

はなはだ宜しく、吉田冠藏は漸猪熊大之進の役なり。
右役割左之通り

義經千本櫻

五段續

道行

ツレ
竹本 杣太夫
竹本 信濃太夫

初段

大序 竹本 此太夫
中 竹本 信濃太夫
切 竹本 錦太夫

四段目

奥 竹本 百合太夫
口 同 錦太夫
中 同 政太夫
切 同 島太夫

貳段目

口 竹本 百合太夫
中 竹本 文字太夫
切 竹本 政太夫

三段目

口 竹本 島太夫
切 竹本 此太夫

五段目

ツレ
竹本 杣太夫
同 文字太夫

此時吉田文三郎役、渡海屋銀平・鮎屋彌左衛門・佐藤忠信、三役なり。源九郎狐の人形、廣袖にて、黒に源氏車の模様、だんだらの丸解、人形頭そさのをにて此時はじめて、耳の働く仕懸を思ひ付し也。源九郎故、源氏車の模様を付しにはあらず。此趣向最初より狐と見せざる事故玉の模様もつけられず、いろ／＼に工夫をなし右狐場をつとむる政太夫の紋所源氏車故、源氏のゆかりにて源氏車の模様付し故、今も歌舞妓杯には長上下にてすれども、どこぞのはづみては此姿にならねば源九郎狐めかず。是も三代前吉田文三郎仕伺にて、何國にても此姿でなければ源九郎狐は出来ぬ。年號改元あつて寛保元年戊酉八月十四日初日

假名手本忠臣藏

十一冊物

作者

竹田出雲

三好松洛

役割（此時竹本友太夫出座）

（是古人近松門左衛門作の碁盤太平記より出せし淨瑠璃なり）

初段

竹本此太夫

七冊目

惣かけ合

貳冊目

竹本百合太夫

八冊目

道行

竹本文太夫

三冊目

口

竹本信濃太夫

同

信濃太夫

奥

同 錦太夫

九冊目

竹本此太夫

四冊目

竹本政太夫

十冊目

口

竹本錦太夫

五冊目

竹本百合太夫

切

同 政太夫

六冊目

口

竹本友太夫

十一冊目

口

竹本文太夫

切

同 島太夫

切

同 政太夫

新淨瑠璃の折から古今の大入なれど、少し大もめありて當十月より此太夫・島太夫・百合太夫・友太夫退座なし、東豊竹越前の芝居へ相住し故、立物の太夫多く出座せし事なれば是非に不及、替り役にて政太夫・錦太夫、東より入替りし千賀太夫・長門太夫、紋太夫事上總太夫と改名、内匠太夫事此冬大隅掾と受領し、此人數にて矢張忠臣藏を同年十一月迄相勤、十月に聞有てやはり替り役にて繁昌せしはどだいの狂言が能故也。^(理)斷りなるかな。此忠臣藏歌舞妓にては大銀のどだいにて、三ヶの津立物の役者も由良之助^{*}が身上定也。近在國々迄も忠臣藏は幾度

しても見あかず、しやう根杯といふ事はじまり、後には淨瑠璃の文句を打消し、大序より大切迄幕引ず杯といろく／＼に仕れども、古いといひく見物も見るは忠臣藏なり。是より後忠臣藏の増補數々新淨瑠璃出れども、古元の假名手本にまさりしはなし。扱々奇妙なる淨瑠璃也。同十一月廿二日初日にて

蘆屋道満大内鑑、二番目くり返しにて相應に入りはあれど、忠臣藏にはいつかなかなはず、是も相休め、寛延二年己巳四月十八日初日

栗島譜嫁入雛形

五段續

作者 竹田出雲

三好松樂

大切出語り 竹本大隅掾

ワキ 同 千賀太夫

三絃 鶴澤友次郎

此淨瑠璃はなはだ不入にて同年六月にて相休み（此時はけ太事竹本組太夫と改名、初て出る。

是今道頓堀榎家先祖也）七月二十四日より初日

双蝶々曲輪日記

九冊物

作者

竹田出雲
三好松樂

此淨瑠璃趣向は能けれど、夏祭りと同事、團七に徳兵衛を前髪にせしやうな狂言とはなはだ不入なり。此趣向歌舞妓にては長吉長五郎とて大入をなし、今も歌舞妓の狂言となり操りには餘りいたさず。此時三味線鶴澤友次郎死す。同寛延二年十一月廿八日初日にて

源平布引瀧

五段續

序切錦太夫、二切上總太夫此時病死す、三段目政太夫、四段目大隅掾にて、實盛の人形吉田文三郎人の如くに見ゆる。吉田才次、瀬尾十郎・木曾よしかたの役勤られしに、二段目にてよしかたの人形に舞臺にてゑぼしすほうを着せる趣向、是は昔澤村宗十郎が油斗の伊勢新九郎の仕打を寫されたれど、歌舞妓にては其人豈人、操りにては大勢懸り、黒き手をいだす故はなはだ

見にくし。吉田才次も名人なれど、文三郎にははるかにおとれり。

同三年七月、國姓爺合戰四度目、二段目の虎本皮にて張り、眼杯も働きをなし、久仙山大隅掾、ワキ千賀太夫、三味せん野澤喜八也。同年十一月廿四日初日にて、文武世繼梅、五段續、はなはだ不入。此時二代目の紋太夫始めて出座。寛延四年未二月朔日初日

戀女房染分手綱

十一冊物

右淨瑠璃五ツ目、吉田文三郎道成寺の所作。ワキ吉田甚五郎、太鼓桐竹助三郎、笛吉田彦三郎、大鼓吉田才次、小鼓桐竹門三郎、是近年の大入也。(此時後の文三役與作にけい政を遣ふ、吉田(官)冠藏役鷺塚八平治也)

右戀女房に古吉田文三郎の役、定之進・重の井二役を遣ふ。詮議場は樂屋に休足して居られけるに、舞臺に人形多くならび、鷺坂左内八平治を庭へなげ落すところに、下より人形をとる者なき故、文三郎見兼、我此人形をとらんと、初日に思はず下へ落たる處、八平治の人形に袴の上をかつけ、くるく舞ふてうづくまる思ひ入をしられしに、見物一やうにわつと云ふてほめにける。文三郎ついてんがうせられし事さへ、今に歌舞妓も八平治をする敵役此思ひ入をせぬ

はなし。いかさま文三郎は名人く。右戀女房の淨瑠璃昔近松が作丹波與作の古淨瑠璃を増補なし、吉田文三事冠子あらかた作をせられしとの事、何かに付て名人也。同年十月十七日

役行者大峯櫻

五段續

此時大隅掾大和掾と改名す。夫より淨瑠璃二三番不入にて、年號改元寶曆といふ。此三年酉年東より竹本春太夫・同陸太夫來り、同年五月五日

愛護稚名歌勝鬨

初段・中段・後段

此淨瑠璃道行山の段、春太夫大當りにて是從名をあげる。舞臺一面水船にて、道具はなはだ宜し夫より古淨瑠璃二三番あれ共宜しからず。(此時吉田文三郎の役、にほてる姫。たそがれ御前。二條藏人、三役を遣ひ大あたりく)

寶曆四年甲戌十月十三日初日

小野道風青柳碯

五段續

(此淨瑠璃二の口、近松半二始て作者となり是を書く)此時傳法屋源七事竹本染太夫、同家太夫はじめて出座。三の中染太夫、四の口家太夫、斯初床なれど新物にて役場をとるは、淨瑠璃稽古が能故、今の太夫にない事^{*}。右三の中染太夫の三味線鶴澤長藏と云しは、近比相はてし^{*}市山助五郎是也。又古淨瑠璃參番餘の内、平惟茂凱陣紅葉・姫小松子日の遊・蛭小島武勇問答、操りの相撲あり。此淨瑠璃三番餘大入りにて跡は不入也。此砌少々もめあつて、大和掾吉田文三郎芝居を相休み。寶曆六年丙午二月朔日初日

崇徳院讚岐傳記

此時堺中濱會所理兵衛、竹本中太夫と改名出座す。寶曆九年己卯二月朔日

日高川入相花王

五段續

評判能大入せしに、同五月四日芝居類焼して直さま假り家を立、五月廿一日よりやはり日高川四段目の切迄。

大切 用明天皇鐘入之段

出語り 太夫 竹本政太夫

ワキ 同 染太夫

人形 吉田文吾

右文吾とは二代目の吉田文三郎也。是迎も親に續く名人なり。此時操り繁昌なるは親吉田文三郎。悴文吾其外の太夫をかたらひ、大西芝居にて操り興行せんとたくみありし迎、座本より是をはびく。段々挨拶人ありて覺なき事と申せし故、吉田文三郎暫く京都の芝居を勤、悴文吾祖父の名をつぎ吉田三郎兵衛と改名す。同年九月十六日初日

太平記菊水卷

五段續

此時竹本春太夫、尼ヶ崎より岬太夫始て出座。此淨瑠璃大入りにて兎角春太夫の評判だん／＼宜しく（住吉新家、丸屋文藏竹本住太夫と改名。此時始て中場より出）寶曆十年庚辰五月六日より五十日間播磨掾拾七回忌追善ひらがな盛衰記相勤る。同年七月廿一日初日、極彩色娘扇、帷子衣裳にて水狂言、續て大入也。是より新淨瑠璃古淨瑠璃入替／＼出せ共不入にて、曾根崎新地芝居へ行、堺へ引越、奈良へも行。此間（平野屋嘉助事）綱太夫・（堺屋三右衛門事）咲太夫

出勤（是安達原の淨瑠璃二の口が初床なり）

寶曆十一年辛巳十月廿一日より冬籠浪花の梅、人形顔見世、吉田三郎兵衛吉田文三郎と改め、江戸へ行暇乞、夜の内十日勤候處是も大入り。此砌芝居くは近比死去せられし竹田近江大掾芝居銀主にて、竹田・出羽・中の芝居・竹本と四軒の仕打也。此人段々ゑやふに長じ大坂中銀持貴人杯も付合、同年十二月年忘れとて我下家數にて貴人を寄せ、一夜に四季の體を庭において人々に見せ、はなはだおごりに長ぜし故、御公儀より御取方にて近江大掾鐵屋何某田中氏なんど入牢となる。此時竹本淨瑠璃は古戰場鐘懸松五段續、此節大坂町人へ、御上より五千兩の用金を家々へ申付られし故はなはだ物さはがしく、古戰場鐘懸松を五千兩金借待と、誰いふとなく申せしもをかし。夫より程なく相濟、皆々出牢す。またく古淨瑠璃をいだし、漸寶曆十二年午九月十月初日、奥州安達原五段續、同十三年未正月九日竹田芝居失火に付、竹本芝居にて淨瑠璃操り子供狂言一切十文にて打込追出し、はなはだ大入なり。同年四月十三日初日近江大掾趣向にて

初日
山城國畜生塚

五段續

後日 天竺德兵衛郷鏡

五段續

作者

近松半二

竹本三郎兵衛

竹田小出雲

三好松洛

右毎日入替一日替り、此時竹本生駒太夫始て出座。此淨瑠璃はなはだ不入りにて同八月三日初日

前淨瑠璃

諸葛孔明鼎軍談

貳段目迄

御前懸り淨瑠璃相撲

右は竹本豊竹の淨瑠璃を毎日々々三段宛組合、勝負を見る事相撲の趣向也。舞臺の上やぐらをいだし土俵を飭り、行司の人形出て操りの古實をいふ。是より道具左右へ開けば、東西の操り始る。たとへて云はゞ西は國性爺東は信仰記と、能き場を一段宛合毎日替りなり。此時竹本大和掾一世一代にて、三味線野澤喜八毎日替りを勤る。翌年申座中残らず江戸表へ引越し、留守中京都一座來り、寶曆十四年甲申五月廿八日初日

淨瑠璃譜

京羽二重娘形氣

九冊物

此時竹本岡太夫はじめて大坂へ来る。此淨瑠璃不入にて暫芝居休。(岡之屋舗中衆又兵衛、京都竹本芝居にて修行し名人となり、此時初下り也) 同年十一月皆々一座江戸表より歸り、十一月十七日より江戸花王愛敬會我、顔見世狂言、夜五日晝拾日相勤。同十二月廿五日三度目

假名手本忠臣藏

十一冊物

竹本岡太夫九段目を始めて勤る。

明和と改元ありて、二年乙酉二月九日初日、蘭奢待新田系圖。序切音太夫、二の口岡太夫、二の切染太夫、三の切政太夫、四の口綱太夫、二代吉田文三郎浮れ座頭を遣ふ。四の中岡太夫、三の口・四の切錦太夫也。同年六月十五日初日、御祭禮棚閣車操。是大坂宮々の祭を淨瑠璃の寄物になし、或は難波祭は御所櫻骨接場、稻荷祭は干本狐場、天神祭は菅原三段目といふ趣向也。當七月十日政太夫死す。夫より芝居段々不繁昌にて、新淨瑠璃古淨瑠璃も當りめなく、竹本仲太夫出勤すれども、芝居所々へ行故、同年十二月仲太夫江戸へ行。明和三年丙戌正月十四

日初日新に太夫を抱、東より島太夫・鐘太夫出座にて、住太夫も京より歸り出勤。本朝廿四孝五段續。序切住太夫、二の口綱太夫、二の切染太夫、三の口鐘太夫、三の中染太夫、三の切島太夫、四の口咲太夫、四の切鐘太夫にて、四段目見物場をはすに引割御殿をせり上げ古今の大道具、大入也。夫より古淨瑠璃新淨瑠璃には、小夜中山鐘由來。靱神崎屋作五郎竹本組太夫と改名始て出座、此淨瑠璃も不入り。同十月十六日初日

太平記忠臣講釋

九冊物

竹本三郎兵衛

杉田ばく

作者

近松半二

三好松洛

八民平七

是忠臣藏にまさりしと大評判大入り也。

同四年丁亥五月初日、四天王寺稚木像、五段續、はなはだ不入り、同年六月十五日三度目夏祭浪花鑑、是逆もはなはだ不入りにて、同八月四日初日、前、花軍壽永之春貳段目迄、後、關取千兩幟相勤候處、新淨瑠璃ながらはなはだ不入。是非なく京都竹本儀太夫座と入替り、同

年十月十四日京都一座、錦太夫・岡太夫・春太夫・千賀太夫にて

石川五右衛門一代噺

九冊物

是歌舞妓作者並木正三の作也。^{*}評判はなはだしく京一座にげ歸る程の事也。是より皆々京都より歸る。同年十二月十四日初日

泉州小田居茶家
攝州天下茶屋
三日太平記

九冊物

此時竹本中太夫政太夫と改名し、江戸より歸る。木々太夫・野太夫出座。佳太夫江戸へ行。終に竹本儀太夫より筑後掾となり、貞享二年より明和四年八十三歳目に竹本芝居退轉せし事、世の盛衰とは云ながら是非もなや〜。

當十月より座本山下八百藏といふ名前を上げ、是より歌舞妓芝居となりし事一兩年なれども、追々太夫がすくなくなり、繰り再建すれども中芝居となり、また歌舞妓となり、今では筑後芝居共大西芝居ともまぎらはしきは是非もなや〜。

蜀山人云、三日太平記名爲識矣 八十三年竹本戲場變爲山下乎

文政己卯春日

諸事聞書往來

豊竹芝居之部

當流名人と呼ばれし豊竹越前少掾、出生は堂島豊後の家數中衆にて、河内屋勘右衛門と云ふ。貞享の頃より井上播磨・宇治加賀・竹本筑後先師達の淨瑠璃を能悟り覺、豊竹若太夫と改名し、國々を修行し、京都・堺・南都・紀州にては自身芝居を興行せられ、其後元祿十五年壬午より道頓堀立慶町にて始て操り淨瑠璃を興行、初め二三番は竹本井上宇治杯の古物。爰に紀の海音といふ作者、和州柿本寺の所化僧にて、俗となり大坂に住居す。是人はじめて豊竹座にて新淨瑠璃の作意をなす。元祿十五年壬午三月十一日初日

けいせい懷子^{ふところこ}

五段續

作者 紀海音

同五月廿八日初日

前淨瑠璃

源氏烏帽子折

三段目迄

切

金屋金五郎浮名額

是より新淨瑠璃數々差出すといへ共、竹本芝居作意宜敷、淨瑠璃外題も今に残りし正本ありといふは皆近松門左衛門が作意也。豊竹は新物多しといへども外題になじみなく、本杯を見あたらず。漸大入せしは井筒屋源六戀の寒晒の世話淨瑠璃、元祿十六年癸未正月七月初日。是より奈良・紀州・堺、其外近國を多く廻り、享保三年迄凡十七八年が間漸く當り淨瑠璃は、新百人一首・増補佐々木大鏡・泉州枕物語・身替問答・増補日向景清・淨瑠璃古今序・男色加茂待・富仁親玉嵯峨錦・小夜中山夜泣石・油屋おそめ袂白絞、わけてめづらしきは

けいせい國性爺

五段續

作者 西澤一鳳*

此淨瑠璃は竹本芝居國性爺合戦を世話物に取組、狂言筋は同じ事にて近松氏が作をなじりたる思ひ付也。是も不入りにて、京四條へ一座引越す。是よりおもはしき新淨瑠璃もなく數々出し

内

鎌倉三代記

五段續

作者 紀海音

享保三年戊戌正月二日初日、此時に座元若太夫事受領あつて、豊竹上野少掾藤原重勝となる。此節喜代太夫・万太夫・文太夫出勤す。同年八月朔日初日、傾城吉原雀・義經新高館・神功皇后三韓襲・伏見常盤昔物語・大友王子玉座靴・心中二ツ腹帶・建仁寺供養、是等の新淨瑠璃相應に大入。外不入の新淨瑠璃あまたあれど爰に略す。

享保九年甲辰二月朔日初日

頼政追善の柴^(芝)

五段續

此年四月間あり。源太夫・鶴澤左内出勤す。當三月廿一日南堀江橋通より出火、大坂中残らず焼亡す。是を享保大坂の大火事と云。豊竹芝居も類焼に付、堺南の芝居へ行き、亦曾根崎新地へ行、此秋伊勢古市の芝居へ引越、九月下旬に大坂に歸り候内、今の東芝居屋敷地を求め芝居新に建、新造芝居にて、享保九年甲辰十月十六日初日

女蟬丸

五段續

此砌より芝居大入いたし、作者、紀海音・西澤一鳳(風)・安田蛙文・並木宗輔、若手の面々出て作意をなす故、今も残れる淨瑠璃の外題あり。昔米萬石通・南北軍問答・身替弓張月・大佛殿萬代礎、此新淨瑠璃相應に大入。享保十一年丙午四月八日初日

北條時頼記

五段續

右淨瑠璃は竹本にて近松門左衛門作、最明寺殿百人上臈増補にて、五段目雪の段は其儘なり。右役割爰に出す。

大序 豊竹 上野少掾

初段 中 同 新太夫

切 同 源太夫

二段目 口 豊竹 喜代太夫

切 同 出水太夫

道行 豊竹 上野少掾

ワキ 同 源太夫

三段目 奥 豊竹 喜代太夫

切 同 上野少掾

口 豊竹 鐘太夫

雪の段 出語り出遣ひ

しつと段 同 出水太夫

太夫 豊竹 上野少掾

四段目 中ツレ 同 新太夫

五段目 ワキ 同 出水太夫

切 同 出水太夫

三味絃 野澤 喜八

人形出づかひ藤井小八郎・同小三郎・豊松藤五郎・中村彦三郎也。此淨瑠璃古今の大入りにて
同十二年丁未二月十五月初日

清和源氏十五段

五段續

五段目出語り

太夫 豊竹 上野少掾

ワキ 同 出水太夫

ツレ 同 品太夫

三味線 野澤 喜八

出遣ひ人形藤井小八郎・同小三郎・近本九八郎・中村彦三郎也。同年八月十五月初日

攝津國長柄人柱

五段續

大切あしかりの段 出語り出遣ひ

太夫 豊竹 上野 少掾

ワキ 同 出水 太夫

三味線 野澤 喜八

出遣ひ人形藤井小三郎。此新淨瑠璃大入りにて。(此時入鹿大臣の人形口を明く細工を仕出す。八王丸の人形つかみ手逆五本の指動くを細工す。岩治の人形眼をふさぐ事を細工す。是等豊竹の工夫也) 同十三年戊申二月朔日初日

尊氏將軍二代鑑

南都十三鐘

是不入にて奈良・兵庫へ行。享保十四年己酉正月二日初日、後三年奥州軍記、是不入りにて同九月間ありて十月初日

藤原秀郷田原系圖

切 出語り

太夫 豐竹上野少掾

ワキ 同 出水太夫

三絃 竹澤藤四郎

享保十五年庚戌正月廿日初日、蒲冠者藤戸合戰、切に出語り前に同斷。本朝檀特山。同年八月朔日初日、楠木正成軍法實錄。此時近元九八、和田七の人形に眼の動く事を始る。夫より

和泉國浮名溜池 酒吞童子枕言葉

同年十月十六日初日、

赤澤山伊藤傳記

右新淨瑠璃に天満橋床三右衛門と云者、始て芝居^{*}の表へ幟進上す。當九月廿日太夫元上野少掾事、豐竹越前少掾藤原重泰と改名す。祝儀出語り蓬萊山相勤申す。是より

八百屋お七戀緋花王 お初天神記

右世話物二三番大入りにて、享保十九年甲寅正月二日初日、二度目

北條時頼記

此時迄床は正面にありしを横へ直す。^{*}今に其如くなり。同年八月十三日初日

那須與市西海硯

五段續

此新淨瑠璃大入りにて、享保二十年乙卯二月七日初日と書出す處右外題御上より御差留あり。^{*}

南蠻鐵後藤目貫

直様かんばんを引。同二月十二日初日二度目

清和源氏十五段

切 出語り

太夫	越前少掾
ワキ	河内太夫
ツレ	湊太夫
三味線	竹澤藤四郎

是より八月十五月初日

荻萱桑門筑紫轢

五段續

此時播磨屋彌三郎豐竹駒太夫と改名、はじめて出座。同廿一年丙辰三月四月初日

和田合戦女舞鶴

五段續

此淨瑠璃大入にて（此時はながくの人形藤井小八郎遣ふ。常のをやま人形よりは二さうばい大く別に作る）、此年々號改元あつて元文元年となる。同二年巳七月廿一日初日

釜淵雙級巴

上中下

(右釜入五右衛門の人形段々色赤くなるやう數四番に拵る。人形役近本九八郎是を遣ふ)

此時綿武事^{*}和佐太夫始て出座す。後錦太夫となる。此新淨瑠璃大入にて、元文三年戊午四月八日初日

丹生山田青海劍

右淨瑠璃五月六日迄相勤候處、芝居大破に付是を建直し、普請成就まで曾根崎芝居へ一座引こし、和田合戰に戀の緋花王を勤、芝居普請成就に付、同七月十五日より新造芝居にて、亦丹生山田を相勤る。切、新宅祝儀淨瑠璃古今序、太夫越前少椽、ワキ湊太夫・駒太夫、三絃竹澤藤四郎。同十月八日初日

茜染野中隱井戸 狹夜衣鴛鴦劍羽

此時若竹東工郎^{*}はじめて出座。此者出生は田島町はし子枕といふ、入齒醫藥を商ふ松井藤右衛

門といふ者の悴にて、幼時より操り人形を好み、三代前吉田文三郎をしんかうにて風俗を見ならひ、終に後、人形大達者となる。是より新淨瑠璃には

鷗山姫捨松 本田義光日本鑑

武烈天皇艤 播州皿屋敷

河内太夫事駿河太夫と改名。同年九月十月初日

田村麿鈴鹿合戦

此時内匠太夫出勤。當冬より太夫元越前少掾・駒太夫暫く江戸豊竹肥前芝居へ行。同九月寛保
(三)
と改元。同二年壬戌三月四月初日

百合稚高麗軍記

切に宮島八景出語り

同年八月十一日初日

太夫

豊竹内匠太夫

ツレ

同文字太夫

三絃

野澤喜八郎

道成寺現在鱗

五段續

此時越前少掾・駒太夫江戸より歸る。此淨瑠璃不入にて此間南都へ引越す。同三年癸亥八月朔
日初日

久米仙人吉野櫻

五段續

是はなはだ大入にて、年號改元あつて延享元年甲子四月二日迄相勤る。右久米仙人^{*}五段目は、
市川海老藏鳴神上人にて、尾上菊五郎雲のたへま相勤、はなはだ大入なせし故、右狂言操りに
直し、久米の王子花増と増補なし、太夫元越前少掾・内匠太夫・駒太夫・和佐太夫、懸合にて
相勤候故古今の大あたり也。續て四月十九日初日、潤色江戸紫、是は戀の緋櫻の増補にて並木

宗輔が作、大入く。同九月十月初日、柿本紀僧正旭車、五段續、此時春太夫出座。是より新淨瑠璃四五番あれどもはなはだ不入。延享二年乙丑十一月三月初日

三度目

北條時頼記

五段續

早朝式三番出遣ひ、豊松藤五郎・同彌三郎・若竹東工郎也。此時座本豊竹越前少掾行年六十五歳にて一世一代相勤る。此時内匠太夫事改名上野掾、雪の段のワキを語り、三味線野澤喜八郎人形出遣ひ藤井小八郎・同小三郎・若竹東工郎・中村勘四郎出遣ひ也。同三年十一月三日京都にて越前少掾一世一代相勤候淨瑠璃は、久米仙人吉野櫻也。同年十二月九日新淨瑠璃、花筏巖流島、同四年二月十三月初日、裾重紅梅服、此時上總太夫出勤。同年三月四月初日、萬戸將軍唐土日記、此時豊竹鐘太夫はじめて出座。

同年七月十五月初日

惡源太平治合戰

五段續

(此時作者紀海音死す。石碑法壽寺とて上町紅葉のある法花寺にあり)

此淨瑠璃四の切上總太夫相勤、操り人形にておやまおどり。雀踊あり。是若竹東工郎工風にて、立役人形に屏風手といふ事をはじめ。右屏風手とは五本のゆびを並べており、皮にてつなぎ、てふつがひの如く、是を屏風手といふ。竹本豊竹ともにおやま人形には多くつかへども、立役には此度始て也。甚だ不かつかふなものにて、是を指先似たるとて數の子手といふ。其外人形どふぐし、西は引ぜん東は小猿逆違ひ、かた板・突上げ・丸どふ・片腹、みなく東西の流あり。つかみ手逆ゆび五本働くのあり。是も東はうで首働く、西はうでぐび働かず。其外人形遣ひの黒がふ、西は前のゑりやはり打合せ也。東は半合羽の如く左右のかたにて懸ける。頭巾も西にては耳ををれど、東は耳たてたる儘也。亦手袋逆ゆびにはめるめりやすの如きもの、舞臺下駄、みなく東西にて替る也。人形かしらは竹本座笹尾八兵衛よりいろく名あるを細工し昔より傳はれども、豊竹は元祿年中よりはじまりし故、人形頭にも名細工あれども何の淨瑠璃の何頭といふ事を聞ず。若竹東工郎出精より、西の頭を寫し少々違ひ打されし故、此砌よりは人形の頭の名、當り淨瑠璃にしたがひしやうくは申せし也。是は扱置延享五年戊辰正月二日初日、此時榊太夫出座。

昔歌舞妓の男達
今操りの女だて

客競出入の湊

九冊物

作者 並木丈助

是大入りにて歌舞妓黒船の狂言を寫せし新淨瑠璃也。同年七月十五月初日

東鑑御狩卷

五段續

此年太夫元、泉州堺にて一世一代相勤る。北條時頼記雪の段。當年々號改元有て、寛延元年戊辰十一月十四日初日

攝州渡邊橋供養

五段續

此時竹本芝居より此太夫・島太夫・百合太夫・友太夫出勤。駒太夫江戸へ行、上總太夫・道太夫・元太夫・春太夫、竹本へ出勤。右新淨瑠璃役割。

攝州渡邊橋供養

五段續

大序 豊竹 島太夫

初段

中 同 鐘太夫

切 同 伊勢太夫

道行
ツレ 豊竹 鐘太夫

口

豊竹 友太夫

四段目

奥 同 百合太夫

貳段目

中 同 榊太夫

口 同 伊勢太夫

切 同 百合太夫

切 同 島太夫

三段目

口 豊竹 阿曾太夫

五段目

豊竹 狩太夫

切 同 此太夫

同二年三月迄大入。爰に北の新地白人かしくといふぜんせいの女郎ありしが、去家數方の客にて引、八重と名を替へ、天満老松町邊に妾宅となる。此八重酒を吞ば前後を忘れ、しやうたいなきが病也。兄に絞りを結て渡世とする吉兵衛といふ者あり。此者正直ものにて折々妹にだじやくなる酒の事を異見せしに、或時言ひ上り兄妹喧嘩にて刃物ざんまいをなし、兄吉兵衛に手を負す。直さま入牢あつて言譯立がたく、寛延二年己巳三月大坂中引廻し、千日寺にて獄門と

なる。此時^{*}南新屋敷福島屋清兵衛といふ方の女郎園といふ者、大寶寺町大工の丁稚上り六といふ者と西横堀にて心中をなす。此間^{*}中山無縁經にて神崎に於て御駕籠の十右衛門といふ者、多くの馬士と口論なし手を負せる。是三月十八日十九日の事也。同廿日に外題看板を出す。

前淨瑠璃

攝州渡邊橋供養

大序より二段目迄

切淨瑠璃

八重霞浪花濱萩

七冊物

右新淨瑠璃かしくの趣向は、三月十八日十九日の事なりしを、二十日にかんばいだし、廿六日初日、古今稀なる早き事と大坂中こぞつての評判也。是作者並木惣助および惣太夫操り中、夜を日についでの出精、前代未聞の事共也と、大坂は言ふに及ばず、近國よりも大入をなせしとぞ。右かしくの役割斯の通り。

八重霞浪花濱萩

七冊物

かし座敷の段

口 豊竹 榊太夫
 切 同 百合太夫

千日寺の段

五冊目 同 友太夫

若林屋の段

貳冊目 豊竹 此太夫

新やしきの段

六冊目 豊竹 島太夫

詮議の段

口 豊竹 阿曾太夫
 切 同 伊勢太夫

神崎の段

七冊目 カケ合
 同 豊竹 此太夫
 同 百合太夫
 同 友太夫

四冊目

道行 豊竹 鐘太夫
 同 狩太夫

同 阿曾太夫
 同 狩太夫

是近年の犬入りにて七月十五日より、切に操り大踊り、雀黒羽おやま踊り・伊勢おんど新作に

て、道頓堀島の内、茶屋懸あんどろそこへはなはだ宜しく。同十一月四日初日

十帖
源氏 ものぐさ太郎

五段續

此時鞍屋佐吉八重太夫と改名、はじめて出座。駒太夫江戸より歸る。伊勢太夫江戸へ行。當九月此太夫事、勅許にて豊竹筑前少掾藤原爲政と受領有。大切祝儀出語り座中不殘。此時並木宗助死す。寛延三年庚午六月朔日初日、夏楓連理の枕、九冊物。同年八月七日二度目、和田合戦女舞鶴、此時豊竹嶋太夫若太夫と改名。同四年未正月十五日初日、玉藻前曦袂、此淨瑠璃不入りにて、浪花文章夕霧塚。頼政扇の芝、二度目。切に操り大踊り。同年十月十日初日、日蓮聖人御法海、五段續。此時百合太夫京へ行。是迄淨瑠璃二三番不入にて。年號改元あり、寶曆元年辛未十二月十二日初日

一谷嫩軍記

五段續

此時豊竹八重太夫時太夫と改名、後の此太夫是也。此新淨瑠璃古人並木宗輔三段目迄作置しを、四段目をつより出す。

一谷嫩軍記 五段續

初段

大序 豐竹 筑前少掾
中 同 信濃太夫
切 同 鐘太夫

三段目

口 豐竹 阿曾太夫
奥 同 友太夫
中 同 鐘太夫
切 同 筑前少掾

貳段目

口 同 時太夫
奥 同 嶋太夫
中 同 友太夫
切 同 駒太夫

四段目

道行 同 鐘太夫
口 同 信濃太夫
中 同 駒太夫
切 同 阿曾太夫
若太夫

五段目

豐竹 時太夫

此淨瑠璃古今の大入にて、翌年申の盆より大切に操り踊りを附る。寶曆二年十二月七月初日、倭假名在原系圖、五段續。此時若竹東工郎蘭平の人影を遣ひ、頭思ひ付打せ候得共はなはだ悪しく、右淨瑠璃大入りにて、同三年癸酉七月廿八日初日、男結勘助島、是不入にて、同十月朔

日より二度目、苅萱桑門筑紫轡。此時豐竹十七太夫始て出座。同四年戊二月廿一日初日、相馬太郎季文語、序切鐘太夫、二の切駒太夫、三の切筑前少掾、四の切若太夫。これ大入にて、同七月廿九日初日

前淨瑠璃

義經腰越狀

三段目迄

切淨瑠璃

釜淵雙級巴

二度目

右腰越狀の新淨瑠璃は、享保の比御上より差留られし南蠻鐵後藤目貫を、賴朝時代に増補し、是を出す。同十二月十五日初日、天智天皇苅穗庵。この時伊勢太夫江戸より歸り、新太夫と改名。阿曾太夫江戸へ行。寶曆五年乙亥四月廿一日初日、三國小女郎曙櫻。同七月七月初日、双扇長柄松。此淨瑠璃不入にて、一座塚へ引越す。同年十一月朔日初日、二度目、後三年奥州軍記、是たいがいの大入にて、寶曆六年丙子三月十八日初日

義仲勳功記

五段續

序切鐘太夫、二の切駒太夫、三の切筑前少掾、四の切若太夫、大切は亂菊枕慈童、藤井小八郎出づかい、座中不殘出語り。同年閏十一月朔日初日、甲斐源氏櫻軍配、寫儘足利染、前九年奥州合戰。右新淨瑠璃大かたの入りにて、同年八月朔日初日、清和源氏十五段、二度目、此時豐竹筑前少掾一世一代出語りを勤る。

山伏攝待の段

忠臣幡そろへ

太夫 豐竹 筑前少掾

ワキ 同 鐘 太夫

ツレ 同 時 太夫

三味線 鶴 澤 寛 治

人形出遣ひ藤井小八郎・同小三郎・豐松彌三郎・中村勘四郎也。此時時太夫事、豐竹此太夫と改名。此砌人形遣ひ立者は若竹東工郎・豐松東五郎・同彌三郎・藤井小八郎・同小三郎・若竹伊三郎・同新十郎・中村勘四郎・是等出精なし、みなく名人の部也。同年十二月五月初日にて、中村阿慶といふ人新淨瑠璃の作意。

祇園祭禮信仰記

五段續

大序 豐竹若太夫

三段目 口 同 伊豆太夫

中 同 伊豆太夫

奧 同 駒太夫

初段

口 同 常太夫

中 同 鐘太夫

切 同 此太夫

切 同 若太夫

貳段目

口 豐竹新太夫

口 同 此太夫

中 同 十七太夫

四段目 中 同 十七太夫

切 同 鐘太夫

切 同 駒太夫

道行

豐竹新太夫
同 常太夫

五段目

豐竹麓太夫

大内裏大友眞鳥五郎亦

ノ頭、細工人篠尾

八兵衛。是行平。

此兵衛。御所櫻藤

彌太。夏

祭傳八

ナゾニ

ツカヒ

ハナハダ

宜シ。戀女

房八平次モ是ナリ。



用明天皇ケンビイ

シ勝船頭、細工人

篠尾八兵衛。是薄

雪妻平・菅原梅王。

千本銀平

・布引

實盛。

近江源

氏佐々

木。妹背山芝

六、スベテ世話

時代ツカヒカタ澤山ナ

ル頭ナリ。



鼎軍談諸葛孔明ノ頭ナリ。細

工人龜屋平助。此頭、薄雪

葛木民部。近江源氏御

酒ノ守。蘭奢待義貞ナ

ゾニ遣フ。此外親

父頭ニハ、

勘作、寅王。

白太夫。

政宗。

實盛。

定之進。

鬼一、敵役

ニハ稀代樋口。

李海坊。佐兵衛。月光。

與勘平・大場カクハシ。五郎

頭、主役ニテハ若男トテイロ

イロ有。由良之助、六部、其外

サマ〜有トモ、紙不足故斯ニ略。



祇園祭禮信仰記、

此下東吉ノ頭。若

竹東工郎思附ニテ

是ヲ打ス。細工人

龜屋利助。

是都高

臺寺太、

閣様ノ

木像ヲ

寫セシト

ナリ。目ハ玉

眼ヲ入。

眼ヲ入。



同松永大膳ノ頭。細工

人龜屋利助。是二

代前若竹伊三郎コ

ノミニテ打セツカ

フ。今

ハ松永

ヲ白ク

ヌリテ

遣ヒテ

四段目

ハ宜シケレ

下序ノ切ハ是ニテナケ

レバ敵役ノヤウニナシ。

伊三郎モヘタデハナカツタ。



倭假名在原系圖、奴蘭平ノ

頭、細工人龜屋利助。

是若竹東工郎ノ思

付ニテ打セ、竹

本座團七頭ヲ少

シ違テ

打シケ

レドモ

ハナハ

ダ悪シ。

マダ〜

豊竹座ニ名有頭アレド、

無取ベ故爰ニ不出。



右淨瑠璃丁丑十二月五日より、寅卯三年越に勤る。此時若竹東工郎、織田信長。此下藤吉の役を遣ふ。右藤吉の人形頭、京高臺寺太閤様の木像を細工人に寫させ、此頭にてつかふ。若竹伊三郎、松永大膳の役、鬼のやうなる頭を打せつかへども、竹本人形の頭とは違ひさしでたる事もなし。此淨瑠璃の時鍋屋宗兵衛豐竹麓太夫と改名にて、漸五段目を相勤候得共段々出精なし、今は麓太夫にまさりしはなしといふも、能い太夫がなくなりわるい太夫がふへる故、麓太夫の目に立は、修行のかうにて尤也。寶曆九年己卯三月三日初日

兒源氏鶯塚

五段續

四ツ目駒太夫場、金時が遣ふ熊、びろうど張にて見事なれども、はなはだ不入り。此節久米太夫・君太夫はじめて出座。豐竹十七太夫・人形ふじ井小八郎江戸肥前芝居へ行。同年五月十四日初日、浪花丸金鶏。世話淨瑠璃にて、帷子衣裳、表かんばん絹張のついたてにて花やかなれども、中入にて、當秋筑前少掾堺にて一世一代、一座引越。同十二月七月初日、先陣浮洲巖。此時豐竹十七太夫江戸より歸る。櫻姫賤姫櫻、寶曆十年庚辰三月十一日初日也。同年八月十五日、攝津國長柄人柱、二度目。同年十二月十一日、祇園女御九重錦、五段續。此新淨瑠璃横會

根平太郎の熊野物語を取組し新淨瑠璃也。三段目柳の大木を車に乗せ、緑丸の小人形花道^{*}をひくからくりにてはなはだ宜敷、是若太夫場也。殊の外大入せしに、寶曆十一年辛巳二月十四日芝居類焼にて曾根崎新地芝居にて、一谷三段目まで、切八重霞にて豊竹筑前掾暫く助に出る。殊の外大入也。此間道頓堀豊竹芝居の表普請、進物の書付數をしれず、大坂中を板行にて賣ある程の事也。同所にて四月十九日より、祇園女御九重錦（作者中村阿契・豊竹笛舁）。同年五月十八日初日、曾根崎模様、此淨瑠璃はお初徳兵衛をどだいにて、此頃京都桂川にて、帶屋長右衛門三拾八歳、信濃屋おはん十四歳、そこはぬ心中ありしを右淨瑠璃に取組新淨瑠璃となす。同年九月新芝居普請成就し、道頓堀へ歸り、九月十日より初日、人丸萬歳臺、五段續。朝式三番叟、千歳・豊松元五郎、翁・豊松藤五郎、三番叟・若竹東工郎、太夫出語り、同次高砂の能人形出遣ひ、是趣向にて狂言の大序となる。

寶曆十二年壬午二月廿四日初日、三好長慶礎軍記、五段續。同年閏四月十八日初日、岸姫松轡鑑五段續、此時和泉屋平兵衛事八重太夫と改名し始めて出座。又枝芝居^{*}迎、此太夫・加賀太夫・佐渡太夫・豊松豊五郎・同彌三郎・藤井小三郎、京石垣芝居にて、洛陽ひさご念佛といふ新淨瑠璃を相勤る。鐘太夫跡よりのぼる。

寶曆十三年癸未正月初四日、藤厚秀郷倭系圖。當正月九日出羽の芝居より火出、芝居残らず類焼。普請の間一座を二ツにわかち、京・堺へ行、同年四月芝居普請成就し、式三番淨瑠璃をまぜ出遣ひ、三十石夜船の始り、丸山の段・御殿の段、右歌舞妓狂言を淨瑠璃となし、切古淨るり身取にて語る。同年十二月八日、番場忠太紅梅簾、五段續。此時駒太夫江戸へ行。同十四年甲申四月初日、官軍一統志、五段續。當九月十三日豐竹越前少掾死す、行年八十四歳。おしいかな。元祿の頃より芝居興行なし、爰に於て段々芝居不繁昌となる事、偏に柱を失ひしゆへ也。豐竹越前掾、八十四歳、改名一音院本覺隆信日壽居士、中寺町本經寺といふ法花寺に石碑あり。年號改元あつて、明和元年申の十月廿一日初日越前掾追善として、娘景清八島日記。是は大佛殿萬代礎といふ淨瑠璃の増補也。序。切麓太夫、二の切十七太夫、三の口此太夫、三の切鐘太夫、四の切此太夫也。大切豐竹筑前少掾也。曾我かたみ送り出語り。若太夫島太夫となり西芝居へ出座。同年閏十二月十七日初日、いろは歌義臣兜。此時駒太夫江戸より歸る。若竹東工郎。此太夫江戸へ行。同二年乙酉三月十六日初日、しきしま操軍記、五段續。同七月五月初日、内助手柄淵。當八月晦日限りにて芝居相續なりがたく、豐竹越前少掾若太夫の昔より相續せしも終にはたいてんの。

外

題

年

鑑

今昔操
淨瑠璃
外題年鑑叙

夫、淨瑠璃外題の起りは、小野のお通と云し女の作られし淨瑠璃物語十二段を始めとす。此物語を聞^{きこ}舊^{ふる}したる後、瀧野・角澤^{つがさわ}の兩檢校、大職冠^{おおいよくかん}・八島・高館等の舞の章雅^{あきら}に節^{つげ}を付、是を淨るり節と云習はせしより惣名とはなれり。其後薩摩次郎右衛門新作を綴り、曲節^{きょくせつ}を語り出さる。併し其文句何れも短かくして、今の世の景事^{けいじ}道行杯の類ひ也。其上三絃^{さんげん}に合するといふ事もし。右の手の爪先にて扇の骨を抓^{かき}鳴^{なら}して拍子を取語りたる由、江戸鹿子に見えたり。其後、角澤檢校三絃に合し始られぬ。此角澤の門人、京都東の洞院二條の住人目貫屋長三郎と云人都巡り見物左衛門と云外題の五段續を作らる。夫より相續き好者^{かうしや}の遊人衆^{うでんと}、或は俳諧師達、次第々々に新作を編^{あひだ}出^だされり。西鶴翁・宇治嘉太夫・錦文流・近松門左衛門・紀海音・村上嘉介・西澤一風・松田和吉・長谷川千四・竹田出雲・爲永千蝶・並木宗輔・同文輔等より當時の作者達に連綿せり。扱又、京都の山本土佐掾・宇治加賀掾、大阪に井上播磨掾・竹本筑後掾・豊竹越前掾等の芝居にて語り來られし淨るり、段々に繁昌し、外題の數凡そ數百千番にも及びなん。

然るに、古代には當時竹本豐竹兩座の別ち有と違ひ、同じ淨るりを何れの座にても語られしと見えたり。譬ば、井上氏の跡目論、加賀掾自作のいろは物語、山本氏の四十八願記等の例のごとし。又井上氏の花山院を弘徽殿嫉妬打と加賀掾方にては外題を替、又井上氏の日向景清を松本治太夫方にては鎮倉祖日記と替、山本氏方の都志王丸を岡本文彌は山榊太夫と變じ、加賀掾方の團扇會我を筑後掾芝居にては百日會我と變題されし様成例無數からず。其上、前々は不葉流成淨るりは板本にも成らざる由。勿論井上氏山本氏の時代には、繪入細字の讀本斗りにて、稽古本といふは曾てなし。貞享二乙丑年に七ツ伊呂波の淨るり五段を大字八行に板行させ、宇治加賀掾節章を指し、直の正本と號して出さる。是稽古本の最初也。其後寶永七庚寅の年、竹本筑後掾の語られし吉野都女楠の時よりも大字七行と成し始、是より前々の當り淨るり共をも改め七行に再板せられし也。然るに寶永年中京都二度の大火事、次に享保辰の年大坂大火の砌、古來の正本板木焼失して傳はらざるもの多し。然れ共予若年の比より、此道を好る餘りに古流の名に觸し外題共を、次第に前後に構らず思ひ出せるまゝに拾ひ集め、次に竹本豐竹兩芝居共に近頃の分は初日の年月日を記し、次に名高き太夫達の出勤退座の節を顯はし、此道を好き給ふ衆中の慰み共ならんかしと並出せり。勿論年舊し事成ば、流儀部分の相違、近來の分は初日

の月日聞及びの違ひ、外題文字の誤り等も多からんなれば、用捨を希こひねがひのみ而已。

寶曆七丁丑年二月

八十翁

一

樂

今昔操
淨瑠璃
外題年鑑目錄

○古流井上播磨掾 分

○同門弟井上市郎太夫 分

○同清水理兵衛 分

○同山本土佐掾角太夫事 分

○同門弟松本治太夫 分

○同同都太夫一中 分

○同宮古路國太夫事 分

○同岡本文彌 分

○同門弟阿波太夫 分

○同字治加賀掾嘉太夫事 分

○同門弟野田若狹・富松薩摩 分

外題年鑑

○同 伊勢島宮内同佐太夫事

○同 道具屋吉左衛門 分

○同 表具又四郎 分

○當流竹本喜與太夫 分

○同 伊藤出羽掾座 分

○同 明石越後 分

○同 陸竹小和泉 分

○同 江戸豊竹肥前掾並來歴 分

○同 京都竹本義太夫座之事

○同 大坂諸所稽古淨瑠璃場始り之事

○當流祖竹本筑後掾 分

○同 豊竹越前掾 分

○正徳このみ已來兩座替り淨瑠璃初日年月日記
享保

(正徳享保の割書を、「明」「安」「寛」は貞享元祿と訂正)

○古今太夫受領年月記

○兩座太夫出座退座之事

○出語出遣だし始り之事

○時代事世話淨瑠璃始り之事

○出語太夫ワキツレ三さん絃人形出遣日記

○芝居之表へ幟進物等到來之始り

○間之狂言道具建之事

○舞臺ニ小幕ヲ引初る事

○正面之床を横床ニ直ス時節の事

○兩座諸事の始り之事

目 錄 終

(以下「安」「寛」のみ)

○堀江市ノ側豐竹此太夫座之分

○大坂所々新淨るり之分

○江戸表新淨るり之分

○京都新淨るり之分

○讀本淨るり之分

・ 作者附のならばに同上とこれあるは二度目のことにあらず作者付なり
〔寛〕

○古流井上播磨掾並門人

井上市郎太夫
清水理兵衛分

新十二段

是は古への十二段を作り直したる物也。

二王の本地

日本廻り

是は中古の見物左衛門を綴直せしなり。

舟遺恨

栗津の太郎が敵討の事也。

女袖鏡

是は後に作り直し日向景清と號す。

都女商人

放下僧の能をやつせしもの也。

二親孝行

是はみのゝ國太郎介が行跡也。

金平法門諍あらそひ

白旗の由來

八幡太郎よしいへの事を作りし也。

敵討の遺恨

五天竺

祇園精舍

天鼓

大友眞鳥

日本王代記

荏柄平太あか

神道あむど蟻通

百合若麿

甲賀の三郎

源平戀の遺恨

道釋どうしゃく禪師傳

長谷寺利生記

土蜘蛛退治

金剛兵衛左文字刀

兵庫の築嶋

二代の敵討

田村將軍初觀音

利屈りくつ物語

外題年鑑

一休物語

賴光跡目論おもめ

源氏筑紫合戰

根元曾我物語

聖德太子傳記

業平一代記

源氏熱田合戰

賴義北國落

花山院物語

賴朝七騎落

菅原親王行狀記

蒲御曹司東踏歌かほのおんさうしあつまたうか

金剛山合戦

大曾我富士牧狩

賢女手習鑑

日向景清

信濃源氏木曾軍記

大職冠たいしよくわん知畧丞取

大念佛由來

三浦北條軍法競〔寛〕は北條を道す

楠千早合戦

河津相撲かはづの遺恨

東大寺大佛緣起

佐々木藤戸先陣

三浦大助老後譽

源氏十五段 井上市郎太夫

五大力菩薩 上ニ同

待宵物語 清水理兵衛

源氏東の門出

上東院 右ニ同

松浦五郎旅日記

○井上氏一生に語られし淨るり、百餘番も有之由、西澤氏の操年代記に見へしか共、予見聞及ばざれば爰に止まる。追々考へかき加ふべし。

○山本土佐豫角太夫事並

松本治太夫
都太夫一中
分

楠天外兵法問答 [寛]

角田川

小野篁

むらさき野
〔寛〕

天親菩薩

愛子若

阿漕平次

傳教大師記

王昭君

生捕八百人
〔寛〕

清水晴玄

源氏蓬萊三ッ物

三條小鍛冶

外題年鑑

女人往生記

行基誕生記〔寛〕

久米仙人

都志王丸

飛驒内匠

天王寺彼岸中日

善光寺開帳

信田小太郎

信太妻じのだ

熊井太郎孝行卷

西教寺七万日廻向

一心二河白道（〔安〕〔寛〕は一心を三世）

小敦盛

鉢被

小栗判官

逆髮王子橫車

因幡堂開帳

眉間尺物語

石童丸

浦嶋太郎

入鹿大臣

四十八願記

平親王將門

花山法皇順禮記

袈裟御前物語

酒吞童子

日蓮聖人德行記

高砂

松本治太夫

半若東下向

くだり

上ニ同

源氏烏帽子折

同

此時藤九郎盛長・澁谷金王丸二ツの^{*}人形に初て足を付たり。

石川五右衛門

右同

鎌倉袖日記

同

八嶋合戦

同

清水寺利生物語

同 延寶六年午八月〔寛〕

傳授小町

都太夫一中

万屋助六心中 上ニ同

椀久末の松山 同

菜種の花盛 同

辛崎浪枕 同

彦三近江八景 同

愛染明王影向松 同

おしゅん川原の心中 同

傳兵衛

○岡本文彌並阿波太夫分

三榊太夫

源恕上人記

曇鸞太師記

外題年鑑

大職冠^{たいしよくわん}方便^{へんぽう}の玉

阿彌陀坊

守屋大臣

日親上人法難記

中將^{なかつしやう}姫蓮蔓陀羅^{はむすのまんだら}

三田八幡御傳記

戀塚物語

百合若高麗攻

契史^{けし}國物語

長命寺開帳

中山利生物語

雁金文七^{*}

元祿十五年壬午八月十六日に御仕置に合、同九月九日初日なり。

善光寺開帳

てゐるのひめみさはくるま
照天姫操車

いまやうぞく
當世樣續日本紀

卅三間堂棟由來 むなぎ 山本河内作〔寛〕

○岡本文彌・同阿波太夫・松本治太夫・都太夫一中等は、何れも先師土佐掾又は井上氏の淨るりを多分語られし故、新作多からず。別して、一中の弟子宮古路國太夫は、竹本豐竹の世話淨るり共を取直し語られしゆへ、一生の間、新作五段續の時代事を勤められしを聞及ばず。

○宇治加賀掾嘉太夫事並門弟衆の分

大磯虎遁世記

小晒物語

百人一首

西王母さいわうぼ

一心五戒玉

身替問答

融大臣

今川了俊

柿本人丸

大佛供養

西行物語

染殿后

吉備大臣きび

淨藏貴所八坂塔きしよ

俵藤太

和田軍

中將姬

柏崎

弓削道鏡

當流小栗物語

元服曾我

融通大念佛〔安〕〔寛〕

阿部宗任東大全

日本武尊
やまとたけのみこと

丹生山田〔寛〕

小袖曾我

衣通きと通り姬和光玉

梅雨左門由來〔寛〕

三井寺狂女

十六夜いざよひ物語

清明道滿行力諍

夜討會我

摩耶山開帳

小野道風額揃

法隆寺開帳

弘徽殿うしなひ嫉妬打

源賴家鞠始

神武帝うしろ潤正月

薩摩守忠度

惟高惟仁位諱

大原問答

三社の託宣

須磨寺青葉笛

富貴ふつき曾我

門出八島

浦島太郎七世縁

遊行上人名號記

曆

傾城反魂香〔寛〕

蒲冠かほの者鞠初

外題年鑑

賢女相生松

弱法師よろ

徒然草

いろは物語

天神御本地

鳥羽戀塚物語

世繼曾我

此淨るりの時、朝比奈の人形に足を付初しより、諸流共に立物人形に足をつけたり。

伏見常盤

葵の上

藍染川

凱陣八島

東山殿たのひのあそび子日遊

本領曾我

關東小六東六あ法

辨慶京土產

平安城都遷うつし

賴朝由井濱出

おなつ歌念佛
清十郎

吳羽中將廿三夜待

曾我七ツ以呂波

桑原女之助

津戸三郎往生要集

遊君三世相

源三位賴政

葛葉道心物語くすのは

主馬判官盛久

團扇曾我だんせん

義經懷中硯

壽永忠則

刈萱道心物語かるかや

結城七郎小袖賣

石山寺開帳

野田・富松

吾妻歌七枚起請

同〔安〕〔寛〕

吉岡兼房染けんぼう

上ニ同

新腰越訴狀しんようえつじょう

同

舍利 〔寛〕

難波五人男 同

西明寺殿行脚松 富松

忠臣身替物語 同 〔寛〕

傾城姿見池 同

夕霧筐かたみの袂 同

富士淺間舞樂諍 同

今様伊路葉物語 同

辛崎一本松 同

白髭壽命髮置 同 伊藤流枝作 〔寛〕

椀久狂亂笠 同

魂たまよほひ産靈觀音 宇治

外題 年鑑

誓願寺名號記 宇治

女人卽身成佛記 同

傾城今西行 同

傾城八重櫻 同

鞍馬山師弟杉 同 清水三郎兵衛作【寛】

曾我花橘 同

玉黒髮七人化粧 同

南部御影森みかげ 同

念佛往生記 同

忠信身替物語 同 (【寛】になし)

加増曾我 同 【寛】

糸盛久地獄るとき 同 【寛】

遊行念佛記

同

賴政歌道扇

野田・富松 享保四年十月十一日〔寛〕伊藤流枝・清水三郎兵衛作〔寛〕

傾城我立柚もも

同上

傾城淺間嶽

同

龍城たつのみやこ連理鐘

同

伊勢御遷宮

宇治

傾城浮洲岩

同上

八幡宮和光白旗、富松

三井寺豐年護摩

同

大黒天万寶御藏

同

南大門秋彼岸

同

愛宕山旭峯

同

外題 年鑑

大和歌五穀色紙 同

傾城紋日曆 もんぴこま 同

忠臣伊呂波夜討 立花

關東小六丹前姿 富松

扇の芝 [寛]

○^(嘉)加太夫の先師伊勢島宮内、淨るりも江戸の大ざつま杯と同前に五段續の外題を聞及ばず。宮内門人佐太夫、後に節齋と云し人、京都北野にて芝居を興行し、久々勤められしか共、數年の間、加賀掾と井上氏との淨るりを語られし也。又、加賀掾弟子野田若狹、北野七本松糸屋伊右衛門定芝居の太夫にて、久々勤められしか共、新作の淨るり多からず。此外に、富松さつま・宇治さがみ・立花河内等右に同じ。就中、富松氏は四條宇治加太夫定芝居にて、宇治宮内等と同座にて、永々勤められし中は、大坂竹本豊竹兩座の新淨るり共を替るゝ語られし故、自分の新作すくなし。

○道具屋吉左衛門館

四天王いかづち雷論

筑紫問答

金平地獄破

鎮西八郎

三原合戰

○表具又四郎節

木曾義仲

難波八景

草紙洗小町

外題年鑑

忠臣兵揃つはもの

○右の兩人は井上氏の淨るりを多分語られし也。

○竹本喜世太夫曾根崎芝居にて享保四年

龍宮東門阿波鳴戸

熊野權現からまのこ烏牛王

此人道頓堀にて芝居興行せられし節は古淨るり也。

○伊藤出羽掾芝居にて當流〔安〕〔寛〕に當
流の二字なし

一心二河白道 〔安〕〔寛〕

雁金文七 〔安〕〔寛〕

前内裏嶋都遷まへないり 享保十七壬子年十二月初日

作者 豐田新助・土木待賈。伊藤伊太夫初出座〔寛〕（〔寛〕には都を王城）

孝謙天皇倭文談

是は外題の出たる斗にて此節より芝居斷絶したり。（〔寛〕には以下の如し。）是は少しの間の興行にて、本不出、此節より芝居斷絶したり。

○明石越後曾根崎芝居にて

三軍桔梗原

延享二年乙丑十一月十三日初日

作者 櫻井頼母・文瀾堂。陸竹伊豆太夫・竹本源太夫〔寛〕

延喜帝秘曲琵琶 同年孟夏上の三日

作者 紀甘谷〔寛〕

○陸竹小和泉芝居道頓堀にて

歌枕棗棠花合戦 うまざき 延享三年丙寅八月三日初日（〔寛〕は朔日）

作者 春草堂・並木宗助〔寛〕

唐金茂右衛門東鑑 延享二年十二月朔日〔寛〕

作者 櫻井頼母・並木和助〔寛〕

女舞劔紅葉 同三年十月廿一日

作者 春草堂。大當り〔寛〕〔寛〕……〔寛〕には紅葉を楓

鎮西八郎射往來 同四年二月廿一日

作者 春草堂〔寛〕

氷室地大内軍記〔寛〕

大切出語り、佐和太夫〔寛〕

○此外、古代に虎屋喜太夫、次に、陸奥茂太夫・二ツ井彦太夫・永島重太夫・竹本源太夫・辰松八郎兵衛等、大坂表にて芝居興行ありしか共、何れも井上竹本の淨るりを語られし故、別に新作を見聞及ばず。

○江戸豊竹肥前掾新太夫事

享保十九甲寅の年、御江戸表に立越、四五年の間は若松丹後掾といふ名代にて芝居を興行せられ、其後又、辰松氏の芝居にても勤められしが、元文年中に今の芝居を求め、普請成就し豊竹肥前掾藤原清正と新たに櫓幕を揚げられたり。當座、新淨るりの外題

石橋山鎧いしはしかさね襲

寛保二年八月朔日〔寛〕

作者 豊岡珍平・爲永太郎兵衛〔寛〕

義經新含狀

〔安〕〔寛〕の卷末江戸の部に延享元、三月とあり。

日蓮記兒硯〔寛〕寛延二年十月八日

古人近松門左衛門作、並木宗助添削。肥前座〔寛〕

増補日蓮記

後江戸の分の兒硯〔寛〕

小山判官かきね新板重物語 寛延三年八月朔日〔寛〕
信田小太郎

作者 並木良助〔寛〕

霞の關守 八幡太郎東海硯 寛延四年八月朔日〔寛〕

作 一二三軒〔寛〕

親鸞聖人繪傳記

十五日男太平記枕詞 寶曆二年七月廿一日〔寛〕

作 安田蛙文〔寛〕

聖德太子職人鑑 寶曆八年八月朔日

四天王寺伽藍鑑也〔寛〕

○當座に限らず、江戸表の外記・辰松等の操芝居、此二三十ヶ年の間は、何れも大坂竹本・豐竹兩座の新淨るゝ共を替るゝに勤らるゝ故、新作の外題を見聞及ばず。

○京都竹本義太夫芝居（此項〔寶〕のみ）

寶曆三年癸酉の春より始る。當座は、大坂表の太夫達入替りて勤らる。勿論、大坂本家芝居

の淨るりを勤る故、別に新作はなし。

○追

加

(此項「寶」のみ)

寶永四丁亥年二月、大坂生玉御社の境内において、竹本豊竹の淨瑠璃稽古場始る。夫より諸方の寺社境内にて興行有。日を追て益々繁昌す。

○京都竹本義太夫芝居

(此項「寶」になし。)

寶曆三酉春より多分大坂本家の淨るり也。

花系圖都鑑

寶曆十二年ノ三月廿一日

契情阿古屋の松

寶曆十四年申ノ正月

京羽二重娘形氣

同年四月十七日

○當流竹本筑後掾義太夫事

竹本義太夫は攝州天王寺村豐家の出産成しが、若年の比より井上播磨掾の淨瑠璃を好みて修行せられ、延寶年中大坂虎屋喜太夫芝居を勤め、天和年中京都へ登り宇治加賀掾芝居を勤め貞享二年大坂へ歸り道頓堀にて自分に櫓を揚て、常芝居を興行せられ、其後筑後掾と受領せらる。最初貞享二年より明和四年迄、八十三年なり。而益々繁昌せり。最初より、替り淨るり初日年月日に及び、他所へ行又は名高き太夫衆の出座退座委細に記す。〔明〕〔安〕〔寛〕大坂道頓堀にて、芝居興行の始めは、貞享二年乙丑の二月也。最初の淨瑠璃は、世繼曾我、次は藍染川、其次いろは物語、此三番は加賀掾方の古物。其次に、井上氏方の賢女手習鑑、頼朝七騎落。以上五替りは、先師達の語られし古淨るりにて仕廻、同三年寅の春より、近松門左衛門京都より新物を作り越さる。其第一は〔寶〕

出世景清

是近松氏義太夫淨るり作の最初なり。此後多分近松の作なり。〔寶〕

是は近松門左衛門竹本義太夫新淨るり作の初なり。此節は近松氏京都住居なり。後に大坂へ下り多分新作をせられしなり。當夏、京都へ行。〔明〕〔安〕〔寛〕

（以下明・安・寛の三本に共通な場合は×印を以て示す）

世繼會我

貞享二年乙丑二月朔日初日

宇治加賀掾方の古淨るり也。

(以下頼朝七騎落まで〔寶〕になし。)

藍染川

同年四月八日

右同斷

いろは物語

同年七月十五日

右同斷

*
一心五戒玉

右同斷

賢女手習鑑

同年九月二十一日

井上播磨掾方の古淨るり。

頼朝七騎落

同三年正月二月

右同斷

外題 半鑑

佐々木大鑑

同年七月十五日

又佐々木先陣とも。作者同上〔寛〕

（以下國性爺合戦まで〔寶〕は興行年月を缺き、且年代的に順序不同につき、他の三本による）

多田満仲記

同年九月十三日 ×

達磨の本地

貞享四丁卯年正月八日

當三月より中國路所々旅行。 ×

源氏冷泉節^{*}

貞享五戊辰年正月二日

當夏、江州大津より伊勢へ行。 ×

大塔宮熊野落

同年九月改元 元祿元年十月十二日

定家卿小倉色紙

同二年正月二日

天智天皇

同年三月三日

當夏、泉州堺より紀州へ行。 ×

今様柏木

同年八月十五日

當冬、京都北野へ行。×

自然居士

元祿三庚午年正月十四日

源氏十二段

同年三月三日

當夏秋、堺・奈良・和州へ行く。×

讃談記

同年十月十一日

文武五人男〔寶〕

今様柏崎

元祿五壬申年正月二日

當春、京都七ななの社へ行。×

日本西王母

同年四月八日

作者 近松門左衛門〔寛〕

當秋冬、西國・中國所々へ行。×

愛子若都富士

元祿六癸酉年正月二日

平假名太平記

同年三月三日

新本領會我

同年五月六日

當秋冬、和州・美濃・尾張へ行。×

辨慶出世記×

元祿七年甲戌正月九日

*松風村雨東帶鑑

同年三月三日

(×は、松風村雨を割書)

作者 近松門左衛門 [寛]

當夏京都中御靈の社内、秋冬北野七の社へ行。×

大掛物十幅一對 [寛] [寶]

齋藤別當實盛

元祿八年乙亥正月二日

多田院開帳

同年三月六日

*釋迦如來誕生會

同年四月八日

(×は釋迦如來を割書)

作者 近松門左衛門 〔寛〕

當夏秋、堺・奈良・和州所々行。×

鎌田兵衛名所盃 同年十月十二日

忠信廿日正月 元祿九丙子年正月八日

當夏、伊勢へ行。×

當麻中將姫× 同年四月十四日

當夏、讃州より宮島へ行。×

義經追善女舞^{*} 同年九月九日

那須與市小櫻威^{おとし} 元祿十丁丑二月朔日

新板腰越狀 同年四月六日

當夏、泉州・堺より奈良へ行。×

外題 年鑑

頼朝伊豆日記

同年七月十五日

作者 近松門左衛門〔寛〕

百日會我*

同年十月十三日

初めは團扇會我と號せし、京都宇治加賀掾淨るりにて、近松氏の作成し、定日百日相勤めしゆゑに、ことぶきて百日會我と云。此時分は百日と勤めし事は珍しきがゆゑなり。×

吉野忠信〔寛〕

今様小栗判官

元祿十一戊寅年二月十四日

作者 近松門左衛門〔寛〕

小野道風記×

同年五月五日

義經東六法

同年六月五日

當秋、伏見中書島、夫より伊勢へ行。×

源氏烏帽子折

二度目〔寛〕 元祿十二己卯年正月二日

山本土佐掾古淨るり〔寛〕

當春、泉州堺へ行×

本海道虎が石 同年五月六日

當秋、備中宮内・藝州宮島へ行く×

浦嶋年代記 元祿十三年正月六日

作者 近松門左衛門〔寛〕

長町女腹切* 正月六日

作者 近松門左衛門〔寛〕

淀鯉出世瀧徳*
のほり 同年四月八日

作者 近松門左衛門〔寛〕

當夏、堺・奈良へ行。×

因幡藥師傳記 同年九月九日

當春より休足、京へ行。×

蟬丸

元祿十四年辛巳五月六日

作者 近松門左衛門〔寛〕

元祿十四年辛巳五月竹本義太夫勅許受領、筑後掾藤原博教と號す。〔實〕

竹本義太夫筑後掾藤原博教と勅許受領の弘めを勤めらる。今年五十一歳なり。×

神託粟万石^{*}

同年八月朔日

前十二段長生嶋臺^{ちやうせい}

同年九月九日

切大掛物十幅對

作者 近松門左衛門〔寛〕

曾我五人兄弟

同年十一月朔日

同上〔寛〕

前傾城八花形

元祿十五壬午年正月二日

切豐年富貴万歳

當春の末伊勢へ行。×

*大磯虎稚物語

同年五月二十八日

同上〔寛〕

加古教心七墓巡

同年七月十五日

同上〔寛〕

新一心五戒の魂^{たま}

同年九月九日

來春堺より奈良へ行。×

(最)西明寺殿百人上臈

同十六年末三月四日

作者 近松門左衛門〔寛〕

前淨るり日本王代記。同上〔寛〕

同年五月七日

切^{おはつ}德兵衛 曾根崎心中

外題年鑑

此心中は當四月廿三日也。〔實〕（×にはおはつ徳兵衛なし）

作者 近松門左衛門×

是、世上世話淨るりの始めにて、竹本氏古今の大當り也。

前たがら悦賀樂平太

切おまん源五兵衛薩摩歌

元祿十七甲申年正月十五日

同上〔寛〕

前甲賀三郎

當四月改元

切おふさ徳兵衛心中重井筒

寶永元甲申年四月十六日

同上〔寛〕

當秋冬、太夫病氣休息。是まで筑後掾自分の座本なり。×

用明天皇職人鑑 寶永二乙酉年三月二日

同上〔寛〕

今度より、竹田出雲掾竹本芝居の座本と成る。

人形の衣装に及び道具建等まで、立派になりしなり。×

鐘入の段、太夫筑後掾、三味線竹澤權右衛門、おやま人形辰松八郎兵衛出語り出遣ひ、今度より仕初る。

*雪女五枚羽子板 同年七月十四日

同上〔寛〕

傾城返魂香 (反) 同年八月十五日

同上〔寛〕

前木曾軍記

同年十一月二十一日

切おなつ清十郎 笠物狂

*義經將某經 寶永三丙戌年正月二十五日

前本領曾我

同年三月二十七日

切心中二枚繪草紙

作者 近松門左衛門〔寛〕

*兼好法師物見車

同年五月五日

同上〔寛〕

同跡追一段物

同年六月朔日

碁盤太平記

同上〔寛〕

曾我扇八景

同年七月十五日

同上〔寛〕

前扇八景 三段目迄

同年九月二十一日

切おさん*茂兵衛 大經師昔曆

同上〔寛〕（×にはおさん茂兵衛なし）

*吉野忠信

寶永四丁亥年正月二十日

前吉野忠信 三段目迄

同年二月十五日

切堀川波の鼓

前今川了俊×

同年四月二十一日

切おかめ*
與兵衛卯月紅葉

前根元曾我×

同年六月朔日

切*後日卯月の色上

前源氏十二段

同年六月廿四日

切關小まん
丹波與作待夜小室節

(×には丹波與作關小まんの順)

酒吞童子枕言葉

同年九月九日

作者 近松門左衛門〔寛〕

前酒吞童子三段目迄

寶永五戊子年四月十六日

切おむめ
久米之助心中萬年草

外題 年鑑

同上〔寛〕

當夏、奈良・伊勢へ行。秋より冬、備中宮内・藝州宮島へ行。x

今川制詞條目 寶永六丑年正月二日

おなつ 清十郎 五十年忌歌念佛〔安〕〔寛〕

前 今川 三段目迄

同年三月三日

切上巻 助六千日寺心中

前 新天鼓

同年四月八日

切おまん 源五兵衛 蘆分船

當夏、伊勢へ行。x

紅葉狩劔本地 同年九月九日

作者 近松門左衛門〔寛〕

當冬、伏見中書島へ行。x

曾我虎が石磨うす

寶永七庚寅年正月二日

前虎が石磨 三段目迄

同年正月廿三日

切おき二郎兵衛掛鯛心中

大原問答青葉笛

同年三月四日

作者 近松門左衛門

寛

百合若大臣野守鏡

同年五月六日

同上〔寛〕

前野守鏡 三段目迄

切*心中氷の朔日

同年六月十六日

同上〔寛〕

前根元曾我 三段目迄

切*夕霧阿波鳴戸

同年七月廿四日

外題・年鑑

當秋より冬、堺・伏見・大津へ行。×

新しいは物語

寶永八辛卯年正月九日

作者 近松門左衛門〔寛〕

前いろは三段目迄

同年三月五日

切梅川冥途飛脚
忠兵衛

同上〔寛〕

當五月正徳と改元。當夏、和州より伊勢へ行。〔安〕〔寛〕

吉野都女楠

正徳元辛卯年九月十日

同上〔寛〕

前傾城掛物揃

正徳二壬辰年三月四日

切丹波與作 二度目

今度、和歌竹政太夫始めて出座。道中双六節事語り（以上〔寶〕にも）後に竹本と改む。×

弘徽殿うのほろうぶや鸛羽うのぼろ産家

同年五月五日

同上〔寛〕

(五)
二百番ノ内、二廻山姥

同年七月十五日

作者 近松門左衛門〔寛〕

傾城吉岡染

同年十一月二日

同上〔寛〕

河内國姥が火

正徳三癸巳年正月二日

作者 松田和吉〔寛〕

天神記

同年二月廿五日

作者 近松門左衛門〔寛〕

今度彦太夫始て出座。後に大和太夫と名を改む。天拜山節事出語り。

孕常盤*

同年七月十六日

外題 年 鑑

同上〔寛〕

*新撰大職冠

同年十一月朔日

同上〔寛〕

相摸入道千匹大

正徳四甲午年四月八日

同上〔寛〕

樋口＊かほよ横笛 娥歌＊かほよがるた

同年八月朔日

同上〔寛〕

大和太夫退座〔寛〕

○筑後掾事、當八月中旬より病氣にて引込、保養に相叶はず、終に當九月十日行年六十四歳にて死去せらる。法名は釋道喜と號せり。此人、芝居興行、貞享二乙丑年より當正徳まで、年曆三十ヶ年。淨るり九十四番を操に掛て勤められたり。其助の衆中には、豊竹若太夫・陸奥茂太夫・長島重太夫・二ツ井彦太夫・多川源太夫・内匠理太夫・竹本難波・豊竹万太夫・竹本喜代太夫・竹本頼母・若竹政太夫・竹本彦太夫・竹本文太夫、其外の衆中、年々に替りて

つとめられたり。これより筑後掾死後の分。x

嵯峨天皇甘露雨 同年十月十五日

同上〔寛〕

此節の太夫、竹本頼母・内匠理太夫・竹本政太夫・豊竹万太夫・竹本文太夫。大和太夫退座。x

^{＊ふたりしつがたいないまぐり}殯 静胎内拵 同五年未正月二日

〔寛〕 以外は「殯」を「二人」、「拵」を「探」

同上〔寛〕

當春伊勢へ行。x

持統天皇歌軍法 同年八月朔日

同上〔寛〕

此節迄は、淨るり短かき故、間の物にのろま人形のどうけ或はからくり有。こくせんやよりはかゝる事もなし。〔寶〕^{*}

筑後掾芝居興行、貞享二年より已來三十二三年の間、井上氏宇治氏先師達の勤られし淨るり凡五六十番餘も語られしかども、前の部分に出せる故、爰に略す。近松氏に及び、其他の新作百餘番都合百五六十番餘を操に掛けて、芝居を勤め、正徳四年甲午九月十日六十四歳にて死去せらる。豊竹若太夫・陸奥茂太夫・ニツ井彦太夫・内匠利太夫・竹本難波・多川源太夫・豊竹万太夫・竹本頼母・竹本喜代太夫・竹本政太夫・竹本大和太夫・竹本文太夫等の衆中、筑後掾存生の内勤められしなり。(以上四條共)

筑後掾死後、國性爺よりは替り淨るり初日の年月日に及び、他所行又は名高き太夫衆の出座退座を記す。〔寶〕

嘉平治
おさが 生玉心中 〔寛〕

同上

父は唐土
母は日本 國性爺合戦

(以下は〔寶〕にも興行年月日あり)

初日正徳五年乙未十一月朔日より、三年越十七ヶ月勤む。來申正月闕有。

九仙山、竹本頼母・内匠理太夫・竹本文太夫、三絃鶴澤三二。三段め、同政太夫・豊竹万太夫・同難波。作者近松門左衛門。

種は日本
産は唐土 同後日合戦 享保二年丁酉二月十五日

同上〔寛〕

大幕の上に小幕を引き初む。此度、吉田文三郎始て出座。

曾根崎心中 二度目 同年八月朔日

鎗權三重帷巾 同年八月二十二日

同上〔寛〕

聖徳太子繪傳記 同年十一月十六日

同上〔寛〕

文太夫退座。

山崎與次兵衛壽門松 享保三年戊戌正月二日

同上〔寛〕

大和太夫再出座。

日本振袖始

同年二月二十二日

同上〔寛〕

曾我會稽山

同年七月十五日

同上〔寛〕

日蓮上人記

同年十月十二日 閏十月有

同上〔寛〕

傾城酒吞童子

同年十月二十五日

同上〔寛〕

いづみ太夫事澤太夫始て出座。

博多小女郎浪枕

同年十一月二十日

同上〔寛〕

國太夫出座。

善光寺御堂供養 同年十二月十三日

同上〔寛〕（〔寛〕以外は「御堂」を「堂」）

本朝三國志 享保四年己亥二月十四日

同上〔寛〕

女^{俊寛}牛^若平家女護島 同年八月十二日

同上〔寛〕

島原蛙合戦 同年十一月六日

同上〔寛〕

出語り大和太夫。ツレ國太夫。三絃鶴澤三二。

國性爺合戦 二度目 享保五年庚子正月二日

九仙山、頼母。三絃、三二事鶴澤友二郎。

井筒
業平 河内通

同年三月三日

同上〔寛〕

出語太夫、頼母。ツレ澤太夫。三絃友二郎。

双子隅田川

同年八月三日

同上〔寛〕

日本武尊吾妻鑑

同年十一月四日

同上〔寛〕（〔寶〕〔明〕は「吾妻」を「東」）

陸奥茂太夫再勤。

小春
治兵衛 心中天網島

同年十二月六日

同上〔寛〕

文太夫又出座。

攝津國夫婦池

享保六年辛丑二月十七日

同上〔寛〕

千疊敷出語、大和太夫、ツレ國太夫、三絃友二郎。

女殺油地獄

同年七月十五日 閏七月有

同上〔寛〕

信州川中島合戰

同年八月三日

同上〔寛〕

山すだれをはりぬきの本山に作り初む。

唐船^{たうせんはなし}噺今國性爺

同七年壬寅正月二日

同上〔寛〕

（〔寛〕以外は「船」を「土」）

式太夫出座。

浦嶋年代記、二度目〔寛〕 同年三月三日

心中宵庚申

同年四月二十二日

同上〔寛〕

外題年鑑

祇王 祇女 佛御前扇車 同年九月朔日

作者 松田和吉 〔寛〕

當冬茂太夫退座。〔寛〕には「當冬」の二字なし

おほたのみやあさひのようひ
大塔宮 囃 鎧 享保八年卯二月十七日

作者 竹田出雲・松田和吉 〔寛〕

お吉 空月 櫻町昔名花 同年十一月二十四日

將軍太郎良門 出羽冠者頼平 關八州繫馬 同九年正月十五日 四月に關有

作者 近松門左衛門 〔寛〕

○當三月二十一日、大坂中大火芝居類燒故、四月八日より假芝居にて、酒吞童子・持統天皇・相模入道、十日替に相勤むる。

三國志大全 鼎軍談 同年七月十五日
諸葛孔明

作者 竹田出雲 〔寛〕

右大將鎌倉實記

同年十一月四日

同上〔寛〕

當十一月二十二日、近松門左衛門死す。

出世握虎稚物語

同十年乙巳五月九日

同上〔寛〕（〔寛〕以外は「握虎」を「奴」）

和泉太夫退座。

復鳥羽戀塚

同年六月十五日

喜太夫出座。

大内裏大友眞鳥

同年九月十八日

作者 竹田出雲〔寛〕

此節、政太夫・大和太夫・文太夫・式太夫・喜太夫等相勤む。

翌年午六月より南都へ行、大友眞鳥・河内通・鎌倉實記。

伊勢平氏年々鑑

同十一年丙午九月十三日（十一日〔寛〕）

同上〔寛〕

道行出がたり、政太夫・大和太夫、三絃友二郎。

敵討未刻の太鼓 享保十二年丁未正月十五日 正月に聞有

同上〔寛〕

前淨るり、翺軍談。

小野炭焼 深草土器師 七小町 同年四月十八日

同上〔寛〕

三莊太夫五人嬢 同年八月朔日

作者 竹田出雲〔寛〕

工藤左衛門富士日記 同十三年戊申三月二十二日

同上〔寛〕

加賀國篠原合戦 同年五月二十三日

同上〔寛〕

始て正面の床を横へ直す。

尼御臺由井濱出 享保十四年己酉二月十五日

大塔宮曦鎧 二度目 同年六月十八日

眉間尺象貢 みけんじやくさうのみつき 同年八月朔日

作者 竹田出雲・長谷川千四〔寛〕

當九十月京都へ行。大友眞鳥・三莊太夫。

京土産名所井筒 同年十一月廿五日

作者 長谷川千四〔寛〕

三浦大助紅梅袴 たしな 同十五年庚戌二月十五日

作者 長谷川千四・文耕堂〔寛〕

信州姨捨山 同年八月朔日

同上〔寛〕

外題年鑑

須磨都源平躑躅 同年十一月十五日

同上〔寛〕

國性爺合戰 三度目 享保十六年辛亥五月五日

天満最負組より、芝居の表に初て幟を立る。

鬼一法眼三略卷 同年九月十三日

同上〔寛〕

増補用明天皇 二度目〔寛〕 享保十七年壬子四月朔日

鐘入出語、政太夫、三絃友二郎、出遣人形桐竹三右衛門。

伊達染手綱 二度目〔寛〕にはなし 同年六月八日

作者 近松門左衛門〔寛〕

前淨るり、信しん大小太郎。

壇浦兜軍記 同年九月九日

作者 文耕堂・長谷川千四〔寛〕

大内裏大友眞鳥 二度目 享保十八年癸丑二月朔日

當三月十二日大和太夫死す。

太平記
住吉卷 車返合戰櫻 同年四月八日

作者 文耕堂〔寛〕

和泉太夫又出座。

今度、大盛彦七人形にゆびさきの動く事を仕初む。當六月三十日芝居類火、假家芝居にて景
事揃。夫より上京、鬼一法眼・國性爺。

碗久元日金^{こがねの}年越 同年十一月十五日
松山

同上〔寛〕

七太夫出座。

應神天皇八白幡 享保十九年甲寅二月朔日

政太夫義太夫と名を改む。

河内通 二度目〔寛〕 同年六月八日

外題 年鑑

蘆屋道滿大内鑑

同年十月五日來卯年三月閏有

作者 竹田出雲〔寛〕

三輪太夫出座、内匠太夫と名改む。

此節、義太夫・式太夫・和泉太夫・喜太夫・七太夫・常太夫等勤む。今度與勘平より人形の腹ふくるゝ様に仕初る。

當秋京へ行。大内鑑。

甲賀三郎窟物語

同廿年乙卯九月十四日

作者 竹田出雲・文耕堂〔寛〕

赤松圓心綠陣幕

同廿一年丙辰二月朔日

作者 文耕堂・三好松洛〔寛〕

受領の祝儀に、進物を芝居の表に飭り始む。享保廿年乙卯十一月義太夫事勅許受領。竹本上總少掾藤原喜教。祝儀出語、天神記冥加松。三絃鶴澤友二郎。

敵討檻樓錦

同年五月十二日

作者 文耕堂・三好松洛〔寛〕

前淨るり、四季十二段。出語和泉太夫。三みせん友二郎。

猿丸太夫鹿卷毫まきふで

同年十月十三日

同上〔寛〕

御所櫻堀川夜討

元文二年丁巳正月廿八日

同上〔寛〕

上總掾播磨少掾に變名す。

太政入道兵庫岬

同年十月十日 十一月に閏有

作者 竹田出雲・竹田正藏〔寛〕

美濃太夫出座、合羽伊太夫事。

行平磯馴松

同三年戊午正月廿五日

作者 文耕堂・三好松洛〔寛〕

此節和泉太夫死す。

外題 年鑑

小栗判官車街道 同年八月十九日

作者 千前軒・文耕堂〔寛〕

美濃太夫事此太夫と名を改む。

ひらかな盛衰記 同四年己未四月十一日

島太夫始て出座。

今川本領猫魔館 同五年庚申四月十一日

作者 文耕堂・千前軒〔寛〕

將門冠合戰 同年七月朔日 七月間有

同上〔寛〕

前百日曾我 二度目〔寛〕

同十一月十一日

切戀八卦柱曆

近松門左衛門十七回忌追善。

伊豆院宣源氏鑑

元文六月辛酉正月十四日

同上〔寛〕

百合太夫・紋太夫始て出產。

新うす雪物語

寛保元年酉五月十六日

作者 文耕堂・竹田小出雲〔寛〕

此節、出勤之衆、此太夫・島太夫・百合太夫。

當冬、七太夫江戸へ行。播磨掾・内匠太夫・紋太夫・七太夫、三絃鶴澤友二郎相勤むる。

花衣いろは縁起

寛保二年壬戌二月十四日

去冬内匠太夫退座。

室町千疊敷 夫婦池也 二度目 四月十七日

出語太夫此太夫、ツレ島太夫、三絃友二郎。

男作五雁金おとこだていつめりかね

同年七月二日

作者 竹田出雲〔寛〕

當冬、河内太夫事駿河太夫出座、追付死す。

入鹿大臣皇都みろこあらそひ諱

寛保三年癸亥四月六日 四月閏有

丹州爺打栗たんしゅうて

同年五月十八日

作者 竹田小出雲・三好松洛〔寛〕

大内裏大友眞鳥 三度目 同年十月廿五日

ざこば重兵衛事政太夫始て出座。

兒源氏道中軍記

延享元年甲子三月六日

同上〔寛〕

當七月廿五日播磨掾死す。行年五十四歳。

ひらかな盛衰記 二度目 同年十一月十六日

錦太夫出座。和佐太夫事柚太夫出座。

切播磨播磨様八曲筐掛繪

出語、此太夫・政太夫・百合太夫・柚太夫・島太夫・錦太夫・紋太夫・其太夫。三絃、鶴澤

友二郎。同平五郎。

軍法富士見西行 延享二年乙丑二月十三日

作者 並木千柳・竹田小出雲〔寛〕

夏祭浪花鑑 同年七月十六日 十月間有

同上〔寛〕

今度、人形に帷子衣裳を着せ初む。

楠昔噺 延享三年丙寅正月十四日

(小出雲)

作者 並木千柳・竹田出雲〔寛〕

前播磨掾三*佛御前扇軍 二度目

同忌追善

同年五月初日法樂

切筑後 縁心 中重井筒

卅三年忌

同出語、太夫此太夫。ツレ政太夫。三みせん友二郎。人形遣ひ、吉田文三郎・山本伊平治。

菅原傳授手習鑑 同年八月廿一日

傾城枕軍談 延享四年丁卯八月廿三日

外題 年鑑

作者 並木千柳・竹田出雲〔寛〕

文字太夫・信濃太夫出座。紋太夫退座。

義經千本櫻

同年十一月十六日

作者 竹田出雲・並木千柳〔寛〕

假名手本忠臣藏

寛延元年戊辰八月十四日

同上〔寛〕

*當十月此太夫・島太夫・百合太夫・友太夫退座。

蘆屋道滿大内鑑

二度目 同年十一月廿二日 十月間有

當冬、大隅掾再勤、内匠太夫事。千賀太夫・長門太夫・土佐太夫出座。古參政太夫・錦太夫・

佐野太夫・上總太夫又出座。文字太夫退座。

栗島譜嫁入雛形

寛延二年己巳四月十八日

同上〔寛〕

切、出語太夫大隅掾、ツレ千賀太夫、三みせん友二郎。

双蝶々曲輪日記

同年七月廿四日

同上〔寛〕

當夏、三味せん鶴澤友二郎死す。

源平布引瀧

同年十一月廿八日

同上〔寛〕

當冬上總太夫死す。

國性爺合戰

四度目

寶延三年庚午七月十六日

九仙山、大隅掾、ワキ千賀太夫、三絃野澤喜八郎。

文武世繼梅

同年十一月廿四日

同上〔寛〕

今の紋太夫始めて出座。

戀女房染分手綱

同四年辛未二月朔日 六月閏有

作者 吉田冠子・三好松洛〔寛〕

外題 年鑑

道成寺所作事。盆より切に操踊。人形、シテ吉田文三郎・ワキ同甚五郎。大鼓吉田才治・小

鼓桐竹門三郎。笛吉田彦三郎・大鼓桐竹助三郎。

役行者大峯櫻

同年十月十七日

作者 竹田外記〔寛〕

大隅掾大和掾に變名す。

名筆傾城鑑

寶曆二年壬申三月廿三日

作者 吉田冠子・三好松洛〔寛〕

世話言漢楚軍談

同年五月十八日

作者 竹田外記〔寛〕

敵討檻樓錦 二度目 同年七月十六日

前淨るり川中島三段目迄。

伊達錦五十四郡 同年十一月十六日

同上〔寛〕

春太夫・陸奥太夫出座。

愛護あいごのわが雅名歌勝関 寶曆三年癸酉五月五日

政太夫・錦太夫京都行。組太夫・折太夫初出座。

菖蒲前操みさほのゆみはり 弦 寶曆四年甲戌二月三日 二月間有

作者 竹田出雲・三好松洛 [寛]

大和掾上京、陸奥太夫退座、信濃太夫又出座。

小袖組貫練門平くわんねら 同年四月十七日

新うす雪物語 二度目 同年七月十六日

信濃太夫退座。

小野道風青柳硯 同年十月三日

作者 竹田出雲・三好松洛 [寛]

染太夫・家太夫初て出座。

前相摸入道 二度目 [寛]

寶曆五年乙亥七月十六日

後庭涼操座鋪

にはすゐ

大和掾歸京。

前拍子扇淨瑠璃合*

同年十一月十六日

後年忘座敷操

友太夫出座、桐夫太初出座。

崇徳院讃岐傳記

寬曆六年丙子二月一日

錦太夫上京、森太夫・仲太夫出座。

鬼一法眼三略卷

二度目 同年六月朔日

播磨掾十三回忌追善。

男作五鴈金

二度目 同年八月二日

於曾根崎芝居。政太夫上京。

平惟茂凱陣紅葉

同年十月十五日十一月間有

作者 竹田出雲・三好松洛〔寛〕

千賀太夫出座。

姫小松子日の遊 同七年丑二月朔日

作者 吉田冠子・三好松洛〔寛〕

政太夫京より歸。三絃、野澤喜八出座。

〔寶〕には、以下の竹本座の記事なし。

薩摩歌妓鑑

けいこ

同年九月三十日

大和掾上京、百合太夫再勤。當時出勤の衆、政太夫・錦太夫・千賀太夫・染太夫・百合太夫・紋太夫・中太夫・嶋太夫等也。

昔男春日野小町 同年十二月十五日

作者 竹田出雲・同瀧彦〔寛〕

春太夫京より歸る。

敵討崇禪寺馬場 同八年三月十三日

作者 竹田小出雲・同瀧彦〔寛〕

菅原傳授手習鑑 二度目 同年五月十五日

會根崎にて一ヶ月勤め、七月十五日より道頓堀へ歸り盆中勤る。

姪小島武勇問答 同年八月十九日

作者 竹田小出雲・同瀧彦〔寛〕

大和掾京都より歸る。

日高川入相花王 同九年二月朔日

作者 竹田小出雲・二步堂〔寛〕

大和掾・吉田文三郎休。

當五月四日芝居類焼せしゆゑ、假屋芝居にて右日高川四段目迄切に、

用明天皇職人鑑

を一段、五月二十一日より、出語り太夫政太夫、人形出遣ひ吉田文吾。當閏七月、人形吉田
文三郎・同文吾父子共退座。

太平記菊水の巻

同年九月十六日

作者 二步堂・三好松洛〔寛〕

此節、大和掾又上京。音太夫・岬太夫始めて出座。人形吉田文吾再勤。三郎兵衛と名を改む。

ひらがな盛衰記 三度目 寶曆十庚辰年五月六日

竹本播磨掾十七回忌。

極彩色娘扇

同年七月二十一日

作者 二步堂・三好松洛〔寛〕

八木太夫始めて出座。

前 國性爺 二段目迄

同年十一月廿八日より十日の間

切年忘座鋪操

曾根崎芝居にて、太夫不殘、大和掾・錦太夫・染太夫・音太夫・八木太夫出がたり。

政太夫・其太夫・中太夫・岬太夫。

阿倍晴明倭言葉

寶曆十一辛巳年正月廿日

三絃野澤喜八。紋太夫。綱太夫等出座。

由良湊千軒長者 同年五月十六日

作者 二步堂・三好松洛〔寛〕

錦太夫休。

當九月、堺へ行、ひらがな盛衰記卅日の間。

冬籠難波梅 同年十月廿一日

人形顔見世夜芝居、十日の間相つとむ。吉田三郎兵衛名改、文三郎と云。江戸へ行暇乞出遣ひ。

古戰場鐘懸の松 同年十一月廿日

作者 二步軒・三好松洛〔寛〕

志賀太夫・喜太夫出座、紋太夫・中太夫退座。

戀女房染分手綱 二度目 寶曆十二年七月二日

政太夫上京、百合太夫死去す。

奥州安達原

同年九月十日

政太夫歸京。

假名手本忠臣藏 二度目 同十三年未正月十八日

當正月九日、竹田芝居類焼に付、竹本座へ相加り、淨るり・あやつり・竹田からくり狂言打込、七切追出し、拾文づゝいたし候。

初日 山城國畜生塚 同年四月十三日

作者 近松半二・竹本三郎兵衛〔寛〕

生駒太夫出座、濱太夫退座。

後日 天竺徳兵衛郷鏡 さとのすがた

磯太夫出座。前後一日替り。

前諸葛孔明鼎軍談 二段目迄 同年八月三日

中太夫退座。

後御前懸り淨瑠璃相摸*

外題 年鑑

大和掾一世一代、三味噺ん喜八。

九月十八日切にて堺へ行。

御所櫻堀川夜討 同年未十二月九日

極月十八日切、當申年座中江戸表へ行。

京羽二重娘形氣 同十四年甲申五月廿八日

作者 近松半二。竹本三郎兵衛〔寛〕

京都新作。尤、京座中大坂へ引相勤。〔明〕〔安〕

岡太夫初て出座。

敵討雅物語 〔寛〕 同年七月十五日

江戸櫻愛敬曾我 同年十一月十七日

江戸表より歸。夜五日晝十日の間相勤。

假名手本忠臣藏 三度目 同閏十二月廿五日

蘭奢待新田系圖 明和二年乙酉二月九日

作者 近松半二。竹本三郎兵衛〔寛〕。

春太夫京へ行く。

愛護稚名歌勝関 二度目 同年五月六日

春太夫京より歸る。

御祭禮だんじり棚閣車操 同年六月十五日

當七月十日、竹本政太夫死去。

姻袖鏡こんねい 同年九月十二日

作者 近松半二。竹本三郎兵衛〔寛〕

中太夫出座。

會狂言役者双六あひ 同年十一月五日

鐘太夫出座、錦太夫退座。

外題年鑑

霜月十八日にて堺表へ行。〔明〕〔安〕

富士日記菖蒲刀〔寛〕

事始室早咲 同年十二月七日

堺より歸り、中太夫江戸へ行。

本朝廿四孝 明和三年戊正月十四日

作者 近松半二・竹本三郎兵衛〔寛〕

嶋太夫出座、若太夫事。

前兒源氏 二段目迄

後和田合戦 三段目迄 同年五月十九日

小夜中山鐘由來 同年七月十八日

組太夫出座。

太平記忠臣講釋 同年十月十六日

作者 近松半二・竹本三郎兵衛〔寛〕

四天王寺稚木像 同四年亥五月五日

夏祭浪花鑑 二度目 同年六月十二日

前花軍壽永春

同年八月四日

後關取千兩幟

作者 近松半二・竹本三郎兵衛〔寛〕

堺へ行、京へ行。

石川五衛門一代噺 同年十月十四日

同上〔寛〕

京都太夫不殘下り相勤。

泉州小田居茶屋
攝州殿下茶屋 三日 太平記 同年十二月十四日

同上〔寛〕

木々太夫。の太夫出座。

中太夫江戸より歸、政太夫と改名。

〔寶〕〔明〕には以下の竹本座の記事なし。

傾城阿波の鳴門 明和五子年六月朔日

名代 近松門左衛門。

此節、島太夫竹本にて出勤。鐘太夫。染太夫。君太夫。綱太夫等也。

きのふのお初
けふの徳兵衛よみ賣三巴 同年七月朔日

作者 近松半二。竹本三郎兵衛〔寛〕

初櫓操目錄 同年九月十四日

殿造千丈嶽とのづくり 明和六丑年八月朔日

同上〔寛〕

竹本豊竹打込にて、座本豊竹万三。

近江源氏先陣館 同年十二月九日

同上〔寛〕

再興、座本竹田新松。

近江かぶとのかざり太平頭整飾

明和七寅年五月廿二日

同六月十六日切に相止む。本不出。

廓の名は陸奥萩大名傾城敵討 同年八月十六日

敵討櫓樓錦上中下

同年九月廿一日

用明天皇 鐘入之段

出かたり、竹本鐘太夫、ツレ染太夫。文太夫。三絃鶴澤文藏。人形吉田才二。

切ニ穴意探

おどけ上るり、鶴澤友二郎。

近松門左衛門。竹本筑後。竹本播磨、冥途にて當時しやばの太夫三絃操方惣藝者の評よみ本
出来。〔安〕

忠臣藏
武士鑑
忠臣講尺
通矢數四十七本〔寛〕

外題年鑑

梶久
松山由縁の十徳

同年十一月十五日

此節、吉田文三郎江戸より登り、故人文三郎十三回忌追善出遣ひ所作事。

切 = 神靈矢口渡

此節、竹本春太夫スケニ出る。但し忠臣講尺道行。

十三鐘
綱懸柳妹脊山婦女庭訓

明和八卯年正月廿八日

此節、春太夫・染太夫・綱太夫・咲太夫・筆太夫・三根太夫・梶太夫等也。

今年四月下旬より、大坂表^{*}おかげ参りはやり候に付、あやつりに取組、出がたり出遣ひ也。

其外題左に、

つやのりと
艶祝詞太々神樂

同年五月

本不出。

いろがはせ
色爲替曲輪之通

同年七月

外題計、本不出。

彦三
古今朝迎三途雲

同年八月十一日

本不出。

亭主方東山殿櫻御殿五十三驛つぎ
上客一休禪師

同年十二月廿九日

座本 竹田榮藏。

此節、竹本大隅十七回忌、政太夫十三回忌追善として、切に古上るり、毎日取かへ十日ケ間
相つとむ。

大切におどけ上るり

雷らい太郎君代言業

麓太夫出座。

驍方武士鑑

明和九辰年四月廿八日

と見取淨瑠利
あへず

同年八月朔日

刀屋半七くわの初花

安永二巳年正月九日

達模だて様愛敬曾我

座本 竹田氏吉。本不出。

小田角髮(敷) 島原千疊鋪 同年八月廿一日

羽柴産髮
本不出。

三十二相刀双競 同年十一月五日

本不出。

性根競姊川頭巾 同三年四月六日

作者 近松半二〔寛〕。座本 竹田縫之助。

役者評判身振操 同年十一月六日

座本 近松半二。古上るりよせもの。本不出。

東海道七里艇梁わたし 安永四未年二月廿三日

座本 竹本義太夫。

鹽飽七島稚陣取しめく 安永五申年九月廿三日

座本 竹田万二郎。

日本歌竹取物語 安永六酉年二月朔日

座本 竹本染太夫〔寛〕

（〔安〕には以下の竹本座の記事なし。）

繁花地男鑑 安永八年亥七月廿六日

座本 竹本義太夫。

立春姫小松 安永九年子正月七日

座本 竹本義太夫。

新板歌祭文 同年九月廿八日

作者 近松半二。座本 竹田新松。太夫 竹本組太夫。

時代織室町錦繡 天明元年丑二月廿四日

染太夫出座。竹本義太夫座。

道具屋お龜 同二年寅六月廿六日

外題 年鑑

竹本内匠太夫出座。

新うす雪物語

同三年卯正月

加々見山舊錦繪

座本 竹本太市。江戸、竹本佳太夫出座。

伊賀越道中雙六 同年四月廿四日

作者 近松半二。

此節、竹本染太夫・同住太夫・同男徳齋名太夫事。同鐘太夫・鶴澤文藏・吉田才治・同冠藏等出勤。

比良嶽雪見陣立 同六年午六月五日

座本 竹本千太郎。

彦山權現誓助劔 同年十月十八日

政太夫・麓太夫・内匠太夫。

安徳天皇兵器貢 同七年未五月朔日

内匠太夫退座。三根太夫事竹本染太夫出座。

增補 織合團七嶋

同年六月十八日

本不出。

鬼一法眼三略卷

同年八月九日

麓太夫退座。

最明寺殿由緒礎さいみやうじ

同八年申十二月廿五日

豐竹錦太夫出座。本不出。此節太夫、竹本政太夫。同彌太夫。同唉太夫。同内匠太夫。同中太夫。和太夫事同氏太夫。

濱真砂千町封疆つみ

天明九改元。寛政元年酉九月廿三日

座本 竹本交治郎。本不出。

此節、豐竹麓太夫。竹本梶太夫。竹本鐘太夫。豐竹駒太夫。竹本綱太夫。森太夫事竹本三根太夫。野澤吉兵衛勤。

故豐竹駒太夫
十三回忌追善壇浦琴責

同年十月廿八日

出語、豊竹麓太夫・同駒太夫。

戀傳授文武陣立 同二年戌十一月十五日

座本 竹本徳松。

此節、竹本政太夫・竹本内匠太夫・竹本頼太夫・竹本越太夫。

太平嶋戸の船諷 寛政五年三月九日

横山郡領信行
小栗判官兼氏 照天姫操車

作者 豊田新助。

蝶花形名歌嶋臺。

○當流豊竹越前少掾

初は若太夫
と號す

大阪道頓堀にて、芝居興行の始めは元祿十二年の比成。井上宇治竹本等の先師達の淨瑠璃を語られたり。傾城懷内子、是新作の始め也。京都堺紀州南都等にも芝居を興行せられ、其後元祿十五壬午年より、道頓堀にて定芝居を勤らる。最初よりの新淨るり外題どもを集む。

東山殿子ノ日ノ遊 元祿十二己卯年三月十一日

宇治加賀掾古淨るり。

(以下佐々木大鑑迄「寶」になし。)

源三位賴政 同年五月六日

右同斷。

鎌倉袖日記

大職冠知略ノ玉取 同年七月十五日

井上播磨掾古淨るり。

傾城懷子ふとこうこ 同年八月廿八日

新作。

佐々木大鑑 同年十月十三日

竹本筑後掾古物。

外題年鑑

（以下西行法師墨染櫻迄〔寶〕に興行年月日なし。）

前末廣十二段*

元祿十五壬午年五月廿八日

切心中涙の玉の井*

作者 紀海音〔寛〕

前源氏烏帽子折（〔寶〕になし）

同年八月朔日

切金屋金五郎浮名ノ額*

東岸居士

同年九月九日

小野小町都年玉*〔寛〕

作者 紀海音〔寛〕

新百人一首

同年十月十五日

新板兵庫築嶋

元祿十六癸未年正月七日

作者 紀海音〔寛〕

（「寶」に「板」なし。坂上田村磨の次）

（「明」「安」には）

前
兵庫築島

切井筒屋源六戀ノ寒晒

今様殺生石
同年二月十五日

（「寶」には「今様」の二字なし）

當春、泉州堺へ行。x

井筒屋源六戀ノ寒晒
〔寶〕

坂上田村丸
（磨）
同年五月五日

今川了俊青砥刀
同年七月十五日

（「寛」以外は「今川青砥刀」）

信田森女占
（うらかた）
同年九月十一日

（「寛」以外は「森」を「妻」）

外題年鑑

熊谷三ツ子盃 同年十一月朔日

(「寶」は「盃」を「鑑」)

増補佐々木大鑑 元祿十七甲申年正月二日

(「寶」は「増補」を「新板」)

前東大全×

切^{*}八百屋お七歌祭文 同年二月十五日

當四月寶永と改元。×

いろはノ始千丈カ瀧 寶永元甲申年六月朔日

女長田^{おさだ}皐櫻 同年七月廿日

當秋、奈良へ行。×

傾城富士カ嶽 同年十月廿一日

美濃
近江寐物語 寶永二乙酉年正月二日

〔寶〕は角書なし

三井寺狂女

同年二月十五日

〔寶〕は「新板」を附す

泉州枕物語×

同年四月八日

傾城二河白道

同年七月十五日

曾我三部經

同年九月九日

播州曾根松

同年十一月廿八日

傾城躑躅カ岡

寶永三丙戌年正月九日

作者 清水三郎兵衛 〔寛〕

前紀三井寺開帳

同年三月四日

切男色加茂侍

作者 錦文流。これは筑後淨るり也。〔寛〕

外題 年鑑

前元服曾我 三段目迄（〔實〕になし）

同年四月十二日

切彌市
お高梅田心中

會根崎新地芝居にて。x

聖德太子舍利都 同年六月二日

前舍利都 三段目迄

同年七月十六日

切傾城千日ノ鐘

當秋より讃州より宮島へ行。x

増補富貴曾我 x 寶永四丁亥年正月二日

前増補日向景清

同年三月三日

切淨瑠璃古今序

（〔明〕〔安〕のみ、〔寛〕は後者を削除）

新日向景清 〔實〕

今様女袖鑑

同年五月五日

増補女袖鏡〔寶〕

頼朝七騎落 三度目〔寛〕 同年七月十六日

當秋、泉州堺より紀州へ行。x

（〔寶〕は「新板」を附す）

身替問答

同年十一月十八日

（〔寶〕は「新」を附す）

今様西行物語

寶永五戌子年正月廿日

前新利屈物語

同年三月三日

切腕久末の松山

秦始皇帝太夫松

同年七月十五日

山榊太夫戀慕湊みなと

同年十月十三日

外題年鑑

前 藍染川 三段目

〔寛〕〔寶〕なし

寶永六己丑年二月五日

切 敵討難波梅

* 富仁親王嵯峨錦

同年六月朔日

作者 紀海音 〔寛〕

前 嵯峨錦 三段目迄

同年八月廿三日

切 笠屋三勝廿五年忌

赤染衛門榮花物語

同年十月三日

賴光新跡目論

寶永七庚寅年正月二日

前 跡目論 三段目迄

同年三月廿日

切 心中戀の中道

佐與ノ中山夜泣ノ石

同年七月十四日

前 夜泣石 三段目迄

切 椀久熊谷笠

同年十月十六日

前 本朝五翠殿

切 淨るり古今序 〔寛〕 寶永八辛卯年正月廿日

前 五翠殿 三段目迄

同年四月八日

切 油屋お染袂の白綾

作者 紀海音 〔寛〕

當夏、堺へ行。×

北國源氏金の山吹 正徳元年辛卯九月九日

平安城細石 さいし 正徳二壬辰年正月十六日

前 藤戸ノ前陣 ×

同年四月八日

切 今宮丸腰連理松

前 しな信の源氏 ×

外題 年鑑

切新艘太夫丸

同年五月十七日

前松浦五郎×

同年七月十六日

切七枚起請吾妻雛形

八幡太郎東初梅 正德三年癸巳二月朔日

作者 紀海音〔寛〕（〔寶〕〔明〕は櫻）

傾城國性爺

同年五月六日

同上〔寛〕

當秋、京都四條へ行。×

仁德天皇万歳車 同年七月十五日

同上〔寛〕

前播州曾根松

同年十月十二日

切傾城三度笠

同上〔寛〕

會根崎新地芝居にて。×

鬼鹿毛武藏鎧

同年十二月朔日

同上〔寛〕

〔〔寛〕ハ「不佐志鎧」〕

小敦盛花鞆うっほ

正徳四甲午年四月朔日

當夏、泉州堺へ行。×

御前曾我姿ノ富士

同年七月十五日

愛子若罍箱

同年十月朔日

吉野忠信錦着長

正徳五乙未年正月廿日

前吉野忠信 三段目迄

同年五月五日

切傾城思舛屋×

外題 年鑑

記錄會我玉笄こうがいわけ鬘

同年六月二日

作者 戸川不鱗

〔寛〕（〔寶〕〔明〕は〔鬘〕を〔曲〕）

天智天皇豐年ノ秋 同年九月十日

是は筑後淨るり也。〔寛〕

鎌倉尼將軍

正徳六丙申年二月朔日

當七月享保と改元。×

花山院都巽

享保元丙申年七月十六日

作者 紀海音 〔寛〕

當冬 奈良へ行。×

甲陽軍鑑すかた今様粧

享保二丁酉年正月三日

同上 〔寛〕（〔寛〕は「今様」を「時世」）

西行法師墨染櫻

同年五月二十二日

作者 錦文流〔寛〕

照日前都姿 同年九月二十八日

鎌倉三代記 初日享保三戌戌年正月二日

作者 紀海音〔寛〕

今年、太夫本上野少掾藤原重勝と受領す。此節は、喜世太夫・方太夫・文太夫等相勤むる。

傾城吉原雀 同年八月朔日 十月閏有

今様賢女手習鑑 同年十一月五日

義經新高館 享保四年己亥正月廿日

作者 紀海音〔寛〕

神功皇后三韓責 同年五月十五日

同上〔寛〕

當秋、泉州堺へ行。

外題年鑑

業平昔物語

同年十月朔日

同上〔寛〕

鎮西八郎唐土船

享保五年庚寅正月二日

同上〔寛〕

富仁親王嵯峨錦

二度目 同年六月三日

日本傾城始

同年九月廿一日

同上〔寛〕

山榊太夫葭原雀

〔安〕〔寛〕

同上

三輪丹前能

享保六年辛丑正月廿日

同上〔寛〕

伏見常盤昔物語

同年五月十六日 七月閏有

吳越軍談比翼臺うてな

同年九月十一日

作者 紀海音〔寛〕

大友王子玉座靴

享保七年壬寅正月二日

同上〔寛〕

心中二ツ腹帶

同年四月六日

同上〔寛〕

當夏秋、堺より紀州へ行。

東山殿室町合戰

同年十二月朔日

同上〔寛〕

玄宗皇帝蓬萊鶴

同八年正月廿日

作者 紀海音〔寛〕 四段目出語太夫上野掾。

記祿會我（錄）

同年五月六日

外題 年鑑

同上〔寛〕

傾城無間鐘

同年七月十五日

同上〔寛〕

井筒屋源六戀ノ寒晒〔寛〕

作者 西澤一風・田中千柳。

日本五山建仁寺供養

同年十一月三日

同上〔寛〕

内匠事三輪太夫始て出座。

頼政追善芝

享保九年甲辰二月朔日 四月閏有

同上〔寛〕

此節、源太夫・喜世太夫・佐内等勤む。

○當三月廿一日、大坂中大火。芝居も類焼に付、四月廿三日より堺の芝居にて、建仁寺供養。

夫より又曾根崎新地にて、六月廿三日より、建仁寺供養。頼政追善芝。此節、道頓堀今の芝

居屋敷地を買求め、普請の間、秋中伊勢に立越、芝居相勤。九月下旬に大坂に立歸、新造の芝居にての外題。

女蟬丸

享保九年甲辰十月十六日

同上〔寛〕

切ニ昔米万石通

享保十年乙巳正月二日

同上〔寛〕

前淨るり女蟬丸、三段目迄。

南北軍問答

同年三月三日

同上〔寛〕

身替弓張月

同年五月六日

同上〔寛〕

和泉太夫。品太夫始て出座。

外題 年鑑

大佛殿萬代礎

同年十月二日

文耕堂〔寛〕

當冬京都に行、鎌倉三代記。

曾我錦几帳

享保十一年丙午二月朔日

作者 安田蛙文〔寛〕

新太夫始て出座。

北條時頼記

享保十一年丙午四月八日

來未正月閏有。

作者 西澤一風・田中千柳〔寛〕

切＝雪の段

太夫上野掾、ワキ和泉太夫。三絃野澤喜八郎。出遣ひ人形藤井小三郎・近本九八郎・中村彦三郎。此節、喜世太夫。品太夫。三輪太夫等相つとむ。

作者 西澤一風・並木宗助・安田蛙文。

清和源氏十五段 享保十二年丁未二月十五日

作者 並木宗助・安田蛙文〔寛〕

四段目攝待、太夫。ワキ。三絃右に同。ツレ品太夫。

攝津國長柄人柱 同年八月十五日

同上〔寛〕

切＝芦刈出語

太夫上野掾、ワキ和泉太夫。出遣ひ人形藤井小三郎。三みせん野澤喜八郎。

尊氏將軍二代鑑 享保十三年戊申二月朔日

同上〔寛〕

南都十三鐘 同年五月十五日

同上〔寛〕

當秋冬奈良ニ行。清和源氏・時頼記。長柄人柱。

後三年奥州軍記 享保十四年己酉正月二日

同上〔寛〕

藤原秀郷倭系圖 同年九月十日 九月閏有

同上〔寛〕

切に出語。太夫上野掾、ワキ和泉太夫。三みせん竹澤藤四郎。

蒲冠者藤戸合戰 同十五年庚戌正月廿日

作者 並木宗助。安田蛙文〔寛〕

切ニ出語。右に同。

本朝檀特山 同年五月六日

作者 西澤一風。田中千柳〔寛〕

切に出語。右に同。

楠正成軍法實錄 同年八月朔日

作者 並木宗助。安田蛙文〔寛〕

和田七人形に目のはたらく事を仕初る。

源家七代集

享保十六年辛亥正月二日

同上〔寛〕

切ニ女丹前出語。太夫上野掾、ワキ和泉太夫。三絃竹澤藤四郎。

和泉國浮名溜池

同年四月二日

同上〔寛〕

酒吞童子枕言葉

同年六月朔日

間の物出語。太夫左近、ワキ右近。三みせん野澤文次郎。

赤澤山伊藤傳記

同年十月十六日

同上〔寛〕

今度、天満橋三右衛門と云人始て幟一本進上す。

當九月三十日太夫本勅許受領越前少掾藤原重泰。祝儀出語、蓬萊山。太夫越前掾、ワキ和泉太夫。三絃竹澤藤四郎。

八百屋お七戀緋櫻 享保十七年壬子正月廿日

前鎌倉三代記 三段目迄

湊太夫始めて出座。

今様返魂香

(傾城反)

同年五月七日 五月閏有

待賢門夜軍

同年九月十日

當冬、和泉太夫。三輪太夫退座。

前吉野忠信 三段目迄 享保十八年癸丑二月二日

要太夫始めて出座に付、芝居の表に進物を始めて饒る。

切お初天神記

觀音廻り 出語。太夫越前掾、ツレ湊太夫。出つかひ人形藤井小三郎、三絃竹澤藤四郎。

鎌倉比事青砥錢

ひじ

同年四月十五日

作者 安田蛙文 (寛)

伊太夫出座。甘塩事。

秀伶人吾妻雛形

同年七月十六日

作者 並木宗助・同丈助〔寛〕

切ニ忠臣金短冊

同年十月朔日

品太夫、河内太夫と變名す。

北條時頼記 二度目 享保十九年甲寅正月二日

正面の床を横床になす。

切雪の段 太夫越前掾、ワキ河内太夫。三絃竹澤藤四郎。出遣人形藤井小三郎・同小八郎。

中村勘四郎。

曾我昔見臺

同年六月朔日

作者 並木宗助・同丈助〔寛〕

新太夫江戸へ行。

那須與市西海硯

同年八月十三日

同上〔寛〕

當冬伊太夫退座。

南蠻鐵後藤目貫

享保廿年乙卯二月七日

清和源氏十五段

同年二月十二日

攝待。太夫越前掾、ワキ河内太夫、ツレ湊太夫。】

万屋助六二代衾〔補〕

同年五月六日

作者 並木丈助〔寛〕

荻萱桑門築紫どろしん（筑）いしと轡

同年八月十五日

駒太夫初て出座。

和田合戦女舞鶴

同廿一年丙辰三月四日

作者 並木宗助〔寛〕

安部宗任松浦登きぬかま

元文二年丁巳正月十五日

同上〔寛〕

釜淵双級巴どろえ

同年七月二十一日

同上〔寛〕

綿武事わたぶ、和佐太夫初て出座。

前蟬丸 二度目〔寛〕 同年七月二十一日 十一月閏有

傾城無間鐘 二度目〔寛〕 來午正月二日

丹生によの山田青海劔

元文三年戊午四月八日

作者 並木宗助〔寛〕

右の淨るり暫く相勤、芝居普請に付、五月六日より會根崎新地にて、和田合戰と八百屋お七戀緋櫻を勤めし内に、普請成就し、新造芝居にて、七月十五日より又丹生の山田を相勤む。

新宅祝儀出語

太夫越前掾、ワキ湊夫夫。駒太夫。三味せん竹澤藤四郎。

前鎮西八郎

茜染野中の隠井戸 あかねぞめ 同年十月八日

作者 原田由良助〔寛〕

要太夫死す。

奥州秀衡有髮塚 (髻) 元文四年己未二月朔日

作者 並木宗助〔寛〕

佐渡太夫出座。

建仁寺供養 二度目〔寛〕 同年五月六日

湊太夫退座。

狭夜衣鴛鴦劔羽 同年八月十五日

同上〔寛〕

當冬、堺へ行。和田合戦女舞鶴。

鷗山^{ひばり}姫捨松

元文五年庚申二月六日

同上〔寛〕

佐渡太夫退座。

本田義光日本鑑

同年四月十日 七月閏有

袖太夫出座。

武烈天皇

みなよをほひ 艤

同年九月十日

作者 爲永太郎兵衛〔寛〕

文字太夫出座。

^(狭)佐手彦の人形眉毛うごく事を仕初る。

本朝班女扇

元文六年辛酉三月四日

同上〔寛〕

外題 年鑑

前淨るり 後三年 三段目迄

青梅擇食盛 つはりさかり 二度目 同年五月二十一日

作者 紀海音〔寛〕 二ツ腹帶也。

播州皿屋鋪 同年七月十五日

作者 爲永太郎兵衛・淺田一鳥〔寛〕

河内太夫、駿河太夫と變名す。

田村麿鈴鹿合戰 同年九月十日

作者 淺田一鳥・豐田正藏〔寛〕

内匠太夫再勤。

當冬より、太夫元越前少掾。駒太夫、江戸豊竹肥前掾芝居へ行。

百合稚高麗軍記 寛保二年壬寅三月三日

作者 爲永太郎兵衛〔寛〕

切ニ宮嶋八景出語

州太夫内匠太夫、ツレ文字太夫。三絃野澤喜八郎。

道成寺現在（蛇鱗）

同年八月十一日

越前掾。駒太夫、江戸より歸り勤む。

鎌倉大系圖

同年十一月二日

作者 爲永太郎兵衛 〔寛〕

來亥春、南都に行。大系圖。釜淵。駿河太夫退座。

風俗太平記

寛保三年癸亥三月四日 四月閏有

同上 〔寛〕

久米仙人吉野櫻

同年八月朔日

同上 〔寛〕

潤色江戸紫

延享元年甲子四月二日

同上 〔寛〕

柿本紀僧正旭車 同年九月十日

同上〔寛〕

道太夫・春太夫出座。和佐太夫。柚太夫退座。

遊君衣紋鑑^{ゆうくんえもん}

同年十二月二日

詩近江八景^{からうた}

延享二年乙丑二月朔日

作者 淺田一鳥・爲永太郎兵衛〔寛〕

増補大佛殿万代礎 二度目〔寛〕 同年五月四日

陸奥太夫出座。

浦島太郎倭物語 同年八月五日 十二月間有

作者 淺田一鳥・爲永太郎兵衛〔寛〕

北條時頼記 三度目 延享二年乙丑十一月三日

式三番三を勤む。伊勢太夫始て出座。

切雪の段

出語。越前少掾太夫元一世一代六十五歳、ワキ内匠名改上野掾。三絃野澤喜八郎。出遣人形
藤井小八郎・同小三郎・若竹藤九郎。

酒吞童子出生記 同三年丙寅五月六日

作者 梁塵軒〔寛〕

當秋、京行、越前掾一世一代、久米仙人吉野櫻。

花筏巖流島 同年十一月三日

裾重紅梅服 つまごそで 延享四年丁卯二月十三日

作者 淺田一鳥・但見彌四郎〔寛〕

紋太夫事上總太夫出座。

万戸將軍唐土日記 まんご 同年三月廿二日 (〔寶〕〔明〕〔安〕は四日)

同上〔寛〕

鐘太夫初出座。上野文字太夫退座。

惡源太平治合戰 同年七月十五日

作者 淺田一鳥〔寛〕

四段目に操踊を仕始る。人形方、豊松・若竹・藤井等。】

容競^{すげ}出入湊 延享五年戊辰正月二日

作者 並木丈助・淺田一鳥〔寛〕

升太夫出座。陸奥太夫退座。

東鑑御狩卷 同年七月十五日 十月閏有

同上〔寛〕

當十月太夫元堺にて一世一代を勤む。東鑑と惡源太。

攝渡邊橋供養 寛延元年戊辰十一月十四日

同上〔寛〕

陸奥此太夫。島太夫。百合太夫。友太夫。阿曾太夫等出座也。

駒太夫江戸へ行。上總太夫。道太夫。元太夫。春太夫等は退座也。當冬床改り、出勤の太夫此太夫。島太夫。伊勢太夫。榊太夫。百合太夫。鐘太夫。阿曾太夫。狩野太夫等也。

前橋供養 二段目迄

寛延二年己巳三月廿六日

八重霞浪花濱荻

前花和讃新羅源氏 同年七月十五日

前斗り替る。

切に操大踊。いせ音頭、茶屋掛あんどろ、雀踊の仕出し珍重。

右 ^{しるし} の趣向は三月十八日十九日の事也。廿日に外題を出し五六日の間に出来。作者並

木丈助及び惣役者中の働、前代未聞。

^{十帖}源氏物語ぐさ太郎 同年十一月四日

作者 浅田一鳥・浪花三藏 [寛]

駒太夫江戸より歸り、伊勢太夫江戸へ行。八重太夫初て出座す。

當九月廿三日、此太夫事勅許受領。筑前少掾藤原爲政。祝儀に出語を勤む。

切 =) 追善惣太夫出語 來午三月十八日より

梅川夏楓連理枕 寛延三年庚午六月朔日

同上〔寛〕

和田合戦女舞鶴 二度目 同年八月七日

島太夫、若太夫に改名。和歌八景出語。

玉藻前曦袂 同四年正月十五日

作者 浪岡橋平。安田蛙文〔寛〕

浪花文章夕霧塚 同年四月廿五日 六月閏有

同上〔寛〕

頼政扇子芝 二度目 同年七月十五日

水操。切に踊。

日蓮聖人御法海 同年十月十日

百合太夫退座。

一谷嫩軍記

寶曆元年辛未十二月十一日

作者 淺田一鳥・古人並木宗助〔寛〕

並木宗輔名殘作。來申の盆より切に踊。

此時出勤の衆、八重太夫時太夫と名改、筑前掾・駒太夫・阿曾太夫・友太夫・若太夫・鐘太夫・信濃太夫、以上八人今度より出座。

倭假名在原系圖

同二年壬申十二月七日

作者 淺田一鳥・豐竹甚六〔寛〕

森太夫・志賀太夫出座。友太夫退座。

雄結をとこむすび 勘助島

寶曆三年癸酉七月廿八日

苅萱桑門筑紫轢

二度目 同年十月朔日

十七太夫出座。信濃太夫・志賀太夫退座。

相馬太郎孝文話みはえ〔談〕

同四年甲戌二月廿一日 二月間有

作者 並木永輔・豊竹千路〔寛〕

前義經腰越狀

同年七月廿九日

切釜淵双級巴 二度目

天智天皇苅穂菴 同年十二月十五日

作者 並木永助〔寛〕

森太夫退座。

當冬、伊勢太夫江戸より歸り新太夫と變名す。阿曾太夫江戸へ行。伊豆太夫・武太夫始て出座。

三國小女郎曙櫻 同五年乙亥四月廿一日

作者 難波三藏・豊竹上野〔寛〕

双扇長柄松 同年七月七日

作者 並木永助・豊竹上野〔寛〕

切に操踊。當秋堺へ行。後三年奥州軍記。

後三年奥州軍記 二度目〔寛〕同年十一月朔日

鰯太夫始て出座。

義仲勳功記

寶曆六年子三月十八日 十一月閏有

作者 淺田一鳥・豐竹應律〔寛〕

切亂菊枕慈童 藤井小八郎。

甲斐源氏櫻軍配 同年閏十一月朔日

同上〔寛〕

諏訪太夫始て出座。

寫^{うつしゑすがた}儘 足利染

寶曆七年丁丑正月廿六日

同上〔寛〕

（〔寶〕に以下の豊竹座の記事なし。）

外題 年鑑

前九年奥州合戦 同年三月廿日

作者 並木宗助・安田蛙文〔寛〕

清和源氏十五段 三度目〔寛〕 同年八月朔日

筑前掾一世一代暇乞、山伏攝待出語りをつとむ。ワキ鐘太夫、ツレ時太夫事今度名を改、此太夫。

祇園祭禮信仰記 同年十二月五日より丑寅卯三年越勤む。

作者中村阿契・淺田一鳥 寛

此節出勤、若太夫・駒太夫・鐘太夫。此太夫。十七太夫。伊豆太夫・伊勢事新太夫と名改。驚太夫。恒太夫初て出座。

^{つゝむ}芽源氏鶯塚 寶曆九己卯年三月三日

作者 淺田一鳥・豊竹應律〔寛〕

此節久米太夫・喜美太夫・豊太夫初て出座。十七太夫。恒太夫。人形藤井小八郎江戸豊竹座
(肥前)
へ行。

難波丸金鷄（こがね）

同年五月十四日

作者 中村阿契〔寛〕

當冬、筑前掾一世二代に堺へ行。

先陣浮洲巖（うきす）

同年十二月七日

作者淺田一鳥〔寛〕

十七太夫。諏訪太夫江戸より歸る。

櫻姬賤姬櫻

寶曆十庚辰年三月十二日

攝津國長柄人柱 二度目 同年八月十五日

祇園女御九重錦 同年十二月十一日〔寛〕は十二日

作者 若竹笛躬・中村阿契〔寛〕

加賀太夫。鶴太夫。喜代太夫始て出座。新太夫。伊豆太夫。諏訪太夫。喜美太夫退座。
寶曆十一辛巳年二月十四日、芝居類焼につき、曾根崎新地芝居にて、

前一谷嫩軍記 二段目迄

切八重霞浪花濱荻 二度目 〔寛〕 三月十一日

筑前掾暫く助に出る。

祇園女御九重錦 二度目 〔寛〕 四月十九日

同所にて。

おはつ曾根崎模様 五月十八日
徳兵衛

同所にて。

人丸萬歲臺 はんせいのうてな 同年九月十日

作者 豊竹應律。福松藤助 〔寛〕

新造芝居祝儀。式三番三。半出遣ひ。

切、惣太夫出語り、高砂人形出遣ひ。

三好長慶碁軍記 きねだ(談) 寶曆十二壬午年二月廿四日

作者 梁塵軒 〔寛〕

岸姫松轡鑑

同年閏四月十八日

作者 豐竹應律。並木永助〔寛〕

當時出勤衆、若太夫。駒太夫。鐘太夫。麓太夫。氏太夫。品太夫。富太夫。采女太夫。淺太夫。八會太夫初て出座。此太夫。加賀太夫。久米太夫。豐松藤五郎。藤井小三郎伊勢へ行。

當九月より京へ行。

藤原秀郷倭系圖 二度目〔寛〕 寶曆十三年正月四日

當正月九日芝居類焼。堺へ行、京へ行。

（〔寛〕に此一行なし。）

洛陽瓢念佛〔寛〕 同年三月六日

新舞臺 三十石燈始よね 同年四月九日
式三番叟

新建芝居にて古淨るりよせ物。當夏秋、南都へ行。』

番場忠太紅梅簾 同年極月八日

駒太夫江戸へ行。

官軍一統志

同十四年申四月十日

當夏、堺へ行。

九月十三日越前掾死去す。行年八十四歳。

(鑑)
娘景清八嶋日記

明和元年申十月廿一日

越前追善、筑前掾相勤。豊竹若太夫退座。

伊呂波歌義臣兜

同年閏極月十七日

駒太夫江戸より歸出座。此太夫。若竹藤九郎江戸へ行。

しきしま操軍記

同二年酉三月十六日

内助手柄淵ないすけ

同年七月廿五日

當八月晦日切にて相續難成、歌舞妓芝居に成。

星兜弓勢鑑

明和四年亥正月三日

豊竹座再興。

麓太夫。十七太夫。恒太夫。組太夫。喜代太夫。當二月中旬より座中伊勢へ行。

同年四月八日より、古淨るり一段づゝ、札錢十文、追出し芝居に成る。錦太夫出座。

(「明」に以下の豊竹座の記事なし。)

壽永風 源平鶉鳥越 明和七寅九月十九日

豊竹座再興。座本豊竹此吉。太夫、鳥太夫。駒太夫。此太夫。時太夫。生駒太夫。入太夫。

柚太夫。房太夫。

北條時頼記 同年十一月十九日

座本 豊竹和歌三。

今年故越前少掾七回忌追善として、鉢木出語り。麓太夫相勤む。此節、此太夫。時太夫退座。

朝鮮 細見九州與治兵衛灘 明和八卯年正月廿三日

此節、竹本三郎兵衛出勤。此後都て新淨るり此人の作なり。』

お梅つのびないうらみの 久米之介 角額嫉蛇柳 同年五月廿三日

壇浦兜軍記

同年七月廿八日

切ニ 忠臣藏 道行。九段目

此節、竹本政太夫出座、忠臣藏九段目相勤。

梅の迎駕。籠死期茜染 同年八月十四日
由兵衛

嗚呼忠臣楠氏旗 同年十二月廿八日

茜 屋半七
みのや三勝 艷容女舞衣 明和九辰年十二月廿六日

岡太夫出座。

しのだ妻今物語

安永二巳年閏三月十五日

本不出。

釜淵双級巴

同年十一月廿二日

櫻鏢恨鮫鞘

綱太夫出座。

惣體北男鑑

安永三年十二月廿六日

本不出。

菅原傳授手習鑑

安永四年三月十日

豐竹嶋太夫一世一代。

此後、豐竹和歌三座斷絶故、新上るり不出。古上るり見どり物は迄に度々出れども、一切物故、略之。*

(〔安〕に以下の豐竹座の記事なし。)

船歌唐音しほぎ 汐境七草しほぎ 天明二年寅十月

名代 近松門左衛門。太夫 豐竹氏太夫。

此時、太夫、豐竹氏太夫・同文字太夫・同綱太夫。

釜淵双汲巴(級) 同年十一月八日

座本 近松門左衛門。

外題 年鑑

此節、内匠太夫・和佐太夫出座。網太夫・吉田文三郎退座。

石萬千五百
冊數四十七
廓景色雪の茶會 ちやのゆ 同七年未九月廿六日

座本 竹本千太郎・豐竹此吉。

東ノ芝居にて、豐竹此太夫・豐竹時太夫・竹本中太夫・竹本咲太夫・竹本政太夫・豐竹頼太夫・豐竹百合太夫・豐竹伊太夫。

からやまと
韓和聞書帖

同年十二月廿三日

座本 竹本千太郎・豐竹此吉。

此節、太夫、竹本政太夫・豐竹此太夫・豐竹時太夫・竹本中太夫。江戸、鶴澤三三事蟻鳳出勤。

初嵐元文嘶

寛政元年酉五月十日

本不出。

兒淵東軍記

同年七月十九日

本不出。

豐竹此太夫・竹本政太夫。

天王山杜鵑合戰 同年九月八日

本不出。

座本 豐竹此吉。

(以下〔安〕〔寛])

○北堀江市の側芝居

座本 豐竹此吉
太夫 豐竹此太夫

今年明和三戌のとし、北堀江市側にて、豐竹座新芝居興行。新淨るり外題左にしるす。

染模様殊脊門松 明和四亥年十二月十五日

駒太夫・此太夫・生駒太夫・時太夫・入太夫・氏太夫・八重太夫・光太夫・弦太夫・佐太夫・
櫛太夫。

忠孝大磯通 明和五子年九月廿二日

此節、鐘太夫出座。

助六 揚卷紙子仕立兩面鑑 同年十二月廿一日

四天王寺伶人櫻

明和六丑年二月廿四日

前上るり北濱名物黒舟噺

同年七月廿八日

後上るり雙紋刀巢籠

義經腰越狀

明和七寅年正月十五日

是は四段目丸一段、新作なり。

此節、道頓堀豐竹芝居にて、島太夫・駒太夫・此太夫三人にて新上るり興行。外題は道頓堀豐太の部に出す。此後堀江荒木芝居にて鐘太夫・此太夫にて、新上るり興行。外題奥に出す。

落標浪花筏

明和八卯年八月十日

本卦復昔曆

同年十二月廿五日

鐘太夫退座。

忠臣後日噺

明和九辰年四月七日

千種結舊繪艸紙

同年八月十九日

麓太夫出座。

後太平記瓢箪錄

安永元辰年十二月廿四日

攝州合邦辻

安永二巳年二月五日

綱太夫出座。

起請方便品伊達娘戀緋鹿子 同年四月六日
書置壽量品

此節、麓太夫退座。君太夫出座。

南無三寶極樂往來蓮奇初 同年七月
正三追善

本不出。

綱太夫相勤む。

呼子鳥小栗實記

同年八月廿七日

けいせい戀飛脚

同年十二月廿三日

綱太夫・君太夫退座。

外題年鑑

此節、一座會根崎新地芝居にて、右上るり相勤。

時太夫死去。麓太夫出座。

花襷會稽掲布染

(柄)

安永三年八月十三日

堀江へ戻り、興行、此節鐘太夫江戸より歸り出座。

軍術出口柳

安永四年正月廿九日

此節、鐘太夫死去。

倭歌月見松

同年九月八日

鯛屋貞柳歳旦閣

びらき

安永五申年正月廿二日

作者 近松半二出勤。

三國無双奴請狀

同年四月三日

作者 近松東南出勤。

蓋壽永軍記

同年九月八日

おはん桂川連理桐 同年十月十五日
長右衛門

此節、綱太夫死去。

唐丸新艘始

外題ばかり。尤本不出。

端手姿鎌倉文談 安永六酉年正月廿五日

伊賀越乗掛合羽 同年三月廿六日

置土産今織上布 同年五月十九日

融大臣鹽竈櫻花 同年八月十五日

女小學平治見臺 同年十二月廿六日

本不出。

御堂前菖蒲帷子 安永七戌年正月廿六日

以呂波讃州屏風浦 同年八月十六日
行狀記

妹脊結町家仙人 同年十一月十日より

あやつり顔見世。

田村丸鈴鹿合戦 三の切迄 同年十二月廿一日

風流戲曾我

夏浴衣清十郎染

今様亂拍子

麓太夫・時太夫・町太夫、鶴澤三二、^(重)豊松十五郎出がたり、出つかひ。

〔安〕に以下の市の側芝居の記事なし。

近江國源五郎鮎 同八年亥八月十三日

^{いまなごかり}今盛戀緋櫻 同年十月十九日

色嘶庚申待 同年十二月十九日

八重太夫出座。

東山殿幼稚物語 同九年子二月九日

稻荷街道墨染櫻 同年九月廿三日

後太平記
十三卷目 時代織室町錦繡 天明元年丑二月廿四日

碁太平記白石噺 同年 (十一月三十日)*

是は七つ目丸一段新作、此太夫場。

あひことは
合詞四十七文字 同年九月十三日

本不出。

此比、淨瑠璃評判閣の礫出板。

吾妻海道茶屋娘 同二年寅九月廿六日

此節、豐竹此太夫・豐竹頼太夫・豐竹村太夫・豐竹麓太夫・豐竹梶太夫等出勤。若竹友五郎
死す。

義仲勳功記

同三年卯（三月十五日）

近頃河原の達引

豐竹八重太夫勤む。

（太平記）

太平義臣礎

同四年辰正月二日

本不出。

豐竹氏太夫死去す。

木下蔭狹間合戰

寛政元年酉二月廿一日

此太夫・麓太夫・駒太夫・時太夫。

博多織戀錆おき

同年五月九日

座本豐竹此母。此節床改り、豐竹此太夫・豐竹内匠太夫・豐竹彌太夫・豐竹中太夫等出座、
豐竹麓太夫・同駒太夫・同時太夫退座。

有職鎌倉山

同年八月十五日

弓太夫事豐竹岡太夫出座

星月夜百人上臈 同二年戌 (五月八日)

近江八景石山遷 同 年

彫刻左小刀 同三年亥三月四日

江戸豐竹紋太夫出勤。伊太夫事鐘太夫と改。

會稽故鄉錦 (寛政五年三月廿三日)

甲斐
信濃世話兩國志

花楓都模様 *もみぢ 寛政三年六月十一日

攝津國長柄人柱 * 寛政四年九月廿八日より

四段目まで。

切ニ義仲勤功記 三の切

一世一代、豐竹此太夫、三味線鶴澤寛治勤。

鼻手本給銀藏

同五年九月晦日より

顔見世座附。

(以下〔安〕〔寛〕)

○大坂取々新淨留利混雜

須磨内裏^{ふたご}勢

寶曆十四年申の正月三日

北の新地、北本和泉座。

正保^{けほ}四年粧^は水絹川堤

明和五子年二月十五日

あみだ池門前、座本幾竹島吉。

小^春治兵衛中元噲掛鯛

明和六丑年七月廿八日

同東の芝居、座本竹本綱太夫。

東口咄^{くち}西口噲^{くち}傾城浪花おだ巻

明和五子年十月十四日

同門前、幾竹座。

振袖天神記

明和六丑年正月廿七日

道頓堀角の芝居、座本竹本義太夫。

連官三番叟

れんくわん

明和五子年九月

關取二代勝負附

同龜谷芝居、座本並木正三。

夏衣裳鴈染

明和七寅壬年六月廿二日

同芝居にて、座本竹本春吉。

聖德太子利生の池水

同年八月十二日

同座にて。

小いな廓色上
半兵衛

明和五子年十一月十九日

あみだ池東の芝居、竹本綱太夫座。

榊重浪花八文子

(字)

明和六丑年二月十二日

同座にて。

初物八百屋献立 同年

同座にて。本不出。

平家義臣傳

同座にて。本不出。

勇將兼道 魁鐘岬 明和七寅年十二月十五日

同芝居にて、座本豊竹若太夫。

園生の竹本 明和六丑年九月廿九日

道頓堀鰯谷芝居、竹本義太夫座。

時代時畫 世話模様 いろは藏三組盃 安永二丑七月廿八日

北新地芝居、座本竹本染太夫。

心中紙屋治兵衛 安永七年四月廿一日

同芝居。座本竹田万二郎。太夫、竹本染太夫。染太夫・政太夫・梶太夫・咲太夫・彦太夫・文字太夫。

道中龜山噺

同年七月十七日

同座。

往古曾根崎村噺

同年九月廿三日

同座。

政太夫退座。

（「安」に以下の記事なし。）

假名寫阿土問答

安永九年正月四日

竹本染太夫座。

檻樓錦今様織留

天明元年丑九月十八日

堀江西之芝居。座本竹田新松。

外題 年鑑

太夫、竹本政太夫・男徳齋・彌太夫・卷太夫・中太夫。

此淨瑠璃は先に古淨るり敵討つゞれの錦興行の所、古今の大あたりに付、大安寺堤の段より先増補にて丸新作也。

替唱歌糸の時雨 同二年寅三月

北新地芝居。竹本染太夫・氏太夫・綱太夫。

女節用操鏡 同三年卯四月

北の芝居にて、竹田新松座。本不出。

太夫、竹本組太夫・豊竹駒太夫・竹本彌太夫・豊竹磯太夫。

年忘長生噺 同年七月

竹本男徳齋勤。

大功艶書合 同七年未十月十九日

道頓堀竹田芝居にて、座本竹本万作。豊竹麓太夫・竹本内匠太夫・竹本磯太夫・竹本染太夫

竹本彌太夫。

近松半二死去。

碁太平記白石噺

同八月十二日

北の新地芝居にて、座本豊竹此吉。太夫、豊竹此太夫・豊竹頼太夫・豊竹百合太夫・豊竹時太夫・鶴澤寛治。

晴勝負万兩器物

(天明八年八月十五日)

陸竹常吉座。北の新地芝居にて。

(以下「安」「寛」)

○江戸

錫どくご 鋤駄六一代咄

安永三年九月三日

義經新含狀

延享元年三月

東金茂右衛門とうがね

明和六年六月七日

吉野合戦名香兜

寶曆十四年正月二日

外題 年鑑

神靈矢口渡

明和七年正月十六日

弓勢智勇湊

明和八年正月二日

源氏大草紙

明和七年八月十九日

鎌倉山釣翠勝闌
(縁)

安永四年正月四日

時代世話女節用

明和六年七月十九日

吉野靜一目千本
(人)

安永四年正月二日

蝦夷錦振袖雛形
えぞ

明和六年三月十六日

忠臣いろは實記

安永四年七月十五日

初冠賤束帶
ういかうぶり

安永四年五月廿八日

前太平記古跡鑑

安永三年正月十三日

櫻姫操大全

安永五年正月二日

江戸自慢戀商人

安永六年三月

増補河内通

初冠の外題がへ。

志賀の敵討

驪山比翼塚 うぐろ〔寛〕安永八亥七月二日

肥前座。

累物語 〔安〕

和泉の三郎

八幡の太郎

關取石の鳥井

當世模様往古噺

往昔
模様龜山染

嫩寮葉相生源氏 わかほのりどり、安永二年四月晦日 〔寛〕

外題年鑑

新太夫座。〔寛〕

けいせい扇富士 明和七年八月朔日

新太夫座。〔寛〕

（以下「安」は外題のみ。）

糸櫻本町育 安永六年三月十一日

新太夫座。

（「安」にはこの次に日蓮記見硯とあり。）

戀娘昔八丈 安永四年九月廿五日

新太夫座。

（「安」には以下の江戸の記事なし）

色揚瀬川染 安永五年二月廿三日

新太夫座。昔八丈後編。

伊達競阿國戲場かよき 安永八年三月廿一日

肥前座。

増補會稽山

けいせい 扇富士外題がへ也。

和泉式部軒端梅

明和三年

肥前座。駒太夫出座。大當り也。

壽萬歲嶋臺

安永四年

新太夫座。若太夫勤。

東歌名物男

東唄操文章

天明七年三月

薩摩外記座。

増補腰越狀

肥前座。

外題年鑑

後日菅原

汐境七草双紙

納太刀譽鑑

安永八年七月末日

新太夫座。

靈驗宮戸川

同九年三月三日

肥前座。

碁太平記白石噺

同九年正月二日

新太夫座。紋太夫・八重太夫・島太夫。

裙重血紅跣ちしほのあかばね

同九年正月廿五日

肥前座。

むかし唄今物語

天明元年正月二日

肥前座。

鎌倉三代記

天明元年三月廿七日

肥前座。

万代會我二番目

おちよ半兵衛

天明元年丑七月

肥前座。

荒御玉新田神德
(靈)

安永八年二月八日

結城座。

万代會我二番目

お夏清十郎

天明元年七月

肥前座。

万代會我二番目

お半長右衛門

天明元年丑七月

肥前座。

加々見山舊錦繪

天明二年寅正月二日

新太夫座。

伊達娘戀緋廬子

天明元年卯正月二日

肥前座。

七草若菜いさほし功

同二年七月十五日

肥前座。

伽羅先代萩

同五年正月

結城座。

石田詰將棊軍配

同三年卯正月二日

肥前座。竹本政太夫・紋太夫・越太夫。

内百番富士太鼓

同年十月廿五日

肥前座。竹本政太夫。

おしゅん*
傳兵衛 近頃河原の達引 同五年九月九日

肥前座。

花上野譽の石碑

同八年八月廿一日

肥前座。竹本住太夫・同政太夫・豊竹村太夫・三輪太夫。

此節、薩摩座豊竹新太夫死去に付、座本竹本折太夫座と替る。

筆始いろは曾我

寛政三年亥二月

薩摩座。

(以下「安」「寛」)

○京 都

浪花の地染増補女舞劔楓 明和元申八月四日
洛陽の潤色

座本 扇谷豊前掾。

都朗詠 住吉誕生石 寛延元辰九月三日
東管絃

外題年鑑

竹茂都大隅。

咲分赤間關

明和四亥九月九日

竹本義太夫。

小田館雙子日記

明和七寅八月十一日

扇谷和歌太夫。

競伊勢物語

安永四未八月十二日

豐竹嶋太夫。

此上るりは、大坂中の芝居嵐松二郎座に致せし歌舞妓狂言なり。嶋太夫・春太夫相勤む。
(以下「安」になじ。)

源平二張弓

明和(四年五月十四日)

本不出。

*富士日記菖蒲刀、明和二年五月十七日

竹本義太夫座。

佐々木高綱武勇日記 安永七年二月朔日*

竹本義太夫座。

本不出。

伽羅千代萩 同年九月*

三段目まで淨るり出來。太夫、竹本春太夫。此時、竹本春太夫一世一代、花景圖都鏡相勤む。

荳菴桑門筑紫轢 同八年

豐竹嶋太夫一世一代。

* 曠勝負廊環（いれ ぐだまき）

安永二年壬三月廿一日

竹本岡太夫。

（以下〔安〕〔寛〕）

○よみ本上るり*

宇賀道者源氏鑑 寶曆九卯正月

外題年鑑

木曾冠者旭系圖

同年七月

櫻井御前
斑女御前
都鳥東古跡

明和三年三月

誓義士三人次郎

(治)

明和四亥六月

假名雜後日菅原

まじり

同年八月

源氏の弓流
平家の矢合
船軍凱陣兜

ふないくさ

明和八卯三月

聖德太子
守屋大臣
四天王寺伽藍鑑

(藍)

寶曆七年四月六日

座本大松百介。並木正三作。

競伊勢物語

安永四未四月五日

中の芝居。座本嵐松二郎。

平家朗詠
源氏管絃

相生轡の松

安永七年九月

(以下〔安〕になし)

花飾三代記

天明元年丑八月

是は先に興行の佐々木高綱也。

花櫓名取關

下總國かさね説

安永八年亥八月

今昔妹脊腹帶*

寶曆十三年未三月

宮蘭豊前座。

亂曲扇拍子

越後座。

○豊竹伊太夫事鐘太夫・豊竹和佐太夫事若太夫・竹本町太夫事春太夫・豊竹弓太夫事岡太夫・
竹本森太夫事三根太夫・竹本葉太夫事倭太夫・竹本武太夫事鐘太夫・竹本濱太夫事綱太夫・
竹本三根太夫事染太夫・竹本重太夫事咲太夫・竹本和太夫事氏太夫・竹本梶太夫事染太夫。

作者 一 樂子

淨瑠璃大系圖

淨瑠璃大系圖序

人生^{なまれ}ながらにして知者^{しよ}なし。師^しの教導^{せうたう}を得て而後^{しかう}に知^し。是^{こゝ}を以^{もつて}古人^{こじん}も弟子^{でし}七尺^{しちせき}去^さて師^しの影^{かげ}を不踏^{ふたふ}の誠有^{まことあり}。竹本小鷹翁^{たけもとこたかおきな}世上^{じやうじやう}の淨瑠璃者^{じやうるりしや}流^{りう}又は三絃家^{さんげんか}等の來由^{らいゆ}をも不辨^{ふへん}輩^{はい}多^{おほ}を歎^{なげ}き、淨瑠璃三絃^{さんげん}の系譜^{けいふ}を著^{しよ}さん事^{こと}を老僕^{らうはく}に識^しる。己^{おのれ}亦^{また}多年^{たふねん}此宿志^{このしよし}あり。依^よて欣喜^{きんし}に不堪^{ふかへん}、翁^{おきな}と俱^{とも}に志^しを合^{あは}し諸家^{しよか}の傳記^{でんき}を探^{たづ}り、遠^{とほ}く尋深^{じん}く考^{かう}て此冊子^{このさんし}を編^{あみ}、淨瑠璃大系圖^{じやうるりだいけいず}と題^めす。是^{こゝ}若^{わか}き輩^{はい}に師^しの傳來^{でんらい}元祖^{げんそ}の苦心^{くしん}をも知^しせ、萬^{よろず}一の恩^{おん}を報^{はう}する便^{べん}とし、且^{かつ}は此道^{このみち}執心^{しよくしん}の人々^{のひと}の寐覺^{みかく}を慰^{なぐさ}むる種^{かたが}ともならんかとの老婆心^{らふしん}のみ。乞^こ後^ごの君子^{くんし}、小鷹翁^{こたかおきな}と老僕^{らうはく}が微意^{ゐい}を扶^{たす}け、誤錯^{ごさく}を正^{ただ}し闕^かたるを補^{おぎな}ひ給^{たま}はゞ、大幸^{だいしやく}何^{いか}か是^{こゝ}に如^{ごと}ん。因^よて一言^{いちごん}を卷端^{くわんたん}に述^のて序辭^{しよじ}とする事^{こと}爾^{なり}。

天保十三壬寅年仲秋日

凡 例

一 都て系譜のならひにて筋の混雜をいとふが故、古き師の門人は末になり新しき人の門人は先になれり。見る人は是を察して新古の順列前後になりしを怪しみ給ふ事なかれ。

一 系譜の内當時在世の師の門人の後をあげ餘紙を残すは、追々門弟衆の付たらん時記し加ふべきためなり。

一 多人數の事ゆへ稀には時代前後の誤も有べく、又は遠國にのみ在て名のしれざる人々は名前をもらしたるも有べし。其は考訂するにいとまあらざる故なりと見ゆるし給ふべし。

淨瑠璃大系圖卷之上

竹本筆太夫小鷹翁考

近松狂言堂春翠子訂

淨瑠璃惣開祖

○小野於通女

生國姓氏詳ならず。初織田信長公の侍女たり。後に豐太閤の侍女となる。博學秀才のきこえ有をもつて北政所高臺院殿の御所望により、三州矢矧の長者の女淨瑠璃女ひよめが源の牛若丸に懸想せし始末をつより長生殿十二段の物語を著す。一名淨る理物語ともいへり。

此淨瑠璃女は三州峯の藥師の告子もちこなる故即ち淨瑠璃女と名付し也。此因にて藥師の十二神將に表し十二段を述作すと謂いり。北政所其文の秀たるを感じ給ひ琵琶法師を召れ是にフシ草を付させてかたらせ給ふ。其頃はいまだ三絃さんせんに合すといふ事もなく、右の手の爪さきにて扇の骨をかきならし拍子をとつてかたりたりといへり。其後泉州堺の盲人角澤

檢校はじめて三絃に合せて是をかたり出せしより世に淨る理節といひふらせし故此曲の惣名となりしとぞ。此於通は秀才の上御家流の能書のまじよにて其頃女筆の冠たりしかや。上野國利根川の北なる杵村何かし寺に右於通の墓あり。寺號並法名追て考べし。

○右の義をもつて小野於通を淨瑠璃の惣開祖と仰になん。

淨瑠璃並三絃惣元祖

○^{*}角つゝ澤さわ檢校

泉州堺の盲人、豐太閤の北政所の命によつて於通が述作の長生殿十二段の物語を三絃に合してかたり初む。續て、大職冠・八島・高館等の唱歌にフシ章を付てかたり出し、世に淨る理ブシといひならはせしより惣名となる。たとへば山姥の事を作たる物語にても、フシ章を付て三絃に合せば淨る理かたるといふがごとし。

―目貫屋長三郎

○京都東洞院二條上ル町に住す。角澤氏の門人となりて淨る理をかたり弘め、みやこいかり自分に都巡見物左衛門といふ淨瑠璃を新作してかたり、其余一代の中種々の新作して、世にかたり弘む。

淨瑠璃大系圖

江戸開發元祖

虎屋薩摩太夫

大坂の産又堺の人ともいふ。初め薩摩次郎右衛門といへり。角澤氏に淨る理を習ひ自分又色々フシ章を工夫し一流をかたり出す。後に豐太閤の臺命を蒙り、浪人ども人形操り芝居興行の砌、櫓目付として一座の太夫となり、色々新淨瑠璃をかたり出す。天正年中江戸へ出て大に流行し、門人あまたつき繁昌して淨るりブシいよ／＼世に弘まる。老年に及び剃髮して淨雲入道と號せり。今に江戸表に大ざつまブシ・小ざつまブシとてかたるは此薩摩太夫の遺流なり。

油屋茂兵衛 慶安の頃の人。江戸住。名人なり。

鳥屋次郎吉 江戸住。

四郎興吉 江戸住。

虎屋丹後太夫

江戸住。正保より慶安の頃。以上四人を四天王といふ。いづれも名人なり。

虎屋丹波太夫 江戸住。

虎屋源太夫

江戸住。京都開發元祖。

虎屋長門太夫

江戸住。

江戸半太夫 江戸住。當時江戸に遺流あり。門葉多し。

*坂本河東太夫 江戸住。河東プシとて遺流あり。

虎屋喜太夫

虎屋相模太夫

虎屋越後太夫

近江太夫語齋 江戸住。遺流あり。

江戸肥前太夫 同上。

江戸外記太夫 同上。遺流あり。

江戸土佐太夫 江戸住。

虎屋永閑太夫 江戸住。すべて江戸太夫遺流追考。

京都惣開發

○六字南無右工門

文祿年中女太夫。傳記詳ならず。追考後篇に出す。

說經與八郎

歌念佛

說經墓はち八太夫

說經林清

說經林故

說經林達

○山本角太夫

京都の人。一流をかたり出し角太夫ブシといふ。正保貞和の頃の人。山本土佐掾と受領す。

山本長太夫

○伊勢嶋宮内

正保貞和の頃の人、一流をかたり出す。

宇治嘉太夫

紀州の人。謡に妙曲にて美音なり。後に伊勢島氏の門人となりて一流をかたり出し、四條道場境内に於て常芝居興行す。後受領して宇治加賀掾藤原好澄と改名、門人に富松氏野田氏などあまた有といへども、當時此流斷絶によつて略す。京都二條川東の順妙寺に墓あり。

岡本文彌

一流をかたり出し、後江戸へ出て文彌ブシを弘む。

都万太夫、後に都越後掾と改名。

都太夫一仲

菅野傳彌改。

松本治太夫

宮古路國太夫

都半仲改。江戸へ出て一流をかたり出し常盤津豊後掾と改、豊後ブシを弘む。^{*}

富本^{*}豊前太夫

享和文化の頃の人。一流をかたり出す。世に富本ブシと云。

岡本阿波太夫 後鳴戸太夫と改。

鶴賀^{*}若狹掾

鶴賀新内 一流をかたり出す。世に新内ブシといふ。

鶴賀若狹太夫

○都て文彌・一仲・豊後・新内・富本・清本とも師弟の系譜追て考、後篇に出す。

鶴賀繁太夫 江戸新といふ。若狹太夫の末弟ながら大坂へ出て新内ブシを弘む。

大阪開發元祖

○井上 市郎兵衛

生國未詳。謡に妙曲の名を得られしが諸流の淨るりを學びて一流をかたり出す。世にハリマブシといふは此人のフシなり。寛文の頃の人。後に受領して井上播磨掾藤原要榮と改名す。

石屋 三右衛門

尾崎 權右衛門

貞享二年清水理太夫とともに竹屋庄兵衛と義を結ぶ因をもつて、義太夫ブシ三絃の元祖となる。角澤氏の澤の字をとり竹澤氏と改む。門人は三絃の部に記す。(六二四頁)

清水 理兵衛

天王寺村徳屋理兵衛といふ。安井天神社の傍に住し、風流を好み茶の湯生花又は淨る理を好み、折々芝居へも出勤す。名人ゆへ其頃今播磨と稱す。延寶年中の人なり。

道具屋吉右衛門 大坂の人。一流をかたり出す。世に道具屋ブシといふ。

表具屋又四郎 大坂の人。一流をかたり出す。世に表具屋ブシといふ。

井上市郎兵衛

當流元祖

竹本義太夫

攝州天王寺村堀越町農夫五郎兵衛といふ。清水理兵衛門人となりて晝夜寢食を忘れ丹誠を抽で修行せし故、程なく清水理太夫と改名し、宇治嘉太夫と同座にてかたられしが、此人天質の美聲にて、嘉太夫も此理太夫に押れおのづから不和になりける故、嘉太夫の銀主竹屋庄兵衛此理太夫を誘ひ、藝州宮島へ下り芝居興行せしに大當りをと、後大坂へかへり竹屋庄兵衛と義をむすぶ縁にて竹本義太夫と改名し、道頓堀大西の芝居を求めて竹本座の櫓を上る。是貞享二年の事也。されば此人を義太夫ブシ淨る理の元祖とす。元祿十四年巳五月 勅許受領し竹本筑後掾藤原博教と改む。されば大西の芝居を筑後の芝居と稱す。正徳四年午九月十日六十四歳にて寂す。法名道喜居士といふ。天王寺の南超願寺に葬る。

内匠理太夫

陸奥茂太夫むつのおも

多川源太夫

竹本頼母太夫 正徳五年乙未十一月、國姓爺くわんせうやる理の時九仙山の段をかたり初む。

竹本難波太夫

二ツ井彦太夫

東流元祖

○豊竹若太夫

大坂嶋の内幾竹屋何某、元祖義太夫の門人となり竹本采女といふ。元祿十五年道頓堀にて芝居を求め豊竹若太夫と改名し、一流を語出し櫓を上げて常芝居興行す。此人元來諺の名人にてしかも美聲なり。一二三ともに揃ひ殊更三の聲うるはしく、聞人感ぜずといふ事なし。眞に昔より若太夫ほどのマカンの音のすぐれたるは稀なりといふ。享保三戌年正月豊竹上野少掾重勝と受領改名す。同十六年亥十月上野掾京都へ上り おほけなくも禁廷へ召れ孫庇まごびさしのもとにて淨る理をかたり 叡聞に備ふ。櫻町院御感まし／＼即ち 勅許有て豊竹越前少掾藤原重安と受領す。殊更受領綸旨の奥に塵梁軒と 御書添賜はり、紙のはしに何某の大納言承之と小さく兩卿の御名前あり。越前掾今の若太夫の芝居にて、

此拜領の御綸旨鳥帽子裝束を白木の臺に乗せ舞臺の上段にかざり置、其前にて受領の祝儀淨る理をかたる。ワキ豊竹和泉太夫、三絃竹澤藤四郎也。延享三年丑十一月、六十五歳にて一世一代淨る理をつとむ。京、奈良にて同斷。明和元年九月十三日、八十四歳にて寂す。法名は一音院眞覺隆信日重居士と號す。天王寺西門の傍に古墳あり。門葉は中の卷に別記す。

二代目義太夫

若竹政太夫

大阪の人、紅屋長四郎といふ。又中紅屋ともいふ。正徳二年若竹政太夫と改名して、師匠義太夫の許しなれば豊竹座へ出勤す。其後竹本と改氏す。元祖筑後掾死去の砌遺言に依て二代目義太夫と改名す。享保二十年乙卯十一月受領、竹本播磨掾藤原喜教と改名。祝儀淨る理出かたり、三絃鶴澤友次郎。延享元申子年七月廿五日死去、行年五十歳。天王寺國恩寺に葬る。法名不開院乾外孤雲居士と號す。

豊竹万太夫

竹本彦太夫

北國丹太夫

竹本文太夫

長嶋重太夫

竹本喜太夫

竹本^{*}大和太夫

改内匠太夫、二代目義太夫門人なり。後に受領して大和掾と改名。門人奥に出す。

竹本^{きよ}幾世太夫

竹本政太夫

二代目なり。大坂さこばの人十兵衛といふ。依て十兵衛政太夫ともさこば政太夫とも云。

竹本錦太夫 錦武といふ。

竹本紋太夫 後に上總太夫と改名。

竹本友太夫

竹本土佐太夫 是より以下二代目政太夫門人なり。

竹本染太夫

初代。

竹本組太夫 御堂の前。

竹本政太夫

三代目也。中太夫改。住宅鹽町ゆへ鹽町政太夫といふ。中興の名人なり。

順四軒 順慶町四丁目に住す。さこば政太夫の高弟にて素人なれども名人なり。

竹本志賀太夫 京。

竹本住太夫

江戸。

竹本紋太夫 此村屋。倉太夫改。

竹本男徳齋

竹本綱太夫 初代。新ろうじといふ。

竹本咲太夫 男徳齋門人。金藏といふ。

竹本浪太夫 京よし源。是より以下住太夫門人

竹本半太夫 京。

竹本住太失 組太夫改。

竹本中太夫 是より以下鹽町政太夫門人なり。

二代目。新町中吉といふ。

竹本政太夫

四代目也。和太夫改、氏太夫又改名、藤助といふ。

竹本播磨掾

加太夫改土佐太夫。文政年中受領して改名。

竹本大和太夫 伊達太夫改。是より以下播磨掾門人。

竹本大隅太夫

三根太夫改。

竹本土佐太夫

音太夫改。

竹本住太夫

富太夫改、高麗太夫又改名。盲人になり無本にて出がたりす。

竹本越入太

宇太夫改、筆の太夫又改名。

竹本嶋太夫 文字太夫改。

竹本千賀太夫

竹本土佐太夫 柚太夫改、三輪太夫又改名。

竹本佐渡太夫 是より以下筆の越太夫門人。

竹本字太夫

竹本高麗太夫 歳太夫改。

竹本上總太夫

竹本早太夫

竹本音羽太夫

是より音土佐太夫門人。

竹本音太夫

竹本駒木太夫 是より音羽太夫門人。

竹本鯁^{しやち}太夫

竹本千里太夫 是より三根大隅太夫門人。

竹本大和太夫

竹本大嶋太夫

竹本富太夫

竹本氏太夫 是より以下四代目氏政太夫門人。

竹本絹太夫

淨瑠璃大系圖

竹本内匠太夫 和太夫改頼太夫、又改金兵衛といふ。

竹本組太夫

當司改藍玉といふ。

竹本勢見太夫

竹本恵見太夫 是より以下勢見太夫門人。

竹本宮太夫

竹本泉太夫

竹本盛太夫

竹本當磨太夫 是より以下藍玉組太夫門人。

竹本當能太夫

竹本玉太夫 金玉改。

竹本當勇太夫

竹本伊勢太夫

竹本力太夫

竹本染太夫

二代目。三根太夫改。八兵衛といふ。是より初代染太夫門人也。

竹本染太夫

三代目也。梶太夫改。

竹本是太夫

京。

竹本彦太夫

竹本絹太夫 京。大茂改。是より京是太夫門人。

竹本中太夫

式太夫改。岡嶋屋といふ。

竹本式太夫 京。

竹本藏太夫 ガシヨ。京。

竹本政太夫

五代目なり。重太夫改。是より以下中太夫門人。

竹本中太夫 江戸。政子太夫改。

竹本中太夫

佐賀太夫改。

竹本式太夫 河内。

竹本泉太夫 是より以下佐賀中太夫門人。

竹本光太夫

竹本文太夫

竹本谷太夫 是より以下五代目重政太夫門人。

竹本佐賀太夫

竹本信太夫

竹本頼母太夫

竹本琴太夫

竹本美能太夫 是より以下佐賀太夫門人。

竹本縁太夫

竹本梶太夫 三代目染太夫門人。菅太夫改。

竹本越太夫

初代也。三代目染太夫門人。柳屋といふ。

竹本越太夫 二代目也。江戸要太夫改。是より初代越太夫門人。

竹本武太夫

後に越太夫と改。

竹本伊佐太夫

竹本 文字太夫 武太夫門人。光太夫改。

竹本 越太夫 武太夫門人。和太夫改武太夫又改。

竹本 峯太夫 二代目染太夫門人。

淨瑠璃大系圖卷之上畢

淨瑠璃大系圖卷之中

○豐竹新太夫

是より以下元祖若太夫越前掾門人なり。享保十一年午二月初座、同十九年寅三月に江戸肥前座開發、元文中受領豐竹肥前掾藤原の清正と改名。

豐竹文太夫

豐竹和泉太夫

豐竹河内太夫

*チャリかたりの元祖。

豐竹三輪太夫

享保八卯年三月初座、後に竹本内匠太夫と改名、寛延元辰年十一月受領竹本大隅掾又同四年受領大和掾藤原宗貫と改名、有隣軒と號す。元祖内匠太夫なり。

○新太夫・三輪太夫門人は多筋混亂を憚り別に改め後紙に記す。(六二一・六一四頁)

豐竹伊太夫

元祖竹本義太夫門人陸奥茂太夫の弟子にて合羽伊太夫といへり。
享保十八年四月初座、寛延二年巳九月受領豊竹筑前掾藤原爲政と改名、元祖此太夫なり。天王寺西門の傍に墓あり。

豊竹若太夫

二代目なり。嶋太夫改

豊竹駒太夫

初代。

豊竹鐘太夫

豊竹喜代太夫 京。五こく改。

豊竹岡太夫

豊竹此太夫

二代目なり。時太夫改、八重太夫又改、錢屋といふ。

豊竹伊豆太夫

豐竹時太夫 是より以下二代目此太夫人。かさ五改。

豐竹八重太夫

平兵衛。

豐竹時太夫

錢屋。

豐竹此太夫

三代目なり。頼太夫改。

豐竹房太夫 京半改。

豐竹磯太夫

庄吉。

豐竹柚太夫 後に上總太夫と改。

豐竹鐘太夫 上町。

豐竹君太夫

京。嘉六改。

豐竹君太夫

君太夫門人。初太夫改。

豐竹勢勇^{せゆう}太夫 初君太夫門人。

豐竹八重太夫 庄吉礖太夫門人、八尾太夫改。

豐竹此太夫

同上。吾太夫改、時太夫又改、大平といふ。

豐竹此太夫 大平此太夫門人。以下同。

吾太夫改、時太夫又改、藤吉といふ。

豐竹礖太夫

豐竹久太夫

豐竹代々太夫 賴此太夫門人。

豐竹家太夫 同上。

豐竹柴太夫 錢屋時太夫門人。

豐竹町太夫

豐竹八重太夫

平兵衛八重太夫門人。湊太夫改。

豐竹麓太夫

湊八重太夫門人。湊太夫改。

豐竹八重太夫

桑太夫改。湊麓太夫門人。以下同斷。

豐竹湊太夫 悴、和佐太夫改。

豐竹三木太夫

豊竹橋太夫 衆八重太夫門人。以下同斷。

豊竹薫太夫

豊竹八尾太夫

豊竹久米太夫

豊竹組太夫

是より以下岡太夫門人。うつほ。

豊竹頼太夫 米屋。

豊竹彌太夫

紙屋後に竹本と改。

豊竹春太夫 町太夫改。ねづみ屋といふ。

豊竹塚太夫 筆五。

豊竹むら太夫 江戸。

豊竹七太夫 江戸。

豊竹大太夫

豊竹菊太夫

豊竹岸太夫

竹本岡太夫 是より以下彌太夫門人。

竹本千賀太夫

竹本友太夫 の大。

竹本文字太夫

竹本彌太夫

二代目也。磯太夫改、長七といふ、平のぶ。

竹本筆太夫

千代太夫改。

竹本錦太夫 天忠。

竹本鐘太夫 倉太夫改。

竹本絹太夫 大此。

竹本源太夫 大源。

竹本千代太夫 是より以下筆太夫門人。

竹本鐘太夫

祖太夫改。

竹本十七太夫

竹本綾太夫 江戸。

竹本茂太夫

竹本源太夫

竹本筑後太夫 菅太夫改。

竹本要太夫

竹本錦太夫 江戸。

竹本磯太夫

筆戶太夫改。

竹本入太夫 京。竹幾事。

竹本錦木太夫

竹本常盤太夫 泉又改。

竹本米太夫 塙。

竹本紀國太夫

竹本力太夫 錦木太夫門人。

竹本喜太夫 同上。

竹本雛太夫 筆戶磯太夫門人。

竹本七太夫 同上。

竹本品太夫 源太夫門人。

竹本桂太夫 同上。

竹本三木太夫 祖鍾太夫門人。

竹本民太夫 同上。

竹本要太夫 平のぶ彌太夫門人。

竹本彌太夫

濱太夫改・磯太夫又改。

竹本由良太夫

竹本勝太夫

竹本八十太夫

竹本小松太夫 是より以下濱彌太夫門人。

竹本富士太夫

竹本矢筈太夫

豊竹組太夫

うつぼ組太夫門人。江戸。文字太夫改。

豊竹組太夫 江戸組太夫門人。文字太夫改。

豊竹駒太夫 二代目也。悴。

豊竹麓太夫

初代駒太夫門人。なべやといふ。

寛政文政の頃の名人。

豊竹^{とな}十七太夫

豊竹芳太夫 是より以下なべや麓太夫門人。

豊竹斧太夫

豊竹巴太夫

助造といふ。太好庵と號す。下寺町遊行寺に墓あり。

豊竹 和泉太夫

豊竹 伊勢太夫

豊竹 八重太夫

橘太夫改。有馬屋といふ。

豊竹 生駒太夫 姫太夫改。

豊竹 三光齋 有馬屋八重太夫門人。

豊竹 要太夫 京 是より以下巴太夫門人。

豊竹 咲太夫 秀太夫改。

豊竹 駒太夫

綾太夫改、後に文駒翁といふ。

豊竹 巴勢太夫

豊竹 町太夫

豐竹頼太夫

勝太夫改。

豐竹巴太夫

二代目也。若太夫改。

豐竹小野太夫

豐竹巴太夫

勝太夫改、綾太夫又改、咲太夫改。

豐竹錦翁軒 錦太夫改。伊丹馬吉といふ。

竹本峯太夫 是より以下綾咲太夫門人。

竹本勝太夫

竹本綾太夫

竹本辰太夫

豐竹 此母太夫 是より以下小野太夫門人。

豐竹 和太夫

豐竹 一三五太夫

豐竹 若太夫

富太夫改、實弟也。是より二代目巴太夫門人。

豐竹 伊太夫

豐竹 靱太夫

豐竹 鳳雄太夫

豐竹 道太夫

豐竹 巴磨太夫

豐竹 小嶋太夫 是より以下靱太夫門人。

豐竹 爲太夫

豐竹 若尾太夫 是より以下富若太夫門人。

豐竹 多賀太夫

豐竹 徳太夫

豐竹 登勢太夫

豐竹 鹿太夫

豐竹 登名太夫

豐竹 數馬太夫

豐竹 志賀太夫 是より綾駒太夫門人。

豐竹 浪太夫

豐竹 卷太夫

豐太氏太夫 二代目若太夫門人。初代氏太夫也。

豐竹 源太夫

○竹本 長門太夫

是より以下元祖内匠太夫大和掾門人なり。多筋混亂するゆへ爰に別記す。

竹本 千賀太夫 京。

竹本 春太夫

初代春太夫なり。門人奥に別記す。(六一九頁)

竹本 喜代太夫 京。

竹本 文字太夫

竹本 内匠太夫

二代目也。雛太夫改。久四郎といふ。

竹本 式太夫

京。酢屋といふ。

竹本 綱太夫

京式太夫門人。ゐの熊といふ。

竹本綱太夫

是より以下猪熊綱太夫門人なり。三代目なり。あめやといふ。京都宇治嘉太夫座にて一世一代淨るりを勤む。三綱翁と改。

竹本橋太夫

竹本津賀太夫

伏見。納屋徳といふ。

竹本津太夫 是より津賀太夫門人。

竹本津多太夫

竹本津磨太夫

竹本桐太夫 是より以下あめや綱太夫門人。

竹本阿蘇太夫

竹本門太夫 江戸。

竹本綱太夫

四代目也。村太夫改。

竹本氏太夫

文字太夫改。

竹本絹太夫 江戸。

竹本壽スズ太夫

竹本伊勢太夫 房太夫改。

竹本濱太夫

竹本織太夫

竹本律太夫 是より以下氏太夫門人。

竹本春太夫 さの改、文字太夫改。

竹本見代太夫

竹本越路太夫

竹本 和信^{やし}太夫

竹本 むら太夫 淀太夫改。是より以下四代目綱太夫門人。

竹本 むら太夫 都太夫改。

竹本 むら戸太夫

竹本 眞嶋太夫

竹本 淀太夫

竹本 家太夫

竹本 津多太夫

竹本 百合太夫

竹本 豐太夫 是より以下阿蘇太夫門人。

竹本 叶太夫

竹本 喜志太夫

竹本千賀太夫 是より以下久四郎内匠太夫門人。

竹本雛太夫 多賀太夫改。

竹本頼母太夫 今富改。

竹本長門太夫 長門屋。

竹本内匠太夫 倉太夫改、鐘太夫又改。

陸奥^{ちちの}茂^も太夫

曾根太夫改。

竹本浪太夫

陸奥茂太夫

操太夫改。姓名知縁。

陸奥三尾太夫

陸奥鹿太夫

○竹本筆太夫 江戸。初代筆太夫也。是より以下初代春太夫門人也。爰に別記す。

竹本咲太夫

堺。

竹本雛太夫 上町。

竹本染太夫

重太夫改。右屋はしといふ。堺咲太夫門人。以下同斷。

竹本春太夫

八十太夫改。

竹本淀太夫

竹本嘉太夫

竹本岡太夫

八十春太夫門人。江戸。

竹本陸奥太夫ちの 是より竹岡太夫門人。

竹本萩太夫

竹木艷太夫

竹本染太夫

石屋はし染太夫門人。梶太夫改。江戸。

竹本長門太夫

同上。こぼり口松屋。

竹本由良太夫 こぼり口長門太夫門人。

竹本万太夫

竹本品太夫

竹本登茂太夫

竹本喜代太夫

竹本利津太夫

竹本梶太夫

實太夫改。江戸染太夫門人。以下同斷。

竹本内匠太夫 森太夫改。

竹本守太夫

竹本い太夫

竹本梶の太夫 實梶太夫門人。以下同斷。

竹本増太夫

竹本梶間太夫

○豐竹筆太夫 元祖筆太夫門人二代目也。關太夫改。

○豐竹栴太夫 江戸肥前座元祖豐竹新太夫門人。以下同斷。

「豐竹伊勢太夫

淨瑠璃研究文獻集成

「豐竹宮戸太夫」

六二二

淨瑠璃系圖卷之中畢

淨瑠璃大系圖卷之下

三絃家系譜

絃曲惣祖

○瀧野 檢 校

長歌端諷元祖

虎澤 檢 校

唱歌絃祖

柳川 檢 校 加賀郡改。大坂の産。

八橋 檢 校

城秀改。大坂の産。加賀郡と俱に江戸へ出て一家を立る。今におゐて盲官のはじめに都いの字城じやうの字をつける事は、右兩法師の良例によるものなり。

淨瑠璃大系圖

淨瑠璃太夫並三絃元祖

○角澤檢校

堺の盲人とばかりにて傳記未だ詳ならず、追考。

當流三絃惣元祖

○竹澤權右衛門

尾崎氏也。井上播磨掾門人。上の卷に述ごとく、清水理兵衛、竹屋庄兵衛と義を結び竹本義太夫と改名の時、ともに竹澤と改名し、義太夫ブシの三絃の惣元祖となる。是角澤氏の澤の字をとり用ひしなり。依て後々にも澤の字を用ひ野澤鶴澤といふも此例によれり。

竹澤藤四郎

鶴澤友次郎 三二改。

野澤喜八郎

權右衛門門人數多有之といへども今以て師弟連綿と相續ある分を爰に記す。子孫嗣家

無之は除く。看官是を察し給ふべし。

野澤喜

二代目。京。

野澤吉兵衛

京。松屋町といふ。

野澤庄次郎

京。

野澤藤五郎

京。

野澤喜八 三代目。喜吉改。

野澤正五郎 庄五郎。悴

京四條。

野澤才二 是より以下藤五郎門人。

野澤才吉

野澤才造

野澤吉三郎 庄次郎門人。

野澤吉兵衛

二代目也。吉彌改。

野澤庄次郎 晋次郎改。是より以下二代目吉兵衛門人。

野澤吉彌 常吉改。

野澤吉之助

○鶴澤友次郎 二代目也。是より以下初代友次郎門人。

鶴澤寛次

土ぼし。

鶴澤文藏

文藏張といふ。

鶴澤名八

鶴澤市太郎伊勢。

鶴澤蟻鳳ミ

三二改。江戸。

鶴澤蟻鳳

三二改。二代目。

鶴澤三二晉次郎改。

鶴澤蟻鳳

伊左衛門改。後江戸播磨太夫と改。

鶴澤伊左衛門

鳥毛粹。文化年中花澤氏と改む。以後花澤伊左衛門といふ。

鶴澤市太郎

花澤咲次改。

花澤紋右衛門

花澤平五郎伊勢。

花澤松定

花澤鶴三郎京。

花澤伊左衛門江戸。

花澤咲次

天秤屋。市太郎門人。

花澤咲三郎是より天秤屋咲次門人。

花澤 咲助

花澤 駒七

鶴澤 名八 初代名八門人。理造改。

鶴澤 文藏

是より以下初代文藏門人。

京。伊八改。おやま文藏といふ。

鶴澤 松雨しやうう齋さい

喜市改。

鶴澤 又造

鶴澤 清七

鶴澤 仲助

鶴澤 龜助 是より仲助門人。

鶴澤 仲助 江戸。仲造改。

鶴澤 新藏 上町。是より以下初代清七門人。

鶴澤 文藏
傳吉改。

鶴澤 清七

勝次郎改。二代目也。

鶴澤 彌三郎

鶴澤 蟻鳳

藤吉改、勝造又改。

鶴澤 勇造

鶴澤 名八

鶴澤 傳吉

鶴澤 燕三

鶴澤仙藏

鶴澤庄次郎 是より傳吉門人。

鶴澤豐吉

鶴澤蟻蝶 是より勝造蟻鳳門人。

鶴澤勝造 虎吉改。

鶴澤榮吉 新町。

鶴澤勝鳳

鶴澤勝造 勝次郎改。

鶴澤庄吉 是り以下彌三郎門人。

鶴澤豐助

鶴澤彌市

鶴澤綱熊

鶴澤龜吉 なんば龜といふ。

鶴澤勝七 安次郎改。

鶴澤芳次郎 是より以下勝次郎清七門人。

鶴澤大吉

鶴澤時藏 天保十年時太夫と改。

鶴澤清七

勝右衛門改。

鶴澤清六

鶴澤馬之助

鶴澤清左衛門 富改若太夫倅。勝太郎改。

鶴澤伊八 善太改。

鶴澤勝六 是より以下勝右衛門清七門人。

鶴澤九藏

鶴澤清八

鶴澤松次郎

鶴澤藤吉 是より以下傳吉文藏門人。

鶴澤文三

鶴澤彦次郎

鶴澤又造

鶴澤文ぶん教きやう 文藏ぶんざう粹。

鶴澤廣作

鶴澤元三郎 是より文三門人。

鶴澤才次

鶴澤喜市 喜藏改。是より松雨齋門人。

鶴澤伊藏

鶴澤清三郎

鶴澤梅翁はなづめ ばう

二代目文藏門人。京。市藏改。

鶴澤伊八 梅翁門人。京。

鶴澤寛次

儀七改。二代目也。是より初代寛次門人。

鶴澤寛次

八兵衛改。三代目也。

鶴澤儀八

鶴澤福造 江戸。

鶴澤文三 是より三代目寛次門人。

鶴澤寛次 四代目也。文吾改。

鶴澤寛三

鶴澤文吾 是より四代目寛次門人。

鶴澤文次

鶴澤寛四

鶴澤寛三

鶴澤文次 是より二代目寛次門人。

鶴澤才二

鶴澤喜代七

鶴澤才二 才二門人。京八重造改。

鶴澤才二 清五郎改。五代目政太夫悴。

○竹澤彌七

元祖竹澤藤四郎門人。初代也。

竹澤宗七 是より初代彌七門人。

竹澤彌七

駒吉改。二代目也。

竹澤駒吉 是より二代目彌七門人。

竹澤廣助

源吉改。初代也。豐澤氏と改。

竹澤友次

竹澤彌七

宗六改。新町。三代目也。

竹澤彌七

力造改、宗六又改。四代目也。是より以下新町彌七門人。

竹澤濱右衛門

竹澤相馬 粹。

竹澤宗六 百太郎改。

竹澤權右衛門

竹澤龍造

竹澤彌三郎 甚造改。玉太夫實弟。

竹澤扇造 是より四代目彌七門人。

竹澤彌六

竹澤龜吉

竹澤彌市

竹澤力造

豐澤東市 是より初代豐澤廣助門人。

豐澤源吉

豐澤廣助 吉松改、仙右衛門又改。二代目也。京。新シ屋。

豐澤濱右衛門

豐澤兵吉

豐澤廣助

源之助改、仙右衛門又改。三代目也。

豐澤權平 是より三代目廣助門人。

豐澤源吉

豐澤廣七

豐澤廣造

豐澤富次

竹澤兵吉 仲造改。是より兵吉門人。

竹澤廣藏

○江戸 三絃系譜くわしくは知れがたし。追々細考し後篇に記す。

野澤八兵衛門人

○野澤八兵衛 喜八改。

鶴澤三三門人

○鶴澤 吾八

鶴澤吾八門人

○野澤 語助 鶴澤を野澤氏と改。

鶴澤勘五郎門人

○鶴澤勘五郎 徳次郎改。

野澤庄次郎門人

○竹本紋太夫 正造改、庄次郎又改。

○當時諸國淨瑠璃定芝居名代

京 早雲長太夫座

同 都万太夫座

同 宇治嘉太夫座

淨瑠璃大系圖

大阪 筑後芝居

同 堀江市之側

同 若太夫芝居

同 北新地芝居

江戸 薩摩座

江戸 結城座

駿州駿府 濱太夫座

攝州西宮 政右衛門座

播州 勝之進座

播州三木 常右衛門座

丹州 岩太夫座

丹州美加 嘉平次座

淡州 源之丞座

淡州 六之丞座

同 久太夫座

同 六太夫座

同 傳次郎座

同 蛭子屋座

同 金太夫座

餘は追々細考し後篇にくわしく記す。

（以下本文中の挿繪についてある説明を集録。括弧内はその所在を示す）

○芝居といへる名目の起源は、昔平城天皇の御宇南都猿澤の池の邊にて地妖を退んが爲に薪を積で是を焼、興福寺の南門の前なる芝の上にて中樂を舞せらる。是薪の能の濫觴なり。

諸人芝の上に居て能を見物せし遺風をもつて、能・角觥すまふ・歌舞妓・操ともに皆芝居と稱せしに、何しか歌舞妓、操のみを芝居と呼事となれり。

櫓を上るは豐太閤肥前名護屋に御在陣の砌御免許ありしと云。櫓に立し梵天は是晴天を梵天帝釋に祈る幣串へいじなりと古老言傳たり。(上ノ六・七丁)

○竹本義太夫いまだ清水理太夫といひし頃、藝州宮嶋へ下り芝居興行せし間、暇ある毎に巖嶋明神へ参籠し藝道發達せさせたまへと深く祈けるに、其信心を明神感納まし／＼けん、或夜参籠ししばし睡し内に、天童一卷の軸の物を持出、理太夫に授給ふと思は夢さめたり。是より藝道大に上達し天下の名人と稱せられ、遂に筑後掾と受領せしもひとへに信心の徳と謂べし。(上ノ十四・十五丁)

○操り土偶どんごうの起源は、攝州西の宮の百太夫といふ者蛭子太神宮の神託に因て土偶を造り、年の始に諸方に到り人の門々に是を弄廻つかひまはす。是を傀儡師くわいらいしとも又土偶廻でこもしともいへり。是人形つかひの始りなり。是より傀儡師西の宮より出る事多し。然に何世の程よりか江口・神崎・室積などの遊女、傀儡師に倣ひ土偶を廻し客を慰むるやうになり、是を傀儡女くわいめと歌にもよめり。後には其伎絶しかども猶も歌の題には傀儡と出して遊女の通稱となれり。(中ノ十八・十九丁)

○三味線さんみせん來由並説

夫三味線は琉球國の樂器蛇皮線を模し、京都の琵琶琴の細工人龜屋石村吉左衛門始て是を造る。角澤檢校是を以て小野於通が作の淨瑠璃物語をかたり始むと云。されば京都及び浪花の三絃細工人多分石村氏と名乗は石村吉左衛門の氏を取用ゆるものなり。

抑三味線の丈、其始は三尺なり。是天地人の三才を表せり。

○棹の長二尺餘は陰陽の二氣を象どり、海老尾かいろうびの五寸は天の五星に準ず。

○但し當時の三絃は古の制と少し異なり惣丈三尺一寸五分、海老尾五寸二分、棹長二尺五分、

胸幅六寸、長さ六寸六分、てんじゆ天手三寸五分なり。

○胸の周六寸四方に造るは地の六合を表す。

○胸の厚さ三寸は高下平の三形を象れり。

○轉手てんじゆ紋手又は天柱は天の象を表し反首に半月の形を模す。

○三の糸みつ捲は虚精・陸順・曲順三臺の星に配し、則一の糸を虚精と云、二の糸を陸順と號し、

三の糸を曲順と呼り。

○一の糸に壹越・斷金・平調・勝絶の四つを兼、二の糸に下無・双調・鬼鐘・黃鐘の四を籠め

三の糸に鸞鏡・盤涉・神仙・上無の四を備て、三筋に三十二調子を配當せり。されば其音

色奇絶にして根本たる蛇皮線に勝り、實に倭國の名器なり。(下ノ六・七丁)

後序

撰哉正せる哉、淨瑠璃の大系圖、此道に於て是迄正史記録傳はらざる事凡二百有餘の星霜を歴たれば、紛然として繭の緒の亂たるごとく、歴代の興廢事實を知がたかりしを、斯のごとく明細に選述せられしは、小鷹翁と家父狂言堂兩大人の懇志にして、暗夜に燈を得たるが如く、始めて淨瑠璃道の傳來を見る事を得。是淨瑠璃家三絃者流及此道執心の人々の大幸にて永世不朽の珍冊也。因て一言を添此冊子の跋とする事なり。

天保壬寅季春日

春翠子嗣子

狂作堂誌

解

說

山

本

二

郎

人形淨瑠璃が能樂や歌舞伎劇とともに、わが國の三大國劇の一つに數へられてゐることは今更述べるまでもない。又それが世界にその比を見ないほど藝術的にすぐれた人形劇であることも、誰もが認めてゐるところである。しかし乍らその大事な傳統藝術の保護育成といふことについてはこれ迄殆ど考慮されず、一時は衰滅の危機に瀕したこともあつた。

幸ひ最近古典藝能に對する國民一般の關心が急速に昂まつて來て、人形淨瑠璃に於ても活況を呈し、あらゆる階層にわたつて新しい觀客を獲得しつゝある。このことは西歐文化に目を奪はれるあまり、自國文化から眼をそらしがちであつた明治以來の習慣が、今次の聖戰を契機として次第に是正され、日本文化へ復歸する姿を示すもので、何より欣ぶべきことである。中には一時の流行で支持する人々たちもあらうが、何より觀客の心を劇場にひきつけるのは、その卓越した藝術であることは云ふ迄もない。

しかし、この藝術は決して若くない。流動性の多い歌舞伎と違つて、比較的早くから固定したもののやうである。江戸三百年に亘る藝術的鍊磨によつて、藝術として到達し得る最大限の高さまでの發達を遂げた感がある。一つの言葉、一つの動きもぬきさし出来ないほど磨きがかけられてゐる。従つてこれを眞に鑑賞するにはある程度の豫備智識が必要である。準備なしで

はすぐれた藝術性を見逃がさないと限らない。この貴重な文化財を次の時代迄無事に送り届けることは現代に生きるものの一つの責務であらうが、眞に理解し正しく鑑賞することによつてのみそれは守り續けられてゆくのである。

その意味に於て、現在の人形淨瑠璃を味解するためにも、又明日の人形劇を興すためにも、發達し來つた歴史を省みることが極めて重要である。こゝに於て人形淨瑠璃を研究鑑賞するに當つて、最も大事な基本的な参考文献をここに集成したわけである。

翻刻に當つては、一二どうしても原本にたよることを得なかつたものの外、一々原本によつて嚴密な校訂を行ひ、定本を作することを念願とした。全體に亘つて原本に忠實であることを心掛け、明かに誤りと思はれるものの外は、出来るだけ元の形を保存し、必要に應じては本文に傍記して誤りを訂正しておいた。()の括弧がそれである。尙一般の讀者をも考慮して、句讀點は適當に施した(本集所版の内原本に句讀點のあるのは今昔操年代記だけである)。又濁點は誤解を生じない限り附する方針を取つた。

終りに、本文の理解を助けるため、また學的な資料として活用していただくため、略註(本文*印のもの)と索引とを作つて、研究者の便を計つた。

次に所收書目について簡単な解説を試みることにする。

今昔操年代記^{いまむかしあやつりねんだいぎ}

正本屋九左衛門撰。上下二卷二冊。享保十二年正月、大阪正本屋九左衛門刊。

書名は普通上巻の読み方に従つて「今昔操年代記^{いまむかし}」と呼んでゐるが、下巻には「こんじやく」と振假名が付いてゐる。又序には「近來操年代記」とあり、内題には「淨瑠璃來曆」とあるが通稱として「操年代記」と呼ばれることが多い。

この書の内容は、井上播磨掾・宇治加賀掾の淨瑠璃の流行したことから説き起し、竹本豊竹の發祥に及び、更にその當時迄の操芝居の歴史を、淨瑠璃太夫の列傳を中心として記述したものである。操芝居を歴史的な態度で扱つたものでは初めての試みで、形は十分に整つてはゐないが人形淨瑠璃史として嚆矢といふべきであらう。

大阪安居清水邊の料理屋で、竹本最貞・豐竹最貞の二人の若者が、銘々の最貞のことから口論を初めると、この道に精しい老人が仲裁に入り、自分の見聞を語つて聞かせるといふ序があつて本文に導かれる。この老人といふのは著者自身であると見て差支へあるまい。このやうに物識から話を聞くといふことから物語が初まる趣向は、當時の役者評判記の、俗に開口と稱する序文に常踏的に用ひられてゐる手法で本書の作者も亦それを踏襲したにすぎないのである。

正本屋九左衛門といふのは、當時の浮世草子・淨瑠璃作者たる西澤一風の通稱である。彼は父の代からの家業たる書肆を繼いで、正本屋を営み、主に豐竹座の正本を出版してゐたが、傍ら浮世草子を自らも書いて名聲を博した。また若い時から音曲を好み、播磨風や義太夫風の淨瑠璃に親しんでゐたが、後には豐竹座の作者として、享保八年から三年餘りの間に九篇程の淨瑠璃を書いてゐる。田中千柳との合作「井筒屋源六戀寒暄」以下八篇、並木宗助・安田蛙文との合作「北條時頼記」等がそれであるが、現在では實際に筆を取つたかどうか疑問を持たれてゐる。（黒木勘藏『近世演劇考説』の「淨瑠璃作者として西澤一風」参照）

假に一步を譲つて彼の作を認めるとしても、淨瑠璃作者としては浮世草子の作者として得た地位だけのものを保つことはむづかしいと見られてゐる。然し批評家としては優れた才能を持

つてゐたといふことができよう。この書は一風の著作中唯一の例外であるが、淨瑠璃界とは多年に亘つて深い交渉を持つてゐたので、淨瑠璃に關する知識や淨瑠璃太夫に關しては、並々ならぬ眼識を持つてゐた彼にして初めて可能な書であつた。この書の内容は信をおくに足り、操淨瑠璃の研究資料としては重要なものの一つである。この後に出了た「竹豊故事」はこの書に負ふところ極めて多く、ある意味では本書の増訂版とも見られてゐる位である。

尙本書には寛政八年江戸で別版が刊行されてゐる。「聲曲類纂」の引用書目中にある「増今昔操年代記」といふのがそれである。この事は藤井乙男氏が「外題年鑑及び操年代記の異版」(『江戸文學概説』)で指摘されてゐるが、繪を全部省き、序文を變へ、漢字を假名に改めたりした、粗末な横本である。

翻刻本には新群書類從第六卷、昭和版帝國文庫近松世話淨瑠璃集所收のものがあるが、いづれにも少なからざる誤脱があつて意味の通じない箇所が少なくない。この校訂に當つては本館所藏の原本によつたので、それ等の誤謬を訂正し得たと信ずる。

難波土產

穂積以貫撰。五卷五冊。元文三年正月、大阪丹波屋半兵衛・伊丹屋茂兵衛刊。（「近松世話淨瑠璃集」所收のものは鹽屋平助板とある。）

本書は角書に「淨瑠璃文句評釋」とあり、内題は「淨瑠璃評註」となつてゐる。

序に、年來淨瑠璃本を讀む内に唐倭からいまとの故事・俗諺など拔出して、自ら註を加へ博識にも尋ねて筆記しておいたら、おのづから善を勸め惡を懲らすの一助ともなるまゝ、書肆の望に任せて刊行するものであると記してゐる。

内容は、當時の代表的な淨瑠璃「御所櫻堀川夜討」以下九篇について、主として詞章の評釋をしたもので、各條は最初に外題の説明をし、本文中の辭句を抽出して詳しい解釋をつけ、所々に評を添へ、最後に總括的な批評を下してゐる。

かういふ書は淨瑠璃では最初の試みであるが、能樂書では早くから「謡鈔」「諷増抄」等の詞章の註釋書が數多く刊行されてゐる。形の上ではそれを踏襲したわけであらうが、淨瑠璃の世

界でも註釋書が要求されて來たことは注目すべき出來事であつた。

發端の條は淨瑠璃の由來と、近松禮讃、並に近松の藝術談から成つてゐるが、虚實皮膜の論を基調とする近松の藝術觀が窺はれる重要な一章である。

本文に於ては辭句の評釋に力が注がれてゐるのであるが、所々に挿まれた批評に注目すべき意見が見られる。例へば道行については、近松作の道行について精細な評註を試みてゐるが、他の作の場合では註を省き、近頃の道行の文は近松にみられる如き氣品を失ひ、生玉祭文の如きもので評するに足らぬといつてゐるなど一見識といふべきである。その外にも作劇上の不合理を指摘するなど嚴正な批評も所々にみられるが、それ等の内には當代の淨瑠璃愛好者の意向を反映してゐる點もあるのであらう。尙辭句の選擇や解釋に、彼れの儒者としての職業意識が濃厚に現はれてゐるのは争へない。

著者以貫は姫路の生れで、當時大阪に於ける古學派の錚々たる學者であつたが、淨瑠璃を愛好し近松にも親近した。但し以貫は近松より三十九歳の年少で、親交といふよりは崇拜に近い間柄であつたと想像される。近松が歿した時以貫は三十三歳、この書の成つたのは四十七歳の事である。恐らく以貫は藝談を丹念に書き止めておいたものであらう。

しかも彼は淨瑠璃の愛好者といふだけでなく、竹本座の顧問役のやうな位置にあつて文藝上の助言を與へ、幕内事務にも參與したらしい。(木谷蓬吟『淨瑠璃研究書』参照)。かゝる書の書かれたのは故なき事ではない。

又以貫の二男が後の近松半二である。半二は竹田出雲の門人で、近松とは直接の縁故はなかつたのに近松の名を名乗つたことは、以貫と近松との並々ならぬ關係であつたことを示すものであらう。

後文化三年、この書に次ぐものとして、當時流行の十四曲を註釋した「瑠璃天狗」五卷(養笠翁撰)が作られた。この傳統は明治期に入つて見事な開花を見るに至つた。

本書の翻刻本には、新群書類従第六、昭和版帝國文庫近松世話淨瑠璃集、外に上田萬年氏校訂の單行本があるが、校訂に當つては本館所藏の原本に據つた。

竹^{ちく} 豊^{ほう} 故^こ 事^じ

浪速散人一樂撰。上中下三卷三冊。寶曆六年刊。

解

説

本書は淨瑠璃好きの筑越翁といふ老人の許に、竹本・豊竹貞眞の若者たちが尋ねて行き物語を聞くといふ趣向で、淨瑠璃の發生・發達、兩座の繁榮、太夫列傳その他作者や人形等について記述したものである。「今昔操年代記」と同じやうな意圖をもつて作られた書であるが、「操年代記」にみられる浮世草紙的な雰圍氣は一掃され、淨瑠璃の歴史を考證的に整理しようとする態度が濃厚に窺はれる。これは翌七年には「外題年鑑」を刊行してゐる程の、一樂の故實家的態度によるものであらうが、その背後に淨瑠璃の隆盛期に際して、過去を省みようといふ氣風が潜んでゐたと考へて良からう。

また「操年代記」と違つて文章の調子がかたく、勿體ぶつて漢籍からの引用も多いのであるが、これは、さういふ事が權威を加へるやうに考へられた時代の風潮を反映してゐるものである。然し物々しい文章で装はれた所は、却つて參考になる點は少なく、當時の具體的な事實の記述の方に貴重な資料を發見することが多いのである。

例へば中巻にある藝談類の記述や、下巻の當時の太夫名人の評などは、當時の消息を物語るものとして注意すべきものである。

全體からいつて、「操年代記」より組織だてられ、系統的であつて一步を進めてゐるが、街學

的な態度が資料の選擇や取扱ひ方を混亂させ、却つて事を曖昧にしてゐる傾きが見られるのは惜しい事である。然し斯界に於ては權威ある書の一つであつて、操芝居關係の人たちに珍重された「音曲道智編」に於ては、この書からの引用が半ばを占めてゐるの狀態である。

翻刻本には新群書類從卷六、浪速叢書鷄肋篇、近松世話淨瑠璃集所收のものがあるが、校訂に當つては本館所藏の原本によつた。

倒冠雜誌

白徳齋撰。一冊。寶曆九年七月刊。

著者の白徳齋といふのは竹本座の座本、三代目竹田近江の筆名であるといはれる。

本書は近江が初代吉田文三郎と絶縁したいきさつを世間に明かにした、いはゞ公開狀ともいふべき性質のものである。前半は竹田芝居の人形遣辰松八郎兵衛、吉田三郎兵衛について語りついで三郎兵衛の子文三郎の擡頭・全盛の狀を述べて、獨立を企てゝ座本近江より絶縁される迄の事、後半には、その経緯を樂屋に張出して絶縁を發表した近江の覺書が掲げられてゐる。

この書が假に竹田近江の自己辯護のために出された書であるとしても、文三郎を中心として當時の操界の狀勢が具體的に記述されてゐるので、操史上重要な資料を提供してくれる。例へば吉田三郎兵衛が山本飛彈掾から人形の奥儀を極めたこと、文三郎が初舞臺「國性爺後日合戰」に經錦舎の出遣ひを片手でつとめたこと、文三郎の得意の役、失敗した役のこと等、又は覇氣に富んだ文三郎が幾度が獨立を企てながら、その度に挫折してゐる點に當時の操興行界の裏面を窺ふことが出来るなど。

本書の版本は帝國圖書館に一本を藏してゐる外、『攝陽奇觀』中に張込みが残つて居り、浪速叢書第三卷に翻刻されてゐる。

參考のために文三郎を中心とした略年譜を示してみると次の如くである。

享保二年二月 吉田文三郎初舞臺。「國性爺後日合戰」(竹本座)に經錦舎の人形を片手で出遣ひした。

同十六年 文三郎、作者長谷川千四・大和(彦)太夫と圖つて獨立を企てたが、父三郎兵衛の諫止と大和太夫の病死により中止。

延享四年三月 父三郎兵衛歿。

同 六月 竹本座の座本竹田出雲（外記）歿。文三郎はこの虚に乘じ専横な振舞に出

たので、座本出雲（千前軒）は之を解雇したが、文三郎が芝居興行を企てるのを見て出雲の方から妥協を申込み解雇を取消す。

寛延元年八月 文三郎「假名手本忠臣藏」の演出について此太夫と争ひ休場せしむ。此太夫等豊竹座に轉ず。

寶曆元年 文三郎、冠子の筆名で「戀女房染分手綱」を作る。

同 二年 文三郎三度芝居獨立を企てたが挫折。

同 六年十一月 座本千前軒出雲歿。文三郎、新座本の竹田近江に竹本座の委任を要求し高額の給金を受くるの條件にて妥協。

同 八年 文三郎隠居。

同 九年七月 文三郎、嵐吉三郎座で芝居興行を企てたので、近江は太夫・三味線方・人形遣等を切崩して、文三郎等四人を絶縁。近江は白徳齋の筆名で「倒冠雜詠」を刊行して、文三郎との確執經過を公表。

同年九月 文三郎は京に上り、文吾のみ復座して、三郎兵衛の名に改む。

音曲口傳書

順匹軒編。一冊。明和八年撰、安永二年九月刊。大阪古川惣兵衛・村上清三郎、江戸丹波屋理兵衛・鱗形屋孫兵衛合梓。

内題に「竹本播磨少掾口傳」とあるやうに、竹本播磨少掾即ち二代目竹本義太夫の口傳を門弟の順匹軒が筆録したもので、所々に順匹軒の評言が添へられてゐる。先づ淨瑠璃の由來、播磨少掾の小傳・藝談・逸話等を述べ、次で播磨の音曲口傳として「掛物ぞろへ」以下五十二曲についての、簡にして要を得た口傳、その他全般に亘つての語り方や態度についての口傳が集められてゐる。口傳の中に、人は銘々生得の調子に應じて語ることを努めよとか、曲目の氣分調子を十分に理解して語るべきことや、人物の身分性格を考へて語り分けることの必要などを説いてゐるのは注目すべき事柄である。

播磨少掾については、本文に精しいので改めて述べる必要はないが便宜上略記しておかう。彼は大阪の産で通稱中紅屋長右衛門、幼名長四郎。初め竹本筑後掾に入門、後、芝居出勤を

願つて容れられず、若竹政太夫と名乗つて豊竹座に出勤。正徳二年筑後掾に認められて呼戻され、竹本政太夫と改めて竹本座に出勤、同四年筑後の歿後拔擢されて、竹本座の樽下太夫となる。享保十九年二月二代目義太夫と改め、翌年十一月受領して、竹本上總少掾藤原喜教と名乗り、元文二年再び受領して竹本播磨少掾といふ。彼は音聲に恵まれてゐなかつたが、色々工夫鍛錬の結果、聲で語らず腹で語るといふ行き方を採り、初代義太夫の語り口を改めた點が多かつたといふ。義太夫節大成の名人と稱せられる。延享元年七月二十五日歿、享年五十四歳。

順四軒については精しい事は判らない。播磨歿後二代目竹本政太夫について學び、素人の名人として世に稱せられたといはれる。天明五年六十八歳で歿した。それから溯ると播磨少掾が歿した時は、二十七歳の青年であつたことになる。

翻刻本には音曲叢書第一卷所收のものがある。この校訂に當つては原本を得られなかつたので、止むなく音曲叢書本に嚴密な校訂を施した。

竹本豐竹淨瑠璃譜

撰者未詳。上下合一冊。版行されず寫本で傳つた。

本書は蜀山人太田南畝が享和の初め大阪に出向いた折發見したもので、原題は「諸事聞書往來」とあつたのを、内容にふさはしいやうに「竹本豐竹淨瑠璃譜」と改めたと、その序のうちで斷つてゐる。普通には「淨瑠璃譜」といつてゐる。

この書の成立についてはこれ迄安永天明の頃と推定されてゐたが、本文中の記事から推して寛政期迄引下げるのを至當とする。その理由の一つとして、上卷寶曆十一年「古戰場懸松」興行の記事中、「近頃死去せられし竹田近江大掾」とあるが、木谷蓬吟氏が發見された墓碑銘によると、大掾は天明八年十月に歿してゐる事が明かであるから、寛政になつて書かれたことが確實となるわけである。

もう一つ、竹本座の記事に、天明の頃（實は安永九年）「立春姫小松」を演じた時、大序で人形遣ひが人形を舞臺に置いた儘引込んでしまふので太夫が憤慨するといふことがある。「夫より

二十年計り立しに、いよ／＼操りじだらくとなり不景氣なるも」云々とある。この二十年後といふのは前後の文章から判斷して、姫小松の時以來と思はれる。それは寛政末年に當つてゐる蜀山人の手に入る直前の頃になる。

さて本書は上巻を竹本座、下巻を豊竹座にあて、貞享より明和にいたる約八十年間の兩座盛衰の跡を詳述したもので、淨瑠璃年代記であると共に、人形劇史としての體裁をも具へたものである。

本書の特色といふべきは、淨瑠璃に關する記事ばかりでなく、人形の構造、舞臺の變遷、興行界の狀勢など、貴重な資料がおびただしく含まれてゐること、人形劇史上重要な文獻の一つである。就中吉田文三郎に關する記事は、別項「倒冠雜誌」と參看して、得る處が極めて多い。

本書の翻刻本には、燕石十種第三輯、聲曲自在、溫知叢書第四卷、昭和版帝國文庫近松世話淨瑠璃集所收のものがあるが、何れも帝國圖書館藏の燕石十種本を底本としてゐるため、數多い誤寫が踏襲され、甚だしきに至つては亂丁になつてゐるのが見逃がされてゐる等、資料としても完全とは言ひ難いものであつた。

いま此の書の校訂に當つては、遺憾ながら原本は對照出來なかつたが、某氏藏の準原本とも

いふべき善本を得たので、これを底本とし、燕石十種本を参照した。従つて流布本の甚だしい誤りは、少なからず訂正することができた。

尙本文中括弧でかこつた文章は、一個所だけ蜀山人によつて書かれたものがあるが、その外は撰者自身が追記したもので、大低上欄に記されてゐる。

外題年鑑

編著者一樂子。竹豊故事の作者と同人。

「外題年鑑」は普通四種が知られてゐる。

一、今昔操 外題年鑑 寶曆七年二月 大阪 文萃堂増田源兵衛刊

二、淨瑠璃 外題年鑑 明和五年 同

三、同（増補改正外題年鑑とも） 安永八年 同

四、新增外題年鑑（新增改正外題年鑑とも） 寛政五年 同

初版の寶曆版は巻頭に八十翁一樂の序文があり、興行年代については、竹本座は正徳五年の

「國性爺」、豊竹座は享保三年「鎌倉三代記」以前は殆ど記載されてゐない。總紙數五十五丁。明和版は序を省き、前書になかつた興行年代が全體に亘つて記入され、曲目の増補も八十種に近い。總紙數六十八丁。安永版も同じく序を省き、堀江市ノ側此太夫座之分以下十丁を増補し、曲目の増加は四十種餘。總紙數は七十九丁。寛政版は、全般に亘つて作者名を象嵌し、更に安永版を増補して百種近い曲目を加へてゐる。總紙數九十一丁。

この外に「^{古今}淨瑠璃年代記」といふ本が寶曆十三年江戸で刊行されてゐるが、これは外題年鑑を剽竊したもので、たゞ江戸の操座に關する記録を數行増補したものに過ぎない。

外題年鑑を翻刻するにあつては、それらの一書のみでは利用價值が低いので、右の四種を總合して一本を作ることにした。これはこれ迄の翻刻本にも行はれて來たことで、既に新群書類從卷七、昭和版帝國文庫近松世話淨瑠璃集所收の二通りがある。類從本は寶曆版を底本として、明和版・寛政版を参照したものであるが、相當誤脱がある。帝文本は前書の誤りを訂し、四本を校合整理したものであるが、尙類從本の誤謬を踏襲した個所も見受けられる。よつて、翻刻に當つて本館所藏の原本により四書校合を行ひ、傍ら帝文本を参照した。

本書は編者一樂が多年淨瑠璃を愛好するところから作成した操淨瑠璃の外題年表で、外題・

作者・上演年月等を記載した簡略なものであるが、淨瑠璃研究には基礎となる重要な文獻である。義太夫節については「近世邦樂年表・義太夫之部」によれば良いが、近松時代の淨瑠璃になると邦樂年表だけでは不十分なので、矢張りこの書の恩恵を蒙らなければならぬ。然し編者も斷つてゐるやうに、流義の相異、外題や興行年月の誤謬が相當あるので、この書を全部直ちに信賴することは危険である。

寶曆版の序文には八十翁一樂とあるが、寛政版が出たのは三十五年餘り後の事に屬する。従つて八十翁といふのを正直に解釋すれば、明和版以後の増訂は或ひは出版書肆の手によつたのではないかと考へられるが、兎に角明和版の増補には可成り誤謬が含まれてゐて、それが後々迄傳へられてゐる點は注意しなければならない。そこで今回の校合本では研究者の利便を考慮して、既に學界でその誤りが指摘訂正され或ひは問題になつてゐるものは、出来るだけ註に於て指摘解説して置いた。

淨瑠璃大系圖

竹本筆太夫考、近松春翠子訂。上中下三冊。天保十三年十月、大阪高橋興文堂刊。

『日本文學大辭典』の解説には、初め三卷三冊の豫定のところ、春翠の死によつて二卷に終つたとあるが、それは何かの誤りであらう。

本書は古來よりの淨瑠璃太夫、三味線彈の系統を明かにした書で、上・中卷は、小野於通、角澤（澤住）檢校より初めて、義太夫節豊後三流に亘る淨瑠璃太夫總計三百七十六名の名を掲げ、下卷には瀧野檢校以下三百四十名の三味線彈の名を擧げて居り、主だつたものには簡略な傳記を附けてゐる。また卷末には當時の諸國淨瑠璃定芝居の座名を載せてゐる。尙原本は挿繪五葉を含んでゐるが、資料的な價值がないので省きその説明の文章を卷末に集録しておいた。

この書は筆太夫と春翠とが協力して、錯雜せる淨瑠璃界の系譜を整理編纂したもので、かゝる書としては唯一のものである。部分的には尙訂正すべき點が見られるが、「聲曲類纂」等と相照應して研究上の利便を得ることが多い。この書はこれまで翻刻されたことがないが、時節柄植字上の極めて困難な事情を冒して、こゝに翻刻を企てたのも、淨瑠璃の研究家を利するところ多きを信ずるがためである。

編者の三代目竹本筆太夫は初代豊竹（後、竹本）彌太夫の門人で、寛政三年に道頓堀大西芝

居へ初めて出勤、天保頃は淨瑠璃界の元老株であつた。所謂天保の改革で、諸藝人が土地家屋所有禁止令、即ち町人の資格失墜といふ一大危機に際して、奉行所へ訴へ出て、淨瑠璃太夫に除外例を設けさせた程の氣骨のある人物として知られてゐる。近松狂言堂については詳かにするところがない。

尙この大系圖を増補したものに「補淨瑠璃大系圖」二十二卷がある。四代目竹本長門太夫の撰に係るもので、番附や記録類を廣く涉獵して大増補し、淨瑠璃の創始期より明治十八年迄に亘つて、淨瑠璃萬般について精細な記事が集められてゐる。これは音曲叢書第二卷から第六卷迄に收められてゐるから、其旨を附記しておきたい。

演劇博物館研究室にて

山 本 二 郎

略

註

括弧内の數字は、本文頁數を示す

今昔操年代記

流の末は清水の瀧（一六）井上播磨掾の流派を清水理兵衛が繼いだことを意味してゐる。理兵衛が大坂安居清水邊で料理屋を聞いてゐたから、それをいふのである。彼は今播磨と世人にたゞへられた程、播磨の藝風をうけついでゐた。本文参照。

水引の幕（一六）舞臺の上方に横に張つてある細長い幕。昔眞辰から贈つた幕で、水引の模様が附いてゐた故の稱である。

笹の丸の高矢倉（一六）笹の丸は宇治嘉太夫（加賀掾）の紋。櫓に笹の丸の櫓幕を揚げて淨瑠璃の興行をするといふ意味。

能がりの音曲（一六）加賀掾は初め謡曲を學び、後淨瑠璃に轉じたのであつて、「淨瑠璃に師匠なし、只謡を親と心得べし」と常に弟子に教へてゐるだけあつて、謡曲によつて淨瑠璃に新生命を吹き込み、義太夫に至つてそれが更に集大成されたことになつてゐる。

一向一心の稱名聲（一七）淨土眞宗（門徒宗）で稱へる念佛の聲。筑後掾は熱心な門徒であつたからである。

翁渡し（一七）翁・千歳・三番叟の三人の舞ふ儀式的演舞を式三番といひ、それを演ずるのを翁渡しといふ。

四天王事の上るり（一九）源頼光の四天王を題材とした淨瑠璃。所謂金平淨瑠璃といはれるもので、その正本は澤山にある。「外題年鑑」参照のこと。

舍利々々佛（二二）舍利佛のこと。釋迦十大弟子の隨一で、智慧第一と稱せられた。そんな物知りでもいふ意味で引合ひに出したのである。

ふしはかせかいぐ（二三）節博士。曲節墨譜。

受領（二三）字義は朝廷から國司の官に任ぜられる事であるが、淨瑠璃太夫の受領は名前を頂戴するだけである。これは大體太夫に限られてゐてその名譽たることは云ふ迄もない。受領の事は目貫屋長三郎・人形遣ひ引田某が御陽成院の御召によつて操淨瑠璃を上覽に供し、長三郎が淡路掾を受領したのが最初といはれてゐるが、又監物某の河内目受領さくわんが初めとの説もある。

井上大和掾（二三）正本によると明暦四年頃から大和少掾藤原貞則と名乗り、延寶初年に井上播磨掾藤原要榮と改稱したのであつて、この記事は少し誤つてゐる。（黒木勘藏「淨瑠璃史」）

井上播磨掾の項参照)

うれい、修羅(二三)愁嘆と荒事、柔と剛、そこに重點を置いて語り、播磨風を樹てた。

しらみ本(二三)寛文・延寶頃に行はれた繪入細字の淨瑠璃正本。當時は讀み物であつて節付はなく、小字で書かれ、行数も十七八行に及んでゐたのでこの名がある。延寶年間以降は繪入細字に節付が施されるやうになつた。これ等は主として京の正本屋九兵衛・八文字屋八右衛門・鶴屋喜右衛門の書肆から刊行された。

書本(二三)寫本。こゝでは肉筆で書いた稽古本。これ迄節付は流派の祕傳として他に洩らさなかつたが、播磨掾は節付を書寫して頒布することを許した。これが稽古本流布の端を開いたもので、加賀掾に至つて節付稽古本の刊行がはじまつた。

播磨太夫一生のふし事(二五)「外題年鑑」に播磨の正本として六十篇を擧げてゐるが、これに洩れたものもあるから八十篇以上百篇位かと推測されてゐる。

西澤所持の版行(二五)西澤は一風即ち正本屋九左衛門。享保九年の大火で焼失したといふのであるが、現在残つてゐる段物集に「忍四季揃」上下二冊、延寶二年刊(?)がある。

木戸役者(二五)木戸藝者。劇場の木戸口で、狂言の役割を讀上げたり、役者の聲色を遣つた

りして、宣傳役をつとめた男。

目すいしやう（二六）目水晶。物事を鑑識することの確かで明かなこと。『日本新永代藏』にも「養子にせんと見立てし江戸のおやちも目水晶と、大阪にても一門の喜び」とある。

腹ふくれ衆（二六）富豪、金持。堺鑑「堺の町人の腹脹共を召し寄せ、數寄三昧を専らとし。」天めい知らずの頼近めや（二七）「頼光跡目論」の中の文句。これは播磨の當り淨瑠璃で屢々上演してゐる。

枕をわる（二七）枕をくだく。色々工夫をこらすこと。

竹屋庄兵衛（二七）當時の興行師。加賀掾が上京し、彼と提携したのは延寶三年四十一歳の事。伊勢島宮内（二七）江戸の淨瑠璃太夫で伊勢島節を興す。承應頃京に上つて操りを興行した。

その歿後も子孫が引續いて操りの興行をしてゐる。

くれないはそのほにうへてもなり（二八）紅は園生にかくれなしとの諺、勝れたものは終には頭角を現はすといふ意。「安宅」に「げにや紅は園生にうゑてもかくれなし。」

けいこ本八行（二八）加賀掾が延寶七年五月「牛若干人切」（山本九兵衛版）を大字八行本として刊行したのが八行本の嚆矢。これは謠本を模倣したものである。つばや板行とあるのは

延寶九年刊「大竹集」の事をいふのであらう。（「淨瑠璃史」一七〇頁）

宮島の市（二九）往古嚴島は繁榮した場所で「安藝の宮島、六月十四日より來月七日まで市有て、大坂から竹田のからくし嚴島八景を時計細工」云々（享保二年「傾城野群談」）とあるやうに、市には芝居興行も盛んに行はれた。此時義太夫は嚴島神社に參籠して新淨瑠璃を工夫したと傳へられてゐる。

竹田外記（二九）二代目竹田出雲。寶永二年竹本座の座本となり、後外記と改む。操興行界の第一人者であつた。延享四年六月歿。（「淨瑠璃史」竹田出雲の項）

貞享三年丑の年（二九）丑の年は貞享二年で、三年は誤り。この竹本座の櫓擧の時期を、淨瑠璃正本の刊行日附より推定すれば貞享元年、從つて次の加賀掾の下阪が貞享二年正月の事と考定されてゐる。（同右、竹本義太夫の項）

げにうけがたき（二九）「世繼會我」第二段、化粧坂の冒頭の文句。「さりとは……」は第三段虎少將道行中の文句。

あいそめ川（二九）梅の名寄と道行とが流行。道行は「墨と硯の戀中を誰が水さして浅みどり」京四郎芝居（三〇）山本京四郎座。

がいちん八島(三〇)西鶴作となつてゐるがそれは誤りで、近松の作といふのが定説である。

源氏移徒祝(三〇)明和版の「外題年鑑」には貞享三年正月二日上演とあるが、「出世景清」が

二月上演だからその後のものと見る方が妥當であらう。

佐々木大鑑(三〇)佐々木先陣の道行。間の山ぶしの思ひ川云々で初まつてゐる。

出羽(三〇)伊藤出羽掾名代の操芝居。當時からくり人形の山本飛彈掾が活躍してゐる。此座

は道頓堀最古の芝居であつたが、享保十七年十二月退轉した。

ほつこりした藏入(三一)充分な利益。藏入は芝居用語で、支出をのぞいた純利益のことをい

ふ。

有馬の薬師(三一)攝州有馬温泉の開基は薬師如來。古來よりこの温泉は有名で湯治者が多か

つた。温泉のきゝめが早いといふことから洒落れて、早速淨瑠璃に作つたといふのであら

うか。

ゑいとうく(三一)芝居用語。永當、榮當などの字を當て、長く幾久しくの意に遣ふ言葉。

あさじ日中お八つをかゝさず(三一)あさじは朝勤参りの略で、一向宗で朝早く御堂に参詣す

ること。お八つは午後二時。一日中御堂に籠つて佛に仕へたといふのである。

泪川戀の云々（三四）「泪川……うき川竹」のまで鐘入の段の冒頭の文句。この時辰松八郎兵衛がおやま人形の出遣ひをして評判を取つた。これが出語出遣ひの嚆矢である。

年拾八歳の頃（三四）正しくは廿二歳。「傾城懷子」の興行年月も明和版「外題年鑑」には元禄十二年八月上場とあれど、元禄十五年三月が正しい。

筑後跡芝居（三四）竹本筑後掾等竹本一座の者が伊勢へ旅興行に出かけた、その跡の芝居。東立慶芝居（三五）東立慶町にある芝居。伊藤出羽掾の芝居と思はれる。素淨瑠璃の出語はあけのとし即ち元禄十六年。「外題年鑑」に元禄十二年三月より十月に亘る豊竹座の上演曲目として「東山殿子日遊」等を擧げてゐるのは、此時のものと思はれる。（「邦樂年表」義太夫節の部）

ほり詰の二つ井戸（三五）道頓堀の東堀留町にある二つ井戸で、古來より名高い。この邊の民家の用水となつてゐる。堀留町の角詰にあるので堀詰といふ。近松の「今宮心中」にも「今宵限りとほりづめや、命二つを二つ井戸、深い縁とて死にたいも」。

筑能といふ人（三六）「攝陽奇觀」（卷七）によると、道頓堀吉左衛門町鹽屋九郎右衛門櫓（中の芝居）は泉州筑野北村六右衛門といふ富豪の持ちもので、出火以後は竹田近江の差配に

なつたとある。筑能は筑野といふ地名を誤つたものであらう。

櫓は濱の竹田に譲る（三六）櫓を竹田出雲に譲つた。このため寶永元年

は退轉、同三年

の末に再興する迄、若太夫は竹本座に出勤した。

口宣（三六）天皇口づから宣し給ふ勅命の意であるが、こゝでは受領のこと。

あらし芝居（三七）嵐勘四郎座。

作者の方から隙を乞（三七）享保十年限りで作者の田中千柳は、豊竹座の作者を辭して上京した。千柳の作が不當りであつたことを書いてゐるが、その實一風も合作者として名を並べてゐるのである。思ふに一風は豊竹座の顧問格で、紀海音引退後は作者としての名前は掲げたものの、實際の作は千柳に任せたものであらう。（「淨瑠璃史」四五頁参照）三十石（三七）三十石船。三十石積の荷物船で客船を兼ねたもの。この船は大阪伏見間の淀川を往來してゐた。

さいふりまはす（三八）采配を振る。指圖する。

西澤の下知に任せ（三八）西澤一風は實際には筆を下さなかつたのであらうと、黒木勘藏氏は推定されてゐる。（「近世演劇考説」の「淨瑠璃作者としての西澤一風」）

から子髻（四二）梅檀女道行の冠頭の文句。から子髻は元服以前の童子の結つたもので、髻から上を二つに分け額の上で二つの輪を作つたもの。後には女も結つた。

近松門左衛門……（四三）この文章は自筆辭世文であつて、原文には辭世の歌の次に「享保九年中冬上旬」といふ一行があり、「不俟終焉期」の次は「豫自記春秋七十二歳」と續いてゐる。その他原文を誤り傳へてゐる箇所は原文を傍記して置く。尙この辭世文は「日本文學大辭典」の近松の項に寫眞版になつて載つてゐる。

荻野八重桐（四五）初代。寶永より享保にかけて京都の名若女形。派手な藝風を持ち、時代・世話何れにも秀で、又舞踊にも長じた。享保十一年三月の役者評判記「東は武藏野の月拳相撲」によると、若女形の第一席にあり極上上吉の位付を取つてゐる。

取まはり（四五）身ごなし。節廻しの意味であらう。

嵐三右衛門（四五）三代目。享保頃の大坂の立役。祖父傳來の六方と和事に長じてゐた。享保十一年正月の役者評判記「役者正月詞」では立役の第二席、上上吉。

はんなり（四八）はなやか、はれ／＼。

見一無頭歸一倍市（四八）算盤の割算の九々。見一無頭作九一、歸一倍市一進一十。

杉山勘左衛門（四八）上方の立役。役者評判記「役者正月詞」で立役の第八席、上上吉。その評の内に「年數を自分にわきまへ、やはらかなる藝をはなれて、實事と出られし器量ある衆」云々。

市のや重郎兵衛（四九）京都の立役。享保十年正月「役者美野雀」に立役第八席で上上吉。評に「いかさまねれけのない藝いきさなりとしてきみよし」云々。

上落（四九）上達。

音羽次郎三郎（五一）上方の立役。天和貞享頃は若衆方であつたが、元祿初年より立役に轉じ、實事の重鎮となる。文才に富み作者をも兼ねた。享保九年三月「役者三友會」には立役第二席、上上吉。評に「當世一風の實事、小兵なれ共ひれ有て藝大場にして、打ついてよい御家老役」云々。

延紙（五一）小形の杉原紙で鼻紙・書簡等に用ひる。粹客遊女が常に懷中してゐたもの。

花妻（五一）大阪の若女形、佐野川花妻。「役者正月詞」に若女形の第二席、上上吉。評に「一頃は少し桃屋の始で、ねいり花のやうにありしが、めつきりと藝に旨味が出て、喰手が多うて評判つよく、お仕合く」。

になはず枀中やたへなん（五一）擔ふて折るゝ棒といふ諺があり、兩者の優劣輕重なき意味。
澤村晋右衛門（五二）上方の立役。「役者正月詞」に立役第五席、上上。評に「近年の名物、このやうにも仕上らるゝものか、此度初ての實形、……古坂田（藤十郎のこと）のいきごみ自然とそなはり、長十殿（澤村長十郎のこと）の思入を其儘にうつさるゝ。元來器用なる藝のはだ、今の間に大立物はたしかゝ」

三浦彈正・二階堂城之助（五二）「北條時頼記」の中の人物。「外題年鑑」によると品太夫はこの初演に出勤してゐる。

山本京四郎（五三）大阪の立役。享保十一年三月「拳相撲」に立役第七席、上上。座本。

市川團十郎（五七）二代目。江戸の立役。「役者正月詞」に立役第一席、極上上吉。評に「御當地はいふに及ばず、京大坂迄も此人の藝と名をかりて大入を取らるゝは居ながら團十殿のお手柄……色事武道荒事世話何に一つの不足のない藝者」。

ちくとんばいほめまらしよ（五七）ちつとばかりほめませう。

公平づくり（五七）金平淨瑠璃に登場する人物は皆武張つたものばかりであるが、島太夫もその中に出て來さうな風體の人物であつた。

ほんじやうほやり（五八）愛敬良くおだやかなこと。

松本幸四郎（五八）初代。江戸の立役。荒事・實事を得意とした。「拳相撲」に立役第二席、上上吉。評に「松本殿はあら事力量……、いつ見てもかゆい所をあつ湯でたでるやうで氣味がよろ」。

はしかい音曲（五八）すばしこい、テンポの早い音曲。

嵐三五郎（五九）初代。上方の立役。「役者正月詞」に立役第十席、上上吉。評に「去年辰の霜月三保木座へのぼられ、顔見世より仕舞芝居迄評判すぐれ打續いて京づとめ首尾よく其身の譽、御大慶く」。

金貝の揚弓（五九）金貝は金・銀・銅・錫等の薄片を蒔繪に施したものをいひ、その金貝細工の揚弓。

坂田半五郎（六〇）江戸の立役。「役者正月詞」に立役第八席、上上吉。評に「近年めつきりと秀られ、一場を引請よく致さるゝ。根が悪より實に直られし故、生得の悪まじりたる藝のかた、一入出来榮いたす」。

市川團藏（六一）初代。江戸の立役。「役者正月詞」に立役第四席、上上吉。評に「松本幸四郎

殿におし續いての荒事、古市川の流を立て、諸藝細かに、何をさせてもあつたものではござらぬ」。

手取りの役者（六一）器用で上手な役者。

宿札（六二）門札。標札。

市村竹之丞（六二）江戸の若衆方。「役者正月詞」に總卷軸。市村座の太夫元。

勝山又五郎（六三）江戸の立役。「役者三友會」に立役第十五席、上上。評に「近年評判ねいりてきのどく……はし辨慶のやつし上るりに今あら事又太郎風出來ました」。

土佐節（六三）土佐少掾橋正勝の創めた淨瑠璃。寛文延寶の頃から操座を設けて興行し、世間に歡迎されてゐたが、寶永以降は衰微した。

半太夫節（六三）江戸半太夫の語り出したもので江戸節ともいふ。樂風は上品なもので座敷淨瑠璃として元祿の頃大いに流行した。

永閑節（六三）虎屋永閑の創めた流派。公平淨瑠璃の類のもので、操座を興行、貞享元祿の頃に流行した。

さつま（六三）江戸淨瑠璃の開祖といはれる薩摩淨雲のはじめたもので、寛永正保の頃大いに

行はれた。

難波土産

淨瑠璃の來由（六八）小野於道に關する記事は「京雀」「江戸名所咄」等によつて書かれたもので、江戸中期迄この説が一般に行はれてゐたが、柳亭種彦が「還魂紙料」に於て否定した。

「聲曲類纂」参照。

岩橋檢校（六八）「江戸名所咄」「竹豊故事」等では岩船に作る。

西の宮の傀儡師（六九）「昔々物語」の記事に據つてゐる。

祭文（七一）歌祭文。神佛行者間に行はれた山伏祭文の轉化したもので、巷間の時事、特に心中物等を語つて合力を乞うた。元祿時代より盛んになり三都に行はれた。

文彌節（七二）岡本文彌に始り天和貞享頃に流行した淨瑠璃。俗に泣き節とも云はれ、哀調を帯びたものであつた。曲目は「外題年鑑」参照。

藝のりくぎ（七二）六義。漢詩の六種の風をいふが、轉用して藝の風に使つたのである。

三の趣向と云々（八三）淨瑠璃では概して三段目は曲の主眼ともいふべき段で、二段目は幾分

位が軽い。

擔ふておるゝ棒（八七）六七八頁参照。

清十郎おなつの土用ぼし（八九）寶永六年正月竹本座所演、近松の「おなつ清十郎 五十年忌歌念佛」

の趣向を真似てゐるといふのである。

七小町（八九）享保十二年四月竹本座、竹田出雲作「七小町」に大原さこねの趣向がある。

ありべかゝり（一〇八）普通並み、もんきりがたの意。

請取ぶしんをみるやうに云々（一〇九）請負の普請のやうに作りが粗末だといふのである。

居せりふ（一一〇）せりふばかりで動きのないこと。

あやつりを見やうならば云々（一一〇）この事は言葉をかへると、近松の作品は舞臺に上せては餘り面白くない、文學的には傑れてゐても、演劇的には單純すぎるといふことにもなる。今日文樂で上演される曲目で、近松の改作は演ぜられても原作の儘での上演は稀であることはその證左であらう。これは近松の時代は人形の作りも簡單で、操法も一人遣ひ、従つて眼に訴へるよりは耳に聞かせるといふ傾きが強かつたためと思はれる。この書のかかれた元文頃には、既に人形の目・口も開き、指も動き、三人遣ひも初まり舞臺萬般に亘

つて複雑になつて來てゐる。だから本文の作者も認めてゐるやうに「大夫衆の音曲とあやつりの色どり」にて、見て面白い芝居になつて來てゐるのである。

妣（一一四）妃の誤り。以下妃に訂正した。

眞君の靈府（一一七）造物主・神の精神。

北條時頼記（一一九）「當四月八日初日にて翌未年閏正月迄大人繁昌す。夫故太夫上野掾居宅太左衛門橋筋八幡筋乾角屋敷の裏に土藏を建て、北條ぐらといふ。か程に利徳を得たる淨るり也」〔攝陽奇觀〕卷二十五

一重切（一二二）^{ひとよぎ}一節切。尺八に似た管樂器で、中途に節が一つある故この名がある。元祿前後盛んに行はれた。

下駄とやきみその相手どち（一二五）少し似て大いに異なるものゝ喩。昔味噌を焼くに下駄の如く足のある板を用ひた故といはれてゐる。

大内裏大友眞鳥（一二九）「大友眞鳥の淨瑠璃の趣向は以貫の一夜にて立てたる趣向にて、竹田出雲へ授けしとなり。道行は自作なり」〔反古籠〕

鴻臚館（一二九）外國の來賓を接待した旅館で、京都の外難波や太宰府にもあつた。

惣嫁（一四二）辻君とも。夜陰路傍で淫を賣つた最下等の私娼。關西の方言。

鉢ぼうず（一五八）托鉢して物を乞ひ歩く僧。

近松が筆に云々（一六八）「山崎與次兵衛壽の門松」に「被ぐ布國の緞子よりむりやうの事ぞ思はるゝ」

あらみさき（一八六）荒御鋒。住吉大明神の荒御魂。

毎句付の笠（一九一）前句附まへくづけの誤。俳諧から派生したもので、前句附合の略。前句即ち十四字の短句を課題とし、之に十七字の長句をつけて三十一字の歌の形式を作るもの。笠は笠附のこと、句の首におくのをいふが、こゝでは前句の意味につかつてゐる。

方士（一九七）神仙の術をおさめる者。占師。

荆の國云々（二〇九）荆の國とあるは楚の國。初めの荆王は厲王、後のは文王のこと。

竹 豊 故 事

茶屋はいろはの四十八（二四二）道頓堀の芝居見物の人々が俄雨や炎天で難儀したので元祿五年冬に許可を得て、立慶町吉左衛門町に板圍ひの水茶屋を建てた。その數が四十七軒あつ

たので、俗にいろは茶屋と稱した。「南水雜誌」、浪華叢書卷二）同書の別の個所にはいろは茶屋四十八軒とある。

櫓は八つの定芝居（二四二）定芝居とは毎月續いて興行してゐる芝居で、道頓堀には古くから八つの小屋があつた。「南水雜誌」に道頓堀定芝居株として、伊藤出羽掾芝居・大阪太左衛門櫓（角の芝居）・竹本筑後掾芝居・松本名左衛門櫓（大西芝居）・鹽屋九郎右衛門櫓（中の芝居）・竹田近江掾芝居・龜谷肥後大掾芝居・豊竹越前少掾芝居をあげてゐる。尙享保年間大阪の圖によると、道頓堀には淨瑠璃四、歌舞伎四、竹田からくり一、都合九つの小屋がある。

酒吞童子の道行（二四二）近松作「酒吞童子枕言葉」頼光山入の事で、その中に「月にわかれて月に又ゆふべは宿をかりはらの」とある。

雪の段（二四二）並木宗輔・西澤一風作「北條時頼記」女鉢の木の事で、その中に「實にや蘆生が見し榮華の夢は五十年、其邯鄲の假枕」とある。

薪の能（二五〇）元は獻薪の儀式から轉化したもので、初めは風俗歌などを謡ひ舞つたものであるが、後に猿樂を演ずるやうになつた。現在も春日神社の神事能として二月に行はれる。

猿樂（二五〇）奈良期から室町期に行はれた雑伎・雜藝の總稱で、滑稽な歌舞伎物眞似を主とするものであつたが、漸次洗練されて能樂に進化した。

田樂（二五〇）もと農家の歌舞で、田植時に耕作の勞苦を慰めるために行はれてゐたが、後には神事の用に供せられるやうになつた。平安末期より室町初期に盛行したが、中期より猿樂能に壓倒されて衰微した。

鑓を並ぶるは云々（二五一）「歌舞伎事始」には檜に五本の鑓を並べるのは、五奉行の支配を意味するといつてゐる。

定芝居御免（二五一）三都定芝居の許可になつたのを承應三年といふのは正しくない。京都では元和年中、大阪は承應元年、江戸では寶永元年にそれ／＼に公許されてゐる。（伊原敏郎「日本演劇史」）

角澤檢校（二五二）澤角（佳）の誤り。この誤りは、「外題年鑑」、「淨瑠璃大系圖」に踏襲されてゐる。

貞享二年丑五月十九日（二五六）「操年代記」には播磨掾の歿年を記してゐないのに、三十年後に出た「竹豊故事」は何によつてそれを定めたか、高野正己氏はこの疑問について考證し

播磨掾は延寶五年正月京都で頼光跡目論を興行の際客死したと推定してゐる。(『近世演劇の研究』の「井上播磨掾の歿年に關する疑」)

冷泉・綱戸(二六二)「音曲口傳書」參照。

平家(二六二)平家琵琶。平家物語を琵琶の伴奏で語る音曲。鎌倉時代の初め、盲僧生佛に起り、爾來檢校の專業となつた。

説教(二六二)僧侶の説教から轉化した語り物。時代により唄説教・門説教・説教節・説教淨瑠璃などと呼ばれ、曲節も少し異つてゐる。江戸時代には三味線・操人形を伴ひ大いに流行した。

歌念佛(二六二)江戸時代に行はれた歌曲で、伏鉦に合せて念佛の節で、色々な歌をうたふもの。佛教の和讃の轉化したものとも念佛踊の地から出たものとも云はれてゐる。

黒幕・山簾(二六三)黒幕は黒一色の幕、山簾は背景となるべき山を描いた簾。何れも簡素な舞臺裝置のものである。「聲曲類纂」所載の古圖參照。

鍬泥くわでいの摺込模様(二六三)布に型紙を置いて、その上から眞鍬の泥を摺込んで附けた模様。

詰人形(二六三)一人で遣ふ、捕手や腰元等端役の人形。

落合おちあひ（二七一）義太夫節の語り場の名稱で、アトともいふ。一段の結末がついて、尙後の趣向の伏線となる小場をいふ。例へば「忠臣藏」で云へば三段目の裏門の段、四段目の城渡ししろどしの段が落合である。

手妻人形（二七九）手妻は手品の轉。手品のやうに手早く動き變化する機巧きこう人形の事。「からくり細工はおやま五郎兵衛其子山本彌三五郎是を傳へて無双の名人となる。一筋の絲をもつて大山を動かし、小刀一本を以て形ある物を作りて是を動かしむ」（棠大門屋敷）

南京糸操（二七九）小さい人形に糸を附け上から釣つて操るもの。南京は支那といふのではなく、小さいといふ意味に使はれてゐる。寛文の頃から大阪伊藤出羽掾芝居で行はれたが、同じ頃京山本角太夫座では手妻と糸操を併用して舞臺効果を擧げた。

箕裘きせうの業（二八三）父祖の業を繼ぐことを意味する。文吾が父文三郎の跡を繼いでゐるからこの評語があるわけである。

倒冠雜誌

出來文句（二九〇）立派な文句。

天満やお初のかな本（二九〇）元祿十六年五月竹本座上演の、近松作「曾根崎心中」、世話浄瑠璃の嚆矢とされてゐる。

御堂の前（二九〇）大阪船場北の御堂前から南の御堂前迄八丁計りの間、人形店が軒を連ねて人形を商ひ、大いに繁昌してゐた。（「攝津名所圖會大成」卷十三）

大和彦太夫（二九〇）初代竹本大和太夫のこと。筑後掾の門弟で初名を彦太夫といつた。正徳三年二月初めて竹本座に出勤、天神記の天拜山を語つて名聲をあぐ。同四年十月退座、享保三年十月再勤。享保十六年吉田文三郎の獨立計畫に参加したが成らず同十八年歿。

和泉太夫（二九〇）初名竹本澤太夫。享保三年十月竹本座に出勤。同六年二月、和泉太夫と改む。同十年五月豊竹座へ轉じて豊竹を名乗つたが、十八年四月竹本座に復歸し、元文三年歿。

ちやり（二九一）滑稽。「和田合戦女舞鶴」の四段目の口阿闍利あじりの場が、滑稽味を主としたもので好評を博したが、是が訛つてチャリ場と成つたといはれてゐる。

後の文月（二九一）寶曆九年閏七月。

貞享三年丑のとし（二九四）丑の年は正しくは貞享二年、これは「操年代記」の誤りを踏襲し

たものであらう。義太夫の旗擧げは今日では貞享元年といふのが定説となつてゐる。

筑後掾傳教云々（二九二）寶永元年筑後掾病のため座本を退き、出雲掾に座本を譲る。同二年十一月「用明天皇職人鑑」より、出雲は筑後に代つて竹本座の座本となり、近松・筑後を自分のかゝへとして興行を初めた。彼は今迄の方針を一變し、淨瑠璃本位を改めて人形本位とし、衣裳舞臺道具等を改良した。

突込み（二九二）突込人形。辰松八郎兵衛がこの流義の代表である。當時主として竹本座はこの人形を遣ひ、豊竹座は後から手をさし入れる片手人形を遣つてゐる。

若太夫と心を合し芝居興行云々（二九二）辰松は元竹本座の人形遣ひであつたが、寶永三年興行師河内屋加兵衛の勧めで若太夫と相座本で豊竹座を再興し（操年代記参照）、その後十年間は東の舞臺に出精したが、正徳五年十一月「國性爺」より竹本座に復歸し、おやま人形を遣つた。「國性爺」打上後豊竹座に勤めたが、享保三、四年の夏頃迄には江戸に下り、上覽芝居を行つたりしたあと、葺屋町の江戸半太夫座を引受けて辰松座と改め、自ら座本として興行を行つた。

山本飛彈掾（二九三）からくり人形の元祖で、竹田近江芝居、伊藤出羽芝居に出勤し、後には

出羽芝居の座本となつた。その扱ふ人形は片手人形で、後の三人遣ひの源流となるもので三郎兵衛が飛彈掾の系統を引いたことはその意味に於て重要な事柄である。(石割松太郎『近世演劇雜考』中の「人形三人遣ひの源流」參照)

最初の國性爺(二九三)三郎兵衛は和藤内を遣つた。

南瞻部州(二九三)佛語。南閻浮提ともいふ。須彌山南方海中の島で、もと印度の稱であつたが、轉じて人間世界、現世の意味に使はれるやうになつた。

梅がへの無間の鐘(二九三)「ひらかな盛衰記」第四段で、遊女梅が枝が手水鉢を小夜の中山無間の鐘に擬して柄杓で打つ前後の所作について、「歌舞伎年代記」に次の記述がある。

「享保十三年春京市山助五郎座にて、瀬川菊之丞、庄屋六右衛門娘おすまにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘になぞらへ打ちしが始めなりといふ。同十六年亥春中村座にて葛城にて勤むる。初日舞臺にて金を包む物なき故、衣裳の袖をまことに引切りたりし其思ひ入りよかりし故、翌日より其通りにせしとかや。」右のやうな型を踏襲したのであらう。

島の勘左衛門(二九四)延享四年八月「傾城枕軍談」。

かけ鯛心中(二九四)今宮心中の異稱。二郎兵衛おきさの兩人が今宮戎の森で情死したが、松

の木に日野絹一反をかけて縊死を遂げてゐる狀景が、正月の飾物の掛鯛を聯想させるのでこの名がある。

昔の小室ふし云々（二九四）近松の「丹波興作」の改作。その第五段目文三郎の道成寺の所作が評判を取つた。

忠臣藏より文吾と改め（二九五）忠臣藏より一年前、延享四年十一月「義經千本櫻」の時既に文吾と改めてゐる。

竹田近江（二九五）竹田芝居では四代目、竹本座の座本としては三代目。

弟大三郎（二九五）吉田大三郎。後竹本座に復歸し、寶曆十年五月興行より出場してゐる。吉田彦三郎はその後の消息は明かでない。

手代の不調法と偽り云々（二九六）一旦解雇したものを、獨立興行の企てを聞いて和陸したのは文三郎の力が過大になるのを恐れたものと思はれる。こゝに文三郎の勢力が窺はれる。

八年以前（二九六）寶曆二年。

同笛（二九六）千前軒竹田出雲。

京都へ出芝居興行（二九六）寶曆三年春竹本一座京都へ行き操芝居興行（「聲曲類纂」）。

三十貫（二九七）寶曆頃の金一兩に對する銀比價は六十匁強であるから、銀三十貫は大體五百兩に相當する。現在の金に換算すれば一萬圓位になる。

二十五兩（二九八）銀に換算すると一貫五百目で、隠居料に相當する金額である。

五月節季は類焼にて云々（二九八）五月四日竹本座類焼したので、隠居料を贈らなかつた。節季は間節季、即ち二ヶ月勘定。

借座敷をかり云々（二九八）淨瑠璃座敷をしたいとの願出。

役者共（二九八）人形遣ひの意味。

太夫本も三代役者も三代（二九九）竹田近江は竹本座の座本としては三代目であるから、吉田三郎兵衛・文三郎・文吾の三代と照應することになる。

音曲口傳書

淨瑠璃に師匠なし云々（三〇五）井上播磨掾より申傳へられたやうにいつてゐるが、實は宇治加賀掾から出たもので、その段物集「竹子集」の中に見られる言葉である。又「紫竹集」にも「淨瑠璃は謠狂言の音聲を父とし、草紙の文勢を母とすべし」とある。

徳屋理兵衛（三〇六）清水理兵衛のこと。

鉢の木文彌節にて云々（三〇八）鉢の木は西澤一風等作の「北條時頼記」雪の段の事。その中に文彌節の節附があり、豊竹越前少掾の得意の出し物として屢々上演してゐる。それを文彌節で當りを取るのには、義太夫節の太夫としては名譽でないと非難してゐるのである。

正風體（三二四）竹本筑後掾の語り風。

傾城請狀（三二四）「百日會我」の第二段。

竹本豊竹淨瑠璃譜

笠翁・偃師（三三四）李笠翁は明末清初の文學者で、小説戯曲の述作に努め、戯曲「笠翁十種曲」が著名。偃師は周の人、人形を造つて穆王を驚かした。その故事より傀儡師を意味す。

淨瑠璃年代記（三三四）寶曆十三年江戸で刊行された「古今淨瑠璃年代記」の事か。この書は「外題年鑑」の偽版であるが、江戸在住の蜀山人の眼に觸れてゐたものと思はれる。

甲子仲春幾望（三三四）文化元年二月十四日。

杏花園主人（三三四）太田南畝の號。彼は本名は覃、十六七に及ぶ別號を持つてゐる。牛門と

いふのは、江戸牛込徒町に住んでゐたからである。人は彼を牛門先生とも稱した。

高観音近松寺（三三五）近松の出生地として誤りであることは定説となつてゐる。精しくは黒

木勘藏「近松門左衛門」参照。

丹波興作（三三七）この上演を「外題年鑑」も寶永四年とするも、内容から見て「重井簡」

（寶永四年十一月作と推定）の後のものと思はれる。寶永五年頃。（黒木「淨瑠璃史」二

五五頁）

番付古板云々（三三九）この書入れは蜀山人の筆である。これは文政庚寅（天保元年）に虎の

繪の入つてゐる「國性爺合戦」の番付を複製して頒布した者があつたが、その番付に十五

日よりとあるためである。但しこの番付の眞偽は明かでない。

三年越（三三九）寶曆七年十二月より九年春迄、正味十四五ヶ月であらう。

弓手（三四〇）人形の腕の曲げ伸しを鯨の齒で作つたばね仕掛けにして、紐で操作するやうに

した手。一人遣ひ或ひは二人懸りの時に使用された。「戲場樂屋圖會拾遺」参照。

小幕（三四〇）水引幕。六六八頁参照。

三代前吉田文三郎（三四〇）初代文三郎のこと。二代目文三郎は寛政二年に歿し、此書の成つ

た寛政の頃は三代目を名乗る文三郎はまだ現はれてゐないが、先々代といふ意味で遣つたもののやうである。

大文字山（三四一）毎年七月十六日の夜魂祭りの送り火とて、東山大文字山の半腹で大といふ文字に篝火を焚いた。

操り三人懸の始（三四二）三人掛りの工夫をしたのは近本九八郎。三人遣ひ發生の経緯については石割松太郎「人形三人遣ひの源流」（『近世演劇雜考』）参照。

此年（三四二）享保二十年十一月二代目義太夫受領して竹本上總少掾。「天神記」はこの時の祝儀である。「外題年鑑」参照。

長さし金（三四四）人形の腕を差し出す支へ棒。棒の左右についてゐる紐で指先を操る。三人遣ひの操法を十分に効果あらしめるために差金を長くしたものと思はれる。

續て十一月十六日（三四六）延享元年。

本どろ（三四八）本物の泥。この時本泥・本水を使用した。

そさのをの尊の頭（三四九）素盞鳴尊。後雁金文七に遣つてから文七の名に變つた。

糸鬘（三四九）江戸中期の男の髪結び方で、頂を廣く剃下げ、兩方の鬘を糸のやうに細く残

して結つた髪。

照柿（三四九）黄赤色に熟した柿色。

布袋市右衛門（三五〇）雁金五人男の中の一人。

ニツ胴梶原（三五一）「三浦大助紅梅袴」の梶原平三。この三の切が石切梶原の原作である。

時平公の諸太夫（三五一）「三浦大助紅梅袴」の梶原平三。この三の切が石切梶原の原作である。

太夫松王播磨守といふ侍だぞ」といふセリフがあり、松王が袴姿で出ることがある。三つ

子だから揃ひの扮装にすべきであつて、これは改悪だといふのである。諸太夫は公卿に仕へる官人のこと。今日ではこの演出は殆ど見られないが、昭和十六年三月歌舞伎座で中村吉右衛門が演じたことがある。

菅原の役割（三五三）「邦楽年表」所載のものと相違す。

掛臺（三五五）今日の文樂で、床几や小道具等を置く時に用ひる蓮臺の事であらうか。

頭取は豊松彌三郎（三五五）人形遣ひの頭取は豊松彌三郎といふ苦勞人。彼は安永七年頃は豊竹座の人形遣ひとして相當の位置にあつた。

若竹伊三郎（三五六）延享——天明に活躍した人形遣ひの名手。若竹東工郎の門弟で、師に次

ぐものとして豊竹座に主きをなしてゐた。

千本櫻の役割(三五七)・忠臣藏の役割(三五八)「邦樂年表」所載のものと相違す。

大もめありて云々(三五九)九段目の山科の段の演出の事から吉田文三郎と櫓下太夫此太夫との間に争ひが起り、文三郎の人氣を重んじた座本竹田出雲は結局此太夫を休ませ豊竹上野少掾を代演させた。この結果此太夫は、豊竹座に入つて座頭となり、島太夫等も之に従つた。反對に豊竹座の千賀太夫等は師上野少掾(竹本座に移つて大隅掾)に従つて竹本座へ移つた。こゝに東西兩座の太夫の大入替が行はれたが、この事は兩座の藝風を混亂させることゝなつた。(若月保治「人形淨瑠璃三百年史」)

身上定(三五九)由良之助の役の出來不出來によつて給金が決まるといふのであらう。

長吉長五郎(三六一)放駒長吉・濡髪長五郎。一寸徳兵衛を前者に、團七九郎兵衛を後者に當てたのである。

澤村宗十郎が油斗の云々(三六一)初代。江戸の俳優。二代目團十郎と覇を争ひ、和實を最も得意とした。寛保三年大阪へ上り大西芝居で「大門口鎧襲」を所演。「並木正三一代噺」に「齋藤山城油はかりの狂言に二階座敷一面のせり上げ道具といふ事初む」とある。

市山助五郎（三六四）二代目。明和・安永時代の立役。初め竹本座の三絃方をつとめ鶴澤長藏と稱してゐた。後俳優に轉じ、安永初年には中芝居の座本となつたが、同五年頃からその名が見られなくなつた。

此砌少々もめあつて云々（三六四）次の寶曆六年「崇徳院」の項は上欄に追記されたもので、此砌は寶曆九年のこと。「外題年鑑」には「大和掾・吉田文三郎休」とあるが、文三郎はかねて竹田近江とよからず、寶曆八年十月に病と稱して隠居してゐる。

大西芝居（三六五）大西芝居といふのは筑後芝居即竹本座の事で、寶曆九年よりこの名になつた。獨立を企てようとしたのは嵐吉三郎座。（「倒冠雜誌」）

吉田文三郎京都の芝居を勤む（三六五）「倒冠雜誌」に京へ上り蟄居といつてゐるのが本當であらう。文三郎は翌寶曆十年正月病歿してゐる。文吾は九年九月三郎兵衛と改名して竹本座へ出勤した。

近比死去せられし竹田近江大掾（三六六）大阪青蓮寺の墓碑によると、天明八年十月六日歿。

（木谷蓬吟『淨瑠璃研究書』中の「竹田出雲一族の墓碑發見とその豪華生活」）

仕打（三六六）芝居の銀主。資本家。

下屋敷（三六六）別宅。高津新地四丁目にあつた。

一夜に四季の體を庭に置（三六六）「明和雜記」に「去る巳年田中屋卯左衛門、鐵屋庄右衛門など招請して振舞をいたし、雪月花の宴と言ひけるも思ひ出せり。其頃島之内名譽の藝子白人中居等も呼迎へ、門口には門松を立てしめを張り正月の體、先づ座付に雜煮出して、藝子春駒大黒舞引うたう、いづれも趣向ありし事也。障子開けば櫻花の今を盛りと咲亂れし一興、やゝ時うつりて名月の趣あり。かくて更行くまゝ座敷の障子はらゝと降る音しければ、皆々立寄り障子を開けば、しめゝとして雪降り樹木庭石皆白妙となつて、其氣色いはん方なし。平生かやうの細工を行とせし近江なれば其模様萬事至つて流石に思ひやられしなり」云々。

五千兩の用金（三六六）徳川幕府は寶曆十一年十二月米價調節のため、大阪町人三百五人に對し百七十萬三千兩の御用金を申付けた。これが一人當り大體五千兩位になる。

竹本芝居にて云々（三六六）竹田竹本兩座合併興行の狂言を參考のため擧げてみると、

第一 筑後あやつり 忠臣藏二ツ目・三ツ目・四ツ目

第二 竹田狂言 奥州安達原

第三 筑後あやつり 忠臣藏六ツ目・七ツ目

第四 竹田からくり 機關梅早咲

第五 筑後あやつり 忠臣藏道行・九ツ目

第六 竹田狂言 友全染

尙この際の口上については「淨瑠璃大鑑」(三六三頁)参照。

又兵衛(三六八)初代竹本岡太夫のこと。攝州豊島郡岡町の産で、通稱岡又とも呼ばれた。

並木正三の作(三七〇)正本には友江子當證軒とある。

竹本芝居退轉(三七〇)明和四年十二月退轉。跡を山下八百藏に譲つて離散したが、八百藏の芝居も思はしくなく二の替りで退いた。かくて翌五年六月近松門左衛門の名代で再興したが振はず、同八年正月近松半二の「妹背山」によつて人氣を取戻したが、實質的にはこれが竹本座の終焉であつた。

中衆(三七二)なかしゆ、仲仕。こゝは豊後家の藏の差配をする藏仲仕の意であらう。尙「竹豊故事」では越前少掾の出生を南船場としてゐる。

元祿十五年壬午より云々(三七二)「外題年鑑」には五月二十八日初日で「心中涙の玉井」上場

の由記してゐるが、これは十六年の誤り。豊竹座の創始も「操年代記」に云ふ如く、元祿十六年とするのが至當であらう。

けいせい懷子（三七二）六七四頁參照。

井筒屋源六戀寒晒（三七三）明和版「外題年鑑」に元祿十六年正月上場とあるため、「淨瑠璃譜」の著者が誤つたのであらう。正しくは享保八年七月六日上場。寛政版「外題年鑑」では訂正されており、又西澤一風の「當世榮花物語」にも明記されてゐる。

西澤一鳳（三七三）「けいせい國性爺」の作者は紀海音の誤り。

始て芝居の表へ幟進上（三七八）「外題年鑑」によると同じ享保十六年の五月、竹本座の「國性爺合戦」の時、「天満の最風組より芝居の表に初て幟を立る」とある。

正面の床を横へ（三七九）竹本座では享保十年にこの改革が行はれてゐる。

外題御差留（三七九）「南蠻鐵後藤目貫」は大坂落城を露骨に描寫したため幕府の忌諱にふれて上演禁止となつた。出版も禁ぜられて寫本で傳つてゐる。

若竹東工郎（三八一）元文―明和時代の人形遣ひの名人。元文三年十月豊竹座に出勤、爾來次第に名を擧げ、寶曆八年「東西評林」には吉田文三郎の次に据ゑられて「當流の達人」の

評を得た。

久米仙人五段目（三八三）寛保二年正月、大阪佐渡島長五郎座三の替り「雷神不動北山櫻」。この興行は大いに當つて百七十日打續けた。海老藏は二代目團十郎。菊五郎は元祖、上方の若女形であつた。

潤色江戸紫（三八三）並木宗輔の作といふのは誤りで、爲永太郎兵衛、淺田一島等の合作で、紀海音「八百屋お七戀緋櫻」の増補。尙この初日は「邦樂年表」には四月五日、「外題年鑑」は二日となつてゐる。

どうぐし（三八五）^{どど}胴串。人形のかしらの首の下についてゐる棒。（以下人形の構造については「戲場樂屋圖會」及び宮尾しげを「文樂人形圖譜」参照）

引せん・小ざる（三八五）何れも胴串に附屬した竹の板で、引せんは人形の頭を上下動させる紐、小ざるは眉・目・口等を動かす紐がついてゐる。

かた板（三八五）人形の肩になる板。頭を止め、衣裳をかけ、足と手を吊る役目を受持つてゐる。

突上げ（三八五）人形の肩板に結付けてある一尺二寸餘の竹の棒。人形遣ひが是を腕に當て、

人形を支へるのである。

丸胴（三八五）胴を見せなくてはならない時使用される胴の一つ。張子の一貫張りで、固い胴形をしてゐて、妹背山の鱗七などに使つてゐる。

片腹（三八五）かけ腹のことか。着物は着てゐて胸の部分だけを見せるもの。「伊賀越」の沼津の平作等に用ふ。

つかみ手（三八五）五本の指が一本々々動き、物をつかむ形の時に用ふ。これには色々の種類がある。

黒がふ（三八五）黒衣。人形遣ひ等が衣服の上に著る盲縞の上張り。

半合羽（三八五）丈の短い合羽で、小身の武家などが用ひたもの。

頭巾（三八五）人形遣ひの冠る黒い頭巾。現在では耳を折るのは吉田流、立てるのは桐竹流。

舞臺下駄（三八五）舞臺で人形遣ひのはく下駄。高きは一尺二寸五分より低きは四寸迄、數種

類の大きさがある。

歌舞伎黒船の狂言（三八六）享保十八年江戸中村座興行の「出入湊」を紛本としたものと云はれてゐる。

白人（三八七）島の内、新地等の私娼の別稱。

攝州渡邊橋の役割（三八七）・かしくの役割（三八八）「邦樂年表」所載のものと相異す。

南新屋敷福島清兵衛云々（三八八）「三月十九日朝、介右衛門橋心中。男は生國和泉の者内町大工の弟子六三郎、女は道頓堀新屋敷の女郎おその、助右衛門橋東詰の濱にて、相對死」
〔攝陽奇觀〕卷二十九

中山無緣經云々（三八八）「御城代阿部伊勢守御手廻り宅平といふ者、紫雲山中山寺無緣經修行中代參の節、神崎邊にて馬士共と口論有之、下向に及んで大喧嘩と相成り、宅平一人にて相手大勢に手疵負せ候へ共、馬士非分に相究り宅平無難に役儀を勤む」（同右）。その宅平を船越十右衛門と變へて脚色したといはれてゐる。

作者並木惣助（三八八）作者は豐丈助・淺田一鳥等が正し。

伊勢音頭（三八九）伊勢古市の盆踊。享保頃古市の妓樓で行はれて以來、次第に座敷藝として發達し、諸國に傳つた。

懸あんどろ（三九〇）家の入口、店先等に掛けておく行燈。上方で用ひられる。「すべて芝居茶屋の店先の體にて萬屋といふ提灯・かけ行燈」（「青樓詞合鏡」）

此時並木宗助死す（三九〇）本文に依ると寛延二年九月頃になるが、濱松歌國の「劇場年鑑」

は寶曆元年九月七日としてゐる。（「邦樂年表」）

一谷嫩軍記の役割（三九一）・祇園祭禮信仰記の役割（三九四）「邦樂年表」所載の分と相違

あり。

花道（三九九）操りで花道を何時から使用しはじめたか明かでないが、元祿末に京都の宇河加賀掾座で使つて居り、寛政享和頃に存在してゐたことは「戲場榮屋圖會拾遺」によつても知られるが、何時頃取去られたかも明かに判らない。（若月保治「人形淨瑠璃三百年史」九

一〇頁）

十四日芝居類焼（三九九）流布本では「十四日芝居類焼……三番叟若竹東工郎」の「葉が亂丁になつて、寶曆十三年四月芝居普請の次に續いてゐる。

枝芝居（三九九）上方で場末の芝居をいふ。

石垣芝居（三九九）石垣町は京都加茂川の東、大佛殿の北にある町名で、古くより男色及女色をひさぐ惡所であつた。その石垣町の芝居。「洛陽ひさご念佛」は邦樂年表によると寶曆十三年三月豐竹座で上場とあるが、本書に豐竹座は正月に類焼、一座を分つて京・堺に行く

とあり、芝居普請は四月の事だから、その三月興行といふのは京都で行はれたと見るのが妥當であらう。

古淨瑠璃身取にて語る（四〇〇）古淨瑠璃の寄せ物。通し狂言でない、いくつもの違つた外題を並べたといふのである。身取は見取りの書誤りであらう。この時祝儀として出したものに「東鑑御狩卷」「北條時頼記」「女鉢木」等がある。

芝居相續なりがたく（四〇〇）座本豊竹越前少掾歿後悴甚六跡を受けたが振はず、明和二年八月晦日で退轉となつた。あとは、十一月より妻川菊八が歌舞伎芝居を興行。明和四年正月豊竹此吉座本となり、豊竹此太夫と共に北堀市の側に豊竹座を再興したが、眞の豊竹座は明和二年に廢滅したと考へて良いであらう。

たいてんの（四〇〇）退轉の浮目を見たりといふやうな文章で終つてゐるのであらうが、原本は續く紙葉を缺いてゐる。この處に豊芥子の藏書印が捺してある點から考へて、當時から落丁してゐたものと思はれる。

外題年鑑

大職冠・八島・高館（四〇二）何れも幸若舞の曲名。

稽古本の最初（四〇三）貞享二年「七つ以呂波」を稽古本の最初とする説は誤りで、既に加賀掾が延寶七年五月「牛若千人切」を八行本として刊行してゐる。六七一頁参照。

寶永七庚寅の年（四〇三）正徳元年が正しい。九月「吉野都女楠」より八行が七行に改り、爾後義太夫の丸本は七行本を形式とするに至つた。

人形に初めて足を付（四一八）「外題年鑑」の記事では足が附いたのは京松本治太夫座の本曲（延寶六年か）と、宇治嘉太夫座の「世繼曾我」の朝比奈に始るとされてゐる。これらは延寶貞享頃で、立物の人形に限つたことであつたらしい。「南水漫遊拾遺」には大阪の石井飛彈掾の工夫によつて、手や足がつけられたと云つてゐる。宇治派はこの飛彈掾の影響を受けてゐると考へられる。何れにしろ人形に足がついた事は、三人遣ひの操法の出現を豫想せしめる、操史上重要な出来事である。

雁金文七（四二〇）「雁金文七秋の霜」。雁金文七を頭目とする無頼の徒五人男が捕へられ、八

月二十六日（十六日は誤り）千日寺で處刑された。この一件は文彌以外、各派でも脚色して上場、大いに流行した。本曲は世話淨瑠璃としては「曾根崎心中」より古い。

江戸表の外記・辰松（四三八）寶曆十三年江戸で刊行の「古今外題年代記」には、江戸の太夫について「外題年鑑」にない左の記事を収めてゐる。

江戸竹本伊勢太夫佐太夫事

寶曆十一巳年葺屋町辰松座跡取立普請成就して、當三月やぐらに幕をはられたり。始の淨るりは

三浦大助紅梅鈞

座本

祝儀 伊勢太夫出語
三味 富澤市之丞

江戸薩摩外記座

座元

小倉小四郎

寶曆十三未年大西藤藏後見いたされあやつり興行、則大阪より竹本千賀太夫、同岬太夫下り

おはつ
徳兵衛 曾根崎模様

淨瑠璃稽古場（四三九）劇場以外で淨瑠璃を行ふ場所の事であらう。「寶永四年、大阪生玉の社内に於て、稽古淨瑠璃興行の儀御免有之候、是稽古淨瑠璃、寄進淨瑠璃等の始め也」

略

註

〔攝陽落穂集〕

一心五戒玉（四四一）現存の丸本の版式や、内容から考へて、元祿十一年の作と推定される。

〔黒木勘藏「淨瑠璃史」二五二頁〕

源氏冷泉節（四四二）寶永七年八月頃。題簽に「孕常盤」追加とある故。（同右）

松風村雨束帶鑑（四四四）寶永二年十一月以後と推定。三段目の景事を豊竹若太夫と竹本頼母が掛合で語つたとあるが、若太夫は元祿十六年竹本采女の改名したもの。又内容からみて寶永二年十一月「用明天皇職人鑑」以後のものと推定される。（高野正巳「近世演劇の研究」）

釋迦如來誕生會（四四四）寶永七年以後。七行本の正本の板行は寶永七年に始るが、この曲の正本は筑後掾の七行本十行本があるのみである。（同右）

義經追善女舞（四四五）團十郎の「兵根元會我」の影響をうけたものと考へられるので、元祿十年盆頃の興行と推定。（同右、五五頁）

百日會我（四四六）高橋宏氏は元祿十年を否定して五年説を取る。（「國文學踏査第一輯」近松著作年代考）「團扇會我」の興行は更に溯り、貞享末年と考へられる。（同右、四二頁）

長町女腹切（四四七）正徳二年秋。錢相場や歌舞伎役者の記事等から推定。（「淨瑠璃史」二五四頁）

淀鯉出世瀧徳（四四七）寶永五年末。作中に「重井筒」の噂が出てゐる事と、寶永六年十一月歿した坂田藤十郎めが在世中であることを暗示する句がある事より推定。（同右、二五四頁）

神託粟萬石（四四八）寶永二年三月。作中に「寶永二年の如月や」云々の句がある。（「邦樂年表」）

大磯虎稚物語（四四八）元祿四・五年か。八行獻上本の様式が元祿四・五年の頃にのみ見られるもの。（「淨瑠璃史」二五五頁）

心中重井筒（四四九）寶永四年十一月。道行文中の劇場名の讀込みと、寶永四年十月の畿内地方大地震の當込みより推定。（同右、二五五頁）

用明天皇職人鑑（四四九）寶永二年十一月。「今昔操年代記」の記事と、「心中二枚繪草紙」の發端の文より推定。（黒木「近松門左衛門」一四九頁）

竹田出雲（四四九）二代目竹田出雲、即ち外記。淨瑠璃作者として著名なのは千前軒の竹田出

雲で、三代目である。

雪女五枚羽子板（四五二）正月の景物行事を取入れてゐるので盆興行とは考へ難い。但寶永二年正月は竹本座休座中なので、同年ではない。（「淨瑠璃史」二五五頁）

傾城反魂香（四五一）寛永五年か。狩野元信の百五十年忌を當込んだものと思はれる。（同右、二五六頁）

義經將基經（四五二）正しくは「源義經將基經」。内容の技巧から見て寶永二年十一月の「用明天皇」以前のもとの推定。（「近世演劇の研究」七四頁）

兼好法師物見事（四五二）本曲は「兼好法師跡追基盤太平記」と合せて一つの作と見做すべきで、同時の興行であつたのであらう。（同右、七四頁）

大經師昔曆（四五二）正徳五年春か。おさん茂兵衛の三十三回忌の當込み。（「淨瑠璃史」二五六頁）

吉野忠信（四五二）義太夫の正本によつて、元祿十四年五月筑後掾受領以前のものと推定。（「近世演劇の研究」七四頁）

卯月紅葉（四五三）寶永三年六月。作中に寶永三年夏、岩井半四郎座の「鳥邊山心中」を當込

んだ趣向がある。（「近松門左衛門」一五六頁）

後日卯月の色上（四五三）正しくは「卯月の潤色」。寶永四年四月。作意上から前者より十ヶ月の隔りがなくてはならない。（「淨瑠璃史」二五六頁）

待夜小室節（四五三）寶永五年。クドキの文句によつて「重井筒」より後の作品たるべきことと、寶永二年の抜参りを當込んだ句がある等の理由によつて推定。（同右、二五六頁）

夕霧阿波鳴戸（四五五）正徳元年末か二年春か。正徳元年秋刊の段物集「鸚鵡が杣」に外題が載らず、同二年九月刊の「鸚歌が園」に始めて出てゐること、夕霧の歿後三十五年目を當込んでゐることによつて推定。（「近松門左衛門」一九三頁）

孕常盤（四五七）寶永七年八月か。「鸚鵡が杣」に外題が見え、また本年八月の閏を當込んだ句がある。（「淨瑠璃史」二五七頁）

娥歌がるた（四五八）本曲は延寶四年十一月刊、山本角太夫の正本「瀧口横笛紅葉之遊覽」と題材趣向が同じで、近松の作といふのは疑はしい。（「近世演劇の研究」七五頁）黒木氏は近松作を肯定してゐる。

癡靜胎内探（四五九）正徳三年閏五月か。本年閏五月の當込みの句がある。（「淨瑠璃史」二五

七頁

間の物（四五九）間狂言。淨瑠璃の一段と一段との間に、軽い喜劇であるのろま人形が演ぜられた時代がある。それを間の狂言と呼んだ。

佛御前扇車（四七七）番附には「追善佛御前」とあり、切も「追善重井筒」となつてゐる。それ／＼「佛御前扇車」「心中重井筒」の改題。

當十月此太夫等退座（四七八）忠臣藏上場に際して、吉田文三郎と演出上の意見の衝突から、竹本此太夫は一黨を率ゐて退座、豊竹座へ移つた。この太夫の移動については「淨瑠璃譜」参照。

拍子扇淨瑠璃合（四八二）「邦樂年表」によると、切になつて居り、前は「相模入道千匹大」である。

吉田文三郎父子退座（四八四）「倒冠雜誌」参照。

御前懸り淨瑠璃相撲（四八七）「淨瑠璃譜」参照。

おかげ参り（四九四）ぬけ参り。路金を持たず沿道の人々の庇護により伊勢参宮をすること。

江戸時代に寶永・明和・文政と約六十年目毎に突發的に起つた流行で、明和八年の時は春頃丹

後國から始り忽ちの内に京・大阪に傳播し何十萬といふ人間が繰出したといはれてゐる。

末廣十二段（五〇二）「邦樂年表」に、豐竹上野少掾の正本中、享保十六年九月以前の刊行と認められるもので年代不明の作が擧げてある。

末廣十二段・新百人一首・新板兵庫の築島・殺生石・坂上田村麿・忠臣青砥石・富仁親王
嵯峨錦・笠屋三勝廿五年忌・頼光跡目論・本朝五翠殿・袂の白しぼり・八幡太郎東初梅・
傾城國性爺。

心中涙の玉の井（五〇二）「操年代記」の記事によつて元祿十六年五月の「會根崎心中」より後の興行であると解釋され、内容的に兩者を比べてみてもそのことが肯定される。「邦樂年表」は同年七月としてゐる。尙作者については黒木氏は未詳としてゐる。（「近松以後」）
金屋金五郎浮名額（五〇二）「心中涙の玉の井」の次の替りに出たとある（「操年代記」）ので、一年繰下げで、元祿十六年秋の興行と考へられる。

小野小町都年玉（五〇二）本文中の錢相場から考察して正徳二年から四年の間の興行と推定される。（若月保治「古淨瑠璃の研究」延寶・享保篇一二六頁）

八百屋お七歌祭文（五〇四）正本がなく、又當時豐竹座は退轉してゐたので、この時の興行に

は疑問がある。（「近松以後」）

富仁親王嵯峨錦（五〇八）享保改鑄の當込みらしい句があり、現存の正本が上野少掾（享保三年受領）のものである等の點から見て、享保六年頃とも考へられる。（同右）

義經腰越狀（五四八）四段目一段だけ豊竹應律が新作した。（「聲曲類纂」）

碁太平記白石嘶（五五三）括弧の中の月日は「邦樂年表」によつて、興行日附を書加へたものである。原本と區別するために小字を用ひた。以下同じ。

花楓都模様（五五五）六月十一日といふのは正本刊行の日附であつて、上演は七月二十九日。

〔「邦樂年表」〕

攝津國長柄人柱（五五五）別の番附には五段目迄あり、切に「けいせい反魂香」とある。（「邦

樂年表」）

新太夫座（五六四）豊竹新太夫座。

近頃河原の達引（五六九）九月九日は正本の刊行日附で、上演は五月五日。（「邦樂年表」）

富士日記葛蒲刀（五七〇）京都の項に入つてゐるが、大阪の竹本座上演の誤り。竹本座の項にも載つてゐる。

佐々木高綱武勇日記（五七一）「邦樂年表」に四月とあるのは出典不明。

伽羅先代萩（五七一）「傳奇作書殘編」によると、安永六年四月大阪嵐座興行の「伽羅先代萩」を、翌七年京都の竹本春太夫座で淨瑠璃化して上場し、御殿の場迄の院本を刊行したといふ。それを指すのであらうか。但し「邦樂年表」では採用してゐない。完成されたものとしては天明五年正月江戸結城座が始。又此時春太夫が花景圖を勤めたとあるが、「邦樂年表」によると寶曆十二年三月京蛭子屋座で上場、春太夫が出勤してゐる。

贗勝負廓環（五七一）「邦樂年表」によると、明和七年五月京都扇谷和歌太夫座で上場したとある。

よみ本淨るり（五七一）讀物として刊行された淨瑠璃。歌舞伎で好評を博したのを淨瑠璃化したものもある。

今昔妹背腹帶（五七三）宮蘭豊前（鸞鳳軒）が作つた蘭八節の正本で、誤つて讀本淨瑠璃に入れたのである。従つて宮蘭豊前座といふ座はない。

淨瑠璃大系圖

角澤檢校（五七九）六八六頁參照。

坂本河東太夫（五八一）十寸^す見河東のこと。本名は伊藤藤十郎。江戸半太夫の弟子で享保元年江戸太夫河東を名乗つた。坂本といふのは疑はしく、半太夫が後に坂本梁雲と稱したことから誤つたものであらう。又河東太夫を半太夫の相弟子にしてゐるのは誤りで、「江戸節根元記」以來半太夫の弟子といふのが定説である。

正保貞和（五八三）角太夫の活躍期は寛文延寶の頃に初まり、元祿頃に至つてゐる。勿論貞和といふ年號はない。

常盤津豊後掾（五八四）宮古路豊後掾の誤り。常磐津といふ名稱は、豊後掾の弟子（或は養子）宮古路文字太夫が、豊後節禁止後一派を立て常磐津と號したことに始る。本系圖に文字太夫の名を逸し、その門に出た豊前太夫のみを擧げてゐるのは適當でない。因に常磐津は今日では磐の字を使つてゐるが、江戸時代には磐と盤は番附類に於ても混用されてゐる。

富本豊前太夫（五八四）富本節を語り出したのは文字太夫の弟子の富本豊前掾で明和元年歿。

こゝにいふ享和文化頃の豊前太夫は、初代の實子で二代目豊前掾となつた人。富本の名曲は多く二代目の時に作られ、一時他流を壓倒した。本系圖では兩者が混同されてゐる。

鶴賀若狹掾（五八四）岡本文彌より出たとしてあるが、宮古路豊後掾門弟富士松薩摩掾の門から出たといふのが定説だから、系圖の上では國太夫の下に來るべきであらう。本書の出來た天保年間、岡本宮古太夫（二代新内の弟子）から出た岡本新内が盛んであつたのよりして、斯く誤り誌したのではあるまいか。尙鶴賀新内が若狹掾の相弟子だとする説が相當有力に唱へられてゐる。

一二三（五八七）三味線の一の糸、二の糸、三の糸の音に合せた調子で、稽古本では中・ウ・ハルといふ記號で現してゐる。一の糸はだみつた聲、二の糸は幅のある聲、三の糸は細い聲。

マカン（五八七）甲の更に高い音で、聲の出し得る最高の調子で、例へば「太十」のへ主を殺した天罰に、の處。

竹本大和太夫（五八九）豊竹三輪太夫と同一人。（五九九頁参照）豊竹越前掾の弟子であるから、三輪太夫を残して、この項は抹消した方が間違ひを生じなくて良い。大和掾を二代目

義太夫の門人としてゐるのは誤りで、大和太夫と名乗つたこともない。恐らく初代義太夫の弟子の大和太夫（六八九頁参照）と混同してゐるのであらう。

チャリ語り（五九九）滑稽場を語るのを得手としてゐる太夫。チャリは六八九頁参照。

索引

凡例

一、索引を分つて、人名その他、外題の二種とし、それぞれ五十音に配列し、假名遣ひは發音式に従つた。

一、人名その他の部は、人名の外に、劇場・人形等の關係事項を收めた。

一、人名は單なる役割連名を省いた外、關係事項の記載されてゐるものはすべて採つた。

一、同一人で、前名・異稱等多くの名前を持つものは、それ／＼の項で扱つたが、同一人であることを示すために、代表的な名稱の下に一括しておいた。

一、同名異人は、代數・異稱・前名・師匠名等によつて區別した。

一、外題は、本外題を採り、俗稱はすべて本外題に集めた。

一、本索引は戸部銀作氏の多大なる助力によつて成つたものである。

人名其の他

あ

- | | | | | | |
|--------------|--------|-----------------|---------|----------------------------|--------|
| 藍玉組太夫 | …五四 | 嵐三三郎〔初代〕 | …五 | 市川團十郎〔二代・海老藏〕 | …七 |
| 明石越後掾 | …四三 | 嵐松二郎座 | …五三 | 市川團藏〔初代〕 | …六 |
| 淺井徳二郎 | …二八 | 有馬屋八重太夫 | …六〇 | 市村竹之丞〔二代〕 | …六 |
| 淺田一鳥 | …五八 | 安體神〔大人〕の頭 | …四 | 一物藤兵衛 | …三三 |
| 淺田太四郎 | …八四 | 幾竹島吉〔幾竹座〕 | …五 | 市屋重郎兵衛 | …四九 |
| 油屋茂兵衛 | …三三・五〇 | 石垣芝居 | …三九 | 市山助五郎 | …二四 |
| 甘鹽 | …五三 | 石村吉左衛門 | …六四 | 一樂 | …五三 |
| あみだ池東の芝居 | …五五・五七 | 石屋三右衛門 | …五五 | 伊藤伊太夫〔豊竹筑前少掾〕 | …四三 |
| あみだ池門前芝居 | …五五 | 石屋ばし染太夫 | …六〇 | 伊藤出羽掾 | …三五・四四 |
| あめや綱太夫 | …六五 | 和泉屋平兵衛 | …三九 | 伊藤流枝 | …四九・四三 |
| 綾駒太夫 | …六三 | 伊勢島宮内〔初代〕 | …三三・四三・ | 糸屋伊右衛門 | …四三 |
| 綾咲太夫 | …六〇 | 伊勢島佐太夫〔二代宮内・節齋〕 | …三三 | 井上市郎太夫〔石屋三右衛門〕 | …三 |
| 操り人形〔木偶〕の起源 | …三七・六四 | 〔二代〕 | …三 | 井上市郎兵衛〔初代〕 | …三三・五五 |
| 嵐吉三郎北村六右衛門芝居 | …三九 | 伊丹馬吉 | …三三・四三 | 〔二代〕 | …五五 |
| 嵐三右衛門〔初代〕 | …四 | 市川海老藏〔二代〕 | …三三 | 井上播磨掾藤原要榮〔井上市郎兵衛・大和掾・播磨太夫〕 | …三・六 |
| | | | | ・四・三五・三五・二五・四五・ | |

宇治伊太夫	…三七	越後座	…三七	江戸出羽芝居(江戸座)	…五
宇治加賀掾原好澄(宇治嘉太夫)	…三八・三	江戸和泉大夫座	…三八	江戸土佐太夫	…三五・五二
京都加賀掾宇治好澄	…三八・三	江戸組太夫	…三八	江戸播磨太夫	…六七
〇・七・三五・三七・三〇・二六・		江戸外記太夫	…三三・五一	江戸半太夫(坂本梁雲)	…三五・二五
二七・三四・三六・三五・三二・四		江戸新	…三五・五一		
〇三・四〇・四二・四三・五三		江戸染太夫	…六二		
宇治嘉(加)太夫…三七・毛・元・五					

人 名 (いーお)

岡本阿波太夫 ……三・五五・四九・四二・

かくはんの頭

…三九

勘作の頭

…三九

天四

笠井乙五郎

…三八五

神崎屋作五郎

…三九

岡本鳴戸太夫

…五八四

笠井茂十郎

…三八四

鬼一の頭

…三九

岡本文彌 ……三・五五・三・七・四三・四九・

柏井傳三郎

…三八五

稀代樋口の頭

…三九

四一・五三

勝右衛門清七

…六三

北新地芝居 ……五・五五・五〇・五六・六四

…三九

荻野八重桐 (初代)

…四

勝次郎清七

…六三

北堀江市の側芝居 ……五・五五・五〇・五六・六四

…三九

尾崎權右衛門

…六・四六五

勝之進座

…六三

北村季吟

…三九

曾土佐太夫

…四九三

合羽伊太夫

…六四〇

紀海音 ……五・四・四・五五・五三・五五

…三九

尾上菊五郎 (初代)

…三・三三

勝山又五郎

…三・四三・四三・六〇

紀甘谷 ……五・五五・五三・五五

小野のお通 ……六・三三・三・五五・五八

角の芝居

…六三

儀平次の頭

…四九

・六三

嘉平次座

…五七

狂言堂

…四九

おやま五郎右衛門

…三・七九

紙屋彌太夫

…六四

京是太夫

…五五

おやま次郎三郎

…三・七九

紙屋理右衛門

…五

京式太夫

…五五

おやま文藏

…三・六九

龜谷芝居

…五七

京都加賀縁宇治好澄

…六四

か

龜屋平助

…五七

きやう屋庄右衛門

…三三

會所利兵衛

…三・四

河内屋勘右衛門

…三

桐竹勘十郎

…三三

加賀都 (市)

…三・三三

河内屋勘右衛門

…三

桐竹勘十郎

…三三

桐竹源十郎

…三六

月光の頭

…三六

さ

桐竹定七

…三八

鎌齊佐兵衛

…三八

西鶴

…三六・三七・三六

桐竹三右衛門

…三七・三六・四〇

源之丞

…四〇

齊藤の頭

…三六

桐竹助三郎…三六・三六・三六・三六

けんび(び)いしの頭

…三六・三六

堺咲太夫

…三六

・四〇

こ

…三六・三六

堺屋三右衛門

…三六

桐竹門三郎…三六・三六・三六・三六

孔明の頭

…三六・三六

坂田半五郎(初代)

…三六

・三三・四〇

國性爺の頭

…三八

佐賀中太夫

…三六

金藏

…三六

語齋

…三六

坂本河東太夫

…三六

金太夫座

…三六

小鷹翁

…三六

坂本梁雲

…三六

金兵衛

…三六

小園七の頭

…三六

櫻井頼母

…四三・四六

陸竹伊豆太夫

…四三

小平太

…三七

ざこば政太夫

…三六・三七

陸竹小和泉

…四三

こぼり口長門太夫

…三六

笹(篠)尾八兵衛

…三六・三七

陸竹常吉

…三六

こぼり口松屋

…三六

・三五・三五

久四郎内匠太夫

…三六・三六

小松文十郎

…三六

定之進の頭

…三六

桑八重太夫

…三六

米屋

…三六

薩摩(外記)座

…三五・三五・三六

鞍屋佐吉

…三六

五郎の頭

…三六

薩摩淨雲(薩摩次郎右衛門・虎屋薩摩太夫)

け

五郎亦の頭

…三六

摩太夫

…三六

人

名(きーさ)

七二五

薩摩次(治)郎右衛門〔初代〕 ……三三

清水三郎兵衛 ……四〇・四三・五五

新町中吉 ……五九

・三三・四三・五六

清水理太夫 ……五六・四一

新町彌七 ……六〇

〔二代〕

清水理兵衛〔徳屋理兵衛・伴西〕 ……三六・三九・三二・三三・三六・三九

新ろじ ……五〇

實盛の頭

……三六

菅野傳彌 ……五九

佐兵衛の頭

……三六

杉山勘左衛門 ……四八

澤村晋右衛門

……三三

助造 ……六〇

澤村宗十郎〔初代〕

……三三・三三・五〇

醉屋 ……六四

三絃の來由

……三七・六三

瀬川菊之丞〔初代〕 ……五九

三綱翁

……六五

……五五・五三

三人遣ひの始り

……四三

……五五・五三

し

鹽町政太夫 ……三三・五〇・五九

淨瑠璃外題の起り ……四三

……五五・五三

七行本の始り

……四三

……五五・五三

實堀太夫

……六二

……五五・五三

芝居の表に進物を飾る

……五三

……五五・五三

芝居の表に幟立つ……君八・四七・五

……五三

……五五・五三

一

芝居の濫觴

……三六・四一

……五五・五三

新シ屋

……六二

……五五・五三

新太夫座

……五五・五三

……五五・五三

そ

祖鐘太夫

…六七

そさのをの命の頭

…四九

曾根崎(新地)芝居

…三〇・四〇・五五

・三二・三九・四八・五八・五九・

五八・五五・五九・五五

た

大源

…六六

太好庵

…六〇

大此

…六六

大膳の頭

…三〇

大松百介

…三〇

高津屋勘太郎芝居

…三〇

多(田)川源太夫 …三九・三六・三九

二・三六・三六・四八・四〇・五八

・五七

新能

…四二

瀧野檢校 …三三・三七・四二・六三

人 名 (そーた)

内匠理(利)太夫 …三九・三九・三九・

四六・四六・五八

竹幾

…六七

竹岡太夫

…六〇

竹川七郎次

…六四

竹澤龜吉

…六三

竹澤胸吉

…六三

竹澤權右右衛門(初代) …三三・三三

・四一・六四

二代

…六三

竹澤佐の七

…六三

竹澤甚三郎

…六三

竹澤善四郎

…三七

竹澤扇造

…六三

竹澤宗吉

…六三

竹澤相馬

…六三

竹澤宗七

…六三

竹澤宗六

…六三

竹澤藤四郎 …三六・三六・三六・

・五八・六四・六六

竹澤友次

…六六

竹澤濱右衛門

…六六

竹澤兵吉

…六六

竹澤廣助

…六六

竹澤廣藏

…六六

竹澤彌市

…六六

竹澤彌三郎

…六六

竹澤彌七(初代)

…三七・六六

(二代)

…六六

(三代・新町彌七)

…六六

(四代)

…六六

竹澤彌六

…六六

竹澤力造

…六六

竹澤龍造

…六六

竹田出雲(掾)(初代) …四二・四二・

七・三六・三六・三六・三一・三三

人名 (た—竹本)

七二八

・四〇

〔二代・千前軒〕…四・三五・三六

・四四・四九・五〇・四三・四六

竹田出雲掾座

…三六

竹田氏吉

…四三

竹田榮藏

…四三

竹田近江(大掾)

…三三・三六・三九・五〇

竹田からくり

…四七

竹田外記

…四〇

竹田小出雲

…四七

竹田芝居

…五〇

竹田正藏

…四三

竹田新松

…四三・四七・五〇・五三

竹田千前軒

…三一・四四

竹田瀧彦

…四四

竹田縫之助

…四六

竹田万二郎

…四六・五〇

竹本阿蘇太夫(豊竹阿曾太夫)

竹本宇太夫

…五三

竹本折太夫

…六六・四二・五九

…六五・六八

竹本氏太夫(二代)

…五三

…六〇

(三代)

…五三

竹本綾太夫

…六三

竹本恵見太夫

…五九

竹本家太夫(初代)…三三・三四・四六

竹本安女

…四四・五九・五七

一

〔四綱太夫門〕

…六七

竹本大嶋太夫

…五九

竹本(豊竹)生駒太夫(初代)…三七

竹茂都大隅

…五〇

竹本伊佐太夫

…五七

竹本大隅太夫(三根大隅太夫)

…五九

竹本泉太夫(勢見太夫門)

…五九

竹本大隅掾…三九・三六・四六・四九

〔佐賀中太夫門〕

…五九

竹本(豊竹)岡太夫(二代・豊竹弓太夫)…五三・五七・五三・五五

竹本伊勢太夫

…六六

竹本(豊竹)岡太夫(二代・豊竹弓太夫)…五三・五七・五三・五五

竹本磯太夫(初代豊竹彌太夫)

…四七

竹本晋太夫(初代)…四八・五三・五九

〔筆戸磯太夫〕

…六七

〔晋土佐太夫門〕

…五三

竹本今太夫

…六三

竹本晋羽太夫

…五九

竹本入太夫(竹幾)

…六七

竹本織太夫

…六六

竹本宇太夫

…五三

竹本折太夫

…六六

竹本嘉太夫

…六九

竹本勘太夫

…六一

竹本紀國太夫

…六七

竹本梶太夫〔實梶太夫〕

…六三

竹本喜太夫〔初代〕四九・三〇・四六・

竹本桐太夫〔初代〕

…六三・四三

〔實太夫改〕

…五七

四六・五九

〔三綱太夫門〕

…六五

竹本梶の太夫

…六二

〔錦木太夫門〕

…六七

竹本喜〔幾〕世〔代〕太夫〔初代・播磨

竹本梶間太夫

…六三

竹本義〔儀〕太夫〔初代〕…三九・三毛

屋四郎兵衛〕…二五・二五八・三七四・四

竹本〔豐竹〕上總太夫〔初代・初代

…三九・三六・三七・三三・三六・

…三六・四六・四六・五三・五六・五

紋太夫〕…三九・三六・三四・三五・

…三三・三〇・四九・四〇・五六・六

八・五九

…三六・四八・四九・五二・五三・五

〇〇・六四・六四

〔三代〕

…六四

八九

〔三代〕

…五九

竹本義太夫座…四四・四七・五七・五

竹本陸太夫

…六〇

竹本上總〔少〕掾…三三・三三・四七

〔二代〕

…三八・四二・五八

竹本國太夫

…三三

竹本勝太夫

…六八

竹本義太夫芝居

…三九・四九

竹本組太夫〔初代・豐竹・はけ太・

竹本桂太夫

…六八

竹本木々太夫

…三〇・四九

神崎屋作五郎〕…三三・三〇・三九

竹本要太夫〔筆太夫門〕

…六八

竹本喜志太夫

…六七

〔三代・藍玉組太夫〕

平のぶ彌太夫門〕

…六八

竹本絹太夫〔大此〕

…六六

竹本藏太夫

…五九

竹本鐘太夫〔武太夫改〕…三三・六六

〔江戸〕

…六六

竹本源太夫〔初代〕

…四三・四三

〔祖鐘太夫〕

…六六・六八

〔四政太夫門〕

…五九

〔二代・大源〕

…四三

竹本叶太夫

…六七

〔大茂改〕

…五九

人 名 (竹本)

七二九

人 名 (竹本)

七三〇

〔三代〕 ……四三・四三

〔三代・堺咲太夫・堺屋三右衛門〕

竹本品太夫(こぼり口長門太夫門) ……六〇

竹本越路太夫〔初代・筆の越太夫〕 ……五九・五九

五三・六九

〔三源太夫門〕 ……六七

……五九・五九

竹本〔豐竹〕佐度太夫……五九・五六・

竹本〔豐竹〕信濃太夫……三六・四八・

〔二代・柳屋〕 ……五九

五七・五九

四八・五五

〔三代〕 ……五九

竹本左内

……六

〔四代〕 ……五九

竹本佐野太夫

……四八

〔五代〕 ……五九

竹本三郎兵衛

……四七・五三

竹本越路太夫 ……六六

竹本澤太夫〔初代・豐竹和泉太夫〕 ……五・四六・

竹本芝居再興 ……四九

竹本琴太夫 ……五九

……五・四六・

竹本芝居退轉 ……三〇

竹本此太夫……四四・四七・五三・五九

二代

……三三

竹本嶋太夫〔二代・二代豐竹若太夫〕……四四・四七・五三・五九・五六

……四六・四四・四八・五三・六〇

竹本〔豐竹〕志賀太夫……四六・五三・

……三六・四〇・四四・四八・四八・

竹本高麗太夫 ……五九

五〇

四六・四四・五三・五三・五三・五

竹本駒木太夫 ……五九

竹本式太夫〔初代〕

……四九

竹本小松太夫 ……六八

〔豐竹・辭屋・京式太夫〕 ……六四

四六・五〇・五九

竹本是太夫〔京是太夫〕 ……五九

……六四

〔三代〕 ……五九

竹本佐賀太夫 ……五九・五九

〔京是太夫門〕

……五九

竹本鯁太夫 ……五九

……五九

竹本咲太夫〔初代・金藏〕……五九・

……五九

竹本住太夫〔初代・丸屋文藏〕……六六

……五九

竹本七太夫

……六七

五・五〇・四九・五九・五〇・五

五九・六四

竹本筑後太夫

…六六

〔二代〕

…五九

〔二代・久四郎内匠太夫〕…四九・

竹本筑後(少)掾藤原博敏〔初代義

〔三代〕

…五九

四九・五〇・五〇・六四・六八

太夫・清水理太夫・天王寺五郎

竹本勢見太夫

…五〇

〔三代〕

…六八

兵衛〕…三・五九・四三・七一・三三・

竹本千太郎

…四九・五〇

〔金兵衛〕

…五〇

三二・三三・三六・三七四・三八・二

竹本其太夫

…四七

〔森太夫改〕

…六二

二・三三・三三・三三・三三・三三

竹本染太夫〔初代・石屋ばし染太

竹本頼母(夫太)〔初代〕…四・五・

一・三三・三三・三三・三三・三三

夫・傳法屋源七〕…三八三・三〇四・四

三三・三三・三三・三三・三三・四

・四三・四三・四三・四三・四三・

八・四三・四七・五九・五九・五

五九・四六〇・五七

四三・四三・五九・六二

九・五九

竹本頼母太夫〔今當改〕

…六八

竹本千里太夫

…五三

〔二代・初代三根太夫・八兵衛〕

〔五政太夫門〕

…五七

竹本千代太夫

…六六

…四九・五三・五九・五九

竹本谷太夫

…五九

竹本津太夫

…六五

〔三代〕

…五三・五九・五九

竹本玉太夫

…五九

竹本津賀太夫〔納屋徳〕

…六五

〔四代〕

…六九

竹本千賀太夫〔初代〕…三九・五〇・

竹本津多太夫〔初代〕

…六五

〔五代・江戸染太夫〕

…六〇

四七・四三・六四

〔二代〕

…六七

竹本太市

…四九

〔二内匠太夫門〕

…六八

竹本綱太夫〔初代・新ろろじ・平野

竹本内匠太夫〔初代・大和掾〕…三九

〔二播磨掾門〕

…五九

、屋嘉助〕…五五・四六・五〇・五〇

…三三・三三・四三・四三・五九・

〔初彌太夫門〕

…六〇

五二・五九・五九・五九

人 名 (竹本)

七三一

人 名 (竹本)

七三二

〔二代・猪熊綱太夫〕…五八・六四

・六五

天・五九・五六・四八・四一・五

二・五五・五九

〔こぼり口松屋〕

竹本難波(浪花太夫)…三七・三八・

〔三代・あめや綱太夫・三綱翁〕

…五三・六五

〔の大〕

竹本登茂太夫

竹本常勇太夫

…六〇五

…六〇〇

竹本浪太夫(初代)

…六八

〔よし源〕

…五九四

〔四代〕

…六六・六七

竹本豊太夫

…六二七

竹本男徳齋

…五〇・五九

竹本艶太夫

…六〇〇

竹本豊竹打込興行

…四九三

竹本錦太夫〔初代・初代豊竹和佐

竹本徳松

…五〇〇

竹本豊竹人形の違ひ

…三六五

太夫・綿武〕…三六四・三八・三三・

竹本土佐太夫〔初代〕…三八三・四八・

五九

夫〕…三八三・五四・五八・四八三・四八三

八・四八・四八・四八・四八三・四八

〔二代〕

…五九

・四八六・四八七・四八九・四九〇・五九

〔三代・晋土佐太夫〕

…五九

〔二代・新町中吉〕

…五九四・五九

〔三代・天忠〕

…六〇五

〔四代〕

…五九

〔三代・岡嶋屋〕

…五九五・五九

〔四代・江戸〕

…六〇六

竹本十七太夫

…六六

〔江戸・政子太夫改〕

…五九

竹本錦木太夫

…六〇七

竹本當能太夫

…五九四

〔四代・佐賀中太夫〕

…五九

竹本野(の)太夫

…五九〇

竹本當磨太夫

…五九四

竹本長門太夫〔初代〕…三三・五九・

竹本信太夫

…五九六

竹本富太夫

…五九

四八・六四

竹本萩太夫

…六〇〇

〔竹本友太夫〔初代・豊竹〕…三八三・三

〔長門屋〕

…六八

竹本橋太夫

…六〇五

竹本濱太夫〔初代〕

…四八七

〔文字太夫政〕

…六六

〔三綱太夫門〕

…六六

竹本半太夫

…五九

竹本早太夫

…五三

竹本彦太夫〔初代〕…三八・四七・五

竹本播磨〔少〕據〔上總少掾・二代義

八・五八

…五五

太夫・初代竹太夫・若竹政太夫

〔二代〕

…五五

〔中〕紅屋長四郎〔三毛・三六・三六

竹本雛太夫〔上町〕

…六九

・三四・三五・三六・三六・三六

〔多賀太夫政〕

…六八

・三四・三五・三六・三六・三六

〔筆戸磯太夫門〕

…六七

・三四・三五・三六・三六・三六

竹本武太夫

…五七

・三四・三五・三六・三六・三六

竹本富士太夫

…六八

竹本播磨〔大〕據〔二代土代太夫〕

竹本筆太夫〔初代・豐竹〕…六九・六三

…五九

〔三代〕

…六五・六六

竹本春吉

…五七

竹本文治郎

…四七

竹本春太夫〔初代・豐竹〕…三八・三

竹本文太夫〔初代・豐竹〕…四・四

・三五・三五・三六・三六・三六

八・四六・四六・四六・四六

一・四九・四九・五〇・五〇・五〇

〔四中太夫門〕

…五九

・五〇・五〇・五〇・五〇・五〇

竹本政太夫〔初代〕…六三・五七・五

〔二代・八十春太夫〕…六九

六・五九・四六・五三・五九

竹本光太夫

…五九

人 名〔竹本〕

七三三

〔二代・ざこば〔西口・十兵衛〕政

太夫・雜雛場重兵衛〕…三三・三

三・三九・三九・三九・三九・三九

・三九・三九・三九・三九・三九

四六・四六・四六・四六・四六・四六

八九・四六・五九

〔三代・初代中太夫・鹽町政太夫

・會所利兵衛〕…三三・三六・四三

・五四・五九・五九・五九・五九

〔四代・氏政太夫・藤助〕…五九

…五九・六三

竹本眞嶋太夫

…六三

竹本増太夫

…六三

竹本萬作

…五九

竹本萬太夫

…六〇

竹本三木太夫

…六〇

竹本岬太夫

…五五・四八

竹本光太夫

…五九

〔四綱太夫門〕

田中平次郎

二八四

中紅屋長右衛門

三〇二

竹本米太夫

爲永千蝶

四〇二

中紅屋長四郎

三二八・三〇七

竹本力太夫〔藍玉組太夫門〕

爲永太郎兵衛

三七五・四七〇・五七

長七

三〇五

〔錦木太夫門〕

團七の頭

三九・三〇・三九

つ

竹本律太夫

六二六

ち

塚原市左衛門

三七五

竹本利津太夫

六二〇

近松虛實皮膜の論

七三

土木待買

四四五

竹本和信太夫

六六七

近松春翠

六四四

常右衛門座

四四〇

竹屋庄兵衛…三七・二六・二九・五五・五

近松東南

五〇〇

角澤〔澤住〕檢校…三三・二七・四二・五九・五九・六四・六四二

六六・六四

但見彌四郎

五三

近松門左衛門〔平安堂〕…三・三三・四・三三・六九・七三・二七・二四・

津山金七

四〇〇

立花河内

三五四・四三三

二七・三三・三六・三七・三六・三

津山助十郎

四〇〇

立役人形屏風手の始り

三六五

四・三六・三七・三七・四二・四三

釣船三船の頭

三六〇

辰松八郎〔良〕兵衛…三六・五・二七九

七・四四・四六・四六・四四・四九

鶴賀繁太夫〔江戸新〕

三五

・二八〇・二五・二五・三七・三四〇

近松半二…三六・四七・四六・五五〇

鶴賀新内

三四

四三・四二

英一

鶴賀若狹太夫

三四

辰松〔八郎兵衛〕座

六・四六

近本〔元〕九八郎…三七・三八・三二

鶴賀若狹掾

三四

田中小八

二八三

五八

鶴澤伊左衛門

三八

田中千柳

五六

筑後芝居

三〇・六四

鶴澤伊藏

六三

人名〔竹本一ち〕

七三五

鶴澤市太郎〔初代〕	…六七	鶴澤寛次〔治〕〔初代〕…三五・五五・	鶴澤吾八	…六元
〔二代〕	…六八	六六・六四	鶴澤才次〔二〕〔初代〕	…六三
鶴澤伊八〔初代〕	…六三	〔二代〕	〔二代〕	…六五
〔二代〕	…六四	〔三代〕	〔三代〕	…六五
鶴澤馬之助	…六三	〔四代〕	〔四代〕	…六五
鶴澤榮吉	…六三	鶴澤寛三〔初代〕	鶴澤三三〔二代〕	…五八
鶴澤燕三	…六〇	〔二代〕	〔三代〕	…三七・六元
鶴澤勝七	…六三	鶴澤喜市	〔四代〕	…六七
鶴澤勝造〔二代〕	…六三	鶴澤喜太郎	鶴澤重次郎	…六五
〔三代〕	…六三	鶴澤蟻蝶	鶴澤松雨齋	…六三
鶴澤勝鳳	…六三	鶴澤蟻鳳〔初代・二代鶴澤三三〕	鶴澤庄吉	…六三
鶴澤勝六	…六三	…五八・六七	鶴澤庄次郎	…六三
鶴澤龜吉〔なんば龜〕	…六三	〔二代〕	鶴澤新藏	…六〇
鶴澤龜次郎	…六五	〔三代〕	鶴澤清左衛門	…六三
鶴澤龜助	…六元	〔四代・勝造蟻鳳〕	鶴澤清三郎	…六三
鶴澤勘五郎〔初代〕	…六元	鶴澤儀八	鶴澤清七〔初代〕	…六三・六五
〔二代〕	…六元	鶴澤喜代七	〔二代・勝次郎清七〕	…六〇
鶴澤寛四	…六五	鶴澤九藏	〔三代・勝右衛門清七〕	…六三

鶴澤清八 ……六三

〔二代〕

…六九

鶴澤松次郎

…六三

鶴澤清六 ……六三

〔三代〕

…六〇

鶴澤元三郎

…六三

鶴澤仙藏 ……六三

鶴澤梅翁

…六四

鶴澤彌市

…六三

鶴澤大吉 ……六三

鶴澤彦次郎

…六三

鶴澤彌三郎

…六〇・六三

鶴澤長藏〔市山助五郎〕 ……六四

鶴澤廣作

…六三

鶴澤勇造

…六〇

鶴澤綱熊 ……六三

鶴澤平五郎

…六四

鶴澤芳次郎

…六三

鶴澤傳吉 ……六三・六三

鶴澤福造

…六四

て

鶴澤藤吉 ……六三

鶴澤文敬

…六三

出語りの始り

…三七

鶴澤時藏 ……六三

鶴澤文吾

…六三

天王寺五郎兵衛…三七・三六・三九・元

鶴澤友次郎〔初代〕…三六・三七・四〇

鶴澤文三〔初代〕

二・三六

三・三六・三九・四〇・四三・五八

〔二代〕

…六三

傳吉文藏

…六三

・六四・六六

鶴澤文次〔初代〕

…六四

傳次郎座

…六四

〔二代〕 ……六六

〔二代〕

…六五

天忠

…六五

鶴澤豐吉 ……六三

鶴澤文藏〔初代〕…六三・六七・六九

天秤屋次次

…六八

鶴澤豐助 ……六三

〔二代・おやま文藏〕…六九・六四

傳法屋源七

…六四

鶴澤仲助〔初代〕 ……六九

〔三代・傳吉文藏〕

…六〇

天満橋三右衛門

…三八・三二

〔二代〕 ……六〇

鶴澤又造〔初代〕

…六九

と

鶴澤名八〔初代〕 ……六七・六九

〔二代〕

…六三

藤吉

…六三

人 名 (つーと)

七三七

人 名 (と一豊竹)

七三八

藤吉の頭	…三六・三九	〔二代〕	…六六	豐三・六〇	豐竹一三五太夫	…六二
道具屋吉左衛門	…三三・三五・四三	豐澤權平	…六六		豐竹伊豆太夫	…三四・五八・五九・六〇
藤助	…五一	豐澤東市	…六七			
戸川不麟	…五二	豐澤富次	…六六			
常盤津豐後孫	…五四	豐澤濱右衛門	…六六		豐竹和泉太夫	〔初代・竹本いづみ太夫・澤太夫・豐竹出水太夫・紙屋理右衛門〕…五・三六・三九・四一・四二・四三・四四・四五・四六・四七・四八・四九・五〇・五一・五二・五三・五四・五五・五六・五七・五八・五九・六〇・六一・六二・六三・六四・六五・六六・六七・六八・六九・七〇・七一・七二・七三・七四・七五・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八二・八三・八四・八五・八六・八七・八八・八九・九〇・九一・九二・九三・九四・九五・九六・九七・九八・九九・一〇〇
德兵衛の頭	…四九・五一	豐澤廣七	…六六			
德屋理兵衛	…三六・三五	豐澤廣助	〔初代・竹澤〕…六六・六七			
土佐幸助	…六四	〔二代・新シ屋〕	…六六			
土佐三津八	…六四	〔三代〕	…六六			
富澤伊八郎	…六五	豐澤廣造	…六六			
富澤歌仙	…六七	豐澤兵吉	…六六			
富澤正五郎	…六五	豐竹綾太夫	…六一			
富松藤摩	…三三・四六・四九・五三	豐竹阿曾太夫	…五三・五三・五三			
四三・五三		豐竹伊太夫	〔二代・鐘太夫〕…五三・五三・五三			
富本豐前太夫	…四四	〔三代〕	…六三			
富若太夫	…六三	豐竹家太夫	…六三			
豐岡彌平	…四七	豐竹伊織太夫	…五三			
豐澤源吉	〔初代〕…六六	豐竹生駒太夫	〔二代〕…五三・五三・五三			

豐竹磯太夫〔鎌戸磯太夫〕…六二
 『四此太夫門』…六二
 豐竹入太夫…六三
 豐竹右近…六三
 豐竹〔竹本〕氏太夫〔初代〕…五三・五三・五三

番・六三

豐竹韞太夫

…六三

豐竹越前(少)孫藤原重勝〔初代上

豐竹上總太夫〔二代袖太夫〕

…六三

〔初君太夫〕

…六三

野少緣・初代若太夫・竹茂都大

豐竹勝太夫

…六二

豐竹幾世太夫〔初代竹本喜代太夫〕

隅・竹本安女〕…三九・三六・三六

豐竹要太夫〔初代〕

…五三・五九

豐竹喜代太夫〔二代〕…五九・五三・

…三五・三六・三七・三六・三六

〔四代〕

…六〇

豐竹喜代太夫〔二代〕…五九・五三・

…三九・三六・三七・三六・三六

豐竹鑑太夫〔初代・竹本〕…二六・三六・三六

豐竹錦翁軒〔伊丹馬吉〕…六二

…三九・三六・三七・三六・三六

豐竹組太夫〔二代・竹本・うつぼ組

太夫〕…六四・六九

…三九・三六・三七・三六・三六

豐竹組太夫〔二代・竹本・うつぼ組

太夫〕…六四・六九

…三九・三六・三七・三六・三六

〔二代〕

…五五・五三・六〇

豐竹久米太夫…三九・五九・五三・六〇

豐竹大太夫

…六五

豐竹狩野太夫

…五五・五三・六〇

豐竹久米太夫…三九・五九・五三・六〇

豐竹應律

…五七

豐竹河内太夫〔初代品太夫・初代駿

河太夫〕…三九・三六・三六・三六

豐竹倉太夫…六二

豐竹岡太夫〔初代・初代弓太夫・又

兵衛〕…三八・三六・四八・五三・六〇

豐竹上野(少)孫〔初代・藤原重勝〕

…三八・三六・四八・五三・六〇

豐竹源太夫…六三

豐竹上野…五九

豐竹斧太夫

…六九

豐竹岸太夫

…六五

豐竹上野(少)孫〔初代・藤原重勝〕

豐竹小野太夫

…六二・六三

豐竹君太夫〔喜美太夫〕…三九・五九

…六五

豐竹上野(少)孫〔初代・藤原重勝〕

豐竹薰太夫

…六四

豐竹君太夫〔喜美太夫〕…三九・五九

豐竹上野(少)孫〔初代・藤原重勝〕

人 名 (豐竹)

七三九

七四〇

：吾・五〇一五七

豐竹芝居再興
：五四・五四

豐竹芝居退轉
：四〇・五三

豊竹芝居の始り
…七…三

豊竹嶋太夫（初代）

三、个本此大寺，寺屋平右衛

三三三三三

豐竹所太夫「刃代」

・市人・市面・市況・市川

二代・初代尹勢太夫……三・五

癸・丑・丑・丑・丑

豐竹甚六
：五三

豐竹駿河太夫……三二・四六・五八・五

元

豐竹諏訪太夫
：五七・五九

豐竹勢勇太夫

豐竹千踏

豐竹柚太夫〔初代〕・三〇七・四六・五

豐竹鶴太夫

…五九

豐竹巴勢太夫

…六〇

七・五〇

豐竹時太夫〔初代〕…二八四・三〇・五

豐竹巴磨太夫

…六二

〔二代〕

…五三・六〇

…三・五三

豐竹〔竹本〕春太夫〔三代・ねずみ屋〕…七三・六〇

豐竹染太夫

…五九

〔二代〕

…五三・五〇・六〇

豐竹久太夫

…六三

豐竹多賀太夫

…六三

〔三代・錢屋時太夫〕…五三・六〇

豐竹肥前〔少〕

…六三

豐竹内匠太夫〔竹本〕…二八・三八・

〔鶴澤時藏〕

…六三

後掾・初代新太夫〕…五九・三〇・

三六・五八

豐竹橘太夫

…六四

豐竹登勢太夫

…六三

豐竹緒太夫

…二八四・五七

豐竹辰太夫

…六二

豐竹十七太夫…二八四・三二・三六・五

豐竹武太夫

…五九

豐竹爲太夫

…六二

…三・五八・五九・五三

豐竹房太夫

…五三・六〇

豐竹筑前〔少〕掾藤原爲政〔初代竹

豐竹登名太夫

…六三

豐竹筆太夫〔二代〕

…六三

本〔豐竹・陸奥〕此太夫・初代豐

豐竹巴太夫〔初代・助造・大好庵〕

豐竹麓太夫〔初代・竹本・なべや麓

竹〔伊藤・合羽〕伊太夫・甘鹽〕

…六九・六〇

太夫・銅屋宗兵衛〕…三九・五八

…三四・三七・二八・二八四・三〇・

〔二代〕

…六二・六二

…五三・五九・五〇・五三・六九

…三三・三九・三九・五三・五三・五

〔三代・綾咲太夫〕

…六二

〔二代・湊麓太夫〕

…六三

…元・五九・五〇・五三・六〇

豐竹豐太夫

…五八

豐竹文太夫

…五九

豐竹塚太夫〔筆五〕

…六四

豐竹浪太夫

…六三

豐竹鳳雄太夫

…六二

豐竹恒太夫

…五八・五三

豐竹錦太夫〔二代〕

…四九・五三

人 名 (豐竹)

七四一

豊田正藏	…五八	虎屋越後太夫	…五二	浪花(難波)三藏	…五三・五八
豊田新助	…四三・五〇	虎屋喜太夫	…三三・四三・五一	鍋屋宗兵衛	…五八
豊松勘三郎	…六五	虎屋源太夫	…三三・三三・三六・五一	なべや麓太夫	…六九
豊松源三郎	…六五	虎屋相模太夫	…三三・五一	浪岡橋平	…五五
豊松十(重)五郎	…五三	虎屋薩摩太夫	…五一	並木永助	…五八
豊松祐三郎	…六五	虎屋丹後太夫	…三三・五一	並木丈輔(助)	…三三・三六・三九・四〇
豊松藤(東)五郎	…二六・三六・三九	虎屋丹波太夫	…三三・五一	〇一・五三	
三三・三九		虎屋長門太夫	…三三・五一	並木正三	…三〇・三三・三三
豊松藤四郎	…六五	鳥屋次郎吉	…三三・五一	並木宗(惣)輔(助)(千柳)	…三・四
豊松豊五郎	…三九	な	…三三・五一	・三三・三五・三六・三八・三九	
豊松彦七郎	…六五	中小路法師	…三三	四三・四三・四三・五八・五三	
豊松元五郎	…二六・三九	永嶋重太夫	…三・三八・四三・五一	納屋徳	…六五
豊松門三郎	…六五	長門九郎兵衛	…三	なば龜	…六三
豊松彌三郎	…二六・三三・三六・三九	長門屋	…六八	に	
・三九		中の芝居	…三〇・三三	錦文流	…五〇・三五・四三・五五
寅王の頭	…三九	中村阿慶(契)	…三三・三九	西澤一風	…三・四・三五・三三・三
虎澤檢校	…三三・六三	中村勘四郎	…二六・三六・三九・五三	五・四三・四四・五八	
虎屋永閑太夫	…三三・五二	中村彦三郎	…三六・三三・五一	西口政太夫	…三六

人 名 (と一)

人名 (にーは)

七四四

二歩堂

…四四

四

人形出遣ひの始り

…二七・三三

〔二代〕

…二七・六五

野澤文次郎

…五二

人形の口開く始り

…三三

〔三代〕

…六五

野澤文藏
の太

…六五

人形の肩動く始り

…三三・五七

野澤吉兵衛〔初代・松屋町〕

…六五

野田若狭…三三・四六・四三・四三・

人形の耳動く始り

…三三

〔二代〕

…六六

三三

人形の眼動く始り

…三三・五二

野澤吉彌

…六六

野呂松勘兵衛

…六六

人形の指動く始り

…三三・四一

野澤〔鶴澤〕語助

…六六

は

人形に足を附ける始り…四八・四三

野澤才吉

…六六

長谷川千四…三三・二六・四三・四三・

人形に帷子を着せる始り…四八・四三

野澤才二

…六六

はけ太

ね

野澤才造

…六六

八行本の始り

…四三

ねづみ屋

…六四

野澤正五郎

…六五

初君太夫

…六三

の

野澤庄次郎〔初代〕

…六五・六六

花澤伊左門〔初代・鶴澤伊左衛門〕

野澤吉三郎

…六六

〔二代〕

…六五・六六

〔二代〕

…六六

野澤吉之助

…六六

野澤藤五郎

…六五・六六

花澤駒七

…六六

野澤喜八〔初代〕…三三・三三・

野澤八兵衛〔初代〕

…六六

花澤咲次

…六六

…三三・三三・三三・三三・

〔喜八改〕

…六六

花澤咲三郎

…六六

…六六・五八・五八・五九・五三・

野澤文五郎

…六五

花澤咲次〔天秤屋咲次〕

…六六

花澤咲助
花澤鶴三郎
花澤平五郎
花澤松定
花澤紋右衛門
濱夫太座
濱彌夫太
早雲長太夫
原田由良助
播磨太夫
播磨屋四郎兵衛
播磨屋彌三郎
伴西

久太夫座
肥前座
一二三軒
表具(屋)又四郎
平のぶ彌太夫
千野屋嘉助
平野屋仁兵衛
福松藤助
福嶋市之丞
藤井小三郎
藤井小八郎
藤井新十郎
藤井八十八

ニツ井彦太夫
筆五
筆戸磯太夫
筆の越太夫
文耕堂(松田和吉)
文胸翁
文淵堂
平安堂
平衛兵八重太夫
北條宮内
北國丹太夫
堀江荒木芝居
堀江西の芝居
本泥本水の始り

人 名 (はー)

七四六

五三

二七四

…

三・四・五

三・二五・四〇

四二五

॥३॥

●●●●●

安田縣文：元・四・二五・三五・四

489117

111

CONCLUSIONS

2. **Null**

柳屋

…五七

七・五三・四九

五八・五一・五三・五五・五四・四

山下八百藏

…三〇

吉田源八

…三八四

五八・五一・五三・五五・五四・四

大和彦太夫

…二六・二六

吉田才次(治・二)…二七・五一・五

四・四四

山下伊平次(治)…二七・二七・四七・

一・五三・四〇・四九・四九

(二代・二代三郎兵衛・文伍)

山本角太夫…二五・二八・四四・五二

吉田三郎兵衛(初代)…二九・二九三・

…五五・五六・五八・四六・四四・

山本京四郎

…五三

二五・二六・二六

五四

山本長太夫

…五三

(二代)

…五五・四八五

ゆ

山本土佐藤藤原房政(角太夫)…二五

吉田嶋八

…二八四

結城座

…五七・五六・四〇

三・二五・二七・四二・四三・四四

吉田甚五郎

…五二・四八〇

有隣軒

…五九

・四三・五三

吉田太三郎

…二五

床横へ直す始り…三九・四九・五三

…三九

山本八太夫

…二五

吉田藤五郎

…二八四

由良之助の頭

…三九

山本(彌三五郎)飛彈掾…二五・二九

吉田彦三郎…二八・二九・五三・四八〇

頼此太夫

…六〇三

・二九三

吉田文伍(吾)…二四・二五・二七・三

積平の頭

…三九

よ

吉田文三郎(初代・冠子)…三六・二

季海坊の頭

…三九

與勘平の頭

…三六

七・二五・二四・二五・二六・二九

梁塵軒

…三九

よし源

…五九

八・四〇・四二・四四・四七・四八

ろ

…三九

吉田冠子

…二四・五三・四九

・四九・五〇・五三・五四・五六・

七四七

吉田貫(冠・官)藏…二八・二四・二五

・四九・五〇・五三・五四・五六・

七四七

人 名 (ヤリ)

七四七

人 名 (ろーわ)

六字南無右衛門 …… 六・三五・五二 七・三八・四六・四六・五八

六太夫座 …… 六四 若太夫芝居 …… 六四

六之丞座 …… 六四 若松丹後掾 …… 四七

六部の頭 …… 五九 綿(錦)武 …… 六二・五五・五九

わ

若男の頭 …… 五九

若竹伊三郎 …… 二五・四六・五五・五七

・ 三六

若竹三十郎 …… 二五

若竹新十郎 …… 五三

若竹清五郎 …… 二五

若竹清次郎 …… 二五

若竹東工(藤九)郎 …… 二九・二五・二六

一・三四・三五・五三・五五・五七

・ 三六・五九・四〇・五三・五二

若竹友五郎 …… 二五・五三

若竹笛躬(豊竹笛躬) …… 五九

若竹(和歌竹)政太夫 …… 四四・三六・三

あ

五二

東歌名物男

五

安德天皇兵買

四九

七四九

外 題 (5)

七五〇

伊賀越道中雙六	…四九	和泉式部軒端梅	…五五	今川了俊	…五三
伊賀越乘掛合羽	…五一	和泉の三郎	…五三	了俊青砥刀(今川青砥刀)	…五三
生玉心中	…四六	伊勢音頭	…三九・五三	今宮丸腰連理松	…五九
生玉八景	…五九	伊勢御遙宮	…四三	今昔妹背腹帶	…五三
生捕八百人	…四五	伊勢平氏年々鑑	…三九・四七	今様伊路葉物語	…四九
十六夜物語	…四四	一谷嫩軍記…三六・五二・三九・五五	…三九・五五	今様小栗判官	…四六
石川五右衛門	…四八	一休物語	…四二	今様女袖鏡	…五七
石川五右衛門一代噺	…五〇・四九	嚴島八景(百合若高麗軍記を見よ)	…四二	今様柏崎	…四三
石田詰將某軍配	…五八	一心五戒玉	…四三・四二	今様賢女手習鑑	…五三
石蜜丸	…四七	一心二河白道	…四三・四二	今様西行物語	…五七
石橋山鎧重(襲)	…四七	糸櫻本町育	…四六・四四	今様殺生石	…五三
石山寺開帳	…四六	因幡堂開帳	…四七	當世様續日本紀	…四二
伊豆院宣源氏鑑	…四七	因幡藥師傳記	…四七	今様返(傾城反)魂香	…五三
井筒河内通	…四七	今盛戀緋櫻	…五三	今様亂拍子	…五三
井筒屋源六戀ノ寒晒…毛三・五三	…四四	今川制詞條目	…五三	妹背結町家仙人	…五三
三六	…四四	今川本領猫魔館	…四四	妹背山婦女庭訓	…四四
和泉國浮名溜池	…五八・五二	今川了俊	…四三・四三	入鹿大臣	…四七
				入鹿大臣皇都靜	…四六

色揚瀬川染

…五十四

歌枕棧堂合戦

…四十四

かたみ送り

…四〇〇

色爲替曲輪之通

…四十四

内百番富士太鼓

…五十八

江戸自慢戀商人

…五十三

伊呂波(いろは)歌義臣兜…四〇〇・五

寫眞足利染

…五十四・五十七

娼喜帝秘曲琵琶

…四十四

四

いろは縁起

…三十三

馬の段(頼光跡目論を見よ)

…五十四

役行者大峯櫻

…五十三・四八〇

以呂波讃州屏風浦

…五十一

梅川冥途飛脚

…四十八

お梅の介角額嫉蛇柳

…五十三

いろは藏三組盃

…五十八

忠兵衛

…五十六

大磯虎稚物語

…四十九

色嘶庚申待

…五十三

梅の名よせ(藍染川を見よ)

…四十四

太磯虎遁生記

…六・四三

いろはノ始千丈力瀧

…五十四

梅の迎駕範死期蒔染

…四十四

大内鑑(蔵屋道満大内鑑を見よ)

…四十四・四八

いろは物語…三九・四三・四六・四〇

浦島太郎

…四十七

大掛物十幅(一)對

…四十四・四八

四

初冠賤束帶

…五十三・五十三

浦島太郎倭物語

…五十六

大系圖(鎌倉大系圖を見よ)

…四三

宇賀道者源氏鑑

…五十一

浦島年代記

…四十七

奥州安達原

…五十六・四十五・四十七

牛若東下向

…四十八

荏柄平太

…四十二

奥州秀衡有髮塔(蔵)

…五十六

卯月紅葉

…四十三

悦賀樂平太

…四十六

應神天皇八白幡…三三〇・三三二・四二

右大將鎌倉實記

…四十七

蝦夷錦振袖雛形

…五十三

大曾我富士俊將

…四十三

歌念佛

…四十七

江戸櫻(花王)愛敬曾我…五十六・四十八

大塔宮職鑑…二五・三九・三四・三五

外題 (三十一)

七五一

大塔宮熊野落	…四三	納大刀譽鑑	…五六	小野篁	…四五
大友王子玉座靴	…三四・三五	おさん大經師普曆	…四三	小野道風青柳硯	…三三・四一
大友眞鳥	…四〇	おしゆん川原の心中	…四九	小野道風額揃	…四四
大友眞鳥(大内裏大友眞鳥を見よ)	…四〇	傳兵衛川原の心中	…五九	小野道風記	…四六
近江源氏先陣館	…四三	おしゆん近頃河原の達引	…五九	お初天神記	…三三・五三
近江源氏太平頭整飾	…四三	傳兵衛	…四六	おはつ會根崎心中	…四九
近江國源五郎鮪	…五三	小田角髪髮島原千疊鋪(敷)	…四六	おはつ會根崎模様	…四九
近江八景石山逕	…五三	小田館雙子日記	…五〇	徳兵衛	…四四
おかめ	…五三	お千代半兵衛	…五〇	大原問答	…四四
與兵衛卯月紅葉	…五三	男作五雁(鷹)金	…三四・四五・四二	大原問答青葉笛	…四四
おきさ	…五三	雄(男)結勘助島	…五一・五二	お半長右衛門	…五七
二郎兵衛掛鯛心中	…五三	お夏清十郎	…五七	おはん桂川連理櫺	…五一
お吉櫻町昔名花	…四六	おなつ歌念佛	…四七	長右衛門心中重并筒	…四〇
翁三番叟	…五〇	清十郎笠物狂	…五二	徳兵衛心中重并筒	…四〇
置土産今織上布	…五一	おなつ五十年忌歌念佛	…四四	おまん盧分船	…四四
小栗判官	…四七	清十郎	…四四	おむめ心中萬年草	…四三
小栗判官車街道	…三六・三三・四四	鬼鹿毛武藏(不佐志)鎧	…五一	おやまおどり	…三五・五九
・四四		小野小町都年玉	…五三	小山判官新板重物簪	…四七
		小野炭焼七小町	…四六	信田小太郎	…四七
		深草土器師七小町	…四六	女長田皐樓	…四四

女殺油地獄	…四〇	加賀見山舊錦繪	…四六・五八	敵討稚物語	…四八
女俊貫 平家女護島	…四三	柿本人丸	…四三	敵討未刻の太鼓	…三四・四八
女牛若	…五一	柿本組僧正車	…四四・五〇	敵討崇禪寺馬場	…四三
女小學平治見臺	…五〇	掛鯛心中	…四四・四五	敵討襖襦錦	…三三・三八・四二
女節用操鏡	…五〇	掛物ぞろへ(願義北國落を見よ)	…四九	敵討難波梅	…五八
女蟬丸	…五七	加古敦心七墓巡	…四九	敵討の遺恨	…四〇
女袖鏡	…四九	果物語	…五三	刀屋半七鯉初花	…四九
女丹前(源家七代集を見よ)	…二九・三四	笠物狂	…四一	桂川連理櫓	…五一
女鉢の木(雪の段)	…二九・三四	笠屋三勝廿五年忌	…五八	門出八島	…四三
女舞劍紅葉(楓)	…四六	花山院	…四・四三	假名寫阿土問答	…五九
か		(晴明)神おろし	…三・三六	鼎軍談	…七・三三・三七・四六・四八
會稽故鄉錦	…五五	花山院都巽	…五二	假名手本忠臣藏	…四四・四五・五八
甲斐源氏櫻軍配	…五三・五七	花山院物語	…四二	九段目	…四四
甲斐世話兩國志	…五五	花山法皇順禮記	…四七	假名難後日宮原	…五三
凱陣八島	…四八	柏崎	…四三	金屋金五郎浮名ノ額	…二五・三三・五
懷胎十月	…三三	霞の關守八幡太郎東海硯	…四六	〇三	
替唱歌糸の時雨	…五〇	鎧の渡守(菅原親王行狀記を見よ)	…四三		
娥歌がるた	…四六・四八	加増曾我	…四三		
加賀國篠原合戦	…三三・三九・四六				

鎌入の段(用明天皇職人鑑を見よ)

紙子仕立兩面鑑

…五〇

關東小六丹前姿

…四三

清御曹司東踏歌

龜山染

…五三

觀音廻り(曾根崎心中を見よ)

…四二

清冠者鞠初

詩近江八景

…五〇

關八州繫馬

…四一

清冠者藤戸合戰

辛崎一本松

…四九

鬼一法眼三略卷…三三・三〇・四〇

嘉平次おさが生玉心中

辛崎浪枕

…四九

祇王佛御前扇車

…四六

釜淵双(雙)紋巴…三六・三三・三〇

韓和開書帖

…五八

祇女・四二・四八

五・五九・五八・五四・五〇

雁金文七

…四〇・四四

祇園祭禮信仰記…三九・三七・三〇

鎌倉大系圖

雁金文七(男作五雁金を見よ)

祇園精舍

鎌倉三代記(紀海骨作)…三・三〇・三六・三三

荊萱桑門筑紫轡…三〇・三〇・三三

祇園精舍

…四〇

五三・五八・五三

荊萱道心物語

…四六

祇園女御九重錦…三六・三九・三九

鎌倉三代記(現在上演の物)…三・三〇・三六・三三

河津相撲の遺恨

…四三

岸姫松響鑑…三九・五二

鎌倉實記(右大將鎌倉實記を見よ)

河内通…三三・四四・四七・四二

…四三

起請方便品書置壽量品伊達娘戀緋鹿子…三九

鎌倉袖日記…四三・四八・五一

川中島(信州川中島合戰を見よ)

木曾冠者旭系圖…三三

鎌倉尼將軍

川原の心中

…四九

木曾軍記…三三

鎌倉比事青砥錢

官軍一統志

…四〇・五三

木曾義仲…四三

鎌倉山縁翠勝閑

元日金年越

…三三・四二

北濱名物黒船噺…四六

鎌田兵衛名所盃

關東小六東六法

…四七

神落(花山院を見よ)

蓋壽永軍記

…五〇

楠天外兵法問答

…四四

黒船

…六六

きふのお初
けふの徳兵衛よみ賣三巴

…四二

楠正成軍法寶錄

…三八・五〇

桑原女之助

…四七

吉備大臣

…四三

楠普噺

…二五・四七

軍術出口柳

…五〇

紀三井寺開帳

…五五

葛葉道心物語

…四八

軍法富士見西行

…六八・四七

九州與治兵衛灘

…五三

九(久)仙山(國性爺合戦を見よ)

契情阿古屋の松

…四九

行基誕生記

…四六

工藤左衛門富士日記

…四八

傾城淺間嶽

…四一

京羽二重娘形氣

…五八・四九

熊井太郎孝行卷

…四六

傾城阿波の鳴門

…四二

京土産名所并筒

…二五・三九

熊ヶ谷三ツ子孟(鑑)

…五〇

傾城今西行

…四二

清水晴玄

…四五

熊野權現烏牛王

…四四

傾城浮洲岩

…四三

清水利生物語

…四八

久米仙人

…四六

傾城請狀(百日會會我を見よ)

…四三

記録(祿)會我玉舜鬻(曲)…五二・五

…五二

久米仙人吉野櫻…三三・三四・五九

傾城請狀(百日會會我を見よ)

…四四・四五

金五郎浮名の額(金屋金五郎浮名ノ額を見よ)

…五二

衆盛久地獄ととき

…四〇

傾城思樹屋

…五一

金平地獄破

…四三

鞍馬山師弟杉

…四〇

傾城掛物揃

…三八・四六

金平法門諍

…四〇

車返合戦櫻

…四七

けいせい戀飛脚

…四九

楠千早合戦

…四二

廓色上

…五七

傾城國性爺

…五三・五〇

廓の名は陸奥

…四二

廓の名は陸奥 萩大名傾城敵討

…四九

傾城三度笠

…五〇

楠千早合戦

…四二

廓の名は長門

…四九

傾城酒吞童子

…三八・四六

外 題 (きーけ)

傾城姿見池	…四九	袈裟御前物語	…四八	源氏冷泉節	…四三
傾城千日ノ鐘	…五八	粧水絹川堤	…五八	賢女相生松	…四八
傾城鄺闕カ岡	…五五	源家七代集	…五三	賢女手習鑑	…四〇・四一
傾城浪花おだ巻	…五八	兼好法師物見車	…五三	源氏移徒祝	…三〇
傾城二河白道	…五五	源五兵衛薩摩歌	…四〇	玄宗皇帝蓬萊鶴	…五八・五九
傾城反(返)魂香	…四五・五一・五三	源三位頼政	…四八・五一	源頼上人記	…四九
傾城富士カ嶽	…五四	源氏東の門出	…四四	建仁寺供養	…五・五〇・五四・五六・五八
傾城懷(内)子	…三三・四〇・四〇	源氏熱田合戦	…三三・四二	元服會我	…四三・五八
傾城枕軍談	…四四・五八・四七	長生殿の四季	…一九・二五	見物左衛門	…四九
傾城無間鐘	…五六・五五	源氏鳥帽子折	…三三・四八・四八・五	源平戀の遺恨	…四二
傾城紋日曆	…四三	源氏大草紙	…五二	源平布引瀧	…二四・五二・四九
傾城八重櫻	…四〇	源氏十五段	…六・四四	源平嶋鳥越	…四三
傾城八花形	…四八	源氏十二段	…四三・四三	源平二服弓	…五七
傾城吉岡染	…四七	源氏筑紫合戦	…四・四二	小執盛	…四七
傾城吉原雀	…三三・五三	宮島八景	…一九・二六・三四・三五	小執盛花靱	…五一
傾城我立杣	…四三	源氏の弓流 船軍凱陣兜	…五七	戀塚物語	…四〇
契史國物語	…四〇	平家の矢合	…四二		
		源氏蓬萊三ツ物	…四二		

半衛廊色上	…五七	戀女房染分手綱	…二四・五三・四九	國性爺後日合戰	…五五・四〇・四九・四六	後太平記時代織屋町錦織	…五三
戀八卦桂曆	…五〇	戀傳授文武陣立	…四七	石高千五百	…四一	十三卷目時代織屋町錦織	…五三
戀の緋花王(八百屋お七戀緋櫻を見よ)	…四七	御祭禮棚閣車操	…五八・四九	冊數四十七	…四六	碁太平記白石噺	…五三・五八・五六
戀娘昔八丈	…五四	小晒物語	…四二	廊景色雪の茶會	…五八	後太平記瓢箪錄	…四九
吳越軍談比翼臺	…五五	後三年奥州軍記	…三三・三三・五〇	極樂往來蓮奇初	…五九	五大力菩薩	…四四
甲賀の三郎	…四二・四〇	五十年忌歌念佛	…五九・五八・五七	御前會我妻ノ富士	…五一	五天竺(日本王代記を見よ)	…五五
甲賀三郎富物語	…四七	御所櫻堀河夜討	…三三・三三・三三	小袖組貫練門平	…五五・四一	壽萬歲嶋臺	…五五
弘徽殿鵲羽產家	…四七	骨接場	…四八	小袖會我	…四三	故豐竹駒太夫	…四九
弘徽殿嫉妬打	…四三・四四	御前懸り淨瑠璃相撲	…四四・三七・三八			十三回忌追善壇浦琴賣	…四三
孝謙天皇倭文談	…四四	古戰場鎧懸の松	…四六			後日菅原	…五六
甲陽軍鑑今様(時世)粧	…四三	御前會我妻ノ富士	…五一			木下藤狹間合戰	…四四
極彩色娘扇	…四五	小袖組貫練門平	…五五・四一			吳羽中將廿三夜待	…四七
國性爺合戰	…四二・四〇・三六・三三					小春心中天網島	…四四
	…三九・三三・三七・三三・四〇					治兵衛	…五八
						小春中元噺掛鯛	…五三
						碁盤太平記	…四三
						軀山姥	…四七
						惟高惟仁位諱	…四四
						曆	…四三・四四・四三
						根元會我	…四三・四三

根元會我物語

…四二

櫻井御前都鳥東古跡

…三七

三軍桔梗原

…四三

金剛山合戰

…四三

櫻御殿五十三驛

…四五

三國志大全 鼎軍談

…四六

金剛兵衛左文字刀

…四一

櫻鐔鞘絞鞘

…四四

三國無双奴請狀

…五〇

姻袖鏡

…四九

櫻姫賤姫櫻

…五九

三社の託宣

…四三

さ

西教寺七萬日廻向

…四六

櫻姫操大全

…五三

卅三間堂棟由來

…四二

西行法師墨染櫻

…五三

櫻町昔名花

…四六

三十二相刀双鏡

…四六

西行物語

…四三

佐々木大鑑

…五一

三十石鯉始(夜船の始り)…四〇・五

齋藤別當實盛

…四四

佐々木先陣

…四三

三條小鍛冶

…四五

西明寺殿行脚松

…四九

佐々木藤戸先陣

…四三

三(山)枡太夫

…四三・四九

西(最)明寺殿百人上臈…五五

薩摩歌

…四〇

三莊太夫五人藏(娘)…三五・四八・

最明寺殿由緒礎

…四九

薩摩歌妓鑑

…四五

山枡太夫戀慕漢

…三七

逆髮王子横車

…四七

薩摩守忠度

…四五

山枡太夫腹原雀

…三四

嵯峨天皇甘露雨

…四九

廓景色雪の茶會

…五五

三世二河白道

…四六

坂上田村丸(鷹)

…五〇

猿丸太夫鹿卷端

…四三

讚談記

…四三

相摸入道千四犬…四六

狹夜衣鴛鴦劍羽

…五八

小夜中山鐘由來

…四九

魁鐘碑

…四九

佐夜ノ中山夜泣ノ石

…五八

鹽飽七島稚陣取

…四六

咲分赤間關

…五〇

鹽飽七島稚陣取

…四六

しほがまの段(願光跡目論を見よ)

三

白髭壽命髮置

…四九

汐境七草双紙

…五八

四天王寺伶人櫻

…五八

釋迦如來誕生會

…四四

汐境七草斷

…五九

四天王稚木像

…五九

石橋

…四四

志賀の敵討

…五三

持統天皇歌軍法

…四九

舍利

…四九

式三番三(隻)…三六・五九・四〇〇・五

信の源氏

…五九

壽永忠則

…四八

三・五〇

信濃源氏木曾軍記

…四三

壽永楓源平鴨島越

…五三

しきしま操軍記

…四〇〇・五三

自然居士

…四三

十五日男太平記枕詞

…四八

四季十二段

…四三

信田小太郎

…四二六・四七〇

十三鐘妹育山婦女庭訓

…四四

繁花地男鑑

…四七

信太妻

…四二六

十帖柳妹育山婦女庭訓

…四四

獅子の亂菊(いろは物語を見よ)

…四三・四七

しのだ妻今物語

…四四

源氏物語ぐさ太郎を見よ…三六・五三

…五三

四十八願記

…四三・四七

信田森(妻)女占

…五三

十二段(淨瑠璃物語を見よ)

…四八

時代織室町錦織

…四七・五三

篠原合戦(加賀國篠原合戦を見よ)

出世景清

…三六・四四

時代世話女御用

…五三

嶋の勘左衛門(傾城枕軍談を見よ)

出世世虎稚物語

…三六・四四

世話模様いろは藏三組盃

…五八

島原蛙合戦

…四三

酒吞童子出生記

…四八

七枚香妻雛形

…五〇

島原千疊鋪(歌)

…四六

酒吞童子枕言葉

…五三

起請

…四九

下總國かさね説

…五三

酒吞童子枕言葉

…五三

四天王曾論

…四三

時頼記(北條時頼記を見よ)

…四〇

酒吞童子枕言葉

…五三

四天王寺伽藍(覽)鑑

…四八・五

白旗の由來

…四〇

酒吞童子枕言葉

…五三

外題(七)

七五九

外 題 (七)

七六〇

主馬判官盛久

…四六

諸葛孔明鼎軍談(鼎軍談を見よ)

心中二枚繪草紙

…四三

潤色江戸紫

…三三・五九

新一心五戒の魂

…四九

心中二ツ腹帶

…四四・五五・五六

淨藏貴所八坂塔

…四三

新しいは物語

…四六

心中萬年草

…四七

將軍太郎良門 關八州聚馬…四一・四

新うす(薄)雪物語…三四・四五・四六

心中宵庚甲

…三八・四九

六

一・四六

新撰大職冠

…四六

上東(門)院

…三七・四四

神功皇后三韓責(褻) …三七・四四・五三

新撰太夫丸

…四〇

聖德太子繪傳記

…四一

信仰記(祇園祭禮信仰記を見よ)

神託粟萬石

…四八

聖德太子舍利都

…四六

新腰越訴狀

…四八

新天鼓

…四四

聖德太子職人鑑

…四六

新曆

…四三

神道蟻通

…四二

聖德太子傳記

…四三

信州娘拾山

…四九

秦始皇帝太夫松

…四七

守屋大臣四天王寺伽藍(藍)

…三七

心中重井筒

…四六

新板歌祭文

…四七

聖德利生の池水

…四七

心中紙屋治兵衛

…四六

新板重物語

…四七

性根競姉川頭巾

…四六

信州川中島合戦

…四六

新板腰越狀

…四四

正保粧水絹川堤

…四六

心中水の中道

…四六

新板佐々木大鑑

…四四

淨瑠璃古今序…三三・六一・五九・五

心中天網島

…四四

新百人一首

…四三

元

心中涙の玉の井

…四三

新日向景清

…四六

淨瑠璃物語…六・三三・三五・三六

心中天網島

…四三

新舞臺

…四二

・四三・四四・四五・四九

新十二段

…四九

式三番叟三十石體始

…四二

新本領會我

…四四

…三〇・四〇

…五三

神武帝潤正月

…四四

隅田川(双子隅田川を見よ)

…三七・三八・五九

親鸞聖人繪傳記

…四八

住吉誕生石

…五九

…五九・五五

新利屈物語

…五七

せ

攝津國夫婦池

…四四・四七

神靈矢口渡

…四四・五二

西王母

…四三

蟬丸

…三五・四八・五五

ゆ

末廣十二段

…五二

誓願寺名號記

…四〇

世話言葉楚軍談

…四〇

容競出入湊

…五六・五三

清明神おろし(花山院を見よ)

…四四

前九年奥州合戦

…五五・五九

菅原親王行狀記

…四二

清和源氏十五段

…三六・三九・五三

善光寺開帳

…四六・四二

歌仙の段

…五五

…五九・五五・五九

善光寺御堂供養

…四三

菅原傳授手習鑑

…二四・五三・四七

關取石の鳥井

…五三

泉州小田居茶屋

…四〇

・四四・五五

關取千兩幟

…五九・四二

泉州枕物語

…五三・五五

三段目

…五八

關取二代勝負附

…五七

先陣浮洲殿

…五八・五九

助六
揚卷紙子仕立兩面鑑

…五七

關小まん待夜小室節(丹波與作を見よ)

…五三

前太平記古跡鑑

…五三

雀踊

…五五・五九・五三

攝待(清和源氏十五段を見よ)

…五九

千日寺心中

…五五

崇徳院讃岐傳記

…四二

攝州合邦辻

…五九

千本(義經千本櫻を見よ)

…五五

須磨内裏羽弓勢

…五五

攝州渡邊橋供養

…五八・五八・五三

須磨寺青葉笛

…四四

外

題(しーせ)

七六一

外 題 (そーた)

七六二

草紙洗小町	…四三	曾我三部經	…五五	大職冠	…四三
惣體北男鑑	…五五	曾我虎が石磨	…四七	大職冠知略玉取	…六・四三・五二
補織合圓七嶋	…四九	曾我セツ以呂波	…四七	大職冠方便の玉	…四〇
增補女袖鏡	…五七	曾我錦几帳	…三八	大内裏大友眞鳥	…天・九・二三・
增補女舞劍楓	…五九	曾我花桶	…四〇	二九・二九・三八・四二・四六・四	
增浦河内通	…五三	曾我昔見臺	…五三	右・四八・四九・四二・四六	
增補腰越狀	…五五	衣通姫和光玉	…四四	大念佛由來	…四三
增補(新板)佐々木大鑑	…三三・五〇	曾根崎心中	…三・三・三・二六・三七・	大念佛焚	…四三
增補大佛殿萬代礎	…五〇	三六・三〇・四九・四二		大佛殿萬代礎	…三三・四〇・五八
增補日蓮記	…四七	曾根崎模様	…三九・五〇	太平頭整飾	…四九
增補日向景清	…三七・五六	關生の竹本	…五九	太平記菊水の巻	…四九
增補富貴曾我	…五八	染殿后	…四三	太平記(太平記)義臣礎	…五〇
增補用明天皇	…四〇	染模様妹背門松	…四七	太平記車返合戰櫻	…四一
相馬太郎孝文語(談)	…三三・五五	た		太平記忠臣講釋	…三九・四九
曾我扇八景	…四三	大經師昔曆	…四三	道行	…四九
曾我會稽山	…三三	待賢門夜軍	…五三	太平嶋戸の船謡	…五〇
曾我兄弟の道行	…三五	大功艶書合	…五〇	鯛屋貞柳歳旦閣	…五〇
曾我五人兄弟	…四八	大黒天萬寶御藏	…四一	平惟茂凱陣紅葉	…四四・四二

當麻中將姫

…四四

種は唐土國性爺後日合戦

…四六

丹波與作
關小まん待夜小室節（丹波與作を
見よ）

尊氏將軍二代鑑

…三七・五九

王黒髮七人化粧

…四〇

…三八・四三

高砂

…四八

玉藻前囃袂

…三九・五四

ち

高砂（長生菊の壽）

…三九・五四

魂産靈觀音

…四九

誓義士三人次（治）郎

…五二

瀧口娥歌がるた

…四六

復鳥羽戀塚

…四七

近頃河原の達引

…五四・五九

太政入道兵庫卿

…四二・四三

田村將軍初觀音

…四一

千種結番繪陣紙

…五八

多田院開帳

…四四

田村曆（丸）鈴鹿合戦…三二・三八・

兒淵東軍記

…五八

忠信廿日正月

…四四

達磨の本地

…四三

兒源氏道中記…二四・三六・四四・四

忠僧身替物語

…四〇

倭藤太

…四三

兒源氏道中記…二四・三六・四四・四

多田清仲記

…四二

團七九郎兵衛

…四三

父は唐土國性爺合戦…三九・四六

龍城連理鐘

…四三

一寸徳兵衛

…四三

母は日本國性爺合戦…三九・四六

伊達競阿國戲場

…四四

釣船三船

…四六

父は唐土國性爺合戦…三九・四六

伊達染手綱（丹波與作を見よ）

…四四

丹州爺打栗

…三五・四六

父は唐土國性爺合戦…三九・四六

伊達錦五十四郡

…四〇

國扇會我

…三六・四六

中元噂掛鯛

…五七

伊達娘戀緋鹿子

…四〇

檀浦兜軍記…三三・三五・四七・四八

中將姫

…四三

達模様愛敬會我

…四〇

琴責

…四九

中將姫蓮蔓陀羅

…四〇

七夕祭（道寸軍法競を見よ）

…四〇

丹波與作…三〇・三七・三六・三三・

忠臣いゝは實記

…五二

七夕祭（道寸軍法競を見よ）

…四〇

丹波與作…三〇・三七・三六・三三・

忠臣伊呂波夜討

…四三

外 題（たーち）

七六三

忠臣金短冊 …… 五三

忠臣藏 武士鑑 通矢數四十七本 …… 四三

忠臣講尺 …… 四三

忠臣講尺(太平記忠臣講釋を見よ) …… 四三

忠臣後日噺 …… 四六

忠臣兵揃 …… 四四

忠臣身替物語 …… 四九

彫刻左小刀 …… 五五

長生殿十二段(淨瑠璃物語を見よ) …… 五五

…六・五九・五九

長生殿の四季(源氏熱田合戦を見よ) …… 五九

朝鮮九州與治兵衛繪 …… 五三

細見九州與治兵衛繪 …… 五三

蝶花形名歌嶋臺 …… 五〇

長命寺開帳 …… 四〇

鎮西八郎 …… 四三・五五

鎮西八郎唐土船 …… 五五

鎮西八郎射往來 …… 四六

筑紫問答 …… 四三

都志王丸 …… 四三

襦袢錦今様織留 …… 四三

土蜘蛛退治 …… 四二

津戸三郎往生要集 …… 四七

芽源氏鶯塚 …… 五九

角額嫉蛇柳 …… 五三

裾重紅梅服 …… 五三

裾重血紅腋 …… 五三

裾重浪花八文字 …… 五七

艶祝詞大々神樂 …… 四四

梅雨左門由來 …… 四四

徒然葉 …… 四六

定家卿小倉色紙 …… 四三

亭主方東山殿櫻御殿五十三驛 …… 四三

上客一休禪寺 …… 四三

東海道七里艇梁 …… 四六

爺打栗(丹州爺打栗を見よ) …… 四三・五〇

照天姬操車 …… 五〇

照日前都姿 …… 五三

天王山杜鵑合戰 …… 五七

天王寺彼岸中日 …… 四六

傳教大師記 …… 四一

天鼓 …… 四〇

天竺德兵衛鄉鏡 …… 四七

傳授小町 …… 四八

天神記 …… 四七

天神記冥加松 …… 四七

天神御本池 …… 四六

天親菩薩 …… 四二

天智天皇 …… 四二

天智天皇御穗庵 …… 五五

天智天皇豐年秋 …… 五二

東海道七里艇梁 …… 四六

東金茂右衛門

… 癸一

年忘座敷(鋪)操

… 癸二・癸五

夏祭浪花鑑… 癸四・癸八・癸九・癸九

唐金茂右衛門東螢

… 癸二

年忘長生嘶

… 癸六

夏楓連理枕

… 癸七・癸一

東岸居士

… 癸二・癸三

鑄鉞六一代咄

… 癸一

夏浴衣清十郎染

… 癸二・癸五

道具屋お龜

… 癸七

殿造千丈櫓

… 癸三

七草若菜功

… 癸八

通矢數四十七本

… 癸三

鳥羽戀塚物語

… 癸六

七小町

… 癸八

道釋禪師傳

… 癸二

富仁親王嵯峨錦… 癸三・癸八・癸四

七ツ伊呂波

… 癸三

道成寺現在鱗(蛇鱗)

… 癸三・癸五

虎遁世記(大磯虎遁世記を見よ)

難波五人男

… 癸九

道成寺所作事

… 癸四・癸六

と見取淨瑠璃

… 癸五

浪花の地染増補女舞劍楓

… 癸九

道寸軍法競

… 癸四

雲鸞太師記

… 癸九

難波八景

… 癸三

七夕祭

… 癸三

な

浪花文章夕霧塚

… 癸六・癸四

當世模樣往古噺

… 癸三

内助手柄淵

… 癸四・癸五

難波丸金鷄

… 癸六・癸五

唐船噺今國性爺

… 癸四

長町女腹切

… 癸七

南無三寶

… 癸九

東大寺大佛緣起

… 癸三

中山利生物語

… 癸二

正三追善極樂往來蓮奇初

… 癸九

道中龜山噺

… 癸九

長柄人柱(舞津國長柄人柱を見よ)

業平一代記

… 癸六・癸三

唐丸新艘始

… 癸一

那須與市小櫻威

… 癸四

業平河内通ひ(井筒河内通ひを見よ)

… 癸三

當流小栗物語

… 癸三

那須與市青海硯

… 癸九・癸四

業平昔物語

… 癸五

融大臣

… 癸三

菜種の花盛

… 癸九

男色加茂侍

… 癸三・癸五

融大臣鹽竈櫻花

… 癸一

夏衣裳鴈染

… 癸七

南大門秋彼岸

… 癸一

外 題 (と一な)

南都十三鐘	…五九	日本建仁寺供養	…五六	八幡宮和光白旗	…四一
南蠻鐵後藤目貫	…三九・五二・五四	日本西王母	…四三	八幡太郎東初梅(櫻)	…五〇
南部御影森	…四〇	日本振袖始	…四二	八幡太郎東海硯	…四八
南北軍問答	…三三・五七	日本廻り	…四九	八幡の太郎	…五三
に		女人往生記	…四六	艷容女舞衣	…五四
丹生山田	…四三	女人即身成佛記	…四三	端手姿鎌倉文談	…五一
丹生山田青海劍	…六一・五五	庭涼操座鋪	…四八	初嵐元文嘶	…五八
二王の本地	…四九	仁德天皇萬歲車	…五〇	八曲篋掛繪	…四九
二代の敵討	…四二	ね		初物八百屋獸立	…三九
日蓮記兒硯	…四〇	壽門松(山崎與次兵衛壽門松を見		初樽操目錄	…四二
日蓮上人記	…四二	よ)	…三七	花袋殿流島	…六四・五二
日蓮聖人德行記	…四八	麻物語	…五〇	花軍壽永春	…四九
日蓮上人法難記	…四〇	念佛往生記	…四〇	二段目	…三九
日蓮聖人御法海	…三〇・五四	は		花飾三代記	…三三
日本王代記	…二四・二七・三六・四〇	博多織戀鋪	…五五	競伊勢物語	…三〇・三二
四九		博多小女郎浪枕	…四二	花系圖都鑑(鏡)	…四九・五一
五天竺	…三三	長谷寺利生記	…四一	花衣いろは縁起	…四五
日本傾城始	…五四	鉢被	…四七	花櫛會稽掲(褐)布染	…五〇

鼻手本給銀藏	…五八	東山殿子日遊	…四七・五〇	比良嶽雪見陣立	…四八
花上野譽の石碑	…五九	東山殿室町合戦	…五五	ひらかな盛衰記	…五三・三三・三四
花楓都模様	…五五	東山殿幼稚物語	…五三	・三六・三五・四四・四六・四五・	
花樽名取關	…五三	彦三朝迎三途雲	…四九	四六	
花和讃新羅源氏	…五三	彦三近江八景	…四九	平假名太平記	…四四
濱真砂千町封疆	…四九	彦山權現善助劍	…四八	蛭小島武勇問答	…四四・四四
孕常盤	…四七	日高川入相花王	…三四・四四	ふ	
播磨篠三	…四七	飛彈内匠	…四六	風俗太平記	…五九
回忌追善佛御前扇軍	…四六	人丸萬歳臺	…三九・五四	風流戲會我	…五三
播磨篠八曲篋掛繪	…四六	非人敵討(敵討襦袢錦を見よ)	…三九・五四	富士淺間舞樂靜	…四九
追善	…四六	鶴山姫捨松	…三三・五七	藤戸ノ前陣	…五九
曠勝負廓環	…三七	姫小松子日の遊	…三五・三四・四六	富士日記菖蒲刀	…四〇・五〇
晴勝負萬兩器物	…五八	百日會我	…三六・四三・四六	伏見常盤	…四六
播州皿屋鋪	…五〇	傾城請狀	…三四	伏見常盤昔物語	…三四・五四
萬代會我	…五七	百人一首	…四三	藤原秀郷倭系圖	…三六・四〇・五〇
番場忠太紅梅簾	…四〇・五四	兵庫の築嶋	…四二	・五四	
日向景清	…四三・四九・四三	拍子扇淨瑠璃合	…四二	二親孝行	…四〇
東口咄傾城浪花おだ巻	…五八	屏風八景(金剛山合戦を見よ)	…四二	双子隅田川	…三八・四四
西口噺					

外題 (ふーま)

七六八

双扇長柄松	…三三・五五	平安城都還	…四七	星兜弓勢鑑	…四二
双(雙)蝶々曲輪日記	…三二・四九	平親王將門	…四七	星月夜百人上臈	…五五
二ツ腹常(心中二ツ腹帶を見よ)	…五八	平家義臣傳	…五八	北國源氏金の山吹	…五九
雙紋刀(篋)巢籠	…五八	平家女護島	…三七	佛御前扇車(軍)	…三六・四六・四七
葵伶人吾妻雛形	…五三	平家朗詠相生響の松	…五三	堀川波の鼓	…五三
葵(二人)靜胎内掛	…四九	源氏管絃京土產	…四七	本卦復昔曆	…五八
富貴會我	…四三	辨慶出生記	…四四	本田義光日本鑑	…三二・五七
筆始いろは會我	…五九	放下僧	…四九	本朝五翠殿	…五九
船軍凱陣兜	…五三	北條九代記	…四九	本朝三國志	…三八・四三
船遣恨	…四九	北條時頼記	…三〇七	本朝檀特山	…五〇
船歌唐音	…五五	毛公(五九・三四・五六・五八・五	…五	本朝廿四孝	…五九・四九
船頭德藏沙境七草嘶	…三六・四六	一元・五三・五〇・五三	…	本朝班女扇	…五七
冬籠世繼梅	…五七	雪の段	…六二・三五・五六・五八・	本道虎が石	…四七
振袖天神記	…四三	五三・五三	…	本領會我	…四七・五二
文武天皇麟	…六三・五七	豐年富貴萬歳	…四九	前内裏嶋都(王城)還	…四四
文武五人男	…四三	蓬萊山(赤澤山伊藤傳記を見よ)	…四九	將門冠合戰	…三三・四四
文武世繼梅	…五九	法隆寺開帳	…四四	松浦五郎	…五二
平安城細石	…五九				

松浦五郎旅日記

…三七・四四

身がわゝ音頭(大塔宮職鎧を見よ)

冥加松梅(天神記冥加松を見よ)

松風村雨東帶鑑

…四四四

身替問答

…三七五・四三・五七

三好長慶破軍記(談) …三九・五四〇

待夜小室節(丹波與作を見よ) …元

身替弓張月

…三・三五・五七

三輪丹前能

…五四

四・三八・四三

松よひしぐれの道行(佐々木大鑑

眉間尺象貢

…三二・五八

迎駕籠死期茜染

…五四四

を見よ)

三田八幡御傳記

…四九

むかし唄今物語

…五八

待宵物語

…四四

道行四季

…三三

昔男春日野小町

…四三

眞鳥(大内裏大友眞鳥を見よ)

三日太平記

…三〇・三二・四二

昔歌舞妓男達今操りの女だて容競出入の湊 …六

摩耶山開帳

…四四

御堂前菖蒲帷子

…三二

昔米萬石通

…三五・五七

丸腰連理松

…五〇九

見取淨瑠璃

…四九

往古曾根崎村噺

…五九

萬戸將軍唐土日記

…六四・五二

源頼家鞠始

…四四

昔八丈(戀娘昔八丈を見よ)

み

美濃療物語

…五〇

往昔模樣龜山染

…五三

三井寺狂女

…四四・五五

三原合戦

…四三

娘(娘)景清八嶋日記

…四〇・五三

三井寺豊年護摩

…四二

都女商人

…四九

むらさき野

…四五

三浦大助紅梅豹

…二九・三〇・四六

都鳥東古跡

…三三

室町千疊敷(攝津國夫婦池を見よ)

三浦大助老後魯

…四四

都巡り見物左衛門

…四三・五九

室町千疊敷(攝津國夫婦池を見よ)

三浦北條(道寸)軍法競

…四三

都朗詠住吉誕生石

…五九

室町千疊敷(攝津國夫婦池を見よ)

澤標浪花筏

…五八

宮嶋八景(源氏鏡紫合戦を見よ)

外 題 (ま—む)

め 七六九

外 題 (めーよ)

七七〇

冥途飛脚

…三六

山崎與次兵衛壽門松

…三七・四二

融通大念佛

…四三

名筆傾城鑑

…二四・四〇

山城國畜生塚

…三六・四七

有職鎌倉山

…三六

伽羅先代萩

…三六・毛一

大和歌五穀色紙

…四三

由縁の十徳

…四七

颯山比翼塚

…三六

日本歌竹取物語

…四七

雪女五板羽子板

…四二

物ぐさ太郎

…三六・五三

語倭歌月見松

…三六

雪の段(北條時頼記を見よ)

…三六・四三・四四

紅葉狩劔本地

…四〇

倭假名在原系圖

…五一・五五

行平磯馴松

…三三・三四・四五

守屋大臣

…四〇

日本武尊

…四三

遊行上人名號記

…四二

彌市

や

…四〇

山伏攝待の段(清和源氏十五段を見よ)

…四六

弓削道鏡

…四三

お高梅田心中

…三六

見よ

由良漢千軒長者

…四五

八重霞浪花濱萩

…三八・三九・五三

槍權三重帷巾

…四二

百合稚高麗軍記

…三三・五八

八百屋お七歌祭文

…三六

結城七郎小袖賣

…四六

百合若高麗攻

…四〇

八百屋お七戀緋櫻(花王)

…三九・三

夕霧阿波鳴戸

…四七

百合若大臣野守鏡

…四七

役者評判身振操

…三八・五三

夕霧篋の袂

…四九

百合若曆

…四一

八島合戦

…四八

遊君衣紋鑑

…五〇

弓勢智勇湊

…五二

八島高館

…四三

遊君三世相

…四七

よ

…五二

勇將兼道魁鐘岬

…四八

猛將眞鳥

…五八

宵庚申(心中宵庚申を見よ)

…五八

八島高館

…四三

勇將兼道魁鐘岬

…五八

宵庚申(心中宵庚申を見よ)

…五八

夜討會我

…四四

吉野合戰名香兜

…五一

賴義北國落

…三四・四三

用明天皇職人鑑…三四・三七・四〇

吉野靜一目千本

…五二

掛物ぞろへ

…三五・三〇・三三

哭四

吉野忠信

…三・四六・四三

萬屋助六心中

…四九

鑛入の段

…三四・三四・四三

吉野忠信錦着長

…五一・五三

萬屋助六二代衣(袖)

…五四

横山郡領信行
小栗判官兼氏

…五〇

吉野都女楠

…四〇三・四六

弱法師

…四六

吉岡兼房染

…四八

世繼會我…元・三三・四六・四四・四

ら

義經東六法

…四六

賴光跡目論…三四・三五・三六・三六・四三

義經懷中硯

…四八

淀鯉出世瀧徳

…四七

義經腰越狀

…五三・五五・五八

呼小鳥小栗實記

…五九

賴光山入の道行

…三八

義經將某經

…四二

よみ賣三巴

…四二

賴光新跡目論

…五八

義經新高館

…四四・五三

賴朝伊豆日記

…四六

雷太郎君代言葉

…四五

義經新舍狀

…四六・五一

賴朝七畧落…三〇・四二・四四・四一

洛陽瓢念佛

…五九・五二

義經千本櫻…二四・二五・三六・三三

…五七

賴朝山井濱出

…四七

亂菊枕慈童

…五三・五七

狐場

…五八

賴政扇子(の)芝

…五〇・五四

關署待新田系圖

…五八・四九

義經追善女舞

…四四

賴政歌道扇

…四三

利屈物語

…四二

義仲勸功記

…五二・五七・五四

賴政追善芝(柴)…五・七・七四・五

立春姬小松

…五五・四九

三の切

…五五

二天

外 題 (より)

七七一

外 題 (れーわ)

利生の池水

…五七

龍宮東門阿波鳴門

…四四

れ

靈驗宮戸川

…五六

連官三番叟

…

わ

和歌八景(和田合戦女舞鶴を見よ)

…五三

和田軍

…四三

和田合戦女舞鶴

…三八・三六・三九

・四〇・五七・五八・五九・六〇

梳久狂亂笠

…四九

梳久熊谷笠

…五九

梳久末の松山

…四九・五七

梳久元日金年越

…四一

梳久由縁の十徳
松山

…四四

日本出版會承認
い 390370
(130036・北光書房)

淨瑠璃研究文獻集成

昭和十九年七月一日 初版印刷
昭和十九年七月廿日 初版發行

(三、〇〇〇部)

賣價 七圓八十五錢

(定價 七圓五十錢)
(特別行爲相當額三五錢)

日本演劇文獻研究會代表者

編者

河 竹 繁 俊

發行者

東京都芝區新橋一ノ二四
山 形 初 太 郎

印刷者

東京都小石川區柳町二九
山 元 正 宣

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所

株式會社

國民文庫
刊行會
東京都芝區新橋一ノ二四
北 光 書 房

設立代表者

山 形 創 立 初 事 務 所
北 光 書 房
會員番號 一三〇〇三六號
電話銀座座 七三〇三七二番
振替東京 四七七五三番

印刷所 三晃社印刷所 (東京1106) 中田製本

北
光
書
房
刊